

JP1 Version 9

JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle

解説・文法書

3020-3-R40-20

マニュアルの購入方法

このマニュアル，および関連するマニュアルをご購入の際は，
巻末の「ソフトウェアマニュアルのサービス ご案内」をご参
照ください。

対象製品

P-242C-AA94 JP1/Performance Management - Manager 09-10 (適用 OS : Windows Server 2003)
P-2A2C-AA94 JP1/Performance Management - Manager 09-10 (適用 OS : Windows Server 2008)
P-1J2C-AA91 JP1/Performance Management - Manager 09-10 (適用 OS : HP-UX 11i V2 (IPF) , HP-UX 11i V3 (IPF))
P-9D2C-AA91 JP1/Performance Management - Manager 09-10 (適用 OS : Solaris 9 (SPARC) , Solaris 10 (SPARC))
P-1M2C-AA91 JP1/Performance Management - Manager 09-10 (適用 OS : AIX 5L V5.3 , AIX V6.1)
P-9S2C-BA91 JP1/Performance Management - Manager 09-10 (適用 OS : Linux 5 (x86) , Linux 5 Advanced Platform (x86) , Linux 5 (AMD/Intel 64) , Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64))
P-242C-AJ94 JP1/Performance Management - Base 09-10 (適用 OS : Windows Server 2003)
P-2A2C-AJ94 JP1/Performance Management - Base 09-10 (適用 OS : Windows Server 2008)
P-9S2C-BJ91 JP1/Performance Management - Base 09-10 (適用 OS : Linux 5 (x86) , Linux 5 Advanced Platform (x86) , Linux 5 (AMD/Intel 64) , Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64))
P-242C-AR94 JP1/Performance Management - Web Console 09-10 (適用 OS : Windows Server 2003)
P-2A2C-AR94 JP1/Performance Management - Web Console 09-10 (適用 OS : Windows Server 2008)
P-1J2C-AR91 JP1/Performance Management - Web Console 09-10 (適用 OS : HP-UX 11i V2 (IPF) , HP-UX 11i V3 (IPF))
P-9D2C-AR91 JP1/Performance Management - Web Console 09-10 (適用 OS : Solaris 9 (SPARC) , Solaris 10 (SPARC))
P-1M2C-AR91 JP1/Performance Management - Web Console 09-10 (適用 OS : AIX 5L V5.3 , AIX V6.1)
P-9S2C-AR91 JP1/Performance Management - Web Console 09-10 (適用 OS : Linux 5 (x86) , Linux 5 Advanced Platform (x86) , Linux 5 (AMD/Intel 64) , Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64))
P-242C-GD94 JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle 09-10 (適用 OS : Windows Server 2003)
P-2A2C-GD94 JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle 09-10 (適用 OS : Windows Server 2008)
P-9S2C-GD91 JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle 09-10 (適用 OS : Linux 5 (x86) , Linux 5 Advanced Platform (x86) , Linux 5 (AMD/Intel 64) , Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64))

これらの製品には、他社からライセンスを受けて開発した部分が含まれています。

輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替および外国貿易法ならびに米国の輸出管理関連法規などの規制をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、ご不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

商標類

AIX は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

AIX 5L は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

AMD は、Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。

BEA WebLogic Server は、BEA Systems, Inc. の登録商標です。

DB2 は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

DB2 Universal Database は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

HP-UX は、米国 Hewlett-Packard Company のオペレーティングシステムの名称です。

IBM は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

Internet Explorer は、米国 Microsoft Corporation の米国及びその他の国における登録商標または商標です。

Itanium は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。

Lotus は、IBM Corporation の登録商標です。

Lotus Domino は、IBM Corporation の登録商標です。

Microsoft は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft, Hyper-V は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Exchange Server は、米国 Microsoft Corp. の商品名称です。

Microsoft Internet Information Server は、米国 Microsoft Corp. の商品名称です。

Microsoft SQL Server は、米国 Microsoft Corp. の商品名称です。

ODBC は、米国 Microsoft Corp. が提唱するデータベースアクセス機構です。

ORACLE は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国 及びその他の国における登録商標または商標です。

Oracle 及び Oracle 10g は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国 及びその他の国における登録商標または商標です。

Oracle 及び Oracle Database 11g は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国 及びその他の国における登録商標または商標です。

Oracle 及び WebLogic は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国 及びその他の国における登録商標または商標です。

PL/SQL は、米国 Oracle Corporation の商標です。

Red Hat は、米国およびその他の国で Red Hat, Inc. の登録商標若しくは商標です。

Solaris は、米国 Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標がついた製品は、米国 Sun Microsystems, Inc. が開発したアーキテクチャに基づくものです。

SQL*Plus は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国 及びその他の国における登録商標または商標です。

Sun, Sun Microsystems は、米国 Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国ならびに他の国における登録商標です。

WebSphere は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

Win32 は、米国およびその他の国における米国 Microsoft Corp. の登録商標です。

Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

その他製品名などの固有名詞は各社の商品名、商標および登録商標です。

プログラムプロダクト「P-9D2C-AA91, P-9D2C-AR91」には、米国 Sun Microsystems, Inc. が著作権を有している部分が含まれています。

プログラムプロダクト「P-9D2C-AA91 , P-9D2C-AR91」には , UNIX System Laboratories, Inc. が著作権を有している部分が含まれています。

発行

2009年7月(第1版)3020-3-R40

2010年8月(第2版)3020-3-R40-20

著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2009, 2010, Hitachi, Ltd.

All Rights Reserved. Copyright (C) 2009, 2010, Hitachi Systems & Services, Ltd.

変更内容

変更内容 (3020-3-R40-20) JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle 09-10

追加・変更内容	変更箇所
Oracle Database 11g Release 2 をサポートした。これに伴って、インスタンス情報設定時の注意事項などを追記した。	2.1.1(6)(d) , 2.1.4(3)(a) , 2.2.1(6)(d) , 2.2.4(4)(a) , 2.6.3(1) , 2.6.3(2)

JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle 09-00

追加・変更内容	変更箇所
適用 OS に Windows 2008 を追加した。また、Windows 2008 の注意事項を追記した。	2.1.1(1) , 2.1.3(2) , 2.3.3 , 3.3.1(1)(a) , 7.2.1(3) , 7.4.1 , 7.5.1 , 付録 A.1(1) , 付録 A.2(1)(a) , 付録 G
次の機能のポート番号を追記した。 ・監視コンソール通信機能 ・Web サービス機能 ・Web コンテナ機能	2.1.1(2)(b) , 2.2.1(2)(b)
パフォーマンスデータ格納先の注意を追記した。	2.6.1
バックアップ対象ファイルの注意を追記した。	2.7.1
コマンドプロンプトの起動方法を追記した。	2.9
識別子一覧にプロダクト名を追記した。	付録 C
ファイアウォールの通過方向の設定（ヘルスチェック機能を利用する場合）を追記した。	付録 E.2(3)

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

はじめに

このマニュアルは、JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle の機能や収集レコードなどについて説明したものです。

対象読者

このマニュアルは、次の方を対象としています。

- JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle の機能および収集レコードについて知りたい方
- JP1/Performance Management を使用したシステムを構築、運用して、Oracle のパフォーマンスデータを収集したい方

また、Oracle について熟知していることを前提としています。

なお、JP1/Performance Management を使用したシステムの構築、運用方法については、次のマニュアルをご使用ください。

- JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management 運用ガイド (3020-3-R32)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management リファレンス (3020-3-R33)

マニュアルの構成

このマニュアルは、次に示す編から構成されています。なお、このマニュアルは、Windows Server 2003、Windows Server 2008、および Linux(R) の各 OS (Operating System) に共通のマニュアルです。OS ごとに差異がある場合は、本文中でそのつど内容を書き分けています。

第 1 編 概要編

JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle の概要について説明しています。

第 2 編 構築・運用編

JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle のインストール、セットアップ、およびクラスタシステムでの運用について説明しています。

第 3 編 リファレンス編

JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle の監視テンプレート、レコードおよびメッセージについて説明しています。

第 4 編 トラブルシューティング編

JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle でトラブルが発生したときの対処方法について説明しています。

関連マニュアル

このマニュアルの関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

JP1/Performance Management 関連

はじめに

- JP1 Version 9 JP1/Performance Management 設計・構築ガイド (3020-3-R31)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management 運用ガイド (3020-3-R32)
- JP1 Version 9 JP1/Performance Management リファレンス (3020-3-R33)

JP1 関連

- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R) 用) (3020-3-S81)
- JP1 Version 6 JP1/NETM/DM Manager (3000-3-841)
- JP1 Version 8 JP1/NETM/DM SubManager (UNIX(R) 用) (3020-3-L42)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Client (UNIX(R) 用) (3020-3-S85)

読書手順

このマニュアルは、利用目的に合わせて章を選択して読むことができます。利用目的別にお読みいただくことをお勧めします。

マニュアルを読む目的	記述箇所
JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle の特長を知りたい。	1 章
JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle の機能概要を知りたい。	1 章
JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle の導入時の作業を知りたい。	2 章
JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle のクラスシステムでの運用を知りたい。	3 章
JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle の監視テンプレートについて知りたい。	4 章
JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle のレコードについて知りたい。	5 章
JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle のメッセージについて知りたい。	6 章
障害発生時の対処方法について知りたい。	7 章

このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、日立製品およびその他の製品の名称を省略して表記しています。製品の正式名称と、このマニュアルでの表記を次に示します。

このマニュアルでの表記	正式名称
AIX	AIX 5L V5.3
	AIX V6.1
HP-UX	HP-UX 11i V2 (IPF)
	HP-UX 11i V3 (IPF)
Internet Explorer	Microsoft(R) Internet Explorer(R)

このマニュアルでの表記			正式名称	
			Windows(R) Internet Explorer(R)	
IPF			Itanium(R) Processor Family	
JP1/IM	JP1/IM - Manager		JP1/Integrated Management - Manager	
	JP1/IM - View		JP1/Integrated Management - View	
JP1/NETM/DM			JP1/NETM/DM Client	
			JP1/NETM/DM Manager	
			JP1/NETM/DM SubManager	
Linux	Linux (IPF)	Linux 5 (IPF)	Red Hat Enterprise Linux 5 (IPF)	
		Linux 5 Advanced Platform (IPF)	Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (IPF)	
		Linux AS 4 (IPF)	Red Hat Enterprise Linux AS 4 (IPF)	
	Linux (x64)	Linux 5 (AMD/Intel 64)	Red Hat Enterprise Linux 5 (AMD/Intel 64)	
		Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64)	Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (AMD/Intel 64)	
		Linux AS 4 (AMD64 & Intel EM64T)	Red Hat Enterprise Linux AS 4 (AMD64 & Intel EM64T)	
		Linux ES 4 (AMD64 & Intel EM64T)	Red Hat Enterprise Linux ES 4 (AMD64 & Intel EM64T)	
	Linux (x86)	Linux 5 (x86)	Red Hat Enterprise Linux 5 (x86)	
		Linux 5 Advanced Platform (x86)	Red Hat Enterprise Linux 5 Advanced Platform (x86)	
		Linux AS 4 (x86)	Red Hat Enterprise Linux AS 4 (x86)	
		Linux ES 4 (x86)	Red Hat Enterprise Linux ES 4 (x86)	
	MSCS			Microsoft(R) Cluster Server

このマニュアルでの表記		正式名称
		Microsoft(R) Cluster Service
NNM	HP NNM	HP Network Node Manager Software バージョン 6 以前
		HP Network Node Manager Starter Edition Software バージョン 7.5 以前
	JP1/Cm2/NNM	JP1/Cm2/Network Node Manager バージョン 7 以前
		JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition 250 バージョン 8 以前
	JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition Enterprise バージョン 8 以前	
Oracle		Oracle10g
		Oracle Database 11g
Performance Management		JP1/Performance Management
PFM - Agent	PFM - Agent for Cosminexus	JP1/Performance Management - Agent Option for uCosminexus Application Server
	PFM - Agent for DB2	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM(R) DB2(R) Universal Database(TM)
	PFM - Agent for Domino	JP1/Performance Management - Agent Option for Domino
	PFM - Agent for Enterprise Applications	JP1/Performance Management - Agent Option for Enterprise Applications
	PFM - Agent for Exchange Server	JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Exchange Server

このマニュアルでの表記		正式名称
PFM - Agent for HiRDB		JP1/Performance Management - Agent Option for HiRDB
PFM - Agent for IIS		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) Internet Information Server
PFM - Agent for JP1/AJS	PFM - Agent for JP1/AJS2	JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS2
	PFM - Agent for JP1/AJS3	JP1/Performance Management - Agent Option for JP1/AJS3
PFM - Agent for Microsoft SQL Server		JP1/Performance Management - Agent Option for Microsoft(R) SQL Server
PFM - Agent for OpenTP1		JP1/Performance Management - Agent Option for OpenTP1
PFM - Agent for Oracle		JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle
PFM - Agent for Platform	PFM - Agent for Platform (UNIX)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform (UNIX 用)
	PFM - Agent for Platform (Windows)	JP1/Performance Management - Agent Option for Platform (Windows 用)
PFM - Agent for Service Response		JP1/Performance Management - Agent Option for Service Response
PFM - Agent for Virtual Machine		JP1/Performance Management - Agent Option for Virtual Machine
PFM - Agent for WebLogic Server		JP1/Performance Management - Agent Option for BEA WebLogic Server

このマニュアルでの表記		正式名称
		JP1/Performance Management - Agent Option for Oracle(R) WebLogic Server
	PFM - Agent for WebSphere Application Server	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere Application Server
	PFM - Agent for WebSphere MQ	JP1/Performance Management - Agent Option for IBM WebSphere MQ
PFM - Base		JP1/Performance Management - Base
PFM - Manager		JP1/Performance Management - Manager
PFM - RM	PFM - RM for Microsoft SQL Server	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Microsoft(R) SQL Server
	PFM - RM for Oracle	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Oracle
	PFM - RM for Platform	JP1/Performance Management - Remote Monitor for Platform
PFM - Web Console		JP1/Performance Management - Web Console
Solaris	Solaris 9	Solaris 9 (SPARC)
	Solaris 10	Solaris 10 (SPARC)
		Solaris 10 (x64)
		Solaris 10 (x86)
Win32		Win32(R)
Windows Server 2003	Windows Server 2003 (x64) または 2003 (x64)	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise x64 Edition
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard x64 Edition

このマニュアルでの表記		正式名称	
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Enterprise x64 Edition	
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Standard x64 Edition	
	Windows Server 2003 (x86) または 2003 (x86)	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise Edition	
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard Edition	
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Enterprise Edition	
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Standard Edition	
	Windows Server 2008	Windows Server 2008 Datacenter	Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Datacenter
		Windows Server 2008 Enterprise	Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Enterprise	
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise without Hyper-V(TM)	
	Windows Server 2008 Standard	Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard	
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard without Hyper-V(TM)	
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Standard	

- PFM - Manager , PFM - Agent , PFM - Base , PFM - Web Console , および PFM - RM を総称して , Performance Management と表記することがあります。
- Windows Server 2003 および Windows Server 2008 を総称して , Windows と表記することがあります。

- HP-UX , Solaris , AIX , および Linux を総称して , UNIX と表記することがあります。

このマニュアルで使用する英略語

このマニュアルで使用する英略語を次に示します。

このマニュアルでの表記	正式名称
ASM	Automatic Storage Management
CPU	Central Processing Unit
CSV	Comma-Separated Values
DDL	Data Define Language
DHCP	Dynamic Host Configuration Protocol
DML	Data Manipulation Language
EUC	Extended UNIX Code
GIF	Graphics Interchange Format
GUI	Graphical User Interface
HTML	HyperText Markup Language
HTTP	HyperText Transfer Protocol
LAN	Local Area Network
NAPT	Network Address Port Translation
NAT	Network Address Translation
ODBC	Open DataBase Connectivity
OS	Operating System
SNMP	Simple Network Management Protocol
TCP/IP	Transmission Control Protocol/Internet Protocol
UAC	User Account Control
UTC	Coordinated Universal Time
UTF-8	Unicode Transformation Format-8
WOW64	Windows-On-Windows 64

このマニュアルで使用する記号

このマニュアルで使用する記号を次に示します。

記号	意味
[]	ウィンドウ、タブ、メニュー、ダイアログボックス、ダイアログボックスのボタン、ダイアログボックスのチェックボックスなどを示します。 (例) [メイン]ウィンドウ [エージェント]タブ
太字	重要な用語、または利用状況によって異なる値であることを示します。

このマニュアルの数式中で使用する記号

このマニュアルの数式中で使用する記号を次に示します。

記号	意味
*	乗算記号を示します。
/	除算記号を示します。

このマニュアルのコマンドの文法で使用する記号

このマニュアルのコマンドとパラメーターの説明で使用する記号を次のように定義します。

記号	意味
 (ストローク)	複数の項目に対して項目間の区切りを示し、「または」の意味を示します。 (例) 「A B C」は、「A, B または C」を示します。
[]	この記号で囲まれている項目は任意に指定できます(省略もできます)。複数の項目が記述されている場合には、すべてを省略するか、どれか一つを選択します。 (例) [A] は「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示します。 [B C] は「何も指定しない」か「B または C を指定する」ことを示します。

図中で使用する記号

このマニュアルの図中で使用する記号を次のように定義します。

● コンピュータ



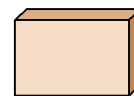
● データの流れ



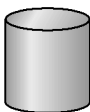
● 処理の流れ



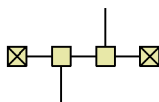
● プログラム



● ファイル



● ネットワーク



● サーバ



● 障害



● 入出力の動作



フォルダおよびディレクトリの統一表記

このマニュアルでは、Windows で使用されている「フォルダ」と UNIX で使用されている

はじめに

「ディレクトリ」とが同じ場合、原則として、「ディレクトリ」と統一表記しています。

このマニュアルでのプロダクト名，サービス ID，およびサービスキーの表記

Performance Management 09-00 以降では，プロダクト名表示機能を有効にすることで，サービス ID およびサービスキーをプロダクト名で表示できます。

識別子	プロダクト名表示機能	
	無効	有効
サービス ID	1S1 ホスト名	ホスト名 <RMOracle>(Store)
	1A1 ホスト名	ホスト名 <RMOracle>
サービスキー	agt1	RMOracle

このマニュアルでは，プロダクト名表示機能を有効としたときの形式で表記しています。

なお，プロダクト名表示機能を有効にできるのは，次の条件を同時に満たす場合です。

- PFM - RM の同一装置内の前提プログラム (PFM - Manager または PFM - Base) のバージョンが 09-00 以降
- PFM - Web Console および接続先の PFM - Manager のバージョンが 09-00 以降

Performance Management のインストール先ディレクトリの表記

このマニュアルでは，Windows 版 Performance Management のインストール先フォルダをインストール先フォルダ，UNIX 版 Performance Management のインストール先ディレクトリをインストール先ディレクトリと表記しています。

Windows 版 Performance Management のデフォルトのインストール先フォルダは，次のとおりです。

PFM - Web Console 以外の Performance Management のプログラムのインストール先フォルダ

- Windows Server 2003 (x64)，64 ビット版の Windows Server 2008 以外の場合
システムドライブ ¥Program Files¥Hitachi¥jplpc¥
- Windows Server 2003 (x64)，64 ビット版の Windows Server 2008 の場合
システムドライブ ¥Program Files (x86) ¥Hitachi¥jplpc¥

PFM - Web Console のインストール先フォルダ

- Windows Server 2003 (x64)，64 ビット版の Windows Server 2008 以外の場合
システムドライブ ¥Program Files¥Hitachi¥jplpcWebCon¥
- Windows Server 2003 (x64)，64 ビット版の Windows Server 2008 の場合
システムドライブ ¥Program Files (x86) ¥Hitachi¥jplpcWebCon¥

UNIX 版 Performance Management のデフォルトのインストール先ディレクトリは，次のとおりです。

PFM - Web Console 以外の Performance Management のプログラムのインストール先ディレクトリ

/opt/jp1pc/

PFM - Web Console のインストール先ディレクトリ

/opt/jp1pcwebcon/

Performance Management に対応する NNM 製品について

Performance Management では、次の製品との連携をサポートしています。

- HP Network Node Manager Software バージョン 6 以前
- HP Network Node Manager Starter Edition Software バージョン 7.5 以前
- JP1/Cm2/Network Node Manager バージョン 7 以前
- JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition 250 バージョン 8 以前
- JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition Enterprise バージョン 8 以前

このマニュアルでは、これらの製品を「NNM」、これらの製品と連携するための機能を「NNM 連携」と表記します。

なお、Performance Management では、次の製品との連携はサポートしていません。ご注意ください。

- HP Network Node Manager i Software v8.10
- JP1/Cm2/Network Node Manager i 09-00 以降

常用漢字以外の漢字の使用について

このマニュアルでは、常用漢字を使用することを基本としていますが、次に示す用語については、常用漢字以外の漢字を使用しています。

個所（かしよ） 桁（けた） 汎用（はんよう） 必須（ひつす）

KB（キロバイト）などの単位表記について

1KB（キロバイト）、1MB（メガバイト）、1GB（ギガバイト）、1TB（テラバイト）はそれぞれ 1,024 バイト、1,024² バイト、1,024³ バイト、1,024⁴ バイトです。

目次

第 1 編 概要編

1	PFM - RM for Oracle の概要	1
1.1	PFM - RM for Oracle の特長	2
1.1.1	複数の監視対象ホストをエージェントレスで監視できます	2
1.1.2	Oracle のパフォーマンスデータを収集できます	3
1.1.3	パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます	3
1.1.4	パフォーマンスデータを保存できます	4
1.1.5	Oracle の運用上の問題点を通知できます	4
1.1.6	アラームおよびレポートが容易に定義できます	5
1.1.7	クラスタシステムで運用できます	5
1.2	パフォーマンスデータの収集と管理の概要	8
1.3	PFM - RM for Oracle を使ったパフォーマンス監視の例	9
1.3.1	パフォーマンス監視の目的	9
1.3.2	ベースラインの選定	9
1.3.3	検索処理パフォーマンス	10
1.3.4	データ更新処理パフォーマンス	12
1.3.5	Oracle インスタンス稼働監視	13
1.3.6	ディスク監視	13
1.3.7	REDO ログ待機の監視	14

第 2 編 構築・運用編

2	インストールとセットアップ	15
2.1	インストールとセットアップ (Windows の場合)	16
2.1.1	インストールとセットアップの前に (Windows の場合)	16
2.1.2	インストールとセットアップの流れ (Windows の場合)	23
2.1.3	インストール手順 (Windows の場合)	25
2.1.4	PFM - RM for Oracle のセットアップ手順 (Windows の場合)	26
2.2	インストールとセットアップ (UNIX の場合)	51
2.2.1	インストールとセットアップの前に (UNIX の場合)	51

2.2.2	インストールとセットアップの流れ (UNIX の場合)	58
2.2.3	インストール手順 (UNIX の場合)	60
2.2.4	PFM - RM for Oracle のセットアップ手順 (UNIX の場合)	62
2.3	アンインストールとアンセットアップ (Windows の場合)	87
2.3.1	アンセットアップの前に (Windows の場合)	87
2.3.2	アンセットアップ手順 (Windows の場合)	88
2.3.3	アンインストール手順 (Windows の場合)	92
2.4	アンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合)	94
2.4.1	アンセットアップの前に (UNIX の場合)	94
2.4.2	アンセットアップ手順 (UNIX の場合)	95
2.4.3	アンインストール手順 (UNIX の場合)	99
2.5	PFM - RM for Oracle のシステム構成の変更	101
2.6	PFM - RM for Oracle の運用方式の変更	102
2.6.1	パフォーマンスデータの格納先の変更	102
2.6.2	監視対象の更新の設定	104
2.6.3	インスタンス環境の更新の設定	105
2.6.4	監視対象の設定状況を確認する	119
2.6.5	レコード収集での Oracle アクセスのキャンセル機能	119
2.7	バックアップとリストア	122
2.7.1	バックアップ	122
2.7.2	リストア	123
2.8	Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定	125
2.8.1	設定手順	125
2.8.2	参照手順	126
2.9	コマンドプロンプトの起動方法	127
3	クラスタシステムでの運用	129
3.1	クラスタシステムの概要	130
3.1.1	HA クラスタシステム	130
3.1.2	負荷分散クラスタシステム	133
3.2	フェールオーバー時の処理	136
3.2.1	監視対象の Oracle がフェールオーバーした場合の処理	136
3.2.2	PFM - RM for Oracle がフェールオーバーした場合の処理	137
3.2.3	PFM - Manager が停止した場合の影響	139
3.3	インストールとセットアップ (Windows の場合)	140
3.3.1	インストールとセットアップの前に (Windows の場合)	140

3.3.2	インストールとセットアップの流れ (Windows の場合)	142
3.3.3	インストール手順 (Windows の場合)	144
3.3.4	セットアップ手順 (Windows の場合)	144
3.4	インストールとセットアップ (UNIX の場合)	152
3.4.1	インストールとセットアップの前に (UNIX の場合)	152
3.4.2	インストールとセットアップの流れ (UNIX の場合)	154
3.4.3	インストール手順 (UNIX の場合)	156
3.4.4	セットアップ手順 (UNIX の場合)	156
3.5	アンインストールとアンセットアップ (Windows の場合)	165
3.5.1	PFM - RM for Oracle のアンインストールとアンセットアップの流れ (Windows の場合)	165
3.5.2	アンセットアップ手順 (Windows の場合)	167
3.5.3	アンインストール手順 (Windows の場合)	171
3.6	アンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合)	172
3.6.1	アンインストールとアンセットアップの流れ (UNIX の場合)	172
3.6.2	アンセットアップ手順 (UNIX の場合)	174
3.6.3	アンインストール手順 (UNIX の場合)	178
3.7	PFM - RM for Oracle の運用方式の変更	180
3.7.1	監視対象の更新の設定	180
3.7.2	インスタンス環境の更新の設定	181
3.8	クラスタシステムで運用する場合の注意事項	183
3.8.1	収集するパフォーマンスデータ中のホスト名について	183
3.8.2	論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポート	183

第3編 リファレンス編

4	監視テンプレート	185
	監視テンプレートの概要	186
	アラームの記載形式	187
	アラーム一覧	188
	Buffer Cache Usage	189
	Buffer Cache Waits	190
	Dict. Cache Usage	191
	Disk Sorts	192
	Free List Waits	193

Full Table Scans	194
Library Cache Usage	195
Redo Log Contention	196
Server Status	197
Tablespace Usage	198
レポートの記載形式	199
レポートのフォルダ構成	201
レポート一覧	203
Blocking Locks	206
Cache Usage	208
Cache Usage Status(Multi-Agent)	209
Cache Usage Trend(Multi-Agent)	210
Database Activity Status	211
Database Activity Status Detail	212
Database Activity Status(Multi-Agent)	213
Database Activity Trend(Multi-Agent)	214
Database Space Overview	215
Database Space Summary(Multi-Agent)	216
Database Space Trend(Multi-Agent)	217
Datafile I/O Activity Detail	218
Datafile I/O Status Detail(Reads)	219
Datafile I/O Status Detail(Writes)	220
Datafile I/O Status Summary	221
Datafile I/O Trend Detail(Reads)	222
Datafile I/O Trend Detail(Writes)	223
Datafile I/O Trend Summary	224
Disk Sorts - Top 10 Sessions	225
Full Table Scans	226
I/O Activity - Top 10 Datafiles	227
Lock Usage - Top 10 Sessions	228
Locked Objects	229
Longest Transactions - Top 10 Sessions	230
Memory Usage - Top 10 Sessions	231
Open Cursors	232
Physical I/O - Top 10 Sessions	233
Redo Log Buffer Contention	234
Server Configuration Status	235
Session Detail	236

Session Statistics Detail	238
SGA Status	239
SGA Status Summary	240
SQL Text	241
System Overview (インスタンスの全体的な状態を示すリアルタイムレポート)	242
System Overview (インスタンスの一般的な状態を示すリアルタイムレポート)	244
Tablespace Status	246
Tablespace Status Detail	247

5

レコード	249
データモデルについて	250
レコードの記載形式	251
ODBC キーフィールド一覧	255
要約ルール	256
データ型一覧	258
フィールドの値	259
Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド	262
Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド	264
レコードの注意事項	265
レコード一覧	266
Activity Summary (PD_PDAS)	268
Collection Instance 2 (PD_PCI)	272
Collection Tablespace 2 (PD_PCTS)	274
Data File (PD_PDDF)	277
Data File Interval (PI_PIDF)	286
Database (PD_PDDB)	298
Database Interval (PI_PIDB)	309
Instance (PD_PDI)	321
Instance Availability (PD_PDIA)	324
Lock Waiters (PD_PDLW)	327
Minimum Database Interval 2 (PI_PMDB)	330
Minimum Data File Interval 2 (PI_PMDF)	332
Minimum Tablespace Interval 2 (PI_PMTS)	337
Open Cursor (PD_PDOC)	340

Parameter Values (PD_PDP)	342
Session Detail (PD_PDS)	344
Session I/O Interval (PI_PIIO)	351
Session Statistics Summary (PD_PDS2)	353
SGA Components (PD_PDSG)	360
SQL Text (PD_PDSQ)	362
System Stat Summary (PD)	365
System Stat Summary Interval (PI)	373
Tablespace (PD_PDTS)	382
Tablespace Fragmentation (PD_PDTF)	391
Tablespace Interval (PI_PITS)	398
Transaction (PD_PDTR)	404
Transaction Lock (PD_PDTL)	408

6

メッセージ	411
6.1 メッセージの形式	412
6.1.1 メッセージの出力形式	412
6.1.2 メッセージの記載形式	412
6.2 メッセージの出力先一覧	413
6.3 syslog と Windows イベントログの一覧	417
6.4 メッセージ一覧	418

第4編 トラブルシューティング編

7

トラブルへの対処方法	429
7.1 対処の手順	430
7.2 トラブルシューティング	431
7.2.1 セットアップやサービスの起動について	431
7.2.2 コマンドの実行について	435
7.2.3 レポートの定義について	436
7.2.4 アラームの定義について	436
7.2.5 パフォーマンスデータの収集と管理について	437
7.2.6 その他のトラブルについて	438

7.3	ログ情報	439
7.3.1	ログ情報の種類	439
7.3.2	ログファイルおよびディレクトリー一覧	441
7.4	トラブル発生時に採取が必要な資料	447
7.4.1	Windows の場合	447
7.4.2	UNIX の場合	452
7.5	資料の採取方法	456
7.5.1	Windows の場合	456
7.5.2	UNIX の場合	459
7.6	Performance Management の障害検知	463
7.7	Performance Management の障害回復	464

付録

	付録 A システム見積もり	465
	付録 A.1 メモリー所要量	466
	付録 A.2 ディスク占有量	467
	付録 A.3 クラスタ運用時のディスク占有量	479
	付録 B カーネルパラメーター	480
	付録 B.1 Linux (x86), Linux (x64) の場合	480
	付録 C 識別子一覧	481
	付録 D プロセス一覧	482
	付録 E ポート番号一覧	484
	付録 E.1 PFM - RM for Oracle のポート番号	484
	付録 E.2 ファイアウォールの通過方向	485
	付録 F PFM - RM for Oracle のプロパティ	488
	付録 F.1 Remote Monitor Store サービスのプロパティ一覧	488
	付録 F.2 Remote Monitor Collector サービスのプロパティ一覧	490
	付録 F.3 リモートエージェントおよびグループエージェントのプロパティ一覧	495
	付録 G ファイルおよびディレクトリー一覧	500
	付録 G.1 PFM - RM for Oracle のファイルおよびディレクトリー一覧	500
	付録 G.2 メッセージカタログ格納ディレクトリ内のファイルおよびディレクトリー一覧	509
	付録 H 移行手順と移行時の注意事項	511
	付録 I 権限に関する注意事項	512
	付録 J バージョン互換	515
	付録 K 動作ログの出力	516

付録 K.1 動作ログに出力される事象の種別	516
付録 K.2 動作ログの保存形式	516
付録 K.3 動作ログの出力形式	517
付録 K.4 動作ログを出力するための設定	523
付録 L 用語解説	526

索引

533

1

PFM - RM for Oracle の概要

この章では、PFM - RM for Oracle の概要について説明します。

1.1 PFM - RM for Oracle の特長

1.2 パフォーマンスデータの収集と管理の概要

1.3 PFM - RM for Oracle を使ったパフォーマンス監視の例

1.1 PFM - RM for Oracle の特長

PFM - RM for Oracle の特長を次に示します。

複数の監視対象ホストをエージェントレスで監視できる
一つの PFM - RM for Oracle から、複数のホストにある監視対象の Oracle のパフォーマンスをリモートで監視できます。

Oracle の稼働状況を分析できる
監視対象の Oracle から、セッションの統計情報などのパフォーマンスデータを PFM - RM for Oracle で収集および集計し、その傾向や推移を図示することで、Oracle の稼働状況の分析が容易にできます。

Oracle の運用上の問題点を早期に発見し、トラブルの原因を調査する資料を提供できる
監視対象の Oracle でセッションが不正な動作をするなどのトラブルが発生した場合、Eメールなどを使ってユーザーに通知することで、問題点を早期に発見できます。また、その問題点に関連する情報を図示することで、トラブルの原因を調査する資料を提供できます。

PFM - RM for Oracle を使用するには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

PFM - RM for Oracle について次に説明します。

1.1.1 複数の監視対象ホストをエージェントレスで監視できます

PFM - RM for Oracle は、パフォーマンスをリモート監視します。

「リモート監視」は、業務サーバにエージェントをインストールしないで、別のホストからリモートでサーバの稼働状況を監視する機能を指しています。

業務サーバに PFM - RM for Oracle をインストールしなくてもよい場合、監視対象となる業務サーバ（ホスト）のシステム構成を変更しないでパフォーマンスデータを監視できます。また、一つの PFM - RM for Oracle で、複数のホストのパフォーマンスデータを収集・管理できます。

なお、Performance Management では、PFM - RM for Oracle が監視するホストを「監視対象ホスト」と呼びます。

PFM - RM for Oracle が監視対象ホストとしてサポートする Oracle については、「2.1.1(4)(a) 監視対象プログラム」または「2.2.1(4)(a) 監視対象プログラム」を参照してください。

1.1.2 Oracle のパフォーマンスデータを収集できます

PFM - RM for Oracle を使用すると、対象ホスト上で動作している Oracle のセッションの統計情報など、パフォーマンスデータが収集できます。

注意

PFM - RM for Oracle では、7 ビットアスキー以外の文字が含まれるパフォーマンスデータは収集できません。

PFM - RM for Oracle では、パフォーマンスデータは、次のように利用できます。

Oracle の稼働状況をグラフィカルに表示する

パフォーマンスデータは、PFM - Web Console を使用して、「レポート」と呼ばれるグラフィカルな形式に加工し、表示できます。レポートによって、Oracle の稼働状況がよりわかりやすく分析できるようになります。

レポートには、次の種類があります。

- リアルタイムレポート

監視している Oracle の現在の状況を示すレポートです。主に、システムの現在の状態や問題点を確認するために使用します。リアルタイムレポートの表示には、収集した時点のパフォーマンスデータが直接使用されます。

- 履歴レポート

監視している Oracle の過去から現在までの状況を示すレポートです。主に、システムの傾向を分析するために使用します。履歴レポートの表示には、PFM - RM for Oracle のデータベースに格納されたパフォーマンスデータが使用されます。

問題が起こったかどうかの判定条件として使用する

収集されたパフォーマンスデータの値が何らかの異常を示した場合、ユーザーに通知するなどの処置を取るように設定できます。

1.1.3 パフォーマンスデータの性質に応じた方法で収集できます

パフォーマンスデータは、「レコード」の形式で収集されます。各レコードは、「フィールド」と呼ばれるさらに細かい単位に分けられます。レコードおよびフィールドの総称を「データモデル」と呼びます。

レコードは、性質によって二つのレコードタイプに分けられます。どのレコードでどのパフォーマンスデータが収集されるかは、PFM - RM for Oracle で定義されています。

ユーザーは、PFM - Web Console を使用して、どのパフォーマンスデータのレコードを収集するか選択します。

PFM - RM for Oracle のレコードタイプを次に示します。

Product Interval レコードタイプ（以降、PI レコードタイプと省略します）

PI レコードタイプのレコードには、1 分ごとのプロセス数など、ある一定の時間（イ

1. PFM - RM for Oracle の概要

インターバル) ごとのパフォーマンスデータが収集されます。PI レコードタイプは、時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用します。

Product Detail レコードタイプ (以降、PD レコードタイプと省略します)
PD レコードタイプのレコードには、現在起動しているプロセスの詳細情報など、ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが収集されます。PD レコードタイプは、ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用します。

各レコードについては、「5. レコード」を参照してください。

1.1.4 パフォーマンスデータを保存できます

収集したパフォーマンスデータを、PFM - RM for Oracle の「Store データベース」と呼ばれるデータベースに格納することで、現在までのパフォーマンスデータを保存し、Oracle の稼働状況について、過去から現在までの傾向を分析できます。傾向を分析するためには、履歴レポートを使用します。

ユーザーは、PFM - Web Console を使用して、どのパフォーマンスデータのレコードを Store データベースに格納するか選択します。PFM - Web Console でのレコードの選択方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

1.1.5 Oracle の運用上の問題点を通知できます

PFM - RM for Oracle で収集したパフォーマンスデータは、Oracle Database のパフォーマンスをレポートとして表示するのに利用できるだけでなく、Oracle Database を運用していて問題が起こったり、障害が発生したりした場合にユーザーに警告することもできます。

例えば、テーブル検索の割合が 10% を上回った場合、ユーザーに E メールで通知とします。このように運用するために、「インデックスを使用しないテーブル検索の割合が 10% を上回る」を異常条件のしきい値として、そのしきい値に達した場合、E メールをユーザーに送信するように設定します。しきい値に達した場合に取る動作を「アクション」と呼びます。アクションには、次の種類があります。

Eメールの送信

コマンドの実行

SNMP トラップの発行

JP1 イベントの発行

しきい値やアクションを定義したものを「アラーム」と呼びます。一つ以上のアラームを一つのテーブルにまとめたものを「アラームテーブル」と呼びます。アラームテーブルを定義したあと、PFM - RM for Oracle と関連づけます。アラームテーブルと PFM -

RM for Oracle とを関連づけることを「バインド」と呼びます。バインドすると、PFM - RM for Oracle によって収集されているパフォーマンスデータが、アラームで定義したしきい値に達した場合、ユーザーに通知できるようになります。

このように、アラームおよびアクションを定義することによって、Oracle の運用上の問題を早期に発見し、対処できます。

アラームおよびアクションの設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、アラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

1.1.6 アラームおよびレポートが容易に定義できます

PFM - RM for Oracle では、「監視テンプレート」と呼ばれる、必要な情報があらかじめ定義されたレポートおよびアラームを提供しています。この監視テンプレートを使用することで、複雑な定義をしなくても Oracle の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。監視テンプレートは、ユーザーの環境に合わせてカスタマイズすることもできます。監視テンプレートの使用方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。また、監視テンプレートの詳細については、「4. 監視テンプレート」を参照してください。

1.1.7 クラスタシステムで運用できます

クラスタシステムを使うと、システムに障害が発生した場合にも、継続して業務を運用できる信頼性の高いシステムが構築できます。このため、システムに障害が発生した場合でも Performance Management の 24 時間稼働および 24 時間監視ができます。

クラスタシステムで PFM - RM for Oracle を運用するためには、次の二つの方法があります。

- Oracle Database がクラスタシステムの場合に PFM - RM for Oracle を運用する
- PFM - RM for Oracle をクラスタシステムで運用する

クラスタシステムで監視対象ホストに障害が発生した場合の運用例を次の図に示します。

1. PFM - RM for Oracle の概要

図 1-1 Oracle Database がクラスシステムの場合に PFM - RM for Oracle を運用する場合の運用例

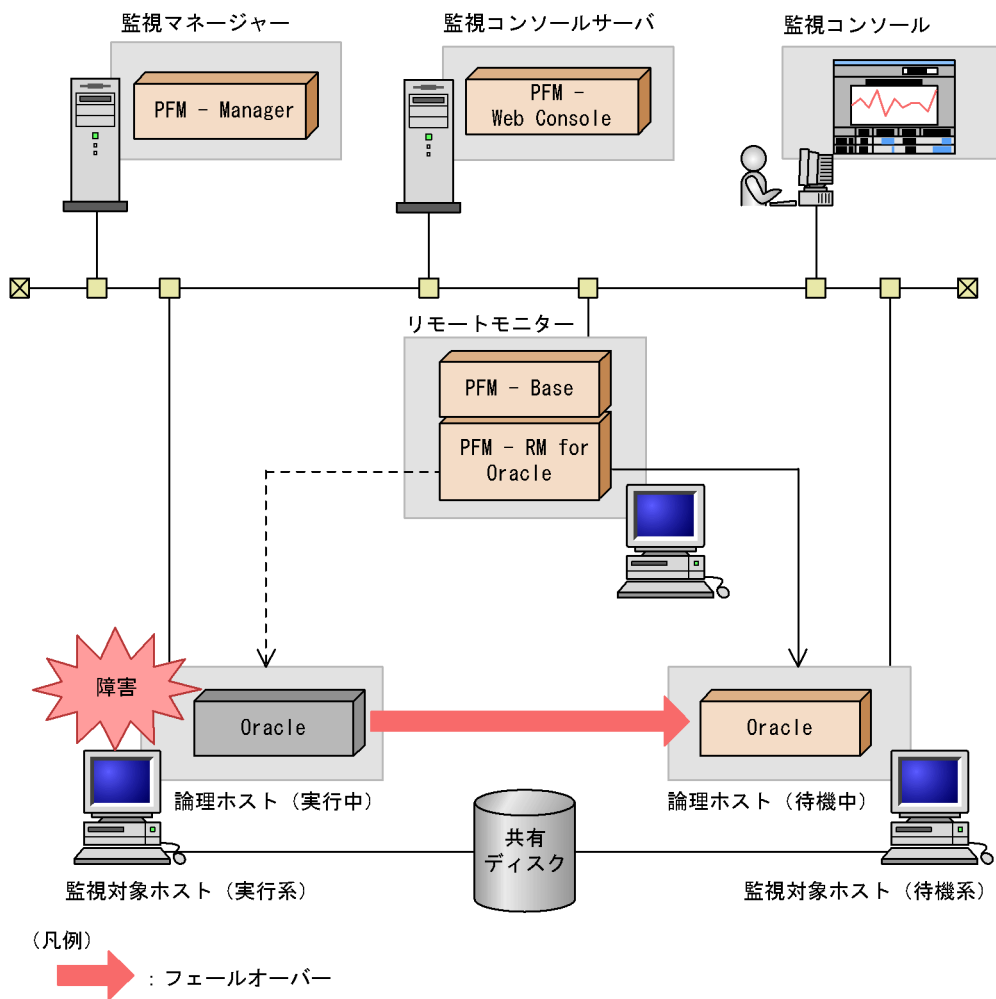
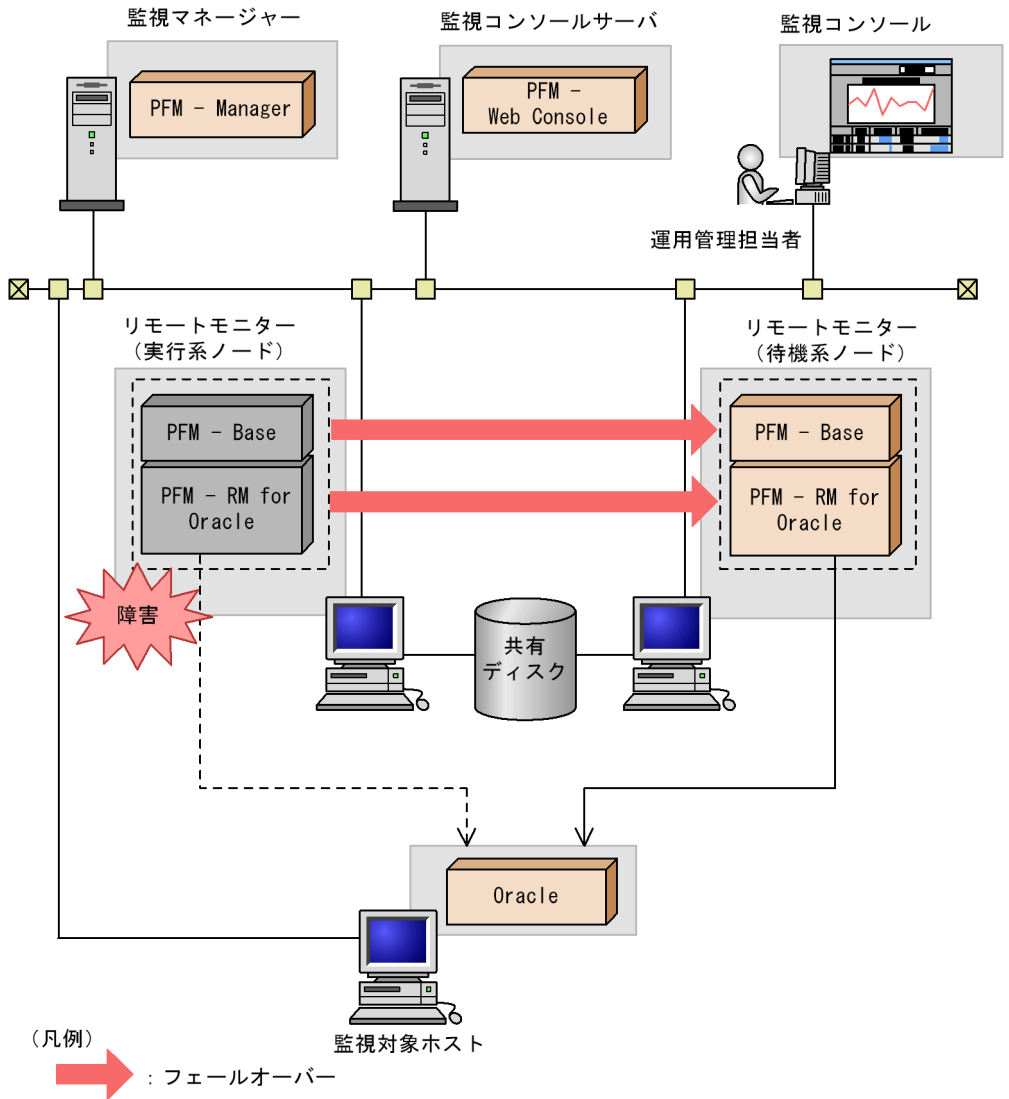


図 1-2 PFM - RM for Oracle をクラスタシステムで運用する場合の運用例



クラスタシステムでの Performance Management の運用の詳細については、「3. クラスタシステムでの運用」を参照してください。

1.2 パフォーマンスデータの収集と管理の概要

パフォーマンスデータの収集方法と管理方法は、パフォーマンスデータが格納されるレコードのレコードタイプによって異なります。PFM - RM for Oracle のレコードは、次の二つのレコードタイプに分けられます。

- PI レコードタイプ
- PD レコードタイプ

パフォーマンスデータの収集方法と管理方法については、次の個所を参照してください。

パフォーマンスデータの収集方法

パフォーマンスデータの収集方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

収集されるパフォーマンスデータの値については、「5. レコード」を参照してください。

パフォーマンスデータの管理方法

パフォーマンスデータの管理方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

PFM - RM で収集および管理されているレコードのうち、どのパフォーマンスデータを利用するかは、PFM - Web Console で選択します。選択方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

1.3 PFM - RM for Oracle を使ったパフォーマンス監視の例

パフォーマンス監視をすることは、Oracle サーバ環境の構築、および管理では重要な作業です。ここでは、PFM - RM for Oracle を用いたパフォーマンス監視の目的、およびパフォーマンス監視の例を紹介します。

1.3.1 パフォーマンス監視の目的

PFM - RM for Oracle を用いたパフォーマンス監視は、主に次の目的で使うことができます。

- パフォーマンスデータを分析し、ボトルネック原因を見つける
- Oracle サーバが正しく動作しているか監視する

Oracle サーバを運用する場合、特定の要因によって、Oracle サーバ全体のパフォーマンスに悪影響を及ぼす場合があります。パフォーマンスに悪影響を及ぼす要因としては、次のようなものがあります。

- バッファ・キャッシュ不足
- 共有プール不足
- ソート作業用メモリー不足
- 全件検索の割合増加
- セグメントのフリー・リスト不足
- ディスク容量不足
- REDO ログ待機の発生

Oracle サーバが正しく動作しているかどうかを確認することは大変重要なことです。Oracle サーバが正しく動作しているかどうかは、パフォーマンスの観点に加えて、次のような監視によって動作を確認することができます。

- Oracle インスタンスの稼働監視

このように、Oracle サーバを安定稼働させるには、PFM - RM for Oracle を用いてパフォーマンス監視をすることができます。

なお、パフォーマンス監視方法のしきい値は参考値です。具体的なしきい値については、ベースラインを測定し決定する必要があります。

具体的な設定項目については、Oracle サーバの運用形態に合わせて検討する必要があります。

1.3.2 ベースラインの選定

ベースラインの選定とは、システム運用で問題なしと想定されるラインをパフォーマンス

ス測定結果から選定する作業です。

Performance Management の製品では、ベースラインの値を「しきい値」とすることで、システムの運用監視をすることとなります。このように、ベースラインの選定は「しきい値」を決定し、パフォーマンス監視をするに当たっての重要な作業となります。

なお、ベースラインの選定は、次のように実施することをお勧めします。

- 運用環境の高負荷テスト時など、ピーク時の状態を測定する
- システム構成によって大きく異なるため、システムリソース、および運用環境を変更する場合は、再度ベースラインを測定する

1.3.3 検索処理パフォーマンス

Oracle Database の検索処理パフォーマンスの維持 / 向上を目的に、チューニング項目に上限値を設け、許容範囲内かどうかを確認するために Oracle を監視します。

検索処理パフォーマンス維持 / 向上のための Oracle 監視には、次のような項目が考えられます。

- バッファ・キャッシュ使用率
- データベースのデータやロールバック・ブロックの競合
- ディクショナリ・キャッシュ
- メモリーやディスク I/O の使用で、すべてのソートについてのディスク上で実行したソートの割合
- 全件検索の割合
- ライブラリー・キャッシュ

(1) 検索処理パフォーマンスに関連するレコードとフィールド

検索処理パフォーマンスに関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 1-1 検索処理パフォーマンスに関連するレコードとフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方 (例)
PI	Cache Hit %	バッファ・キャッシュ使用率。
	Buffer Busy Wait %	バッファビジー待機率。
	Dict Cache Get Miss %	キャッシュミスによるデータ要求の割合。
	Sort Overflow %	一時セグメントを使用しているソート回数の割合。
	Non-Index Lookups %	キャッシュが行われない全表走査の割合。
	Lib Cache Miss %	ライブラリー・キャッシュ・ミス率。 ライブラリー・キャッシュに確保されているオブジェクトがリロードされる割合。 このフィールドの値が増加するとリソース使用量も増加する。

(2) 監視方法

バッファ・キャッシュ使用率の監視

バッファ・キャッシュ使用率は、監視テンプレートで提供している「Buffer Cache Usage アラーム」を使用することで監視することができます。

データベースのデータやロールバック・ブロックの競合の監視

データベースのデータやロールバック・ブロックの競合は、監視テンプレートで提供している「Buffer Cache Waits アラーム」を使用することで監視することができます。データベースのデータやロールバック・ブロックの競合は、「バッファ・キャッシュ使用率」と合わせて監視すると効果的です。

Buffer Cache Usage がしきい値以下、かつ Buffer Cache Waits がしきい値以上の場合、バッファ・キャッシュが不足していることが考えられます。バッファ・キャッシュが不足するとディスク I/O が発生し、検索パフォーマンスの低下を招くおそれがあります。DB_CACHE_SIZE を増やすなどして対応します。

ディクショナリ・キャッシュの監視

ディクショナリ・キャッシュは、監視テンプレートで提供している「Dict. Cache Usage アラーム」を使用することで監視することができます。

ライブラリー・キャッシュの監視

ライブラリー・キャッシュは、監視テンプレートで提供している「Library Cache Usage アラーム」を使用することで監視することができます。

Dict. Cache Usage がしきい値以上、かつ Library Cache Usage がしきい値以上の場合、共有プールが不足していることが考えられます。共有プールが不足すると検索パフォーマンスの低下を招くおそれがあります。SHARED_POOL_SIZE を増やすなどして対応します。

注

Oracle 10g で、初期化パラメーター SGA_TARGET を指定している場合、SGA の構成パラメーターは自動調整されるため、警告または異常条件のしきい値超過時にアクションを実施する必要はありません。

メモリーやディスク I/O の使用で、すべてのソートについてのディスク上で実行したソートの割合の監視

メモリーやディスク I/O の使用で、すべてのソートについてのディスク上で実行したソートの割合は、監視テンプレートで提供している「Disk Sorts アラーム」を使用することで監視することができます。

Disk Sort がしきい値以上の場合、ソート作業用メモリーが不足していることが考えられます。ソート作業用メモリーが不足すると TEMPORARY セグメントを使ったディスクソートが行われ、パフォーマンス低下の原因となるため SORT_AREA_SIZE の値を増やすことで対応します。

全件検索の割合の監視

全件検索の割合は、監視テンプレートで提供している「Full Table Scans アラーム」を使用することで監視することができます。

Full Table Scans がしきい値以上の場合、全件検索の発生で検索パフォーマンスの低下が考えられます。検索対象を絞り込むなどして検索パフォーマンスを見直します。

1.3.4 データ更新処理パフォーマンス

Oracle Database のデータ更新処理パフォーマンスの低下を防ぐために、Oracle を監視します。データ更新処理のパフォーマンス低下を防ぐための Oracle 監視には、次のような項目が考えられます。

- バッファ・キャッシュ使用率
- データベースのデータやロールバック・ブロックの競合
- フリー・リストの競合

(1) データ更新処理パフォーマンスに関連する主なフィールド

データ更新処理パフォーマンスに関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 1-2 データ更新処理パフォーマンスに関連するレコードとフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方(例)
PI	Cache Hit %	バッファ・キャッシュ使用率。
	Buffer Busy Wait %	バッファビジー待機率。
	Free List Wait Events	空きリストの待機イベント。

(2) 監視方法

バッファ・キャッシュ使用率の監視

バッファ・キャッシュ使用率は、監視テンプレートで提供している「Buffer Cache Usage アラーム」を使用することで監視することができます。

データベースのデータやロールバック・ブロックの競合の監視

データベースのデータやロールバック・ブロックの競合は、監視テンプレートで提供している「Buffer Cache Waits アラーム」を使用することで監視することができます。データベースのデータやロールバック・ブロックの競合は、「バッファ・キャッシュ使用率」と合わせて監視すると効果的です。

Buffer Cache Usage がしきい値以下、かつ Buffer Cache Waits がしきい値以上の場合、バッファ・キャッシュが不足していることが考えられます。バッファ・キャッシュが不足するとディスク I/O が発生し、データ更新処理パフォーマンスの低下を招くおそれがあります。DB_CACHE_SIZE を増やすなどして対応します。

フリー・リストの競合の監視

フリー・リストの割合は、監視テンプレートで提供している「Free List Waits ア

ラーム」を使用することで監視できます。

Free List Waits がしきい値以上の場合、セグメントのフリー・リストが不足していることが考えられます。フリー・リストが不足すると、データ更新処理パフォーマンスの低下を招くおそれがあります。STORAGE 句に FREE LISTS オプションを付けて表を再構築するなどして対応します。

1.3.5 Oracle インスタンス稼働監視

Oracle サーバの稼働監視をします。

Oracle サーバの稼働監視には、次のような項目が考えられます。

- Oracle インスタンスの稼働監視

(1) Oracle インスタンスの稼働に関連するレコードとフィールド

Oracle インスタンスの稼働に関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 1-3 Oracle インスタンスの稼働に関連するレコードとフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方(例)
PD_PDIA	Availability	可用性ステータス。 有効な値は、「0(停止)」または「1(稼働)」。

(2) 監視方法

Oracle インスタンスの稼働の監視

Oracle インスタンスの稼働は、監視テンプレートで提供している「Server Status アラーム」を使用することで監視することができます。

Availability が「0」の場合、Oracle インスタンスが停止し Oracle サーバに接続できなくなっています。Oracle インスタンスを再起動して対応します。

1.3.6 ディスク監視

Oracle データベースを安定稼働させるために、運用中の Oracle データベースのディスク容量の変化を監視します。

運用中の Oracle データベースのディスク容量の変化を監視するには、次のような項目が考えられます。

- テーブルスペースの容量

(1) テーブルスペースの容量に関連するレコードとフィールド

テーブルスペースの容量に関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 1-4 テーブルスペースの容量に関連するレコードとフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方(例)
PD_PDTS	Free %	空き領域の割合。

(2) 監視方法

テーブルスペースの容量の監視

テーブルスペースの容量は、監視テンプレートで提供している「Tablespace Usage アラーム」を使用することで監視することができます。

Tablespace Usage がしきい値以下の場合、空き領域が不足しています。PD_PDTS レコードで、どの表領域で問題が発生しているかを確認し、表領域へのアクセスを見直すなどして対応します。

1.3.7 REDO ログ待機の監視

Oracle サーバで REDO ログファイルサイズが小さい場合に、待機が発生することが考えられます。そのために、REDO ログ待機の発生頻度を監視します。

- REDO ログ待機発生頻度の監視

(1) REDO ログ待機発生頻度に関連するレコードとフィールド

REDO ログ待機発生頻度に関連するレコードとフィールドを次の表に示します。

表 1-5 REDO ログ待機発生頻度に関連するレコードとフィールド

使用レコード	使用フィールド	値の見方(例)
PI	Redo Log Space Requests	アクティブ・ログ・ファイルが満杯であるため、REDO ログ・エントリにディスク領域が割り当てられるまで Oracle が待機する必要がある回数。

(2) 監視方法

REDO ログ待機の発生頻度の監視

REDO ログ待機の発生頻度は、監視テンプレートで提供している「Redo Log Contention アラーム」を使用することで監視することができます。

Redo Log Contention がしきい値以上の場合、REDO ログで待機が発生しています。待機が発生する要因として、REDO ログファイルのサイズが小さいことが考えられます。REDO ログファイルのサイズを拡張するなどして対応します。

2

インストールとセットアップ

この章では、PFM - RM for Oracle のインストールおよびセットアップ方法について説明します。Performance Management システム全体のインストールおよびセットアップ方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

-
- 2.1 インストールとセットアップ (Windows の場合)

 - 2.2 インストールとセットアップ (UNIX の場合)

 - 2.3 アンインストールとアンセットアップ (Windows の場合)

 - 2.4 アンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合)

 - 2.5 PFM - RM for Oracle のシステム構成の変更

 - 2.6 PFM - RM for Oracle の運用方式の変更

 - 2.7 バックアップとリストア

 - 2.8 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

 - 2.9 コマンドプロンプトの起動方法
-

2.1 インストールとセットアップ (Windows の場合)

ここでは、PFM - RM for Oracle をインストールおよびセットアップする手順を示します。

2.1.1 インストールとセットアップの前に (Windows の場合)

PFM - RM for Oracle をインストールおよびセットアップする前に確認しておくことを説明します。

(1) 前提 OS

PFM - RM for Oracle が動作する OS を次に示します。

- Windows Server 2003
- Windows Server 2008

(2) ネットワークの環境設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

(a) IP アドレスの設定

PFM - RM のホストは、ホスト名で IP アドレスが解決できる環境を設定してください。IP アドレスが解決できない環境では、PFM - RM は起動できません。

監視ホスト名 (Performance Management システムのホスト名として使用する名前) には、実ホスト名を使用できます。

Windows システムでは `hostname` コマンド、UNIX システムでは `uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名で、IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ホスト名と IP アドレスは、次のどれかの方法で設定してください。

- Performance Management のホスト情報設定ファイル (`jpchosts` ファイル)
- `hosts` ファイル
- DNS (Domain Name System)

監視ホスト名には、実ホスト名またはエイリアス名を使用します。

- 実ホスト名を使用する場合

Windows 環境では、hostname コマンドの実行結果で確認できるホスト名で IP アドレスを解決できるように設定してください。

なお、Performance Management は、DNS 環境でも運用できますが、FQDN (Fully Qualified Domain Name) 形式のホスト名には対応していません。このため、監視ホスト名は、ドメイン名を除いて指定してください。

- エイリアス名を使用する場合

設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境設定をしてください。

監視ホスト名の設定の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、システム構築の変更について説明している章を参照してください。

IP アドレス設定時の注意

- 複数の LAN 環境で使用する場合は、jpchosts ファイルで IP アドレスを設定してください。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Performance Management は、DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上では運用できません。このため、すべての監視ホストには、固定の IP アドレスを設定してください。

(b) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは、デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては、サービスを起動するたびに、そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また、ファイアウォール環境で、Performance Management を使用するときは、ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

表 2-1 デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス (Windows の場合)

機能	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成情報管理機能	Name Server	jp1pcnsvr	22285	PFM・Manager の Name Server サービスで 사용되는ポート番号。Performance Management のすべてのホストで設定される。

2. インストールとセットアップ

機能	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
NNM 連携機能	NNM Object Manager	jp1pcovsvr	22292	PFM・Manager および PFM・Base の NNM 連携機能で、マップマネージャとオブジェクトマネージャの間の通信で使用されるポート番号。PFM・Manager および PFM・Base がインストールされているホストで設定される。
サービス状態管理機能	Status Server	jp1pcstatsvr	22350	PFM・Manager および PFM・Base の Status Server サービスで使用されるポート番号。PFM・Manager および PFM・Base がインストールされているホストで設定される。
監視コンソール通信機能	View Server	jp1pcvsvr	22286	PFM・Manager の View Server サービスで使用されているポート番号です。PFM・Manager がインストールされているホストで設定されています。
Web サービス機能	Web Service	-	20358	PFM・Web Console の Web Service サービスで使用されているポート番号です。
Web コンテナ機能	Web Console	-	20359 20360	PFM・Web Console の Web Console サービスで使用されているポート番号です。

これらの PFM・RM が使用するポート番号で通信できるように、ネットワークを設定してください。

(3) インストールに必要な OS ユーザー権限について

PFM・RM for Oracle をインストールするときは、必ず、Administrator 権限を持つアカウントで実行してください。

(4) 前提プログラム

ここでは、PFM・RM for Oracle をインストールする場合に必要な前提プログラムについて説明します。

なお、PFM・RM for Oracle をインストールしたホストを PFM・RM ホストと呼びます。

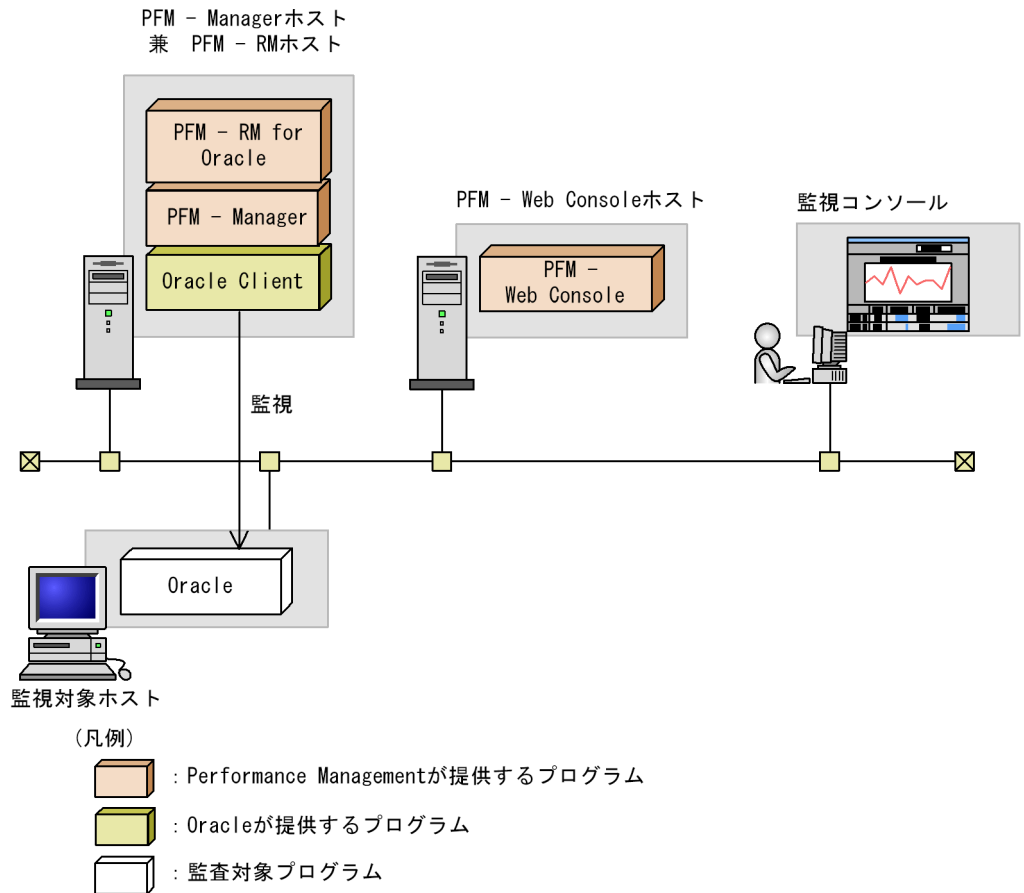
プログラム構成には、大きく分けて次の二つの場合があります。システム環境に応じて、プログラム構成を検討してください。

PFM - Manager ホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合

PFM - Manager と同一ホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合のプログラム構成です。このプログラム構成の場合、PFM - RM for Oracle と同じホストに Oracle Client をインストールする必要があります。

この場合のプログラム構成を次の図に示します。

図 2-1 プログラムの構成 (PFM - Manager と同一ホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合 (Windows の場合))

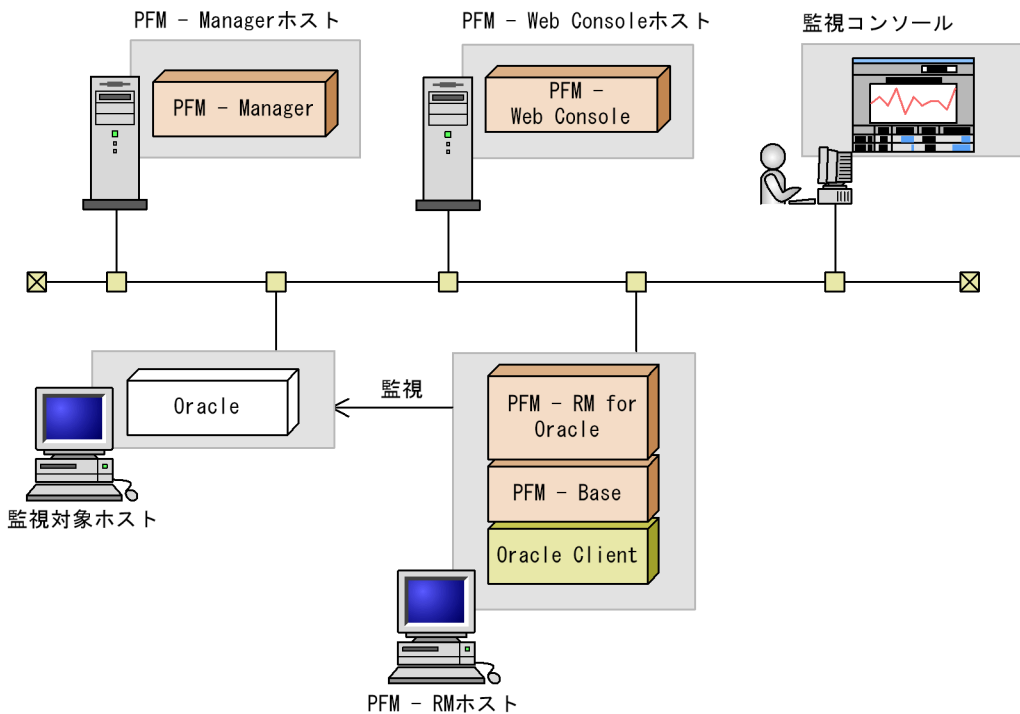


PFM - Manager ホストとは異なるホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合
PFM - Manager とは異なるホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合のプログラム構成です。




このプログラム構成の場合、PFM - RM for Oracle と同じホストに PFM - Base、および Oracle Client をインストールする必要があります。この場合のプログラム構成を次の図に示します。

2. インストールとセットアップ

図 2-2 プログラムの構成 (PFM - Base , および Oracle Client と同一ホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合 (Windows の場合))



(凡例)

-  : Performance Managementが提供するプログラム
-  : Oracleが提供するプログラム
-  : 監査対象プログラム

(a) 監視対象プログラム

PFM - RM for Oracle の監視対象プログラムを次に示します。

- Oracle Database Standard Edition
- Oracle Database Standard Edition One
- Oracle Database Enterprise Edition

仮想化 OS 上で監視対象プログラムを監視する場合、監視対象プログラムが仮想化 OS 上で保障している機能だけが監視対象となります。

(b) Performance Management プログラム

PFM - RM ホストには、PFM - RM と PFM - Base をインストールします。PFM - Base は PFM - RM の前提プログラムです。同一ホストに複数の PFM - RM をインストールす

る場合でも、PFM - Base は一つだけでかまいません。

ただし、PFM - Manager と PFM - RM を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。

また、PFM - RM for Oracle を使って Oracle の稼働監視を行うためには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

(5) クラスタシステムでのインストールとセットアップについて

クラスタシステムでのインストールとセットアップは、前提となるネットワーク環境やプログラム構成が、通常の構成のセットアップとは異なります。また、実行系ノードと待機系ノードでの作業が必要になります。詳細については、「3. クラスタシステムでの運用」を参照してください。

(6) 注意事項

ここでは、Performance Management をインストールおよびセットアップするときの注意事項を説明します。

(a) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では JPC_HOSTNAME を環境変数として使用しているため、ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

(b) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項

Performance Management は、同一ホストに PFM - Manager、PFM - Web Console、および PFM - RM をインストールすることもできます。その場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と PFM - RM を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。この場合、PFM - RM の前提プログラムは PFM - Manager になるため、PFM - Manager をインストールしてから PFM - RM をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Manager、PFM - RM の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、PFM - Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Base、PFM - RM の順でインストールしてください。
- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - RM をインストールすると、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場

2. インストールとセットアップ

合、PFM・RMの接続先 PFM・Manager をリモートホストの PFM・Manager に変更できません。リモートホストの PFM・Manager に接続したい場合は、インストールするホストに PFM・Manager がインストールされていないことを確認してください。

- PFM・RM がインストールされているホストに PFM・Manager をインストールすると、PFM・RM の接続先 PFM・Manager は自ホスト名に設定し直されます。共通メッセージログに設定結果が出力されています。結果を確認してください。
- PFM・Web Console がインストールされているホストに、PFM・RM をインストールする場合は、ブラウザーの画面をすべて閉じてからインストールを実施してください。
- Performance Management プログラムを新規にインストールした場合は、ステータス管理機能がデフォルトで有効になります。ステータス管理機能の設定を変更する場合は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

ポイント

システムの性能や信頼性を向上させるため、PFM・Manager、PFM・Web Console、および PFM・RM はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

(c) バージョンアップの注意事項

古いバージョンの PFM・RM からバージョンアップする場合の注意事項を次に示します。

なお、バージョンアップの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の付録を参照してください。

- Performance Management のプログラムをインストールするときは、ローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止しておいてください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
- すでに Performance Management プログラムがインストールされているホストに PFM・RM をインストールする場合、PFM・RM のインストールパスは、すでにインストールされている PFM・Web Console 以外の Performance Management プログラムのインストールパスと同じになります。インストールパスを変更したい場合は、インストール済みの PFM・Web Console 以外の Performance Management プログラムをすべて削除し、インストールし直す必要があります。
- PFM・Base と PFM・Manager は同一ホストにインストールできません。PFM・Base と PFM・RM がインストールされているホストに PFM・Manager をインストールする場合は、PFM・Web Console 以外のすべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM・Manager、PFM・RM の順でインストールしてください。また、PFM・Manager と PFM・RM がインストールされているホストに PFM・Base をインストールする場合も同様に、PFM・Web Console 以外のすべて

の Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Base, PFM - RM の順でインストールしてください。

- バージョンアップインストール時、既存の Store データベースが自動的にバージョンアップされるため、一時的に Store データベースのディスク占有量が 2 倍になります。バージョンアップインストールを行う前に、Store データベースの格納先のディスクに十分な空き容量があるかどうか確認してください。

(d) その他の注意事項

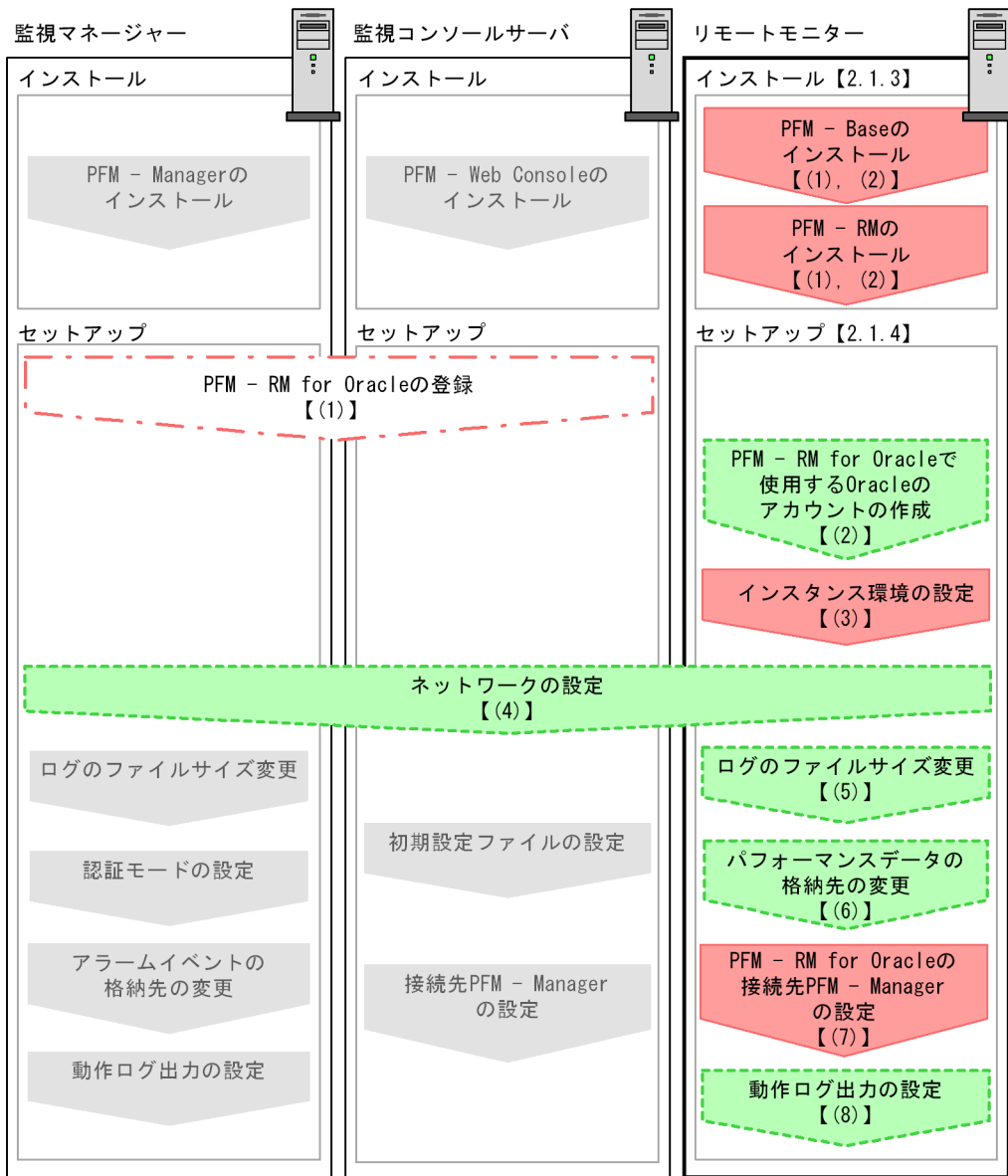
- 監視対象プログラムを監視する場合、Oracle Client 32-bit のインストールと環境設定が必要です。
- インストール先フォルダには、次の文字を含むパスは指定しないでください。
「(,「)」
これらの文字が含まれていた場合、インストールには成功しますが、PFM - RM for Oracle の起動に失敗することがあります。
- 論理ホスト環境の共有ディスクのフォルダ名に、次の文字を含むパスは指定しないでください。
「(,「)」
これらの文字が含まれていた場合、PFM - RM for Oracle の起動に失敗することがあります。
- Performance Management のプログラムが一つもインストールされていない環境に新規インストールする場合は、インストール先フォルダにファイルやフォルダがないことを確認してください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままインストールした場合、システムの再起動を促すメッセージが表示されることがあります。この場合は、メッセージに従ってシステムを再起動し、インストールを完了させてください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム（例えば Windows のイベントビューアなど）を起動したままの状態、ディスク容量が不足している状態、またはフォルダ権限がない状態でインストールした場合、ファイルの展開に失敗することがあります。Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラムが起動している場合はすべて停止してからインストールし直してください。ディスク容量不足やフォルダ権限不足が問題である場合は、問題を解決したあとでインストールし直してください。

2.1.2 インストールとセットアップの流れ（Windows の場合）





PFM - RM for Oracle をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

2. インストールとセットアップ

図 2-3 インストールとセットアップの流れ (Windows の場合)



(凡例)

-  : 必須セットアップ項目
-  : 場合によって必須となるセットアップ項目
-  : オプションのセットアップ項目
-  : マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」またはマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」に手順が記載されている項目
- 【 】 : 参照先

PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

2.1.3 インストール手順 (Windows の場合)

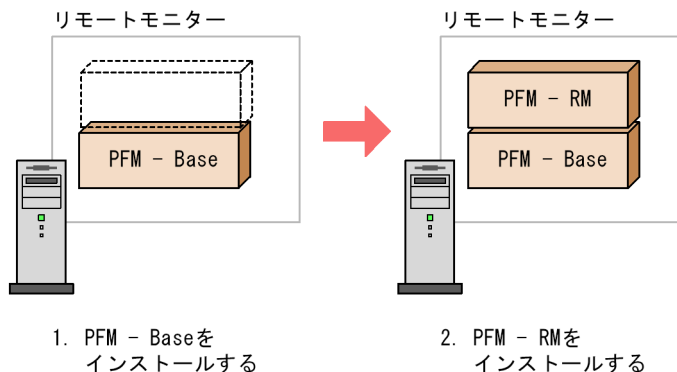
ここでは、PFM - RM for Oracle のプログラムをインストールする順序と CD-ROM の提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。

(1) プログラムのインストール順序

まず、PFM - Base をインストールし、次に PFM - RM をインストールします。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - RM をインストールすることはできません。

なお、PFM - Manager と同一ホストに PFM - RM をインストールする場合は、PFM - Manager, PFM - RM の順でインストールしてください。

同一ホストに複数の PFM - RM をインストールする場合、PFM - RM 相互のインストール順序は問いません。



(2) プログラムのインストール方法

Windows ホストに Performance Management プログラムをインストールするには、CD-ROM の提供媒体を使用する方法と、JP1/NETM/DM を使用してリモートインストールする方法があります。JP1/NETM/DM を使用する方法については、マニュアル「JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R) 用)」を参照してください。

OS 共通の注意事項

インストールするホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance

2. インストールとセットアップ

Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

Windows Server 2008 でインストールする場合の注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、インストール中にユーザーアカウント制御のダイアログボックスが表示されることがあります。ダイアログボックスが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックしてインストールを続行してください。なお、[キャンセル] ボタンをクリックすると、インストールが中止されます。

CD-ROM の提供媒体を使用する場合のインストール手順を次に示します。

1. Performance Management プログラムをインストールするホストに、Administrator 権限でログオンする。
2. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動している場合は、すべて停止してください。
3. 提供媒体を CD-ROM ドライブに入れる。
起動したインストーラーの指示に従ってインストールを進めます。

参考

PFM - Web Console を除く Performance Management プログラムのインストール先フォルダおよびプログラムフォルダは、そのホストに初めて Performance Management プログラムがインストールされるときだけ指定できます。2 回目以降のインストールでは、初回のインストール時に指定したフォルダにインストールまたは登録されます。

2.1.4 PFM - RM for Oracle のセットアップ手順 (Windows の場合)

ここでは、PFM - RM for Oracle を運用するための、セットアップについて説明します。

◇オプション◇ は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

(1) PFM - RM for Oracle の登録

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - RM を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - RM for Oracle を登録する必要があります。

PFM - RM for Oracle を登録する必要があるのは次の場合です。

- Performance Management システムに新しく PFM - RM for Oracle を追加する場合
ただし、登録済みの PFM - RM for Oracle が存在していて、そのバージョンと同じ

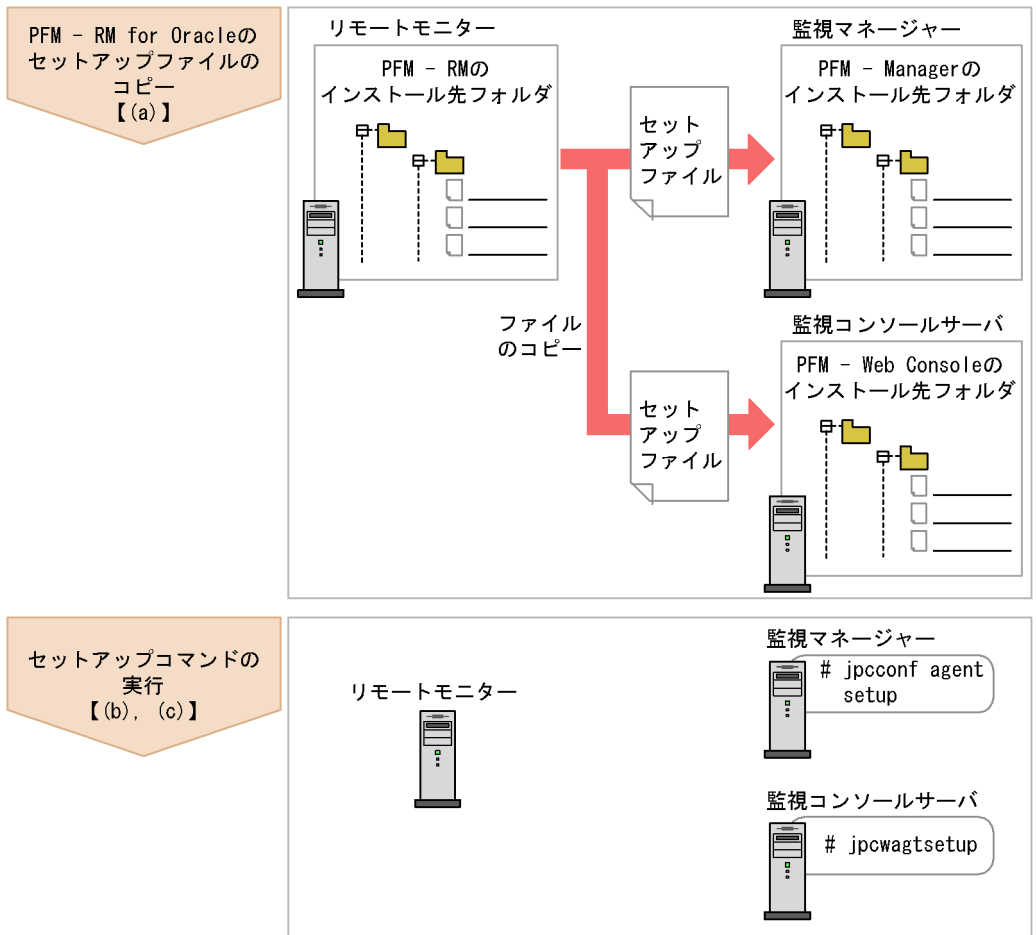
バージョンの PFM - RM for Oracle を新規で追加する場合は、新たに登録する必要はありません。

- すでに登録されている PFM - RM for Oracle のデータモデルのバージョンを更新する場合

PFM - RM for Oracle のデータモデルのバージョンについては、「付録 J バージョン互換」を参照してください。

PFM - RM の登録の流れを次に示します。

図 2-4 PFM - RM の登録の流れ



(凡例)

【 】 : 参照先

2. インストールとセットアップ

! 注意事項

- PFM - RM の登録は、インスタンス環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM - RM for Oracle の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じバージョンの PFM - RM for Oracle を追加した場合、PFM - RM の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる PFM - RM for Oracle を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - RM をインストールした場合、`jpccconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドの章を参照してください。
- PFM - RM for Oracle の情報を登録する作業では、PFM - Web Console の [レポート階層] 画面および [アラーム階層] 画面に「RM Oracle」という名前のフォルダが作成されます。[レポート階層] 画面で、すでに独自に「RM Oracle」という名前のフォルダまたはファイルを作成していた場合には、名前を変更してから作業を始めてください。

(a) PFM - RM for Oracle のセットアップファイルをコピーする

PFM - RM for Oracle をインストールしたホスト (PFM - RM ホスト) にあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は、停止する。
2. PFM - RM のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。
ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 2-2 コピーするセットアップファイル

PFM - RM の セットアップファイル	コピー先		
	PFM プログラム名	OS	コピー先フォルダ
インストール先フォルダ ¥setup¥jpcagt1w. EXE	PFM - Manager	Windows	PFM - Manager のインストール先フォルダ ¥setup
インストール先フォルダ ¥setup¥jpcagt1u. Z		UNIX	/opt/jp1pc/ setup/

PFM - RM の セットアップファイル	コピー先		
	PFM プログラム名	OS	コピー先フォルダ
インストール先フォルダ ¥setup¥jpcagt1w. EXE	PFM - Web Console	Windows	PFM - Web Console のインストール先 フォルダ ¥setup
インストール先フォルダ ¥setup¥jpcagt1u. Z		UNIX	/opt/jp1pc/ setup/

(b) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - RM for Oracle をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpccconf agent setup -key RMOracle
```

コマンド実行時の注意事項

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で `jpccconf agent setup` コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 `jpccconf agent setup` コマンドを実行してください。

PFM - Manager ホストにある PFM - RM のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、削除してもかまいません。

(c) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - RM for Oracle をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - RM のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

(2) PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの作成

PFM - RM for Oracle で Oracle Database を監視し、パフォーマンス情報を収集するためには、次のどちらかの設定が必要になります。

- PFM - RM for Oracle から Oracle Database の監視に使用するアカウントを `sys` アカウントに設定する
- 特定のシステム権限を持つ Oracle のアカウントを作成して、そのアカウントを PFM

2. インストールとセットアップ

- RM for Oracle から Oracle Database の監視に使用するアカウントに設定する

PFM - RM for Oracle がパフォーマンス情報を収集するために Oracle Database に対して実行する操作と、操作を実行するために必要な Oracle のアカウントのシステム権限を次の表に示します。

表 2-3 Oracle Database に対して実行する操作と必要なシステム権限

PFM - RM for Oracle が Oracle Database に対して実行する操作	操作に必要なシステム権限
<ul style="list-style-type: none">静的データディクショナリー・ビューの検索動的パフォーマンス・ビューの検索リスナー制御ユーティリティの実行選択した SQL の実行計画の取得PFM - RM for Oracle 独自のストアドパッケージの実行	<ul style="list-style-type: none">CREATE SESSIONCREATE TABLECREATE PROCEDURESELECT ANY DICTIONARYSELECT ANY TABLEINSERT ANY TABLEDELETE ANY TABLEUPDATE ANY TABLECREATE ANY INDEXALTER ANY INDEXUNLIMITED TABLESPACE

sys アカウントは、表 2-3 のシステム権限を持ちます。Oracle Database の監視に sys アカウントを使用しない場合、表 2-3 のシステム権限を持つ Oracle のアカウントを使用してください。

表 2-3 のシステム権限を持つ Oracle のアカウントは、PFM - RM for Oracle が提供している `mk_rmus.sql` スクリプトを実行して作成できます。

`mk_rmus.sql` スクリプトを使用しないで Oracle Database を監視する Oracle のアカウントを用意したい場合は、操作に応じた権限を付与してください。操作に応じた権限を付与することにより、Oracle のアカウントに付与する権限を、必要最小限に限定することができます。なお、ロールとして権限を付与している場合は、明示的 (GRANT "権限" ...) に権限を与えてください。各操作で必要となる権限については、「付録 I 権限に関する注意事項」を参照してください。

`mk_rmus.sql` スクリプトを実行して Oracle のアカウントを作成するために必要な情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。

表 2-4 Oracle のアカウント作成に必要な情報

項目	説明
Enter username	<p>作成するアカウント名を指定する。 指定できる値は、CREATE USER 文の user パラメーターに指定できる値、かつ 30 バイト以内の 7 ビットアスキーの半角英数文字列。デフォルト値は RMAGT1。</p> <p>注意</p> <p>PFM - RM for Oracle のインスタンスが使用するアカウントに、既存のデータベースアカウントを指定した場合、スクリプトの処理がエラーとなる。 必ず、事前にデータベースに存在するアカウント名を確認し、PFM - RM for Oracle のインスタンス専用のアカウントを指定すること。</p>
Enter password	<p>作成するアカウントのパスワードを指定する。 指定できる値は、CREATE USER 文の IDENTIFIED 句の BY password パラメーターに指定できる値、かつ 30 バイト以内の 7 ビットアスキーの半角英数文字列。入力は必須。</p>
Enter default tablespace	<p>作成するアカウントが使用するデフォルト表領域を指定する。 指定できる値は、CREATE USER 文の DEFAULT TABLESPACE 句に指定できる値、かつ 30 バイト以内の 7 ビットアスキーの半角英数文字列。入力は必須。</p> <p>注意</p> <p>デフォルト表領域として SYSTEM 表領域、INDEX 表領域を指定しないこと。 デフォルト表領域には、PFM - RM for Oracle 用パッケージを登録しても問題のない表領域を指定するか、または、PFM - RM for Oracle 用の表領域を作成し、デフォルト表領域に指定すること。</p>
Enter default temporary tablespace	<p>作成するアカウントが使用するデフォルト一時表領域を指定する。 指定できる値は、CREATE USER 文の TEMPORARY TABLESPACE 句に指定できる値、かつ 30 バイト以内の 7 ビットアスキーの半角英数文字列。入力は必須。</p> <p>注意</p> <p>デフォルト一時表領域として SYSTEM 表領域、INDEX 表領域、USERS 表領域を指定しないこと。 デフォルト一時表領域には、デフォルト一時表領域として使用しても問題のない表領域を指定するか、または、PFM - RM for Oracle 用の表領域を作成し、デフォルト一時表領域に指定すること。</p>

注

- 各項目の入力値は、必ず、30 バイト以内の 7 ビットアスキーの半角英数文字列で指定してください。31 バイト以上の文字列が入力された場合や 7 ビットアスキー半角英数文字以外の文字を指定した場合、スクリプトが予期しない動作をするおそれがあります。
- 各パラメーターの入力値には、「スキーマ・オブジェクトの名称規則」の「非引用識別子」に含まれる値を指定してください。「非引用識別子」以外の値を指定した場合、スクリプトが予期しない動作をするおそれがあります。「スキーマ・オブ

2. インストールとセットアップ

ジェクトの名称規則」および「非引用識別子」については Oracle のマニュアルを参照してください。

- mk_rmus.sql で作成したアカウントの詳細を確認するには、監視対象の Oracle Database の静的ディクショナリ・ビュー DBA_USERS を参照してください。静的ディクショナリ・ビュー DBA_USERS でアカウント「R40」の表領域を参照する例を示します。次の SQL 文を実行し、実行結果から誤った表領域でアカウントを作成していることがわかった場合は、アカウントを削除し、mk_rmus.sql で再作成してください。

(例)

Windows 上の Oracle でアカウント「R40」の詳細を参照する場合

1. コマンドプロンプトから SQL*Plus に sys アカウントで接続する。
sqlplus "sys アカウント@監視対象のデータベースのネットサービス名 /sys アカウントのパスワード [AS SYSDBA]"
2. SQL*Plus で次のような SQL 文を実行する。
SQL>select DEFAULT_TABLESPACE,TEMPORARY_TABLESPACE from DBA_USERS where USERNAME='R40';
3. 実行結果で表示される、「DEFAULT_TABLESPACE」列(デフォルト表領域)、「TEMPORARY_TABLESPACE」列(デフォルト一時表領域)などを確認する。

注意

Oracle のバージョンによって、SQL*Plus に sys アカウントで接続する方法が異なります。詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。監視対象の Oracle Database に対して、SYSDBA 接続を実施します。

CREATE USER 文の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

また、Oracle のアカウント作成に必要な表領域などのリソースをあらかじめ用意してから、作業を実施してください。

Oracle のアカウント作成は、次の手順で実行します。

1. Oracle の sqlplus コマンドが実行できる環境を設定する。
Oracle の環境設定については、Oracle のマニュアルを参照してください。
2. PFM - RM for Oracle が提供している mk_rmus.sql がある、次のフォルダに移動する。
インストール先フォルダ %agt1%agent%sql
3. 監視先の Oracle Database に対して、mk_rmus.sql スクリプトを実行する。

(例)

```
sqlplus Oracle のアカウント@監視対象のデータベースのネットサービス名 /  
Oracle のアカウントのパスワード @mk_rmus.sql
```

注意

- sqlplus は、ORACLE Corporation が提供しているコマンドです。
- mk_rmus.sql スクリプトを実行する Oracle のアカウントには、あらかじめ CREATE USER システム権限、CREATE SESSION システム権限、および GRANT ANY PRIVILEGE システム権限が付与されている必要があります。
- SYS アカウントを使用して mk_rmus.sql スクリプトを実行する場合、AS SYSDBA オプションを指定しないとエラーになることがあります。
- 監視対象の Oracle Database に対して、SYSDBA 接続を実施します。

mk_rmus.sql スクリプトの実行例を示します。

(例)

```
sqlplus "Oracleのアカウント@監視対象のデータベースのネットサービス名 /
Oracleのアカウントのパスワード [AS SYSDBA]" @mk_rmus.sql
```

- mk_rmus.sql スクリプトを実行すると、スクリプトの処理で実行結果をスプールファイルに出力します。ただし、mk_rmus.sql スクリプトを実行時に、カレントフォルダを手順 2 で示すフォルダに変更していない場合、スプールファイルの作成に失敗します。

4. Oracle のアカウント作成に必要なパラメーターを設定する。

表 2-4 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を、項目の入力とする場合はリターンキーだけを押してください。

すべての入力終了すると、Oracle のアカウントが作成されます。

注意

- PFM - RM for Oracle が使用するアカウントを sys 以外に設定した場合、SYS スキーマに属するオブジェクトへの操作に対する、SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドの値を取得できません。この場合、Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドには「Explain Plan Failed」というメッセージが格納されます。SYS スキーマのオブジェクトに対する、SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドの値を取得したい場合は、PFM - RM for Oracle の使用するアカウントに、sys を指定してください。
- SQL を実行したユーザーのスキーマに属するオブジェクトに対して、PFM - RM for Oracle の使用するアカウントにアクセスする権限がない場合、またはオブジェクトを参照できない場合、SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドの値を取得できません。この場合、Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドには「Explain Plan Failed」というメッセージが格納されます。Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドの値を取得したい場合は、スキーマに対してアクセスする権限を付加するか、またはこのフィールドの対象となる SQL を <所有者>.<テーブル名> で実行してください。
- mk_rmus.sql スクリプトを実行して作成した Oracle のアカウントには、UPDATE ANY TABLE システム権限など、ほかのスキーマのオブジェクトを自由

2. インストールとセットアップ

に操作する権限が付与されますので、アカウントの管理には十分注意してください。

Oracle のアカウントに付与される権限を次の表に示します。

表 2-5 mk_rmus.sql で Oracle のアカウントに付与される権限

付与される権限	説明
CREATE SESSION	監視先の Oracle Database に対して、セッションを確立するために必要。
CREATE TABLE	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要なテーブル（表 2-11 を参照）を登録するときに必要。
CREATE PROCEDURE	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な監視用のプロシージャ（表 2-11 を参照）を登録するときに必要。
SELECT ANY DICTIONARY	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な情報（表 2-11 を参照）を登録するときに必要。
UNLIMITED TABLESPACE	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な情報（表 2-11 を参照）を登録するときに必要。
SELECT ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
INSERT ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
UPDATE ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
DELETE ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
CREATE ANY INDEX	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
ALTER ANY INDEX	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。

- 作成されたアカウントには、デフォルト表領域に指定された表領域に対して無制限に書き込みができる権限が付与されます。表領域の使用量の割り当てを変更する場合は、アカウントの作成後に、Oracle の sqlplus コマンドが実行できる環境で ALTER USER 文を発行してください。なお、ALTER USER 文を実行する Oracle アカウントには、ALTER USER システム権限が必要になります。使用量の割り当て変更の例を次に示します。

(例)

```
ALTER USER Oracle のアカウント QUOTA 表領域使用量の上限値 ON 表領域名;
```

ALTER USER 文の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

(3) インスタンス環境の設定

PFM - RM for Oracle では、インスタンス環境および監視対象の設定が必要です。インスタンス環境の設定と監視対象の設定は 1 対 1 の関係です。

PFM - RM for Oracle では、一つのインスタンス環境に定義できる監視対象は一つだけです。複数のインスタンス環境および監視対象を設定する場合は、次の手順を繰り返し実施します。

- インスタンス情報の設定
- 監視対象の設定
- Oracle Database へのオブジェクト登録
- Oracle Database の設定

例えば、三つの Oracle のインスタンスを監視したい場合は、これらの設定を三つそれぞれについて実施します。

それぞれの手順について説明します。

(a) インスタンス情報を設定する

PFM - RM for Oracle で監視する Oracle のインスタンス情報を設定します。インスタンス情報の設定は、PFM - RM ホストで実施します。

設定するインスタンス情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。Oracle のインスタンス情報の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

表 2-6 PFM - RM for Oracle のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
oracle_sid	監視対象となる Oracle システム識別子 (環境変数 ORACLE_SID と同じ値)。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	jpccconf inst setup コマンドの -inst オプションで指定した値
oracle_home ¹	PFM - RM for Oracle が使用する Oracle クライアントの Oracle ホームのフォルダ (環境変数 ORACLE_HOME と同じ値)。 ²	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	-

2. インストールとセットアップ

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
oracle_version	PFM・RM for Oracle が使用する Oracle クライアントのバージョン番号。	<ul style="list-style-type: none"> Oracle 10g の場合：10 Oracle 11g の場合：11 	10
oracle_user ³	Oracle を監視するアカウント。 指定できるアカウント、および必要な権限については、「(2) PFM・RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの作成」を参照のこと。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 <ul style="list-style-type: none"> 空白文字 タブ 次の記号「,」「<」「>」 	sys
oracle_passwd ^{3, 4}	oracle_user で指定したアカウントのパスワード。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 <ul style="list-style-type: none"> 空白文字 タブ 次の記号「,」「<」「>」 	-
net_service_name ^{1, 5}	監視対象のデータベースのネットサービス名。 監視対象のデータベースのネットサービス名については、Oracle のマニュアルを参照のこと。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 <ul style="list-style-type: none"> 空白文字 タブ 次の記号「,」「<」「>」 	インスタンス名 (oracle_sid の値)
retry_time	Oracle 接続時に認証エラーが出力された場合に、再接続を試みる秒数。	0 ~ 600 (単位：秒)	0
log_path	エージェントログの出力先フォルダ (絶対パス)	245 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 <ul style="list-style-type: none"> タブ 次の記号「/」「:」「,」「;」「*」「?」「"」「<」「>」「 」 注意 <ul style="list-style-type: none"> デフォルト以外のフォルダを設定する場合、インストール先フォルダ配下となるパスは指定できない。 ほかのインスタンス出力先として指定している値は指定できない。 	インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥log
log_size	エージェントログの 1 ファイルの最大サイズ。 ⁶	1 ~ 32 (単位：メガバイト) ただし、推奨は 16 以上。	16

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
timeout ⁷	クエリー時の Oracle アクセスのタイムアウト時間。	0, 10 ~ 3600 (単位: 秒) 0 を指定した場合はタイムアウト監視を行わない。1 ~ 9 を指定した場合は、実行時、10 に変更する。 タイムアウトについては、「2.6.5 レコード収集での Oracle アクセスのキャンセル機能」を参照のこと。	0
sql_option ⁸	「Y」を指定した場合、PI_PIDB, PD_PDTS レコードで、次の項目 ⁸ の情報収集を行わず、0 または numeric_10 で指定した値を設定する。	{Y N}	N
numeric_10 ⁹	sql_option が「Y」の場合、情報収集しない項目に設定する値を指定する。sql_option が「N」の場合、指定を無視する。	0 ~ 99999。 ただし、設定するフィールドのデータ型の最大値 (short の場合 32767, ushort の場合 65535) を超える値を指定した場合、データ型の最大値が設定される。 ¹⁰	0
startup_always	PFM - RM for Oracle 起動時に監視対象の Oracle が起動処理中であった場合などに、PFM - RM for Oracle が Oracle 接続エラーで停止することがある。「Y」を指定した場合、接続エラーが発生しても起動処理を継続する。「N」を指定した場合、この動作を有効にしない。	{Y N}	Y
localtemp_option ¹¹	PD_PDDDB, PI_PIDB, PD_PDDDF, PI_PIDF, PD_PDTF, PD_PDTS, PD_PCTS レコードのローカル管理一時表領域の空き容量の情報の表示を切り替えるオプション。 「Y」を指定した場合、使用されていないサイズを表示する。「N」を指定した場合、未割り当てのサイズを表示する。	{Y N}	N

2. インストールとセットアップ

(凡例)

- :なし

注 1

監視対象プログラムを監視する場合、Oracle Client 32-bit のインストールと環境設定が必要です。また、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する際、各項目について次のように設定してください。

- 「oracle_home」

Oracle Client 32-bit の Oracle ホームを設定してください。

- 「net_service_name」

Oracle Client 32-bit で設定したネットサービス名を指定してください。

Oracle Client 32-bit で設定するネットサービス名には、監視する Oracle インスタンスに接続するネットサービス名を指定してください。

Oracle Client 32-bit のインストールと環境構築が完了していない状態で、インスタンス情報の「oracle_home」に、Oracle Client 32-bit がインストールされていない Oracle Database または Oracle Client 64-bit の ORACLE_HOME を指定して、PFM - Agent for Oracle を起動すると、KAVL18020-E のメッセージが表示されません。

注 2

PFM - RM for Oracle が Oracle Database のクライアントライブラリを使用する (Oracle Database に Oracle Client 32bit がインストールされている) 場合には、Oracle Database の Oracle ホームを指定してください。

注 3

PFM - RM for Oracle は、Oracle のパスワード認証で動作します。

注 4

oracle_passwd にパスワードの有効期限が設定されている場合、有効期限に達すると Oracle との接続エラーが起こり、パフォーマンス情報を収集できません。Oracle との接続エラーを起こさないようにするために、パスワードの有効期限が切れる前に、次のどちらかを設定してください。

- パスワードの有効期限を解除します。
- パスワードの更新後、`jpccconf inst setup` コマンドを実行し、`oracle_passwd` を更新します。

なお、`mk_rmus.sql` で作成した Oracle のアカウントには、Oracle が提供している DEFAULT のプロファイルが適用されます。

注 5

PFM - RM for Oracle が使用する Oracle クライアントのネットワークサービス (`tnsnames.ora` など) を設定している必要があります。

また監視対象となる Oracle のネットワークサービス定義 (`listener.ora` など) を設

定し、リスナーを起動しておく必要があります。

Oracle RAC 構成の Oracle Database インスタンスを監視するときは、各ノードの Oracle Database インスタンスを監視するように設定してください。設定方法については、Oracle のマニュアルを参照してください。

また、tnsnames.ora ファイルは次に示すフォルダに格納してください。

oracle_homeで指定したフォルダ¥network¥admin

これ以外のフォルダに格納したときは、PFM - RM for Oracle が Oracle 接続エラーとなります。

注 6

エージェントログは、1 インスタンスにつき最大 4 ファイルが採取されます。

log_size の値は、次の条件を満たすことを確認して指定してください

(log_path がデフォルトの場合を含む)

log_path に指定したドライブの空き容量 (メガバイト) > log_size の値 × 4

ハードディスクに十分な空き容量がない場合、エージェントログが出力エラーとなります。エージェントログについては「7.3 ログ情報」を参照してください。

注 7

タイムアウト値は、高負荷時 (ピーク時) に収集するレコードの収集時間に応じて設定してください。

注 8

PFM - RM for Oracle では Oracle の各セグメント関連の情報を取得するため、Oracle の静的ディクショナリー・ビュー DBA_SEGMENTS の検索をします。Oracle に大量のセグメント (数十万件以上のセグメント) が存在する場合、情報収集で非常に時間が掛かるときがあります。そのため、大量のセグメントが存在し、次の表に示す情報の収集が不要な場合、sql_option を「Y」と設定して運用してください。

表 2-7 レコード名と numeric_10 で指定した値 (インスタンス情報の設定)

レコード名	PFM - View 名	numeric_10 で指定した値
PD_PDTS	Segments	有効
	Extents	有効
PI_PIDB	DB Files %	有効
	Log Files %	有効
	NextAlloc Fails	有効
	Tablespaces	有効
	Rollback Segments	有効

2. インストールとセットアップ

レコード名	PFM - View 名	numeric_10 で指定した値
	Rollback Segments Trans	有効
	Blocks	有効
	Segments	有効
	Extents	有効
	Free Mbytes	有効
	Overextended	有効
	High Max Extent	有効
	Datafiles	有効
	Mbytes	有効
	Free Extents	有効
	Free%	有効
	Free Change	有効
	Write%	有効
	Write/sec	有効
	Redo Files	有効
	Links	有効
	Links Logged On	有効
	Links In Tran	有効
	Links Open Cursors	有効
	Used Change	有効
	Used Mbytes	有効
	Rollback Segments Hit%	有効
	Sort Segments	有効
	Sorting Users	有効
	Physical Blocks Read	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Blocks Written	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Reads	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Writes	デルタ項目のため、常に 0 設定。

注 9

PFM - Web Console などで表示した場合に、注 8 の各フィールドに設定される値が Oracle Database からの収集値なのか、または固定値なのかを判別するために指定する項目です。

注 10

各レコードのフィールドの形式が、「float」または「double」型の場合、データは浮動小数点数となるため、指定値によってまるめられる場合があります。

(例)

numeric_10 の指定を 32767 と指定した場合、32760 と表示される場合があります。

注 11

localtemp_option に「Y」を指定した場合、ローカル管理一時表領域の空き容量やエクステントに関する情報を動的パフォーマンスビューの v\$temp_extent_pool を使用して取得します。取得する情報の空き容量は、収集時に使用していた領域のサイズから未使用サイズを算出します。

localtemp_option に「N」を指定した場合、ローカル管理一時表領域の空き容量やエクステントに関する情報を動的パフォーマンスビューの v\$temp_space_header を使用して取得します。取得する情報の空き容量は、未割り当てのサイズとなります。一度割り当てられたサイズは、一時表領域の再構築や再作成などをするまで解放されないため、解放されるまで空き容量は増加しません。v\$temp_extent_pool ビューを検索した場合、Oracle のインスタンスが休止状態となります。Oracle Database の性能に影響することがありますので、十分に検討してから設定してください。詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

注意

- インスタンス環境を設定していない場合、PFM - RM for Oracle のサービスを起動できません。
- jpcconf inst setup コマンドを使用してインスタンス環境を構築する際、Oracle 上に存在しないインスタンス名を指定した場合でもコマンドは正常に終了します。しかし、その後レコードの収集を開始すると、共通メッセージログに「KAVL18401-W」のメッセージが出力され、監視対象の Oracle に接続できません。この場合、正しいインスタンス名を確認の上、再度 jpcconf inst setup コマンドを実行してください。
- 複数の PFM - RM for Oracle で同じ Oracle インスタンスを監視しないでください。また、PFM - RM for Oracle と PFM - Agent for Oracle で同じ Oracle インスタンスを監視しないでください。

インスタンス環境を構築するには、jpcconf inst setup コマンドを使用します。インスタンス環境の構築手順を次に示します。

1. サービスキーおよびインスタンス名を指定して、jpcconf inst setup コマンドを実行する。

例えば、PFM - RM for Oracle のインスタンス名 SDC のインスタンス環境を構築する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpcconf inst setup -key RMOracle -inst SDC
```

2. インストールとセットアップ

なお、インスタンス名に「sql」という名称は使用できません。

jpccconf inst setup コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

2. PFM - RM for Oracle のインスタンス情報を設定する。

表 2-6 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を、項目の入力とする場合はリターンキーだけを押してください。

すべての入力が終了すると、インスタンス環境が構築されます。構築時に入力したインスタンス情報を変更したい場合は、再度 jpccconf inst setup コマンドを実行し、インスタンス環境を更新してください。インスタンス環境の更新については、「2.6.3 インスタンス環境の更新の設定」を参照してください。

構築されるインスタンス環境を次に示します。

インスタンス環境のフォルダ構成

次のフォルダ下にインスタンス環境が構築されます。

物理ホストの場合：インストール先フォルダ ¥agt1

論理ホストの場合：環境フォルダ ¥jplpc¥agt1

注

環境フォルダとは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のフォルダです。構築されるインスタンス環境のフォルダ構成を次に示します。

表 2-8 インスタンス環境のフォルダ構成

フォルダ名・ファイル名		説明	
agent	インスタンス名	jpccagt.ini	Remote Monitor Collector サービス起動情報ファイル
		jpccagt.ini.model	Remote Monitor Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		status.dat	内部処理用中間ファイル
		tstatuses.dat	仮想 Agent ステータス情報
		targetlist.ini	監視対象一覧
		grouplist.ini	グループ一覧
		GARULES.DAT	グループ化ルールの記述一覧
		targets	リモートエージェント格納フォルダ
		groups	グループエージェント格納フォルダ
		log	ログファイル格納フォルダ
store	インスタンス名	jpccsto.ini	Remote Monitor Store サービス起動情報ファイル

フォルダ名・ファイル名	説明
jpcsto.ini.model	Remote Monitor Store サービス起動情報ファイルのモデルファイル
*.DB	パフォーマンスデータファイル
*.IDX	パフォーマンスデータファイルのインデクスファイル
*.LCK	パフォーマンスデータファイルのロックファイル
status.dat	内部処理用中間ファイル
*.DAT	データモデル定義ファイル
dump	エクスポート先フォルダ
import	標準のデータベースインポート先フォルダ
backup	バックアップ先フォルダ
log	ログファイル格納フォルダ
partial	標準のデータベース部分バックアップ先フォルダ
STPD	PD レコードタイプのパフォーマンスデータ格納先フォルダ
STPI	PI レコードタイプのパフォーマンスデータ格納先フォルダ

注

インスタンス環境を構築した時点の設定値に戻したいときに使用します。

インスタンス環境のサービス ID

インスタンス環境のサービス ID は次のようになります。

- Remote Monitor Collector サービスの場合
1A インスタンス番号 インスタンス名 [ホスト名]
- Remote Monitor Store サービスの場合
1S インスタンス番号 インスタンス名 [ホスト名]
- Group Agent サービスの場合
1A インスタンス番号 インスタンス名 [All@ ホスト名]

PFM - RM for Oracle の場合、インスタンス名には `jpcconf inst setup` コマンドで指定したインスタンス名が表示されます。

例えば、ホスト名が「host1」で、インスタンス名に「SDC」を指定した場合、サービス ID は次のようになります。

- Remote Monitor Collector サービスの場合
1A1SDC[host1]
- Remote Monitor Store サービスの場合

2. インストールとセットアップ

1S1SDC[host1]

- Group Agent サービスの場合
1A1SDC[All@host1]

サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されている命名規則を参照してください。

インスタンス環境の Windows のサービス名
インスタンス環境の Windows のサービス名は次のようになります。

- Remote Monitor Collector サービスの場合
PFM・RM for Oracle インスタンス名 [論理ホスト名]
- Remote Monitor Store サービスの場合
PFM・RM Store for Oracle インスタンス名 [論理ホスト名]

例えば、論理ホスト名が「lhost」で、インスタンス名に「SDC」を指定した場合、サービス名は次のようになります。

- Remote Monitor Collector サービスの場合
PFM・RM for Oracle SDC[lhost]
- Remote Monitor Store サービスの場合
PFM・RM Store for Oracle SDC[lhost]

Windows のサービス名については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されている命名規則を参照してください。また、論理ホストで運用する場合の Windows のサービス名については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(b) 監視対象を設定する

監視対象の設定では、「(a) インスタンス情報を設定する」で設定したインスタンスに監視対象ホストの情報を設定します。複数のホストを監視対象として設定する場合は、次の手順を繰り返し実施します。

監視対象の設定は、PFM・RM ホストで実施します。

設定する情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。

表 2-9 PFM - RM for Oracle の監視対象の設定

項目	説明	設定できる値	デフォルト値	jpccnf target setup コマンドによる再更新の可 / 不可
Target Host	監視対象となる Oracle が稼働しているホスト名。 論理ホストの場合は、論理ホスト名。	1 ~ 32 バイトの半角英数字およびハイフン (-) だけ使用できる。ただし、「-」から始まる名前は指定できない。 インスタンス内でユニーク ¹ である必要がある。	- ²	可

(凡例)

- : なし

注 1

「All」はグループエージェント用の予約語のため使用できません。

注 2

指定を省略した場合は、PFM - RM ホストのホスト名が仮定されます。

注意

- PFM - RM for Oracle を起動するためには、監視対象の設定が必要です。
監視対象を設定しないで PFM - RM for Oracle を起動した場合、共通メッセージログに「KAVL18639-E」のメッセージが出力され、PFM - RM for Oracle は停止します。
- PFM - RM for Oracle は、インスタンス環境で指定した oracle_sid で、監視対象の Oracle インスタンスを特定します。
Target Host で指定したホスト名はヘルスチェックだけに使用され、Oracle インスタンスへの接続には使用されません。
Target Host に不正なホスト名を指定した場合、パフォーマンスデータの収集状況と、ヘルスチェック結果は一致しないことがあります。
- 監視対象の設定で指定した値が不正な場合でも、監視対象の生成コマンドは正常に終了します。
- 監視対象となる Oracle インスタンスのホストにファイアウォールが設定されている場合、PFM - RM for Oracle が使用する Oracle クライアントからの接続が拒否されないように設定してください。Oracle の環境設定については、Oracle のマニュアルを参照してください。また、Oracle の環境設定後は、Oracle の sqlplus コマンドが実行できる環境かどうか確認してください。

監視対象の環境を構築するには、jpccnf target setup コマンドを使用します。監視対象の環境の構築手順を次に示します。

2. インストールとセットアップ

1. サービスキー、インスタンス名および監視対象名を指定して、`jpcconf target setup` コマンドを実行する。

```
jpcconf target setup -key RMOracle -inst インスタンス名 -target 監視対象名
```

2. PFM - RM for Oracle の監視対象の情報を設定する。

表 2-9 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を入力値とする場合は、リターンキーだけを押ししてください。

すべての入力が終了すると、インストール先フォルダ `¥agt1` 以下に監視対象の環境が構築されます。構築時に入力した監視対象の情報を変更したい場合は、再度 `jpcconf target setup` コマンドを実行し、監視対象の環境を更新してください。監視対象の環境の更新については、「2.6.2 監視対象の更新の設定」を参照してください。

構築される監視対象の環境のフォルダ構成を次に示します。

表 2-10 監視対象の環境のフォルダ構成

フォルダ名・ファイル名			説明	
agent	インスタンス名	target s	監視対象名.ini	監視対象設定ファイル
			監視対象名.ini.model	監視対象設定ファイルのモデル

(c) Oracle Database へオブジェクトを登録する

PFM - RM for Oracle で Oracle Database を監視するためには、監視先の Oracle Database に対して、PFM - RM for Oracle が提供するオブジェクトを登録する必要があります。ここでは、PFM - RM for Oracle が提供している SQL スクリプトを次の手順で実行します。なお、この手順は、Oracle Database のインスタンスを監視するアカウントごとに、1 回だけ必要です。

1. Oracle の `sqlplus` コマンドが実行できる環境を設定する。
Oracle の環境設定については、Oracle のマニュアルを参照してください。
2. PFM - RM for Oracle が提供している `sp_rist.sql` がある、次のフォルダに移動する。

```
インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥sql
```

3. 監視先の Oracle Database に対して、`sp_rist.sql` スクリプトを実行する。
`sp_rist.sql` スクリプトによって、PFM - RM for Oracle が Oracle を監視する時に必要なオブジェクト（監視用のプロシージャや作業用のテーブル）を Oracle に登録します。

(例)

```
sqlplus Oracle のアカウント@監視対象のデータベースのネットサービス名 /
```


Oracle のアカウントのパスワード @sp_rist.sql

- sqlplus は、ORACLE Corporation が提供しているコマンドです。
- Oracle のアカウントには、oracle_user の値を指定してください。ここで実行した Oracle のアカウントでデータベースにオブジェクトが作成されます。また、アンセットアップの際には、同じ Oracle のアカウントで実行する必要があります。
- Oracle のアカウントに SYS ユーザーを使用する場合、AS SYSDBA オプションを指定しないで、sp_rist.sql スクリプトを実行するとエラーになる場合があります。その場合は、AS SYSDBA オプションを指定して実行してください。

このコマンドの実行で、次の表に示すテーブルおよびパッケージが作成されます。

表 2-11 作成されるテーブルおよびパッケージ

テーブル	パッケージ
LSC_14_PLAN_TABLE	LSC_14_PDAS, LSC_14_73_PDDB, LSC_14_PDDB2, LSC_14_PDI, LSC_14_73_PIDB, LSC_14_PIDB2, LSC_14_PIDB3

注

5 メガバイト以上の表領域を確保しておく必要があります。

LSC_14_PLAN_TABLE は、SQL TEXT (PD_PDSQ) レコードを収集した場合に使用されます。

(d) Oracle Database を設定する

PFM・RM for Oracle が提供するレコードで、次の表に示すパフォーマンスデータを収集するためには、Oracle Database の初期化パラメーター「TIMED_STATISTICS」の値を「TRUE」に変更する必要があります。

表 2-12 TIMED_STATISTICS=TRUE を設定しないと収集できない項目

レコード	フィールド
Data File Interval (PI_PIDF)	Write Time (WRITE_TIME)
Session Detail (PD_PDS)	Avg Wait (AVERAGE_WAIT)
	Avg Wait String (AVERAGE_WAIT_STRING)
	Time Waited (TIME_WAITED)
	Time Waited String (TIME_WAITED_STRING)
Session Statistics Summary (PD_PDS2)	Statement CPU (STATEMENT_CPU)

注意

- 初期化パラメーターファイルを変更した場合は、データベースインスタンスの再起動が必要です。
- サーバ・パラメーターファイルの値を変更した場合、初期化パラメーターファイ

2. インストールとセットアップ

ルによる変更よりも優先されることがあります。

- 初期化パラメーターの `TIMED_STATISTICS` を `TRUE` に設定すると、時間の統計に関するオーバーヘッドが発生し、Oracle Database の性能に影響することがありますので、十分に検討してから設定してください。詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

(4) ネットワークの設定 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて行う設定です。

ネットワークの設定には次の二つの項目があります。

IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときには設定します。複数の IP アドレスを設定するには、`jpchosts` ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した `jpchosts` ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(5) ログのファイルサイズ変更 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。共通メッセージログは、デフォルトで 2,048 キロバイトのファイルが 2 ファイル使用されます。このファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(6) パフォーマンスデータの格納先の変更 オプション

PFM - RM for Oracle で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先またはエクスポート先のフォルダを変更したい場合に必要な設定です。

パフォーマンスデータは、デフォルトでは次の場所に保存されます。

- 保存先：インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥
- バックアップ先：インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥backup¥
- 部分バックアップ先：インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥partial
- エクスポート先：インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥dump¥
- インポート先：インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥import

注意

論理ホストで運用する場合のデフォルトの保存先については、「インストール先フォルダ」を「環境フォルダ ¥jplpc」に読み替えてください。

詳細については、「2.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更」を参照してください。

(7) PFM - RM for Oracle の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - RM がインストールされているホストで、その PFM - RM を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、`jpcconf mgrhost define` コマンドを使用します。

! 注意事項

- 同一ホスト上に、複数の PFM - RM がインストールされている場合でも、接続先に指定できる PFM - Manager は、一つだけです。PFM - RM ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。
- PFM - RM と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

セットアップを実施する前に、ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

`jpcconf mgrhost define` コマンド実行時に、Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して、`jpcconf mgrhost define` コマンドを実行する。

例えば、接続先の PFM - Manager がホスト `host01` 上にある場合、次のように指定します。

2. インストールとセットアップ

```
jpccconf mgrhost define -host host01
```

(8) 動作ログ出力の設定 オプション

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要の設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「付録 K 動作ログの出力」を参照してください。

2.2 インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ここでは、PFM - RM for Oracle をインストールおよびセットアップする手順を示します。

2.2.1 インストールとセットアップの前に (UNIX の場合)

PFM - RM for Oracle をインストールおよびセットアップする前に確認しておくことを説明します。

(1) 前提 OS

PFM - RM for Oracle が動作する OS を次に示します。

- Linux (x86)
- Linux (x64)

(2) ネットワークの環境設定

Performance Management が動作するためのネットワーク環境について説明します。

(a) IP アドレスの設定

PFM - RM のホストは、ホスト名で IP アドレスが解決できる環境を設定してください。IP アドレスが解決できない環境では、PFM - RM は起動できません。

監視ホスト名 (Performance Management システムのホスト名として使用する名前) には、実ホスト名を使用できます。

Windows システムでは `hostname` コマンド、UNIX システムでは `uname -n` コマンドを実行して確認したホスト名で、IP アドレスを解決できるように環境を設定してください。

監視ホスト名の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ホスト名と IP アドレスは、次のどれかの方法で設定してください。

- Performance Management のホスト情報設定ファイル (`jpchosts` ファイル)
- `hosts` ファイル
- DNS (Domain Name System)

監視ホスト名には、実ホスト名またはエイリアス名を使用します。

2. インストールとセットアップ

- 実ホスト名を使用する場合

UNIX 環境では、`uname -n` コマンドの実行結果で確認できるホスト名で、IP アドレスを解決できるように設定してください。また、`hostname` コマンドで取得するホスト名を使用することもできます。

なお、Performance Management は、DNS 環境でも運用できますが、FQDN (Fully Qualified Domain Name) 形式のホスト名には対応していません。このため、監視ホスト名は、ドメイン名を除いて指定してください。

- エイリアス名を使用する場合

設定しているエイリアス名で IP アドレスを解決できるように環境設定をしてください。

監視ホスト名の設定の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、システム構築の変更について説明している章を参照してください。

IP アドレス設定時の注意

- 複数の LAN 環境で使用する場合は、`jpchosts` ファイルで IP アドレスを設定してください。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Performance Management は、DHCP による動的な IP アドレスが割り振られているホスト上では運用できません。このため、すべての監視ホストには、固定の IP アドレスを設定してください。

(b) ポート番号の設定

Performance Management プログラムのサービスは、デフォルトで次の表に示すポート番号が割り当てられています。これ以外のサービスまたはプログラムに対しては、サービスを起動するたびに、そのときシステムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。また、ファイアウォール環境で、Performance Management を使用するときは、ポート番号を固定してください。ポート番号の固定の手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

表 2-13 デフォルトのポート番号と Performance Management プログラムのサービス (UNIX の場合)

機能	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
サービス構成情報管理機能	Name Server	<code>jp1pcnsvr</code>	22285	PFM・Manager の Name Server サービスで使用されるポート番号。Performance Management のすべてのホストで設定される。

機能	サービス名	パラメーター	ポート番号	備考
NNM 連携機能	NNM Object Manager	jp1pcovsvr	22292	PFM - Manager および PFM - Base の NNM 連携機能で、マップマネージャとオブジェクトマネージャの間の通信で使用されるポート番号。PFM - Manager および PFM - Base がインストールされているホストで設定される。
サービス状態管理機能	Status Server	jp1pcstatsvr	22350	PFM - Manager および PFM - Base の Status Server サービスで使用されるポート番号。PFM - Manager および PFM - Base がインストールされているホストで設定される。
監視コンソール通信機能	View Server	jp1pcsvr	22286	PFM - Manager の View Server サービスで使用されているポート番号です。PFM - Manager がインストールされているホストで設定されています。
Web サービス機能	Web Service	-	20358	PFM - Web Console の Web Service サービスで使用されているポート番号です。
Web コンテナ機能	Web Console	-	20359 20360	PFM - Web Console の Web Console サービスで使用されているポート番号です。

(3) インストールに必要な OS ユーザー権限について

PFM - RM for Oracle をインストールするときは、必ず、スーパーユーザー権限を持つアカウントで実行してください。

(4) 前提プログラム

ここでは、PFM - RM for Oracle をインストールする場合に必要な前提プログラムについて説明します。

なお、PFM - RM for Oracle をインストールしたホストを PFM - RM ホストと呼びます。

プログラム構成には、大きく分けて次の二つの場合があります。システム環境に応じて、プログラム構成を検討してください。

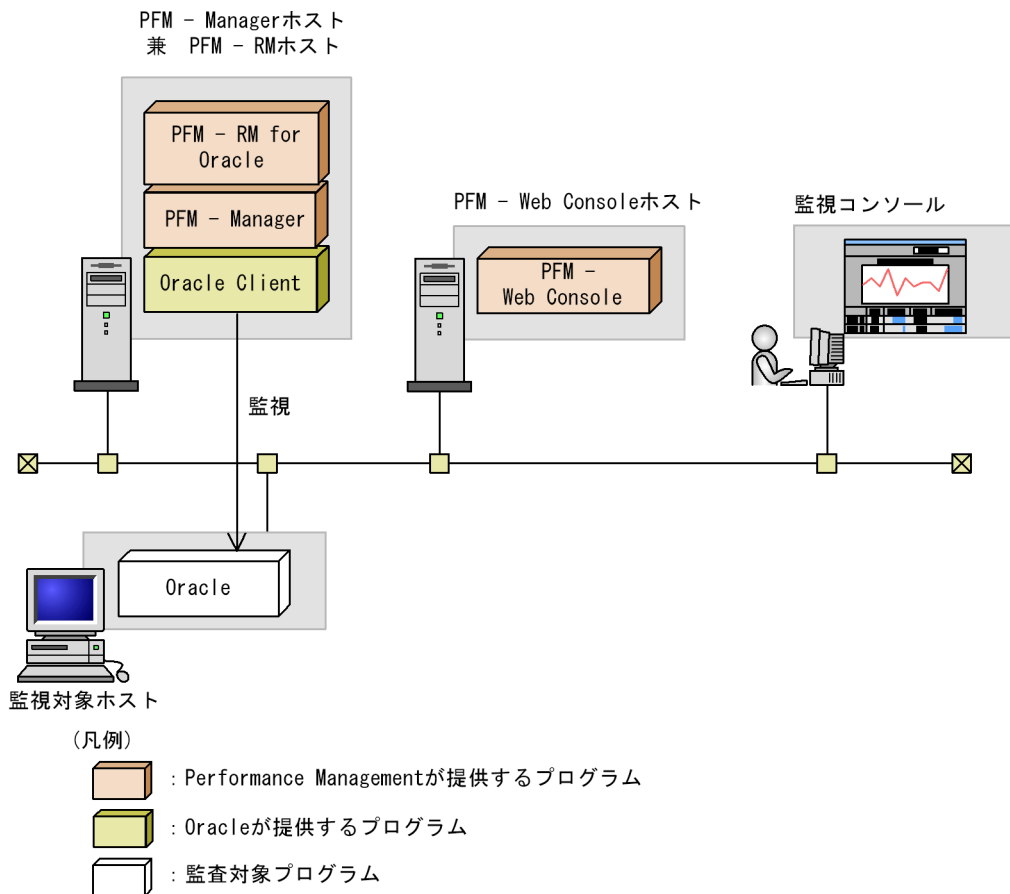
PFM - Manager ホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合

PFM - Manager と同一ホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合のプログラム構成です。このプログラム構成の場合、PFM - RM for Oracle と同じホストに Oracle Client をインストールする必要があります。

この場合のプログラム構成を次の図に示します。

2. インストールとセットアップ

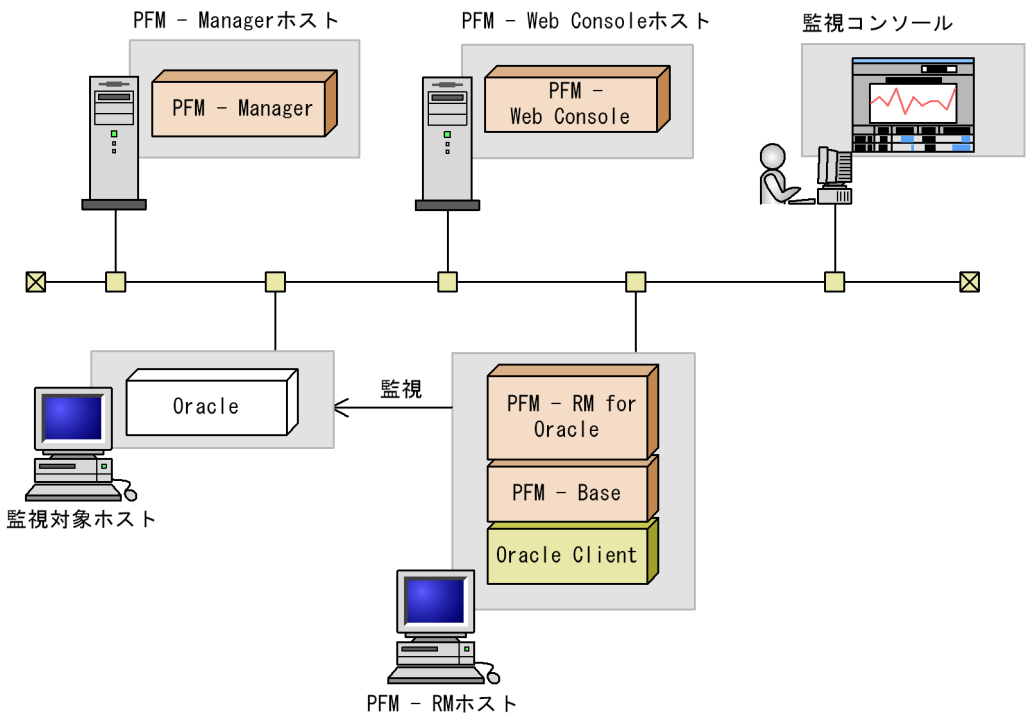
図 2-5 プログラムの構成 (PFM - Manager と同一ホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合 (UNIX の場合))






PFM - Manager ホストとは異なるホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合
PFM - Manager とは異なるホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合
のプログラム構成です。

このプログラム構成の場合、PFM - RM for Oracle と同じホストに PFM - Base , および Oracle Client をインストールする必要があります。PFM - Base , および Oracle Client と同じホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合のプログラム構成を次の図に示します。

図 2-6 プログラムの構成 (PFM - Base , および Oracle Client と同一ホストに PFM - RM for Oracle をインストールする場合 (UNIX の場合))



(凡例)

-  : Performance Managementが提供するプログラム
-  : Oracleが提供するプログラム
-  : 監査対象プログラム

(a) 監視対象プログラム

PFM - RM for Oracle の監視対象プログラムを次に示します。

- Oracle Database Standard Edition
- Oracle Database Standard Edition One
- Oracle Database Enterprise Edition

仮想化 OS 上で監視対象プログラムを監視する場合、監視対象プログラムが仮想化 OS 上で保障している機能だけが監視対象となります。

(b) Performance Management プログラム

PFM - RM ホストには、PFM - RM と PFM - Base をインストールします。PFM - Base は PFM - RM の前提プログラムです。同一ホストに複数の PFM - RM をインストールす

2. インストールとセットアップ

る場合でも、PFM - Base は一つだけでかまいません。

ただし、PFM - Manager と PFM - RM を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。

また、PFM - RM for Oracle を使って Oracle の稼働監視を行うためには、PFM - Manager および PFM - Web Console が必要です。

(5) クラスタシステムでのインストールとセットアップについて

クラスタシステムでのインストールとセットアップは、前提となるネットワーク環境やプログラム構成が、通常の構成のセットアップとは異なります。また、実行系ノードと待機系ノードでの作業が必要になります。詳細については、「3. クラスタシステムでの運用」を参照してください。

(6) 注意事項

ここでは、Performance Management をインストールおよびセットアップするときの注意事項を説明します。

(a) 環境変数に関する注意事項

Performance Management では JPC_HOSTNAME を環境変数として使用しているため、ユーザー独自に環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

(b) 同一ホストに Performance Management プログラムを複数インストール、セットアップするときの注意事項

Performance Management は、同一ホストに PFM - Manager、PFM - Web Console、PFM - Agent、および PFM - RM をインストールすることもできます。その場合の注意事項を次に示します。

- PFM - Manager と PFM - RM を同一ホストにインストールする場合、PFM - Base は不要です。この場合、PFM - RM の前提プログラムは PFM - Manager になるため、PFM - Manager をインストールしてから PFM - RM をインストールしてください。
- PFM - Base と PFM - Manager は同一ホストにインストールできません。PFM - Base と PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Manager をインストールする場合は、すべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Manager、PFM - RM の順でインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - RM がインストールされているホストに PFM - Base をインストールする場合も同様に、すべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM - Base、PFM - RM の順でインストールしてください。
- PFM - Manager がインストールされているホストに PFM - RM をインストールすると、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、PFM - RM の接続先 PFM - Manager をリモートホストの PFM - Manager に変更

できません。リモートホストの PFM・Manager に接続したい場合は、インストールするホストに PFM・Manager がインストールされていないことを確認してください。

- PFM・RM がインストールされているホストに PFM・Manager をインストールすると、PFM・RM の接続先 PFM・Manager は自ホスト名に設定し直されます。共通メッセージログに設定結果が出力されています。結果を確認してください。
- PFM・Web Console がインストールされているホストに、PFM・RM をインストールする場合は、ブラウザの画面をすべて閉じてからインストールを実施してください。
- Performance Management プログラムを新規にインストールした場合は、ステータス管理機能がデフォルトで有効になります。ステータス管理機能の設定を変更する場合は、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

ポイント

システムの性能や信頼性を向上させるため、PFM・Manager、PFM・Web Console、PFM・Agent、および PFM・RM はそれぞれ別のホストで運用することをお勧めします。

(c) バージョンアップの注意事項

古いバージョンの PFM・RM からバージョンアップする場合の注意事項を次に示します。

なお、バージョンアップの詳細については、「付録 H 移行手順と移行時の注意事項」を参照してください。

- Performance Management のプログラムをインストールするときは、ローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止しておいてください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
- PFM・Base と PFM・Manager は同一ホストにインストールできません。PFM・Base と PFM・RM がインストールされているホストに PFM・Manager をインストールする場合は、すべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM・Manager、PFM・RM の順でインストールしてください。また、PFM・Manager と PFM・RM がインストールされているホストに PFM・Base をインストールする場合も同様に、すべての Performance Management プログラムをアンインストールしたあとに PFM・Base、PFM・RM の順でインストールしてください。
- バージョンアップインストール時、既存の Store データベースが自動的にバージョンアップされるため、一時的に Store データベースのディスク占有量が 2 倍になります。バージョンアップインストールを行う前に、Store データベースの格納先のディスクに十分な空き容量があるかどうか確認してください。

2. インストールとセットアップ

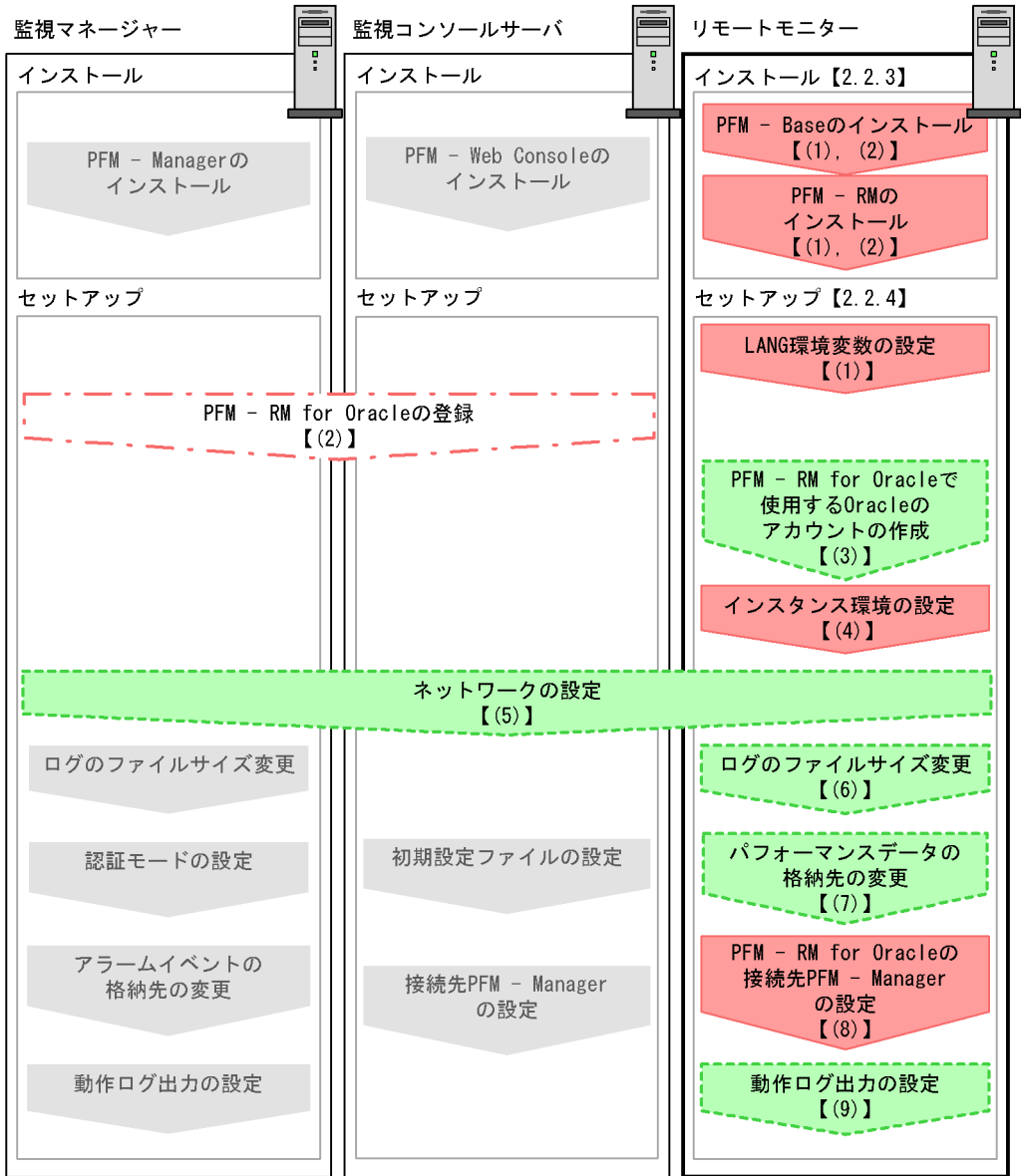
(d) その他の注意事項

- 監視対象プログラムを監視する場合、Oracle Client 32-bit のインストールと環境設定が必要です。
- Oracle OCI 64 ビットモード・ライブラリだけでなく、Oracle OCI 32 ビットモード・ライブラリが必要です。
Oracle OCI をインストールするときは、必ず PFM - RM for Oracle が動作するマシン上に Oracle OCI 32 ビットモード・ライブラリをインストールしてください。
- Performance Management のプログラムが一つもインストールされていない環境に新規インストールする場合は、インストール先ディレクトリにファイルやディレクトリがないことを確認してください。
- インストール時のステータスバーに「Installation failed.」と表示されてインストールが失敗した場合、インストールログを採取してください。なお、このログファイルは、次にインストールすると上書きされるため、必要に応じてバックアップを採取してください。インストールログのデフォルトのファイル名については、「7.4.2(2) Performance Management の情報」を参照してください。
- インストール先ディレクトリにリンクを張り Performance Management のプログラムをインストールした場合、全 Performance Management のプログラムをアンインストールしても、リンク先のディレクトリに一部のファイルやディレクトリが残る場合があります。削除する場合は、手動で行ってください。また、リンク先にインストールする場合、リンク先に同名のファイルやディレクトリがあるときは、Performance Management のプログラムのインストール時に上書きされるので、注意してください。
- /opt/jp1pc/setup ディレクトリに PFM - RM for Oracle のセットアップファイルがある場合、新規 PFM - RM for Oracle の追加セットアップが実行されます。PFM - RM for Oracle の追加セットアップが成功した場合の実行結果は共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されます。確認してください。





2.2.2 インストールとセットアップの流れ (UNIX の場合)

PFM - RM for Oracle をインストールおよびセットアップする流れを説明します。

図 2-7 インストールとセットアップの流れ (UNIX の場合)



(凡例)

-  : 必須セットアップ項目
-  : 場合によって必須となるセットアップ項目
-  : オプションのセットアップ項目
-  : マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」またはマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」に手順が記載されている項目
- 【 】 : 参照先

2. インストールとセットアップ

PFM - Manager および PFM - Web Console のインストールおよびセットアップの手順は、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

2.2.3 インストール手順（UNIX の場合）

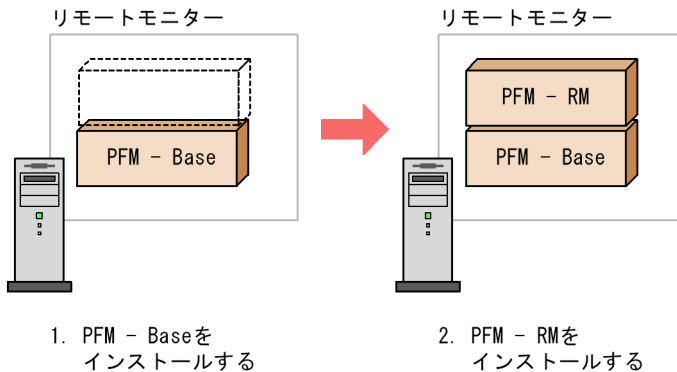
ここでは、PFM - RM for Oracle のプログラムをインストールする順序と CD-ROM の提供媒体からプログラムをインストールする手順を説明します。

（1）プログラムのインストール順序

まず、PFM - Base をインストールし、次に PFM - RM をインストールします。PFM - Base がインストールされていないホストに PFM - RM をインストールすることはできません。

なお、PFM - Manager と同一ホストに PFM - RM をインストールする場合は、PFM - Manager、PFM - RM の順でインストールしてください。

同一ホストに複数の PFM - RM をインストールする場合、PFM - RM 相互のインストール順序は問いません。



（2）プログラムのインストール方法

UNIX ホストに Performance Management プログラムをインストールするには、CD-ROM の提供媒体を使用する方法と、JP1/NETM/DM を使用してリモートインストールする方法があります。

JP1/NETM/DM を使用する方法については、次のマニュアルを参照してください。

- 「JP1/NETM/DM Manager」
- 「JP1/NETM/DM SubManager (UNIX(R) 用)」
- 「JP1/NETM/DM Client (UNIX(R) 用)」

! 注意事項

インストールを行うホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。サービスの停止方法は、マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

CD-ROM の提供媒体を使用する場合のインストール手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムのインストール先ディレクトリが実ディレクトリであることを確認する。
2. Performance Management のプログラムをインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするかまたは su コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。
3. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
Performance Management のプログラムおよびサービスが起動している場合は、すべて停止してください。
4. Performance Management のプログラムの媒体をセットする。
5. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。
`/media/cdrecorder/LINUX/SETUP /media/cdrecorder`

下線部分は、使用している環境によって異なります。
Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

6. 初期画面で「I」を入力する。
インストールできるプログラムの一覧が表示されます。
7. PFM - RM for Oracle を選択して、「I」を入力する。
選択したプログラムがインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。
8. インストールが正常終了したら、「Q」を入力する。
Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

注

自動マウント機能を解除している環境では、Hitachi PP Installer を起動する前に、`/bin/mount` コマンドを次のように指定して CD-ROM 装置をマウントしてください。

```
/bin/mount -r -o mode=0544 デバイススペシャルファイル名 /media/cdrecorder
```

なお、指定するコマンド、および下線部分は、使用する環境によって異なります。

2.2.4 PFM - RM for Oracle のセットアップ手順 (UNIX の場合)

ここでは、PFM - RM for Oracle を運用するための、セットアップについて説明します。

◻ オプション ◻ は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

(1) LANG 環境変数の設定

PFM - RM for Oracle で使用できる LANG 環境変数を次の表に示します。

なお、これらの LANG 環境変数を設定する前に、設定する言語環境が正しくインストール・構築されていることを確認しておいてください。正しくインストール・構築されていない場合、文字化けが発生したり、定義データが不当に書き換わってしまったりすることがあります。

表 2-14 PFM - RM for Oracle で使用できる LANG 環境変数

OS	言語種別		LANG 環境変数の値
Linux	日本語	Shift-JIS コード	(該当なし)
		EUC コード	(該当なし)
		UTF-8 コード	<ul style="list-style-type: none"> • ja_JP.UTF-8 • ja_JP.utf8
	英語 (日本語なし)	• C	

! 注意事項

共通メッセージログの言語は、サービス起動時やコマンド実行時に設定されている LANG 環境変数によって決まります。そのため、日本語や英語など、複数の言語コードの文字列が混在することがあります。

(2) PFM - RM for Oracle の登録

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - RM を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - RM for Oracle を登録する必要があります。

PFM - RM for Oracle を登録する必要があるのは次の場合です。

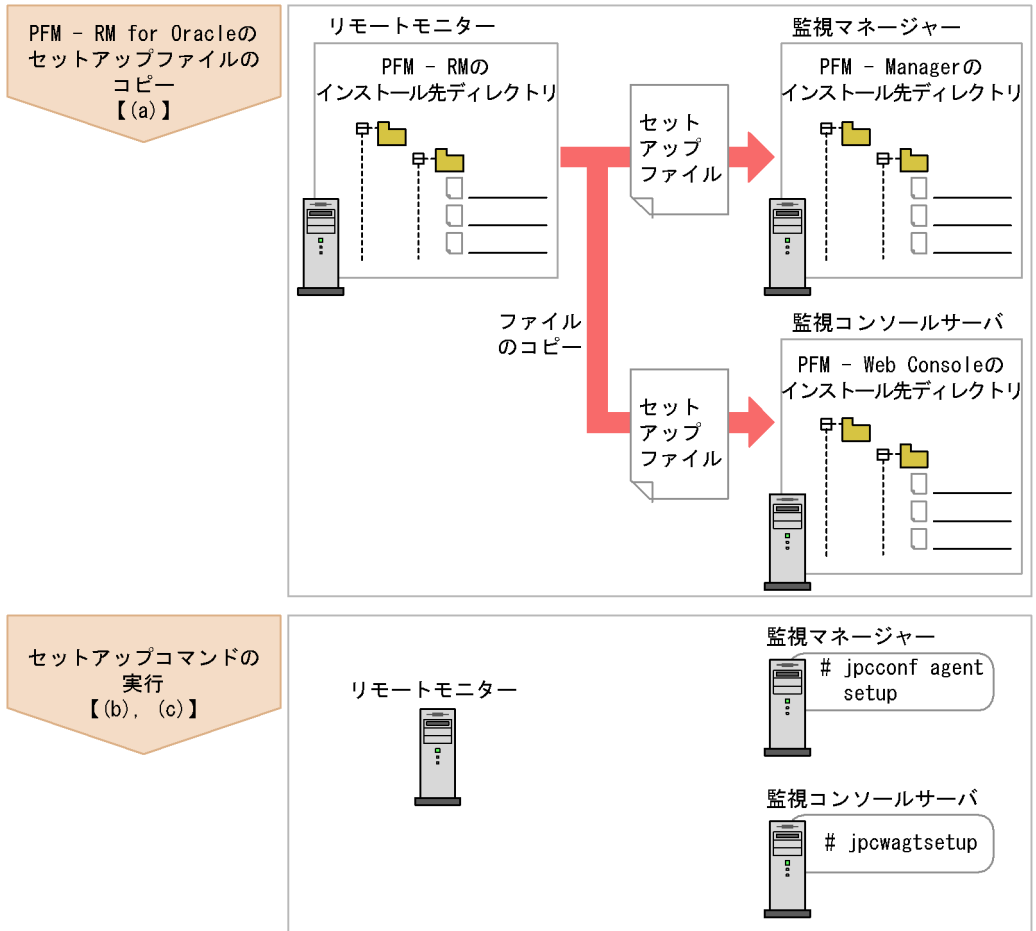
- Performance Management システムに新しく PFM - RM for Oracle を追加する場合
ただし、登録済みの PFM - RM for Oracle が存在していて、そのバージョンと同じバージョンの PFM - RM for Oracle を新規で追加する場合は、新たに登録する必要はありません。

- すでに登録されている PFM - RM for Oracle のデータモデルのバージョンを更新する場合

PFM - RM for Oracle のデータモデルのバージョンについては、「付録 J バージョン互換」を参照してください。

PFM - RM の登録の流れを次に示します。

図 2-8 PFM - RM の登録の流れ



(凡例)

【 】 : 参照先

2. インストールとセットアップ

! 注意事項

- PFM - RM の登録は、インスタンス環境を設定する前に実施してください。
- すでに PFM - RM for Oracle の情報が登録されている Performance Management システムに、新たに同じバージョンの PFM - RM for Oracle を追加した場合、PFM - RM の登録は必要ありません。
- バージョンが異なる PFM - RM for Oracle を、異なるホストにインストールする場合、古いバージョン、新しいバージョンの順でセットアップしてください。
- PFM - Manager と同じホストに PFM - RM をインストールした場合、`jpcconf agent setup` コマンドが自動的に実行されます。共通メッセージログに「KAVE05908-I エージェント追加セットアップは正常に終了しました」と出力されるので、結果を確認してください。コマンドが正しく実行されていない場合は、コマンドを実行し直してください。コマンドの実行方法については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」のコマンドの章を参照してください。
- PFM - RM for Oracle の情報を登録する作業では、PFM - Web Console の [レポート階層] 画面および [アラーム階層] 画面に「RM Oracle」という名前のディレクトリが作成されます。[レポート階層] 画面で、すでに独自に「RM Oracle」という名前のディレクトリまたはファイルを作成していた場合には、名前を変更してから作業を始めてください。

(a) PFM - RM for Oracle のセットアップファイルをコピーする

PFM - RM for Oracle をインストールしたホストにあるセットアップファイルを PFM - Manager および PFM - Web Console をインストールしたホストにコピーします。手順を次に示します。

1. PFM - Web Console が起動されている場合は、停止する。
2. PFM - RM のセットアップファイルをバイナリーモードでコピーする。
ファイルが格納されている場所およびファイルをコピーする場所を次の表に示します。

表 2-15 コピーするセットアップファイル (UNIX の場合)

PFM - RM の セットアップファイル	コピー先		
	PFM プログラム名	OS	コピー先ディレクトリ
/opt/jplpc/setup/ jpcagt1w.EXE	PFM - Manager	Windows	PFM - Manager のインストール先フォルダ ¥setup
/opt/jplpc/setup/ jpcagt1u.Z		UNIX	/opt/jplpc/setup/
/opt/jplpc/setup/ jpcagt1w.EXE	PFM - Web Console	Windows	PFM - Web Console のインストール先フォルダ ¥setup

PFM - RM の セットアップファイル	コピー先		
	PFM プログラム名	OS	コピー先ディレクトリ
/opt/jplpc/setup/ jpcagtlu.Z		UNIX	/opt/jplpc/setup/

(b) PFM - Manager ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Manager で PFM - RM for Oracle をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcconf agent setup -key RMOracl
```

コマンド実行時の注意事項

コマンドを実行するローカルホストの Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止していない状態で `jpcconf agent setup` コマンドを実行した場合、エラーが発生することがあります。その場合は、Performance Management のプログラムおよびサービスが完全に停止したことを確認したあと、再度 `jpcconf agent setup` コマンドを実行してください。

PFM - Manager ホストにある PFM - RM のセットアップファイルは、この作業が終了したあと、削除してもかまいません。

(c) PFM - Web Console ホストでセットアップコマンドを実行する

PFM - Web Console で PFM - RM for Oracle をセットアップするための次のコマンドを実行します。

```
jpcwagtsetup
```

PFM - Web Console ホストにある PFM - RM のセットアップファイルは、この作業が終了したあと削除してもかまいません。

(3) PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの作成

PFM - RM for Oracle で Oracle Database を監視し、パフォーマンス情報を収集するためには、次のどちらかの設定が必要になります。

- PFM - RM for Oracle から Oracle Database の監視に使用するアカウントを `sys` アカウントに設定する
- 特定のシステム権限を持つ Oracle のアカウントを作成して、そのアカウントを PFM - RM for Oracle から Oracle Database の監視に使用するアカウントに設定する

PFM - RM for Oracle がパフォーマンス情報を収集するために Oracle Database に対して実行する操作と、操作を実行するために必要な Oracle のアカウントのシステム権限を次の表に示します。

2. インストールとセットアップ

表 2-16 Oracle Database に対して実行する操作と必要なシステム権限

PFM - RM for Oracle が Oracle Database に対して実行する操作	操作に必要なシステム権限
<ul style="list-style-type: none"> 静的データディクショナリー・ビューの検索 動的パフォーマンス・ビューの検索 リスナー制御ユーティリティの実行 選択した SQL の実行計画の取得 PFM - RM for Oracle 独自のストアドパッケージの実行 	<ul style="list-style-type: none"> CREATE SESSION CREATE TABLE CREATE PROCEDURE SELECT ANY DICTIONARY SELECT ANY TABLE INSERT ANY TABLE DELETE ANY TABLE UPDATE ANY TABLE CREATE ANY INDEX ALTER ANY INDEX UNLIMITED TABLESPACE

sys アカウントは、表 2-16 のシステム権限を持ちます。PFM - RM for Oracle から Oracle Database の監視に sys アカウントを使用しない場合、表 2-16 のシステム権限を持つ Oracle のアカウントを使用してください。

表 2-16 のシステム権限を持つ Oracle のアカウントは、PFM - RM for Oracle が提供している mk_rmus.sql スクリプトを実行して作成できます。

mk_rmus.sql スクリプトを使用しないで PFM - RM for Oracle を使用できる Oracle のアカウントを用意したい場合は、操作に応じた権限を付与してください。操作に応じた権限を付与することにより、Oracle のアカウントに付与する権限を、必要最小限に限定することができます。なお、ロールとして権限を付与している場合は、明示的 (GRANT "権限" ...) に権限を与えてください。各操作で必要となる権限については、「付録 I 権限に関する注意事項」を参照してください。

mk_rmus.sql スクリプトを実行して Oracle のアカウントを作成するために必要な情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。

表 2-17 Oracle のアカウント作成に必要な情報

項目	説明
Enter username	<p>作成するアカウント名を指定する。 指定できる値は、CREATE USER 文の user パラメーターに指定できる値、かつ 30 バイト以内の 7 ビットアスキーの半角英数字列。デフォルト値は RMAGT1。</p> <p>注意</p> <p>PFM - RM for Oracle のインスタンスが使用するアカウントに、既存のデータベースアカウントを指定した場合、スクリプトの処理がエラーとなる。 必ず、事前にデータベースに存在するアカウント名を確認し、PFM - RM for Oracle のインスタンス専用のアカウントを指定すること。</p>

項目	説明
Enter password	作成するアカウントのパスワードを指定する。 指定できる値は、CREATE USER 文の IDENTIFIED 句の BY password パラメーターに指定できる値、かつ 30 バイト以内の 7 ビットアスキーの半角英数文字列。入力必須。
Enter default tablespace	作成するアカウントが使用するデフォルト表領域を指定する。 指定できる値は、CREATE USER 文の DEFAULT TABLESPACE 句に指定できる値、かつ 30 バイト以内の 7 ビットアスキーの半角英数文字列。入力必須。 注意 デフォルト表領域として SYSTEM 表領域、INDEX 表領域を指定しないこと。 デフォルト表領域には、PFM - RM for Oracle 用パッケージを登録しても問題のない表領域を指定するか、または、PFM - RM for Oracle 用の表領域を作成し、デフォルト表領域に指定すること。
Enter default temporary tablespace	作成するアカウントが使用するデフォルト一時表領域を指定する。 指定できる値は、CREATE USER 文の TEMPORARY TABLESPACE 句に指定できる値、かつ 30 バイト以内の 7 ビットアスキーの半角英数文字列。入力必須。 注意 デフォルト一時表領域として SYSTEM 表領域、INDEX 表領域、USERS 表領域を指定しないこと。 デフォルト一時表領域には、デフォルト一時表領域として使用しても問題のない表領域を指定するか、または、PFM - RM for Oracle 用の表領域を作成し、デフォルト一時表領域に指定すること。

注

- 各項目の入力値は、必ず、30 バイト以内の 7 ビットアスキーの半角英数文字列で指定してください。31 バイト以上の文字列が入力された場合や 7 ビットアスキー半角英数文字以外の文字を指定した場合、スクリプトが予期しない動作をするおそれがあります。
- 各パラメーターの入力値には、「スキーマ・オブジェクトの名称規則」の「非引用識別子」に含まれる値を指定してください。「非引用識別子」以外の値を指定した場合、スクリプトが予期しない動作をするおそれがあります。「スキーマ・オブジェクトの名称規則」および「非引用識別子」については Oracle のマニュアルを参照してください。
- mk_rmus.sql で作成したアカウントの詳細を確認するには、監視対象の Oracle Database の静的ディクショナリ・ビュー DBA_USERS を参照してください。静的ディクショナリ・ビュー DBA_USERS でアカウント「R40」の表領域を参照する例を示します。次の SQL 文を実行し、実行結果から誤った表領域でアカウントを作成していることがわかった場合は、アカウントを削除し、mk_rmus.sql で再作成してください。

(例)

2. インストールとセットアップ

UNIX 上の Oracle でアカウント「R40」の詳細を参照する場合

1. コマンドプロンプトから SQL*Plus に sys アカウントで接続する。
sqlplus "sys アカウント @ 監視対象のデータベースのネットサービス名 /
sys アカウントのパスワード [AS SYSDBA] "
2. SQL*Plus で次のような SQL 文を実行する。
SQL>select DEFAULT_TABLESPACE,TEMPORARY_TABLESPACE from
DBA_USERS where USERNAME='R40';
3. 実行結果で表示される、「DEFAULT_TABLESPACE」列（デフォルト表領域）、「TEMPORARY_TABLESPACE」列（デフォルト一時表領域）などを確認する。

注意

Oracle のバージョンによって、SQL*Plus に sys アカウントで接続する方法が異なります。詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。
監視対象の Oracle Database に対して、SYSDBA 接続を実施します。

CREATE USER 文の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

また、Oracle のアカウント作成に必要な表領域などのリソースをあらかじめ用意してから、作業を実施してください。

Oracle のアカウント作成は、次の手順で実行します。

1. Oracle の sqlplus コマンドが実行できる環境を設定する。
Oracle の環境設定については、Oracle のマニュアルを参照してください。
2. PFM - RM for Oracle が提供している mk_rmus.sql がある、次のディレクトリに移動する。
/opt/jp1pc/agt1/agent/sql
3. 監視先の Oracle Database に対して、mk_rmus.sql スクリプトを実行する。

(例)

```
sqlplus Oracle のアカウント @ 監視対象のデータベースのネットサービス名 /  
Oracle のアカウントのパスワード @mk_rmus.sql
```

注意

- sqlplus は、ORACLE Corporation が提供しているコマンドです。
- mk_rmus.sql スクリプトを実行する Oracle のアカウントには、あらかじめ CREATE USER システム権限、CREATE SESSION システム権限、および GRANT ANY PRIVILEGE システム権限が付与されている必要があります。
- sys アカウントを使用して mk_rmus.sql スクリプトを実行する場合、AS SYSDBA オプションを指定しないとエラーになることがあります。
- 監視対象の Oracle Database に対して、SYSDBA 接続を実施します。
mk_rmus.sql スクリプトの実行例を示します。

(例)

```
sqlplus "Oracle のアカウント @ 監視対象のデータベースのネットサービス名 /
Oracle のアカウントのパスワード [AS SYSDBA]" @mk_rmus.sql
```

- mk_rmus.sql スクリプトを実行すると、スクリプトの処理で実行結果をスプールファイルに出力します。ただし、下記のような場合、スプールファイルの作成に失敗します。

- mk_rmus.sql スクリプトを実行時に、カレントディレクトリを手順 2 で示すディレクトリに変更していない場合

- root 以外のユーザーが SQL*Plus で mk_rmus.sql スクリプトを実行した場合

4. Oracle のアカウント作成に必要なパラメーターを設定する。

表 2-17 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を、項目の入力とする場合はリターンキーだけを押してください。

すべての入力終了すると、Oracle のアカウントが作成されます。

注意

- PFM・RM for Oracle が使用するアカウントを sys 以外に設定した場合、SYS スキーマに属するオブジェクトへの操作に対する、SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドの値を取得できません。この場合、Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドには「Explain Plan Failed」というメッセージが格納されます。SYS スキーマのオブジェクトに対する、SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドの値を取得したい場合は、PFM・RM for Oracle の使用するアカウントに、sys を指定してください。
- SQL を実行したユーザーのスキーマに属するオブジェクトに対して、PFM・RM for Oracle の使用するアカウントにアクセスする権限がない場合、またはオブジェクトを参照できない場合、SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドの値を取得できません。この場合、Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドには「Explain Plan Failed」というメッセージが格納されます。Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドの値を取得したい場合は、スキーマに対してアクセスする権限を付加するか、またはこのフィールドの対象となる SQL を <所有者>.<テーブル名> で実行してください。
- mk_rmus.sql スクリプトを実行して作成した Oracle のアカウントには、UPDATE ANY TABLE システム権限など、ほかのスキーマのオブジェクトを自由に操作する権限が付与されますので、アカウントの管理には十分注意してください。
Oracle のアカウントに付与される権限を次の表に示します。

2. インストールとセットアップ

表 2-18 mk_rmus.sql で Oracle のアカウントに付与される権限

付与される権限	説明
CREATE SESSION	監視先の Oracle Database に対して、セッションを確立するために必要。
CREATE TABLE	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要なテーブル（表 2-24 を参照）を登録するときに必要。
CREATE PROCEDURE	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な監視用のプロシージャ（表 2-24 を参照）を登録するときに必要。
SELECT ANY DICTIONARY	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な情報（表 2-24 を参照）を登録するときに必要。
UNLIMITED TABLESPACE	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な情報（表 2-24 を参照）を登録するときに必要。
SELECT ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
INSERT ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
UPDATE ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
DELETE ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
CREATE ANY INDEX	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
ALTER ANY INDEX	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。

- 作成されたアカウントには、デフォルト表領域に指定された表領域に対して無制限に書き込みができる権限が付与されます。表領域の使用量の割り当てを変更する場合は、アカウントの作成後に、Oracle の sqlplus コマンドが実行できる環境で ALTER USER 文を発行してください。なお、ALTER USER 文を実行する Oracle アカウントには、ALTER USER システム権限が必要になります。使用量の割り当て変更の例を次に示します。

(例)

```
ALTER USER Oracle のアカウント QUOTA 表領域の使用量の上限値 ON 表領域名;
```

ALTER USER 文の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

(4) インスタンス環境の設定

PFM - RM for Oracle では、インスタンス環境および監視対象の設定が必要です。インス

タンス環境の設定と監視対象の設定は 1 対 1 の関係です。

PFM - RM for Oracle では、一つのインスタンス環境に定義できる監視対象は一つだけです。複数のインスタンス環境および監視対象を設定する場合は、次の手順を繰り返し実施します。

- インスタンス情報の設定
- 監視対象の設定
- Oracle Database へのオブジェクト登録
- Oracle Database の設定

例えば、三つの Oracle のインスタンスを監視したい場合は、これらの設定を三つそれぞれについて実施します。

それぞれの手順について説明します。

(a) インスタンス情報を設定する

PFM - RM for Oracle で監視する Oracle のインスタンス情報を設定します。インスタンス情報の設定は、PFM - RM ホストで実施します。

設定するインスタンス情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。Oracle のインスタンス情報の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

表 2-19 PFM - RM for Oracle のインスタンス情報

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
oracle_sid	監視対象となる Oracle システム識別子 (環境変数 ORACLE_SID と同じ値)。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号「,」「<」「>」	jpccconf inst setup コマンドの -inst オプションで指定した値
oracle_home ¹	PFM - RM for Oracle が使用する Oracle クライアントの Oracle ホームのディレクトリ (環境変数 ORACLE_HOME と同じ値)。 ²	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号「,」「<」「>」	-
oracle_version	PFM - RM for Oracle が使用する Oracle クライアントのバージョン番号。	• Oracle 10g の場合 : 10 • Oracle 11g の場合 : 11	10

2. インストールとセットアップ

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
oracle_user ³	Oracle を監視するアカウント。 指定できるアカウント、および必要な権限については、「(3) PFM・RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの作成」を参照のこと。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	sys
oracle_passwd ^{3,4}	oracle_user で指定したアカウントのパスワード。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	-
net_service_name ^{2,5}	監視対象のデータベースのネットサービス名。 監視対象のデータベースのネットサービス名については、Oracle のマニュアルを参照のこと。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	インスタンス名 (oracle_sid の値)
log_path ⁶	エージェントログの出力先ディレクトリ (絶対パス)。	245 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」 注意 • デフォルト以外の値を設定する場合、インストール先ディレクトリ配下となるパスは指定できない。 • ほかのインスタンス出力先として指定している値は指定できない。	/opt/jplpc/agt1/ agent/ インスタンス名 / log
log_size	エージェントログの 1 ファイルの最大サイズ。 ⁷	1 ~ 32 (単位: メガバイト)。 ただし、推奨は 16 以上。	16

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
timeout ⁸	クエリー時の Oracle アクセスのタイムアウト時間。	0, 10 ~ 3600 (単位: 秒) 0 を指定した場合はタイムアウト監視を行わない。1 ~ 9 を指定した場合は、実行時、10 に変更する。 タイムアウトについては、「2.6.5 レコード収集での Oracle アクセスのキャンセル機能」を参照のこと。	0
sql_option ⁹	「Y」を指定した場合、PI_PIDB, PD_PDTS レコードで、次の項目 ⁸ の情報収集を行わず、0 または numeric_10 で指定した値を設定する。	{ Y N }	N
numeric_10 ¹⁰	sql_option が「Y」の場合、情報収集しない項目に設定する値を指定する。 sql_option が「N」の場合、指定を無視する。	0 ~ 99999。 ただし、設定するフィールドのデータ型の最大値 (short の場合 32767, ushort の場合 65535) を超える値を指定した場合、データ型の最大値が設定される。 ¹¹	0
startup_always	PFM - RM for Oracle 起動時に監視対象の Oracle が起動処理中であつた場合などに、PFM - RM for Oracle が Oracle 接続エラーで停止することがある。 「Y」を指定した場合、接続エラーが発生しても起動処理を継続する。「N」を指定した場合、この動作を有効にしない。	{ Y N }	Y

2. インストールとセットアップ

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
localtemp_option ¹²	PD_PDDB, PI_PIDB, PD_PDDF, PI_PIDF, PD_PDTF, PD_PDTS, PD_PCTS レコードの ローカル管理一時表領 域の空き容量の情報の 表示を切り替えるオブ ション。 「Y」を指定した場合、 使用されていないサイ ズを表示する。「N」を 指定した場合、未割り 当てのサイズを表示し する。	{ Y N }	N

(凡例)

- : なし

注 1

監視対象プログラムを監視する場合、Oracle Client 32-bit のインストールと環境設定が必要です。また、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する際、各項目について次のように設定してください。

- 「oracle_home」
Oracle Client 32-bit の Oracle ホームを設定してください。
- 「net_service_name」
Oracle Client 32-bit で設定したネットサービス名を指定してください。

Oracle Client 32-bit で設定するネットサービス名には、監視する Oracle インスタンスに接続するネットサービス名を指定してください。

Oracle Client 32-bit のインストールと環境構築が完了していない状態で、インスタンス情報の「oracle_home」に、Oracle Client 32-bit がインストールされていない Oracle Database または Oracle Client 64-bit の ORACLE_HOME を指定して、PFM - Agent for Oracle を起動すると、KAVL18011-E および KAVL18021-E のメッセージが表示されます。

注 2

PFM - RM for Oracle が Oracle Database のクライアントライブラリを使用する (Oracle Database に Oracle Client 32bit がインストールされている) 場合には、Oracle Database の Oracle ホームを指定してください。

注 3

PFM - RM for Oracle は、Oracle のパスワード認証で動作します。

注 4

oracle_passwd にパスワードの有効期限が設定されている場合、有効期限に達すると Oracle との接続エラーが起こり、パフォーマンス情報を収集できません。Oracle との接続エラーを起こさないようにするために、パスワードの有効期限が切れる前に、次のどちらかを設定してください。

- パスワードの有効期限を解除します。
- パスワードの更新後、`jpccconf inst setup` コマンドを実行し、`oracle_passwd` を更新します。

なお、`mk_rmus.sql` で作成した Oracle のアカウントには、Oracle が提供している DEFAULT のプロファイルが適用されます。

注 5

PFM・RM for Oracle が使用する Oracle クライアントのネットワークサービス (`tnsnames.ora` など) を設定する必要があります。

また監視対象となる Oracle のネットワークサービス定義 (`listener.ora` など) を設定し、リスナーを起動しておく必要があります。

Oracle RAC 構成の Oracle Database インスタンスを監視するときは、各ノードの Oracle Database インスタンスを監視するように設定してください。設定方法については、Oracle のマニュアルを参照してください。

また、`tnsnames.ora` ファイルは次に示すディレクトリに格納してください。

`oracle_home` で指定したディレクトリ/`network/admin`

これ以外のディレクトリに格納したときは、PFM・RM for Oracle が Oracle 接続エラーとなります。

注 6

変更前のパス情報は保存されません。手動でファイルなどに履歴として記録しておいてください。トラブルなどによって、変更前のディレクトリからのエージェントログの採取が必要となる場合があります。

注 7

エージェントログは、1 インスタンスにつき最大 4 ファイルが採取されます。

`log_size` の値は、次の条件を満たすことを確認して指定してください (`log_path` がデフォルトの場合を含む)。

$\text{log_pathに指定したディスクの空き容量 (メガバイト)} > \text{log_sizeの値} \times 4$

ハードディスクに十分な空き容量がない場合、エージェントログが出力エラーとなります。エージェントログについては「7.3 ログ情報」を参照してください。

注 8

タイムアウト値は、高負荷時 (ピーク時) に収集するレコードの収集時間に応じて設定してください。

2. インストールとセットアップ

注 9

PFM - RM for Oracle では Oracle の各セグメント関連の情報を取得するため、Oracle の静的ディクショナリー・ビュー DBA_SEGMENTS の検索をします。Oracle に大量のセグメント（数十万件以上のセグメント）が存在する場合、情報収集で非常に時間が掛かることがあります。そのため、大量のセグメントが存在し、次の表に示す情報の収集が不要な場合、sql_option を「Y」と設定して運用してください。

表 2-20 レコード名と numeric_10 で指定した値（インスタンス情報の設定）

レコード名	PFM - View 名	numeric_10 で指定した値
PD_PDTS	Segments	有効
	Extents	有効
PI_PIDB	DB Files %	有効
	Log Files %	有効
	NextAlloc Fails	有効
	Tablespaces	有効
	Rollback Segments	有効
	Rollback Segments Trans	有効
	Blocks	有効
	Segments	有効
	Extents	有効
	Free Mbytes	有効
	Overextended	有効
	High Max Extent	有効
	Datafiles	有効
	Mbytes	有効
	Free Extents	有効
	Free%	有効
	Free Change	有効
	Write%	有効
	Write/sec	有効
	Redo Files	有効
Links	有効	
Links Logged On	有効	
Links In Tran	有効	

レコード名	PFM - View 名	numeric_10 で指定した値
	Links Open Cursors	有効
	Used Change	有効
	Used Mbytes	有効
	Rollback Segments Hit%	有効
	Sort Segments	有効
	Sorting Users	有効
	Physical Blocks Read	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Blocks Written	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Reads	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Writes	デルタ項目のため、常に 0 設定。

注 10

PFM・Web Consoleなどで表示した場合に、注 9の各フィールドに設定される値が Oracle Database からの収集値なのか、または固定値なのかを判別するために指定する項目です。

注 11

各レコードのフィールドの形式が、「float」または「double」型の場合、データは浮動小数点数となるため、指定値によってまるめられる場合があります。

(例)

numeric_10 の指定を 32767 と指定した場合、32760 と表示される場合があります。

注 12

localtemp_option に「Y」を指定した場合、ローカル管理一時表領域の空き容量やエクステントに関する情報を動的パフォーマンスビューの v\$temp_extent_pool を使用して取得します。取得する情報の空き容量は、収集時に使用していた領域のサイズから未使用サイズを算出します。

localtemp_option に「N」を指定した場合、ローカル管理一時表領域の空き容量やエクステントに関する情報を動的パフォーマンスビューの v\$temp_space_header を使用して取得します。取得する情報の空き容量は、未割り当てのサイズとなります。一度割り当てられたサイズは、一時表領域の再構築や再作成などをするまで解放されないため、解放されるまで空き容量は増加しません。v\$temp_extent_pool ビューを検索した場合、Oracle のインスタンスが休止状態となります。Oracle Database の性能に影響することがありますので、十分に検討してから設定してください。詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

注意

- インスタンス環境を設定していない場合、PFM・RM for Oracle のサービスを起動

2. インストールとセットアップ

できません。

- `jpccconf inst setup` コマンドを使用してインスタンス環境を構築する際、Oracle 上に存在しないインスタンス名を指定した場合でもコマンドは正常に終了します。しかし、その後レコードの収集を開始すると、共通メッセージログに「KAVL18401-W」のメッセージが出力され、監視対象の Oracle に接続できません。この場合、正しいインスタンス名を確認の上、再度 `jpccconf inst setup` コマンドを実行してください。
- 複数の PFM・RM for Oracle で同じ Oracle インスタンスを監視しないでください。また、PFM・RM for Oracle と PFM・Agent for Oracle で同じ Oracle インスタンスを監視しないでください。

インスタンス環境を構築するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。インスタンス環境の構築手順を次に示します。

1. サービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する。
例えば、PFM・RM for Oracle のインスタンス名 SDC のインスタンス環境を構築する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key RMOracle -inst SDC
```

なお、インスタンス名に「sql」という名称は使用できません。

`jpccconf inst setup` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

2. Oracle のインスタンス情報を設定する。

表 2-19 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を、項目の入力とする場合はリターンキーだけを押ししてください。

すべての入力が終了すると、インスタンス環境が構築されます。構築時に入力したインスタンス情報を変更したい場合は、再度 `jpccconf inst setup` コマンドを実行し、インスタンス環境を更新してください。インスタンス環境の更新については、「2.6.3 インスタンス環境の更新の設定」を参照してください。

構築されるインスタンス環境を次に示します。

インスタンス環境のディレクトリ構成

次のディレクトリ下にインスタンス環境が構築されます。

物理ホストの場合：/opt/jp1pc/agt1

論理ホストの場合：環境ディレクトリ ¥jp1pc¥agt1

注

環境ディレクトリとは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

構築されるインスタンス環境のディレクトリ構成を次に示します。

表 2-21 インスタンス環境のディレクトリ構成

		ディレクトリ名・ファイル名	説明
agent	インスタンス名	jpcagt.ini	Remote Monitor Collector サービス起動情報ファイル
		jpcagt.ini.model	Remote Monitor Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		status.dat	内部処理用中間ファイル
		tstatuses.dat	仮想 Agent ステータス情報
		targetlist.ini	監視対象一覧
		grouplist.ini	グループ一覧
		GARULES.DAT	集約ルール記述一覧
		targets	リモートエージェント格納ディレクトリ
		groups	グループエージェント格納ディレクトリ
		log	ログファイル格納ディレクトリ
store	インスタンス名	jpcsto.ini	Remote Monitor Store サービス起動情報ファイル
		jpcsto.ini.model	Remote Monitor Store サービス起動情報ファイルのモデルファイル
		*.DB	パフォーマンスデータファイル
		*.IDX	パフォーマンスデータファイルのインデクスファイル
		*.LCK	パフォーマンスデータファイルのロックファイル
		status.dat	内部処理用中間ファイル
		*.DAT	データモデル定義ファイル
		dump	エクスポート先ディレクトリ
		import	標準のデータベースインポート先ディレクトリ
		backup	バックアップ先ディレクトリ
		log	ログファイル格納ディレクトリ
		partial	標準のデータベース部分バックアップ先ディレクトリ
		STPD	PD レコードタイプのパフォーマンスデータ格納先ディレクトリ

2. インストールとセットアップ

ディレクトリ名・ファイル名		説明
	STPI	PI レコードタイプのパフォーマンスデータ格納先ディレクトリ

注

インスタンス環境を構築した時点の設定値に戻したいときに使用します。

インスタンス環境のサービス ID

インスタンス環境のサービス ID は次のようになります。

- Remote Monitor Collector サービスの場合
1A インスタンス番号 インスタンス名 [ホスト名]
- Remote Monitor Store サービスの場合
1S インスタンス番号 インスタンス名 [ホスト名]
- Group Agent サービスの場合
1A インスタンス番号 インスタンス名 [All@ ホスト名]

PFM・RM for Oracle の場合、インスタンス名には `jpccconf inst setup` コマンドで指定したインスタンス名が表示されます。

例えば、ホスト名が「host1」で、インスタンス名に「SDC」を指定した場合、サービス ID は次のようになります。

- Remote Monitor Collector サービスの場合
1A1SDC[host1]
- Remote Monitor Store サービスの場合
1S1SDC[host1]
- Group Agent サービスの場合
1A1SDC[All@host1]

サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されている命名規則を参照してください。

(b) 監視対象を設定する

監視対象の設定では、監視対象ホストの情報を設定します。複数のホストを監視対象として設定する場合は、次の手順を繰り返し実施します。

監視対象の設定は、PFM・RM ホストで実施します。

設定する情報を次の表に示します。セットアップの操作を始める前に、次の情報をあらかじめ確認してください。

表 2-22 PFM - RM for Oracle の監視対象の設定

項目	説明	設定できる値	デフォルト値	jpccnf target setup コマンドによる再更新の可/不可
Target Host	監視対象となる Oracle が稼働しているホスト名。 論理ホストの場合は、論理ホスト名。	1 ~ 32 バイトの半角英数字およびハイフン (-) だけ使用できる。ただし、「-」から始まる名前は指定できない。 インスタンス内でユニーク ¹ である必要がある。	- ²	可

(凡例)

- : なし

注 1

「All」はグループエージェント用の予約語のため使用できません。

注 2

指定を省略した場合は、PFM - RM ホストのホスト名が仮定されます。

注意

- PFM - RM for Oracle を起動するためには、監視対象の設定が必要です。
監視対象を設定しないで PFM - RM for Oracle を起動した場合、共通メッセージログに「KAVL18639-E」のメッセージが出力され、PFM - RM for Oracle は停止します。
- PFM - RM for Oracle は、インスタンス環境で指定した oracle_sid で、監視対象の Oracle インスタンスを特定します。
Target Host で指定したホスト名はヘルスチェックだけに使用され、Oracle インスタンスへの接続には使用されません。
Target Host に不正なホスト名を指定した場合、パフォーマンスデータの収集状況と、ヘルスチェック結果は一致しないことがあります。
- 監視対象の設定で指定した値が不正の場合でも、監視対象の生成コマンドは正常に終了します。
- 監視対象となる Oracle インスタンスのホストにファイアウォールが設定されている場合、PFM - RM for Oracle が使用する Oracle クライアントからの接続が拒否されないように設定してください。Oracle の環境設定については、Oracle のマニュアルを参照してください。また、Oracle の環境設定後は、Oracle の sqlplus コマンドが実行できる環境かどうか確認してください。

監視対象の環境を構築するには、jpccnf target setup コマンドを使用します。監視対象の環境の構築手順を次に示します。

2. インストールとセットアップ

1. サービスキー、インスタンス名および監視対象名を指定して、`jpccconf target setup` コマンドを実行する。

```
jpccconf target setup -key RMOracle -inst インスタンス名 -target 監視対象名
```

2. PFM - RM for Oracle の監視対象の情報を設定する。

表 2-22 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力してください。各項目とも省略はできません。デフォルトで表示されている値を入力値とする場合は、リターンキーだけを押してください。

すべての入力が終了すると、インストール先ディレクトリ `¥agt1` 以下に監視対象の環境が構築されます。構築時に入力した監視対象の情報を変更したい場合は、再度 `jpccconf target setup` コマンドを実行し、監視対象の環境を更新してください。監視対象の環境の更新については、「2.6.2 監視対象の更新の設定」を参照してください。

構築される監視対象の環境のディレクトリ構成を次に示します。

表 2-23 監視対象の環境のディレクトリ構成

ディレクトリ名・ファイル名			説明	
agent	インスタンス名	target s	監視対象名.ini	監視対象設定ファイル
			監視対象名.ini.model	監視対象設定ファイルのモデル

(c) Oracle Database へオブジェクトを登録する

PFM - RM for Oracle で Oracle Database を監視するためには、監視先の Oracle Database に対して、PFM - RM for Oracle が提供するオブジェクトを登録する必要があります。ここでは、PFM - RM for Oracle が提供している SQL スクリプトを次の手順で実行します。なお、この手順は、Oracle Database のインスタンスを監視するアカウントごとに、1 回だけ必要です。

1. Oracle の `sqlplus` コマンドが実行できる環境を設定する。
Oracle の環境設定については、Oracle のマニュアルを参照してください。
2. PFM - RM for Oracle が提供している `sp_rist.sql` がある、次のディレクトリに移動する。

```
/opt/jplpc/agt1/agent/sql
```

3. 監視先の Oracle Database に対して、`sp_rist.sql` スクリプトを実行する。
`sp_rist.sql` スクリプトによって、PFM - RM for Oracle が Oracle を監視する時に必要なオブジェクト（監視用のプロシージャや作業用のテーブル）を Oracle に登録します。

(例)

```
sqlplus Oracle のアカウント@監視対象のデータベースのネットサービス名 /
```

Oracle のアカウントのパスワード @sp_rist.sql

- sqlplus は、ORACLE Corporation が提供しているコマンドです。
- Oracle のアカウントには、oracle_user の値を指定してください。ここで実行した Oracle のアカウントでデータベースにオブジェクトが作成されます。また、アンセットアップの際には、同じ Oracle のアカウントで実行する必要があります。
- Oracle のアカウントに SYS ユーザーを使用する場合、AS SYSDBA オプションを指定しないで、sp_rist.sql スクリプトを実行するとエラーになる場合があります。その場合は、AS SYSDBA オプションを指定して実行してください。

このコマンドの実行で、次の表に示すテーブルおよびパッケージが作成されます。

表 2-24 作成されるテーブルおよびパッケージ

テーブル	パッケージ
LSC_14_PLAN_TABLE	LSC_14_PDAS, LSC_14_73_PDDB, LSC_14_PDDB2, LSC_14_PDI, LSC_14_73_PIDB, LSC_14_PIDB2, LSC_14_PIDB3

注

5 メガバイト以上の表領域を確保しておく必要があります。

LSC_14_PLAN_TABLE は、SQL TEXT (PD_PDSQ) レコードを収集した場合に使用されます。

(d) Oracle Database を設定する

PFM・RM for Oracle が提供するレコードで、次の表に示すパフォーマンスデータを収集するためには、Oracle Database の初期化パラメーター「TIMED_STATISTICS」の値を「TRUE」に変更する必要があります。

表 2-25 TIMED_STATISTICS=TRUE を設定しないと収集できない項目

レコード	フィールド
Data File Interval (PI_PIDF)	Write Time (WRITE_TIME)
Session Detail (PD_PDS)	Avg Wait (AVERAGE_WAIT)
	Avg Wait String (AVERAGE_WAIT_STRING)
	Time Waited (TIME_WAITED)
	Time Waited String (TIME_WAITED_STRING)
Session Statistics Summary (PD_PDS2)	Statement CPU (STATEMENT_CPU)

注意

- 初期化パラメーターファイルを変更した場合は、データベースインスタンスの再起動が必要です。
- サーバ・パラメーターファイルの値を変更した場合、初期化パラメーターファイ

2. インストールとセットアップ

ルによる変更よりも優先されることがあります。

- 初期化パラメーターの `TIMED_STATISTICS` を `TRUE` に設定すると、時間の統計に関するオーバーヘッドが発生し、Oracle Database の性能に影響することがありますので、十分に検討してから設定してください。詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

(5) ネットワークの設定 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて行う設定です。

ネットワークの設定には次の二つの項目があります。

IP アドレスを設定する

Performance Management を複数の LAN に接続されたネットワークで使用するときには設定します。複数の IP アドレスを設定するには、`jpchosts` ファイルにホスト名と IP アドレスを定義します。設定した `jpchosts` ファイルは Performance Management システム全体で統一させてください。

詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ポート番号を設定する

Performance Management が使用するポート番号を設定できます。運用での混乱を避けるため、ポート番号とサービス名は、Performance Management システム全体で統一させてください。

ポート番号の設定の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(6) ログのファイルサイズ変更 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。共通メッセージログは、デフォルトで 2,048 キロバイトのファイルが 2 ファイル使用されます。このファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(7) パフォーマンスデータの格納先の変更 オプション

PFM - RM for Oracle で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先またはエクスポート先のディレクトリを変更したい場合に必要な設定です。

パフォーマンスデータは、デフォルトで、次の場所に保存されます。

- 保存先 : /opt/jp1pc/agt1/store/ インスタンス名 /
- バックアップ先 : /opt/jp1pc/agt1/store/ インスタンス名 /backup/
- 部分バックアップ先 : /opt/jp1pc/agt1/store/ インスタンス名 /partial
- エクスポート先 : /opt/jp1pc/agt1/store/ インスタンス名 /dump/
- インポート先 : /opt/jp1pc/agt1/store/ インスタンス名 /import

注意

論理ホストで運用する場合のデフォルトの保存先については、「/opt/jp1pc」を「環境ディレクトリ /jp1pc」に読み替えてください。

詳細については、「2.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更」を参照してください。

(8) PFM - RM for Oracle の接続先 PFM - Manager の設定

PFM - RM がインストールされているホストで、その PFM - RM を管理する PFM - Manager を設定します。接続先の PFM - Manager を設定するには、`jpccconf mgrhost define` コマンドを使用します。

! 注意事項

- 同一ホスト上に、複数の PFM - RM がインストールされている場合でも、接続先に指定できる PFM - Manager は、一つだけです。PFM - RM ごとに異なる PFM - Manager を接続先に設定することはできません。
- PFM - RM と PFM - Manager が同じホストにインストールされている場合、接続先 PFM - Manager はローカルホストの PFM - Manager となります。この場合、接続先の PFM - Manager をほかの PFM - Manager に変更できません。

手順を次に示します。

1. Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

セットアップを実施する前に、ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

`jpccconf mgrhost define` コマンド実行時に、Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、停止を問い合わせるメッセージが表示されます。

2. 接続先の PFM - Manager ホストのホスト名を指定して、`jpccconf mgrhost define` コマンドを実行する。

例えば、接続先の PFM - Manager がホスト `host01` 上にある場合、次のように指定します。

```
jpccconf mgrhost define -host host01
```

2. インストールとセットアップ

(9) 動作ログ出力の設定 オプション

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「付録 K 動作ログの出力」を参照してください。

2.3 アンインストールとアンセットアップ (Windows の場合)

ここでは、PFM・RM for Oracle をアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

2.3.1 アンセットアップの前に (Windows の場合)

ここでは、PFM・RM for Oracle をアンインストールおよびアンセットアップするときの注意事項を次に示します。

(1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

PFM・RM をアンインストールするときは、必ず、Administrator 権限を持つアカウントで実行してください。

(2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、services ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

(3) プログラムに関する注意事項

- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム (例えば Windows のイベントビューアなど) を起動したままアンインストールした場合、ファイルやフォルダが残ることがあります。この場合は、手動でインストール先フォルダ以下をすべて削除してください。
- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラム (例えば Windows のイベントビューアなど) を起動したままアンインストールした場合、システムの再起動を促すメッセージが出力されることがあります。この場合、システムを再起動して、アンインストールを完了させてください。
- PFM・Base と PFM・RM がインストールされているホストの場合、PFM・Base のアンインストールは PFM・RM をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM・RM、PFM・Base の順にアンインストールしてください。また、PFM・Manager と PFM・RM がインストールされているホストの場合も同様に、PFM・Manager のアンインストールは PFM・RM をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM・RM、PFM・Manager の順にアンインストールしてください。

(4) サービスに関する注意事項

- PFM・Manager をアンインストールするときは、Performance Management システム全体で、Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止して

2. インストールとセットアップ

おいてください。

- PFM・RM をアンインストールしただけでは、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップの章のサービスの削除について説明している個所を参照してください。
- PFM・Manager をアンインストールしたあと、同じマシンに再インストールすると、`jpctool service list` コマンド実行時に Trap Generator サービスが二つ表示されることがあります。この場合、PFM・Manager のサービスを起動し、「Inactive」と表示されている Trap Generator サービスを `jpctool service delete` コマンドで削除してください。

(5) その他の注意事項

- PFM・Web Console がインストールされているホストから、Performance Management プログラムをアンインストールする場合は、ブラウザの画面をすべて閉じてからアンインストールを実施してください。
- アンインストールを実行する前に `jpccconf inst setup` コマンドまたは PFM・Web Console で、エージェントログの出力先フォルダを確認してください。エージェントログの出力先をデフォルト値（インストール先フォルダ `¥agt1¥agent¥` インスタンス名 `¥log¥`）以外に設定している場合、アンインストールしてもエージェントログファイルは削除されません。この場合、アンインストール実行後にエージェントログファイルを手動で削除する必要があります。

2.3.2 アンセットアップ手順（Windows の場合）

ここでは、PFM・RM for Oracle をアンセットアップする手順を説明します。

(1) インスタンス環境のアンセットアップ

インスタンス環境のアンセットアップでは、次の項目を実施します。複数のインスタンス環境をアンセットアップする場合は、次の手順を繰り返し実施します。

- 監視対象の削除
- インスタンス環境の削除
- Oracle Database へ登録したオブジェクトの削除

それぞれの手順について説明します。

(a) 監視対象を削除する

監視対象名を確認して、監視対象を削除します。監視対象の削除は、PFM・RM ホストで実施します。

監視対象名を確認するには、`jpccconf target list` コマンドを使用します。また、構

構築した監視対象を削除するには、`jpccconf target unsetup` コマンドを使用します。

監視対象を削除する手順を次に示します。

1. 監視対象名を確認する。

PFM - RM for Oracle を示すサービスキー、およびインスタンス名を指定して、

`jpccconf target list` コマンドを実行します。

```
jpccconf target list -key RMOracle -inst インスタンス名
Targets:
targethost1
targethost2
Groups:
All
```

2. インスタンス環境の PFM - RM のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. 監視対象を削除する。

PFM - RM for Oracle を示すサービスキー、インスタンス名、および監視対象名を指定して、`jpccconf target unsetup` コマンドを実行します。

```
jpccconf target unsetup -key RMOracle -inst インスタンス名 -target 監視対象名
```

`jpccconf target unsetup` コマンドが正常終了すると、監視対象名が監視対象外になります。

注意

- 監視対象をアンセットアップしても、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、PFM - Manager がインストールされているホストで、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。また、コマンド実行後に PFM - Manager を再起動してください。
- PFM - RM for Oracle 起動中に監視対象を削除した場合、共通メッセージログに「KAVL18639-E」のメッセージが出力され、PFM - RM for Oracle は停止します。

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(b) インスタンス環境を削除する

インスタンス名を確認し、インスタンス環境を削除します。インスタンス環境の削除は、PFM - RM ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、構築したインスタンス環境を削除するには、`jpccconf inst unsetup` コマンドを使用します。

2. インストールとセットアップ

インスタンス環境を削除する手順を次に示します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - RM for Oracle を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key RMOracle
```

設定されているインスタンス名が SDC の場合、SDC と表示されます。

2. インスタンス環境の PFM - RM のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. インスタンス環境を削除する。

PFM - RM for Oracle を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、

```
jpccconf inst unsetup
```

 コマンドを実行します。

設定されているインスタンス名が SDC の場合、次のように指定します。

```
jpccconf inst unsetup -key RMOracle -inst SDC
```

`jpccconf inst unsetup` コマンドが正常終了すると、インスタンス環境として構築されたフォルダ、サービス ID および Windows のサービスが削除されます。

注意

インスタンス環境をアンセットアップしても、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、PFM - Manager がインストールされているホストで、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除したあと、PFM - Manager を再起動してください。また、コマンド実行後に PFM - Manager を再起動してください。

次に指定例を示します。

- インスタンス名 : SDC
- ホスト名 : host03
- Remote Monitor Collector サービスのサービス ID : 1A1SDC[host03]
- Remote Monitor Store サービスのサービス ID : 1S1SDC[host03]

```
jpctool service delete -id 1?1SDC[host03] -host host03
```

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(c) Oracle Database へ登録したオブジェクトを削除する

監視先の Oracle Database に作成したテーブルおよびパッケージの削除方法を説明します。この操作は、Oracle Database にオブジェクトを登録したときと同じ Oracle アカウ

ントで実行してください。なお、この手順は、Oracle Database のインスタンスを監視するアカウントごとに、1 回だけ必要です。

- Oracle の `sqlplus` コマンドが実行できる環境を設定する。
Oracle の環境設定については、Oracle のマニュアルを参照してください。
- PFM - RM for Oracle が提供している `sp_rdrp.sql` スクリプトがある、次のフォルダに移動する。
インストール先フォルダ `¥agt1¥agent¥sql`
- 監視先の Oracle Database に対して、`sp_rdrp.sql` スクリプトを実行する。
PFM - RM for Oracle が Oracle を監視する時に必要なオブジェクト（監視用のプロシージャや作業用のテーブル）を Oracle から削除します。
(例)
`sqlplus Oracle のアカウント @ 監視対象のデータベースのネットサービス名 / Oracle のアカウントのパスワード @sp_rdrp.sql`
 - `sqlplus` は、ORACLE Corporation が提供しているコマンドです。
 - Oracle のアカウントは、データベースにオブジェクトを登録したときと同じアカウントを指定してください。

DBA_RECYCLEBIN に `LSC_14_PLAN_TABLE` が格納され、完全には削除されません。`LSC_14_PLAN_TABLE` を完全に削除するためには、`PURGE TABLE LSC_14_PLAN_TABLE;` コマンドを実行してください。
- Oracle の初期化パラメーターを元に戻す。
PFM - RM for Oracle のレコード収集のために、Oracle の初期化パラメーター「`TIMED_STATISTICS`」の値を変更している場合は、必要に応じて元に戻してください。

(2) PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの削除

PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントは、Oracle Database を監視するために、ほかのスキーマのオブジェクトを自由に変更する権限を保持しています。このため、使用しなくなった Oracle のアカウントは、削除する必要があります。また、Oracle のアカウントを削除したことによって、そのアカウントが使用していた表領域が必要なくなった場合、その表領域を削除してください。

(a) Oracle のアカウントを削除する

Oracle のアカウントを削除するには、Oracle の `sqlplus` コマンドが実行できる環境で `DROP USER` 文を発行します。ただし、`DROP USER` 文を発行する Oracle のアカウントには、`DROP USER` システム権限が必要です。

Oracle のアカウントを削除する手順を次に示します。

- `DROP USER` 文を発行する。

2. インストールとセットアップ

(例)

```
DROP USER Oracleのアカウント CASCADE;
```

このとき、CASCADE オプションを指定すると、アカウントの所持するオブジェクトも同時に削除できます。

DROP USER 文の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

(b) Oracle のアカウントが使用していた表領域を削除する

Oracle のアカウントを削除したことによって、使用しなくなった表領域を削除するには、Oracle の sqlplus コマンドが実行できる環境で、DROP TABLESPACE 文を発行します。ただし、DROP TABLESPACE 文を発行する Oracle アカウントには、DROP TABLESPACE システム権限が必要です。

表領域を削除する手順を次に示します。

1. DROP TABLESPACE 文を発行する。

DROP TABLESPACE 文の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

2.3.3 アンインストール手順 (Windows の場合)

Windows Server 2008 でアンインストールする場合の注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、アンインストール中にユーザーアカウント制御のダイアログボックスが表示されることがあります。ダイアログボックスが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックしてアンインストールを続行してください。なお、[キャンセル] ボタンをクリックすると、アンインストールが中止されます。

PFM・RM for Oracle をアンインストールする手順を説明します。

1. PFM - RM for Oracle をアンインストールするホストに、Administrator 権限でログオンする。

2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。

サービス情報を表示して、サービスが起動されていないか確認してください。サービス情報の表示方法およびサービスの停止方法については、マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。

3. アンインストールする Performance Management プログラムを選択する。

Windows の [コントロールパネル] で [プログラムの追加と削除] を選択して、ア

ンインストールする Performance Management プログラムを選択します。

4. [削除]を選択し,[OK]ボタンをクリックする。
選択したプログラムがアンインストールされます。

2.4 アンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合)

ここでは、PFM - RM for Oracle をアンインストールおよびアンセットアップする手順を示します。

2.4.1 アンセットアップの前に (UNIX の場合)

ここでは、PFM - RM for Oracle をアンインストールおよびアンセットアップするときの注意事項を次に示します。

(1) アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項

PFM - RM をアンインストールするときは、必ず、スーパーユーザー権限を持つアカウントで実行してください。

(2) ネットワークに関する注意事項

Performance Management プログラムをアンインストールしても、services ファイルに定義されたポート番号は削除されません。

(3) プログラムに関する注意事項

- Performance Management のプログラムおよびサービスや、Performance Management のファイルを参照するような他プログラムを起動したままアンインストールした場合、ファイルやディレクトリが残ることがあります。この場合は、手でインストール先ディレクトリ以下をすべて削除してください。
- PFM - Base と PFM - RM がインストールされているホストの場合、PFM - Base のアンインストールは PFM - RM をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - RM、PFM - Base の順にアンインストールしてください。また、PFM - Manager と PFM - RM がインストールされているホストの場合も同様に、PFM - Manager のアンインストールは PFM - RM をアンインストールしないと実行できません。この場合、PFM - RM、PFM - Manager の順にアンインストールしてください。

(4) サービスに関する注意事項

- PFM - Manager をアンインストールするときは、Performance Management システム全体で、Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止しておいてください。
- PFM - RM をアンインストールしただけでは、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップの章のサービスの削除について説明している個所を

参照してください。

- PFM・Manager をアンインストールしたあと、同じマシンに再インストールすると、`jpctool service list` コマンド実行時に Trap Generator サービスが二つ表示されることがあります。この場合、PFM・Manager のサービスを起動し、「Inactive」と表示されている Trap Generator サービスを `jpctool service delete` コマンドで削除してください。

(5) その他の注意事項

アンインストールを実行する前に `jpccconf inst setup` コマンドまたは PFM・Web Console で、エージェントログの出力先ディレクトリを確認してください。エージェントログの出力先をデフォルト値 (`/opt/jp1pc/agt1/agent/` インスタンス名 `/log`) 以外に設定している場合、アンインストールしてもエージェントログファイルは削除されません。この場合、アンインストール実行後にエージェントログファイルを手動で削除する必要があります。

2.4.2 アンセットアップ手順 (UNIX の場合)

ここでは、PFM・RM for Oracle をアンセットアップする手順を説明します。

(1) インスタンス環境のアンセットアップ

インスタンス環境のアンセットアップでは、次の項目を実施します。複数のインスタンス環境をアンセットアップする場合は、次の手順を繰り返し実施します。

- 監視対象の削除
- インスタンス環境の削除
- Oracle Database へ登録したオブジェクトの削除

それぞれの手順について説明します。

(a) 監視対象を削除する

監視対象名を確認して、監視対象を削除します。監視対象の削除は、PFM・RM ホストで実施します。

監視対象名を確認するには、`jpccconf target list` コマンドを使用します。また、構築した監視対象を削除するには、`jpccconf target unsetup` コマンドを使用します。

監視対象を削除する手順を次に示します。

1. 監視対象名を確認する。

PFM・RM for Oracle を示すサービスキー、およびインスタンス名を指定して、`jpccconf target list` コマンドを実行します。

```
jpccconf target list -key RMOracle -inst インスタンス名
Targets:
targethost1
```

2. インストールとセットアップ

```
targethost2
Groups:
All
```

2. インスタンス環境の PFM - RM のサービスが起動されている場合は、停止する。
サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. 監視対象を削除する。

PFM - RM for Oracle を示すサービスキー、インスタンス名、および監視対象名を指定して、`jpccconf target unsetup` コマンドを実行します。

```
jpccconf target unsetup -key RMOracle -inst インスタンス名 -target 監視対象名
```

`jpccconf target unsetup` コマンドが正常終了すると、監視対象名が監視対象外になります。

注意

- 監視対象をアンセットアップしても、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、PFM - Manager がインストールされているホストで、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。また、コマンド実行後に PFM - Manager を再起動してください。
- PFM - RM for Oracle 起動中に監視対象を削除した場合、共通メッセージログに「KAVL18639-E」のメッセージが出力され、PFM - RM for Oracle は停止します。

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(b) インスタンス環境を削除する

インスタンス名を確認し、インスタンス環境を削除します。インスタンス環境の削除は、PFM - RM ホストで実施します。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、構築したインスタンス環境を削除するには、`jpccconf inst unsetup` コマンドを使用します。

インスタンス環境を削除する手順を次に示します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - RM for Oracle を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key RMOracle
```

設定されているインスタンス名が SDC の場合、SDC と表示されます。

2. インスタンス環境の PFM - RM のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. インスタンス環境を削除する。

PFM・RM for Oracle を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst unsetup` コマンドを実行します。

設定されているインスタンス名が SDC の場合、次のように指定します。

```
jpccconf inst unsetup -key RMOracle -inst SDC
```

`jpccconf inst unsetup` コマンドが正常終了すると、インスタンス環境として構築されたディレクトリ、およびサービス ID が削除されます。

注意

インスタンス環境をアンセットアップしても、`jpctool service list` コマンドで表示できるサービスの情報は削除されません。この場合、PFM・Manager がインストールされているホストで、`jpctool service delete` コマンドを使用してサービスの情報を削除してください。また、コマンド実行後に PFM・Manager を再起動してください。

次に指定例を示します。

- インスタンス名：SDC
- ホスト名：host03
- Remote Monitor Collector サービスのサービス ID：1A1SDC[host03]
- Remote Monitor Store サービスのサービス ID：1S1SDC[host03]

```
jpctool service delete -id 1?1SDC[host03] -host host03
```

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(c) Oracle Database へ登録したオブジェクトを削除する

監視先の Oracle Database に作成したテーブルおよびパッケージの削除方法を説明します。この操作は、Oracle Database にオブジェクトを登録したときと同じ Oracle アカウントで実行してください。なお、この手順は、Oracle Database のインスタンスを監視するアカウントごとに、1 回だけ必要です。

注意

Oracle Database にオブジェクトが登録されていない状態で次に示す手順を実行すると、`sp_rdrp.sql` スクリプトの実行時に Oracle のエラーメッセージが表示されます。

1. Oracle の `sqlplus` コマンドが実行できる環境を設定する。

Oracle の環境設定については、Oracle のマニュアルを参照してください。

2. インストールとセットアップ

2. PFM - RM for Oracle が提供している `sp_rdrp.sql` スクリプトがある、次のディレクトリに移動する。

```
/opt/jp1pc/agt1/agent/sql
```

3. 監視先の Oracle Database に対して、`sp_rdrp.sql` スクリプトを実行する。
PFM - RM for Oracle が Oracle を監視する時に必要なオブジェクト（監視用のプロシージャや作業用のテーブル）を Oracle から削除します。

（例）

```
sqlplus Oracle のアカウント @ 監視対象のデータベースのネットサービス名 /  
Oracle のアカウントのパスワード @sp_rdrp.sql
```

- `sqlplus` は、ORACLE Corporation が提供しているコマンドです。
- Oracle のアカウントは、データベースにオブジェクトを登録したときと同じアカウントを指定してください。

DBA_RECYCLEBIN に `LSC_14_PLAN_TABLE` が格納され、完全には削除されません。`LSC_14_PLAN_TABLE` を完全に削除するためには、`PURGE TABLE LSC_14_PLAN_TABLE;` コマンドを実行してください。

4. Oracle の初期化パラメーターを元に戻す。
PFM - RM for Oracle のレコード収集のために、Oracle の初期化パラメーター「`TIMED_STATISTICS`」の値を変更している場合は、必要に応じて元に戻してください。

（2）PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの削除

PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントは、Oracle Database を監視するために、ほかのスキーマのオブジェクトを自由に変更する権限を保持しています。このため、使用しなくなった Oracle のアカウントは、削除する必要があります。また、Oracle のアカウントを削除したことによって、そのアカウントが使用していた表領域が必要なくなった場合、その表領域を削除してください。

（a）Oracle のアカウントを削除する

Oracle のアカウントを削除するには、Oracle の `sqlplus` コマンドが実行できる環境で `DROP USER` 文を発行します。ただし、`DROP USER` 文を発行する Oracle のアカウントには、`DROP USER` システム権限が必要です。

Oracle のアカウントを削除する手順を次に示します。

1. `DROP USER` 文を発行する。

（例）

```
DROP USER Oracleのアカウント CASCADE;
```

このとき、`CASCADE` オプションを指定すると、アカウントの所持するオブジェクトも同時に削除できます。

DROP USER 文の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

(b) Oracle のアカウントが使用していた表領域を削除する

Oracle のアカウントを削除したことによって、使用しなくなった表領域を削除するには、Oracle の sqlplus コマンドが実行できる環境で、DROP TABLESPACE 文を発行します。ただし、DROP TABLESPACE 文を発行する Oracle アカウントには、DROP TABLESPACE システム権限が必要です。

表領域を削除する手順を次に示します。

1. DROP TABLESPACE 文を発行する。

DROP TABLESPACE 文の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

2.4.3 アンインストール手順 (UNIX の場合)

PFM・RM for Oracle をアンインストールする手順を説明します。

1. Performance Management のプログラムをアンインストールするホストに、スーパーユーザーでログインするか、または su コマンドでユーザーをスーパーユーザーに変更する。
2. ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスを停止する。
サービス情報を表示して、サービスが起動されていないか確認してください。ローカルホストで Performance Management のプログラムおよびサービスが起動されている場合は、すべて停止してください。なお、停止するサービスは物理ホスト上および論理ホスト上のすべてのサービスです。サービス情報の表示方法およびサービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
3. 次のコマンドを実行して、Hitachi PP Installer を起動する。
`/etc/hitachi_setup`

Hitachi PP Installer が起動され、初期画面が表示されます。

4. 初期画面で「D」を入力する。
アンインストールできるプログラムの一覧が表示されます。
5. アンインストールしたい Performance Management のプログラムを選択して、「D」を入力する。
選択したプログラムがアンインストールされます。なお、プログラムを選択するには、カーソルを移動させ、スペースキーで選択します。
6. アンインストールが正常終了したら、「Q」を入力する。

2. インストールとセットアップ

Hitachi PP Installer の初期画面に戻ります。

2.5 PFM - RM for Oracle のシステム構成の変更

監視対象システムのネットワーク構成の変更や、ホスト名の変更などに応じて、PFM - RM for Oracle のシステム構成を変更する場合があります。

PFM - RM for Oracle のシステム構成を変更する場合、PFM - Manager や PFM - Web Console の設定変更もあわせて行う必要があります。Performance Management のシステム構成を変更する手順の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

2.6 PFM - RM for Oracle の運用方式の変更

収集した稼働監視データの運用手順の変更などで、パフォーマンスデータの格納先や、インスタンス環境といった、PFM - RM for Oracle の運用方式を変更する場合があります。

Performance Management 全体の運用方式を変更する手順の詳細についてはマニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

2.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更

PFM - RM for Oracle で収集したパフォーマンスデータは、PFM - RM for Oracle の Remote Monitor Store サービスの Store データベースで管理しています。

Store データベースで管理されるパフォーマンスデータの、次のデータ格納先ディレクトリを変更したい場合は、`jpccconf db define` コマンドで設定します。Store データベースの格納先フォルダを変更する前に収集したパフォーマンスデータが必要な場合は、`jpccconf db define` コマンドの `-move` オプションを使用してください。`jpccconf db define` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」を参照してください。

- 保存先ディレクトリ
- バックアップ先ディレクトリ
- 部分バックアップ先ディレクトリ
- エクスポート先ディレクトリ
- インポート先ディレクトリ

(1) Windows の場合

`jpccconf db define` コマンドで設定するオプション名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 2-26 パフォーマンスデータの格納先を変更するコマンドの設定項目 (Windows の場合)

説明	オプション名	設定できる値	デフォルト値
パフォーマンスデータのバックアップ先フォルダ	bd	1 ~ 211 バイトの絶対パス	インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥backup
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号	bs	1 ~ 9	5

説明	オプション名	設定できる値	デフォルト値
パフォーマンスデータのエクспорт先フォルダ	dd	1 ~ 127 バイトの絶対パス	インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥dump
パフォーマンスデータのインポート先フォルダ	id	1 ~ 222 バイトの絶対パス	インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥import
パフォーマンスデータの部分バックアップ先フォルダ	pbd	1 ~ 214 バイトの絶対パス	インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥partial
パフォーマンスデータの保存先フォルダ	sd	1 ~ 214 バイトの絶対パス	インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名

注

論理ホストで運用する場合のデフォルト値については、「インストール先フォルダ」を「環境フォルダ ¥jp1pc」に読み替えてください。

(2) 論理ホストで運用する場合のデフォルト値については、「インストール先フォルダ UNIX の場合

jpccconf db define コマンドで設定するオプション名、設定できる値の範囲などを次の表に示します。

表 2-27 パフォーマンスデータの格納先を変更するコマンドの設定項目 (UNIX の場合)

説明	オプション名	設定できる値	デフォルト値
パフォーマンスデータのバックアップ先ディレクトリ	bd	1 ~ 211 バイトの絶対パス	インストール先ディレクトリ / agt1/store/ インスタンス名 / backup
パフォーマンスデータを退避する場合の最大世代番号	bs	1 ~ 9	5
パフォーマンスデータのエクспорт先ディレクトリ	dd	1 ~ 127 バイトの絶対パス	インストール先ディレクトリ / agt1/store/ インスタンス名 / dump
パフォーマンスデータのインポート先ディレクトリ	id	1 ~ 222 バイトの絶対パス	インストール先ディレクトリ / agt1/store/ インスタンス名 /import

2. インストールとセットアップ

説明	オプション名	設定できる値	デフォルト値
パフォーマンスデータの部分バックアップ先ディレクトリ	pbd	1 ~ 214 バイトの絶対パス	インストール先ディレクトリ / agt1/store/ インスタンス名 / partial
パフォーマンスデータの保存先ディレクトリ	sd	1 ~ 214 バイトの絶対パス	インストール先ディレクトリ / agt1/store/ インスタンス名

注

論理ホストで運用する場合のデフォルト値については、「インストール先ディレクトリ」を「環境ディレクトリ ¥jp1pc」に読み替えてください。

2.6.2 監視対象の更新の設定

監視対象を更新したい場合は、インスタンス名を確認し、PFM - RM ホストで監視対象を設定します。更新する監視対象の情報は、次の表であらかじめ確認してください。Oracle の監視対象の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

表 2-28 PFM - RM for Oracle の監視対象の設定

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
Target Host	監視対象となる Oracle が稼働しているホスト名。論理ホストの場合は、論理ホスト名。	1 ~ 32 バイトの半角英数字およびハイフン (-) だけ使用できる。ただし、「-」から始まる名前は指定できない。インスタンス内でユニークである必要がある。	前回の設定値

監視対象名を確認するには、`jpccconf target list` コマンドを使用します。また、監視対象を更新するには、`jpccconf target setup` コマンドを使用します。

監視対象を更新する手順を次に示します。複数の監視対象を更新する場合は、次の手順を繰り返し実施します。

1. 監視対象名を確認する。

PFM - RM for Oracle を示すサービスキー、およびインスタンス名を指定して、

`jpccconf target list` コマンドを実行します。

```
jpccconf target list -key RMOracle -inst インスタンス名
Targets:
targethost1
targethost2
Groups:
All
```

2. PFM - RM for Oracle を示すサービスキー、インスタンス名、および監視対象名を指定して、`jpccconf target setup` コマンドを実行する。

監視対象名が `targethost1` の監視対象を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf target setup -key RMOracle -inst インスタンス名 -target targethost1
```

3. PFM - RM for Oracle の監視対象を更新する。
表 2-28 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力します。現在設定されている値が表示されます。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押してください。すべての入力が終了すると、監視対象が更新されます。
4. 更新したインスタンス環境のサービスを再起動する。
サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

2.6.3 インスタンス環境の更新の設定

インスタンス環境を更新したい場合は、インスタンス名を確認し、インスタンス情報を更新します。インスタンス情報の設定は、PFM - RM ホストで実施します。

更新する情報はあらかじめ確認してください。Oracle のインスタンス情報の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

インスタンス情報を更新する手順を次に示します。

(1) Windows の場合

Windows の場合のインスタンス情報を次の表に示します。

表 2-29 PFM - RM for Oracle のインスタンス情報 (Windows の場合)

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
<code>oracle_sid</code>	この値は更新できる。監視対象となる Oracle システム識別子 (環境変数 <code>ORACLE_SID</code> と同じ値)。	255 バイト以内の半角文字列。ただし、次の文字は指定できない。 <ul style="list-style-type: none"> • 空白文字 • タブ • 次の記号「,」「<」「>」 	前回の設定値

2. インストールとセットアップ

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
oracle_home ¹	この値は更新できる。 PFM・RM for Oracle が使用する Oracle クライアントの Oracle ホームのフォルダ (環境変数 ORACLE_HOME と同じ値) ²	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	前回の設定値
oracle_version	この値は更新できる。 PFM・RM for Oracle が使用する Oracle クライアントのバージョン番号。	• Oracle 10g の場合 : 10 • Oracle 11g の場合 : 11	前回の設定値
oracle_user ³	この値は更新できる。 Oracle を監視するアカウント (指定できるアカウント、および必要な権限については、「2.1.4(2) PFM・RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの作成」を参照のこと)	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	前回の設定値
oracle_passwd ^{3, 4}	この値は更新できる。 oracle_user で指定したアカウントのパスワードを指定する。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	前回の設定値
net_service_name ^{1, 5}	この値は更新できる。 監視対象のデータベースのネットサービス名。監視対象のデータベースのネットサービス名については、Oracle のマニュアルを参照のこと。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	前回の設定値
retry_time	この値は更新できる。 Oracle 接続時に認証エラーが出力された場合に、再接続を試みる秒数。	0 ~ 600 (単位 : 秒)	前回の設定値

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
log_path	この値は更新できる。 エージェントログの出力先フォルダ名を絶対パスで指定する。	245 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 <ul style="list-style-type: none"> • タブ • 次の記号 「/」「:」「,」「;」「*」「?」「"」 「<」「>」「 」 注意 <ul style="list-style-type: none"> • デフォルト以外のフォルダを設定する場合、インストール先フォルダ配下となるパスは指定できない。 • ほかのインスタンス出力先として指定している値は指定できない。 	前回の設定値
log_size	この値は更新できる。 エージェントログの 1 ファイルの最大サイズを指定する。	1 ~ 32 (単位: キロバイト)、 ただし、推奨は 16 以上。	前回の設定値
timeout	この値は更新できる。 クエリー時の Oracle アクセスのタイムアウト時間を指定する。	0, 10 ~ 3,600 (単位: 秒) 0 を指定した場合はタイムアウト監視を行わない。1 ~ 9 を指定した場合は、実行時、10 に変更する。	前回の設定値
sql_option ⁶	この値は更新できる。 「Y」を指定した場合、PI_PIDB, PD_PDTS レコードで、次の項目 ⁶ の情報収集を行わず、0 または numeric_10 で指定した値を設定する。	{ Y N }	前回の設定値
numeric_10	この値は更新できる。 sql_option が「Y」の場合、情報収集しない項目に設定する値を指定する。sql_option が「N」の場合、設定を無視する。	0 ~ 99999。 ただし、設定するフィールドのデータ型の最大値 (short の場合 32767, ushort の場合 65535) を超える値を指定した場合、データ型の最大値が設定される。 ⁷	前回の設定値

2. インストールとセットアップ

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
startup_always	この値は更新できる。 PFM・RM for Oracle 起動時に監視対象の Oracle が起動処理中であった場合などに、PFM・RM for Oracle が Oracle 接続エラーで停止することがある。 「Y」を指定した場合、接続エラーが発生しても起動処理を継続する。「N」を指定した場合、この動作を有効にしない。	{ Y N }	前回の設定値
localtemp_option 8	この値は更新できる。 PD_PDDDB, PI_PIDDB, PD_PDDF, PI_PIDF, PD_PDTF, PD_PDTS, PD_PCTS レコードのローカル管理一時表領域の空き容量の情報の表示を切り替えるオプション。 「Y」を指定した場合、使用されていないサイズを表示する。「N」を指定した場合、未割り当てのサイズを表示する。	{ Y N }	前回の設定値

注 1

監視対象プログラムを監視する場合、Oracle Client 32-bit のインストールと環境設定が必要です。また、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する際、各項目について次のように設定してください。

- 「oracle_home」

Oracle Client 32-bit の Oracle ホームを設定してください。

- 「net_service_name」

Oracle Client 32-bit で設定したネットサービス名を指定してください。

Oracle Client 32-bit で設定するネットサービス名には、監視する Oracle インスタンスに接続するネットサービス名を指定してください。

Oracle Client 32-bit のインストールと環境構築が完了していない状態で、インスタンス情報の「oracle_home」に、Oracle Client 32-bit がインストールされていない Oracle Database または Oracle Client 64-bit の ORACLE_HOME を指定して、PFM・Agent for Oracle を起動すると、KAVL18020-E のメッセージが表示されません。

注 2

PFM・RM for Oracle が Oracle Database のクライアントライブラリを使用する

(Oracle Database に Oracle Client 32bit がインストールされている) 場合は、Oracle Database の Oracle ホームを指定してください。

注 3

ユーザーを変更する場合は、次の手順で行ってください。

1. 変更前のユーザーが作成していたオブジェクトを削除する。
2. 変更後のユーザーで、新しくオブジェクトを登録する。

なお、ユーザーを変更しても、パフォーマンスデータは削除されません。

オブジェクトの削除方法については「2.3.2(1)(c) Oracle Database へ登録したオブジェクトを削除する」を、オブジェクトの登録方法については「2.1.4(3)(c) Oracle Database へオブジェクトを登録する」を参照してください。

注 4

oracle_passwd にパスワードの有効期限が設定されている場合、有効期限に達すると Oracle との接続エラーが起こり、パフォーマンス情報を収集できません。Oracle との接続エラーを起こさないようにするために、パスワードの有効期限が切れる前に、次のどちらかを設定してください。

- パスワードの有効期限を解除します。
- パスワードの更新後、jpcconf inst setup コマンドを実行し、oracle_passwd を更新します。

なお、mk_rmus.sql で作成した Oracle のアカウントには、Oracle が提供している DEFAULT のプロファイルが適用されます。

注 5

PFM・RM for Oracle が使用する Oracle クライアントのネットワークサービス (tnsnames.ora など) を設定している必要があります。

また監視対象となる Oracle のネットワークサービス定義 (listener.ora など) を設定し、リスナーを起動しておく必要があります。

Oracle RAC 構成の Oracle Database インスタンスを監視するときは、各ノードの Oracle Database インスタンスを監視するよう設定してください。設定方法については、Oracle のマニュアルを参照してください。

次のフォルダ以外に tnsnames.ora ファイルを格納したときは、PFM・RM for Oracle が Oracle 接続エラーとなります。

oracle_homeで指定したフォルダ¥network¥admin

注 6

PFM・RM for Oracle では Oracle の各セグメント関連の情報を取得するため、Oracle の静的ディクショナリー・ビュー DBA_SEGMENTS の検索をします。

Oracle に大量のセグメント (数十万件以上のセグメント) が存在する場合、情報収集で非常に時間が掛かるときがあります。そのため、大量のセグメントが存在し、

2. インストールとセットアップ

次の表に示す情報の収集が不要な場合、`sql_option` を「Y」と設定して運用してください。

表 2-30 レコード名と `numeric_10` で指定した値 (インスタンス情報の更新の設定)

レコード名	PFM - View 名	<code>numeric_10</code> で指定した値
PD_PDTS	Segments	有効
	Extents	有効
PI_PIDB	DB Files %	有効
	Log Files %	有効
	NextAlloc Fails	有効
	Tablespaces	有効
	Rollback Segments	有効
	Rollback Segments Trans	有効
	Blocks	有効
	Segments	有効
	Extents	有効
	Free Mbytes	有効
	Overextended	有効
	High Max Extent	有効
	Datafiles	有効
	Mbytes	有効
	Free Extents	有効
	Free%	有効
	Free Change	有効
	Write%	有効
	Write/sec	有効
	Redo Files	有効
	Links	有効
	Links Logged On	有効
	Links In Tran	有効
Links Open Cursors	有効	
Used Change	有効	
Used Mbytes	有効	
Rollback Segments Hit%	有効	
Sort Segments	有効	

レコード名	PFM - View 名	numeric_10 で指定した値
	Sorting Users	有効
	Physical Blocks Read	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Blocks Written	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Reads	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Writes	デルタ項目のため、常に 0 設定。

注 7

各レコードのフィールドの形式が、「float」または「double」型の場合、データは浮動小数点数となるため、指定値によってまるめられる場合があります。

(例)

numeric_10 の指定を 32767 と指定した場合、32760 と表示される場合があります。

注 8

localtemp_option に「Y」を指定した場合、ローカル管理一時表領域の空き容量やエクステントに関する情報を動的パフォーマンスビューの v\$temp_extent_pool を使用して取得します。取得する情報の空き容量は、収集時に使用していた領域のサイズから未使用サイズを算出します。

localtemp_option に「N」を指定した場合、ローカル管理一時表領域の空き容量やエクステントに関する情報を動的パフォーマンスビューの v\$temp_space_header を使用して取得します。取得する情報の空き容量は、未割り当てのサイズとなります。一度割り当てられたサイズは、一時表領域の再構築や再作成などをするまで解放されないため、解放されるまで空き容量は増加しません。v\$temp_extent_pool ビューを検索した場合、Oracle のインスタンスが休止状態となります。Oracle Database の性能に影響することがありますので、十分に検討してから設定してください。詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、インスタンス環境を更新するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。

インスタンス環境を更新する手順を次に示します。複数のインスタンス環境を更新する場合は、次の手順を繰り返し実施します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - RM for Oracle を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key RMOracle
```

設定されているインスタンス名が SDC の場合、SDC と表示されます。

2. 更新したいインスタンス環境の PFM - RM for Oracle のサービスが起動されている場合は、停止する。

2. インストールとセットアップ

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

`jpccnf inst setup` コマンド実行時に、更新したいインスタンス環境のサービスが起動されている場合は、確認メッセージが表示され、サービスを停止できます。サービスを停止した場合は、更新処理が実行されます。サービスを停止しなかった場合は、更新処理が中断されます。

3. PFM - RM for Oracle を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、

`jpccnf inst setup` コマンドを実行する。

インスタンス名が SDC のインスタンス環境を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccnf inst setup -key RMOracle -inst SDC
```

4. Oracle のインスタンス情報を更新する。

表 2-29 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力します。現在設定されている値が表示されます（ただし、`oracle_passwd` の値は表示されません）。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押してください。すべての入力が終了すると、インスタンス環境が更新されます。

5. 更新したインスタンス環境のサービスを再起動する。

サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(2) UNIX の場合

UNIX の場合のインスタンス情報を次の表に示します。

表 2-31 PFM - RM for Oracle のインスタンス情報（UNIX の場合）

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
<code>oracle_sid</code>	この値は更新できる。監視対象となる Oracle システム識別子（環境変数 <code>ORACLE_SID</code> と同じ値）。	255 バイト以内の半角文字列。ただし、次の文字は指定できない。 <ul style="list-style-type: none">空白文字タブ次の記号「,」「<」「>」	前回の設定値

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
oracle_home ¹	この値は更新できる。 PFM・RM for Oracle が使用する Oracle クライアントの Oracle ホームのディレクトリ（環境変数 ORACLE_HOME と同じ値）。 ²	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	前回の設定値
oracle_version	この値は更新できる。 PFM・RM for Oracle が使用する Oracle クライアントのバージョン番号。	• Oracle 10g の場合：10 • Oracle 11g の場合：11	前回の設定値
oracle_user ³	この値は更新できる。 Oracle を監視するアカウント（指定できるアカウント、および必要な権限については、「2.2.4(3) PFM・RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの作成」を参照のこと）。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	前回の設定値
oracle_passwd ^{3, 4}	この値は更新できる。 oracle_user で指定したアカウントのパスワードを指定する。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	前回の設定値
net_service_name ^{1, 5}	この値は更新できる。 監視対象のデータベースのネットサービス名。監視対象のデータベースのネットサービス名については、Oracle のマニュアルを参照のこと。	255 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • 空白文字 • タブ • 次の記号 「,」「<」「>」	前回の設定値
log_path ⁶	この値は更新できる。 エージェントログの出力先ディレクトリ名を絶対パスで指定する。	245 バイト以内の半角文字列。 ただし、次の文字は指定できない。 • タブ • 次の記号 「/」「:」「,」「;」「*」「?」「"」「<」「>」「 」 注意 • デフォルト以外のフォルダを設定する場合、インストール先フォルダ配下となるパスは指定できない。 • ほかのインスタンス出力先として指定している値は指定できない。	前回の設定値

2. インストールとセットアップ

項目	説明	設定できる値	デフォルト値
log_size	この値は更新できる。 エージェントログの1 ファイルの最大サイズを 指定する。	1 ~ 32 (単位: キロバイト)。 ただし、推奨は 16 以上。	前回の設定値
timeout	この値は更新できる。 クエリー時の Oracle アク セスのタイムアウト時間 を指定する。	0, 10 ~ 3,600 (単位: 秒)。 0 を指定した場合はタイムア ウト監視を行わない。1 ~ 9 を指定した場合は、実行時、 10 に変更する。	前回の設定値
sql_option ⁷	この値は更新できる。 「Y」を指定した場合、 PI_PIDB, PD_PDTS レ コードで、次の項目 ⁷ の情報収集を行わず、0 または numeric_10 で指 定した値を設定する。	{Y N}	前回の設定値
numeric_10	この値は更新できる。 sql_option が「Y」の 場合、情報収集しない項 目に設定する値を指定す る。sql_option が「N」 の場合、設定を無視する。	0 ~ 99999。 ただし、設定するフィール ドのデータ型の最大値 (short の場合 32767, ushort の場合 65535) を超える値を指定し た場合、データ型の最大値が 設定される。 ⁸	前回の設定値
startup_always	この値は更新できる。 PFM - RM for Oracle 起 動時に監視対象の Oracle が起動処理中であった場 合などに、PFM - RM for Oracle が Oracle 接続エ ラーで停止することがあ る。 「Y」を指定した場合、接 続エラーが発生しても起 動処理を継続する。「N」 を指定した場合、この動 作を有効にしない。	{Y N}	前回の設定値
localtemp_optio n ⁹	この値は更新できる。 PD_PDDB, PI_PIDB, PD_PDDF, PI_PIDF, PD_PDTF, PD_PDTS, PD_PCTS レコードの ローカル管理一時表領域 の空き容量の情報の表示 を切り替えるオプション。 「Y」を指定した場合、使 用されていないサイズを 表示する。「N」を指定し た場合、未割り当てのサ イズを表示する。	{Y N}	前回の設定値

注 1

監視対象プログラムを監視する場合、Oracle Client 32-bit のインストールと環境設定が必要です。また、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する際、各項目について次のように設定してください。

- 「`oracle_home`」
Oracle Client 32-bit の Oracle ホームを設定してください。
- 「`net_service_name`」
Oracle Client 32-bit で設定したネットサービス名を指定してください。

Oracle Client 32-bit で設定するネットサービス名には、監視する Oracle インスタンスに接続するネットサービス名を指定してください。

Oracle Client 32-bit のインストールと環境構築が完了していない状態で、インスタンス情報の「`oracle_home`」に、Oracle Client 32-bit がインストールされていない Oracle Database または Oracle Client 64-bit の `ORACLE_HOME` を指定して、PFM - Agent for Oracle を起動すると、KAVL18011-E および KAVL18021-E のメッセージが表示されます。

注 2

PFM - RM for Oracle が Oracle Database のクライアントライブラリを使用する (Oracle Database に Oracle Client 32bit がインストールされている) 場合は、Oracle Database の Oracle ホームを指定してください。

注 3

ユーザーを変更する場合は、次の手順で行ってください。

1. 変更前のユーザーが作成していたオブジェクトを削除する。
2. 変更後のユーザーで、新しくオブジェクトを登録する。

なお、ユーザーを変更しても、パフォーマンスデータは削除されません。

オブジェクトの削除方法については「2.4.2(1)(c) Oracle Database へ登録したオブジェクトを削除する」を、オブジェクトの登録方法については「2.2.4(4)(c) Oracle Database へオブジェクトを登録する」を参照してください。

注 4

`oracle_passwd` にパスワードの有効期限が設定されている場合、有効期限に達すると Oracle との接続エラーが起こり、パフォーマンス情報を収集できません。

Oracle との接続エラーを起こさないようにするために、パスワードの有効期限が切れる前に、次のどちらかを設定してください。

- パスワードの有効期限を解除します。
- パスワードの更新後、`jpccconf inst setup` コマンドを実行し、`oracle_passwd` を更新します。

なお、`mk_rmus.sql` で作成した Oracle のアカウントには、Oracle が提供している DEFAULT のプロファイルが適用されます。

2. インストールとセットアップ

注 5

PFM - RM for Oracle が使用する Oracle クライアントのネットワークサービス (tnsnames.ora など) を設定している必要があります。
 また監視対象となる Oracle のネットワークサービス定義 (listener.ora など) を設定し、リスナーを起動しておく必要があります。
 Oracle RAC 構成の Oracle Database インスタンスを監視するときは、各ノードの Oracle Database インスタンスを監視するよう設定してください。設定方法については、Oracle のマニュアルを参照してください。
 次のディレクトリ以外に tnsnames.ora ファイルを格納したときは、PFM - RM for Oracle が Oracle 接続エラーとなります。

oracle_homeで指定したディレクトリ/network/admin

注 6

変更前のパス情報は保存されません。手動でファイルなどに履歴として記録しておいてください。トラブルなどによって、変更前のディレクトリからのエージェントログの採取が必要となる場合があります。

注 7

PFM - RM for Oracle では Oracle の各セグメント関連の情報を取得するため、Oracle の静的ディクショナリー・ビュー DBA_SEGMENTS の検索をします。Oracle に大量のセグメント (数十万件以上のセグメント) が存在する場合、情報収集で非常に時間が掛かる場合があります。そのため、大量のセグメントが存在し、次の表に示す情報の収集が不要な場合、sql_option を「Y」と設定して運用してください。

表 2-32 レコード名と numeric_10 で指定した値 (インスタンス情報の更新の設定)

レコード名	PFM - View 名	numeric_10 で指定した値
PD_PDTS	Segments	有効
	Extents	有効
PI_PIDB	DB Files %	有効
	Log Files %	有効
	NextAlloc Fails	有効
	Tablespaces	有効
	Rollback Segments	有効
	Rollback Segments Trans	有効
	Blocks	有効
	Segments	有効
	Extents	有効

レコード名	PFM - View 名	numeric_10 で指定した値
	Free Mbytes	有効
	Overextended	有効
	High Max Extent	有効
	Datafiles	有効
	Mbytes	有効
	Free Extents	有効
	Free%	有効
	Free Change	有効
	Write%	有効
	Write/sec	有効
	Redo Files	有効
	Links	有効
	Links Logged On	有効
	Links In Tran	有効
	Links Open Cursors	有効
	Used Change	有効
	Used Mbytes	有効
	Rollback Segments Hit%	有効
	Sort Segments	有効
	Sorting Users	有効
	Physical Blocks Read	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Blocks Written	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Reads	デルタ項目のため、常に 0 設定。
	Physical Writes	デルタ項目のため、常に 0 設定。

注 8

各レコードのフィールドの形式が、「float」または「double」型の場合、データは浮動小数点数となるため、指定値によってまるめられる場合があります。

(例)

numeric_10 の指定を 32767 と指定した場合、32760 と表示される場合があります。

注 9

localtemp_option に「Y」を指定した場合、ローカル管理一時表領域の空き容量やエクステントに関する情報を動的パフォーマンスビューの v\$temp_extents_pool

2. インストールとセットアップ

を使用して取得します。取得する情報の空き容量は、収集時に使用していた領域のサイズから未使用サイズを算出します。

`localtemp_option` に「N」を指定した場合、ローカル管理一時表領域の空き容量やエクステントに関する情報を動的パフォーマンスビューの

`v$temp_space_header` を使用して取得します。取得する情報の空き容量は、未割り当てのサイズとなります。一度割り当てられたサイズは、一時表領域の再構築や再作成などをするまで解放されないため、解放されるまで空き容量は増加しません。`v$temp_extent_pool` ビューを検索した場合、Oracle のインスタンスが休止状態となります。Oracle Database の性能に影響することがありますので、十分に検討してから設定してください。詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf inst list` コマンドを使用します。また、インスタンス環境を更新するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。

インスタンス環境を更新する手順を次に示します。複数のインスタンス環境を更新する場合は、次の手順を繰り返し実施します。

1. インスタンス名を確認する。

PFM - RM for Oracle を示すサービスキーを指定して、`jpccconf inst list` コマンドを実行します。

```
jpccconf inst list -key RMOracle
```

設定されているインスタンス名が SDC の場合、SDC と表示されます。

2. 更新したいインスタンス環境の PFM - RM for Oracle のサービスが起動されている場合は、停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

`jpccconf inst setup` コマンド実行時に、更新したいインスタンス環境のサービスが起動されている場合は、確認メッセージが表示され、サービスを停止できます。サービスを停止した場合は、更新処理が続行されます。サービスを停止しなかった場合は、更新処理が中断されます。

3. PFM - RM for Oracle を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、

`jpccconf inst setup` コマンドを実行する。

インスタンス名が SDC のインスタンス環境を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key RMOracle -inst SDC
```

4. PFM - RM for Oracle のインスタンス情報を更新する。

表 2-12 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力します。現在設定されている値が表示されます（ただし、`oracle_passwd` の値は表示されません）。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押ししてください。すべての入力が終了すると、インスタンス環境が更新されます。

5. 更新したインスタンス環境のサービスを再起動する。
サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

2.6.4 監視対象の設定状況を確認する

設定済みの監視対象の一覧を表示したり、設定内容を確認したりする方法について説明します。

(1) 監視対象の一覧を表示する

リモートエージェントまたはグループエージェントの単位で監視対象の一覧を表示できます。

監視対象の一覧を表示する手順を次に示します。

1. PFM - RM ホストにログインする。
2. `jpccconf target list` コマンドを実行する。

(2) 監視対象の設定内容を確認する

リモートエージェントまたはグループエージェントの単位で監視対象の設定内容を確認できます。

監視対象の設定内容を確認する手順を次に示します。

1. PFM - RM ホストにログインする。
2. `jpccconf target display` コマンドを実行する。

2.6.5 レコード収集での Oracle アクセスのキャンセル機能

1 レコードの収集時間のうち、Oracle へのアクセス時間の上限をタイムアウト値として設定できます。

Oracle およびマシンに負荷が掛かっているときにレコードデータを収集すると、収集データ量によってレコード収集に時間が掛かる場合があります。このような場合、PFM - RM for Oracle の要求が Oracle の稼働に影響を与えるおそれがあります。タイムアウト値を設定すると、PFM - RM for Oracle から Oracle への要求をキャンセルできるため、Oracle の稼働に与える影響を抑制できます。

レコードの収集は、レコード単位に次の順で行われます。

1. Oracle へのアクセス

2. インストールとセットアップ

2. Store データベースへの書き込み

しかし、タイムアウト値を設定した場合、Oracle へのアクセス中にタイムアウトが発生すると、そのレコードの収集がキャンセルされます。

この機能は、Oracle の OCI (Oracle Call Interface) の OCIBreak 関数によって実現しています。

タイムアウト値は、次に示す方法で設定できます。

- `jpccnf inst setup` コマンドによるインスタンス環境設定
- PFM - Web Console の画面の、Remote Monitor Collector サービスのプロパティ「TIMEOUT」の変更

設定できる値は 0、または 10 ~ 3,600 (単位 : 秒) です。0 を指定した場合、この機能は働きません。また、範囲外の値は無効となります。デフォルトの値は、0 が設定されています。

タイムアウト値の入力可否を設定方法別に次の表に示します。

表 2-33 タイムアウト値の入力可否

設定方法	入力値				
	-1 以下	0	1 ~ 9	10 ~ 3,600	3,601 以上
jpccnf inst setup コマンドからの設定 / 更新	入力エラー (入力不可)				入力エラー (入力不可)
PFM - Web Console からの変更	×		×		×

(凡例)

: 入力可能。

: 入力可能だが、PFM - RM for Oracle は起動時に、「10」に置き換える。共通メッセージログに「KAVL18630-W」のメッセージが出力される。

× : 入力可能だが、値は更新されない。共通メッセージログに「KAVL18630-W」のメッセージが出力される。

注意

タイムアウト値は、高負荷時 (ピーク時) に収集するレコードの収集時間に応じて設定してください。

`jpccnf inst setup` コマンドによるタイムアウト値の設定については、「2.1.4(3) インスタンス環境の設定」を参照してください。

なお次のレコードはキャンセル対象外です。

- Instance Availability (PD_PDIA)

タイムアウトが発生した場合、エージェントログの通常ログ (agt1inf0x.log) に次のメッセージが出力されます。

```
KAVL18636-I
The cancellation of the record collection (レコード名) by the time-out
was accepted.
```

また、キャンセルによりレコードが収集されない場合、共通メッセージログに、「KAVL18401-W」のメッセージが出力されます。

履歴データの収集など複数レコードの収集が同じタイミングで一度に行われる場合、一つのレコードでタイムアウトが発生しキャンセルされても、ほかのレコードの収集はキャンセルされません。

! 注意事項

PFM - RM for Oracle は、OCI (Oracle Call Interface) を使用しており、実際のキャンセルに掛かる時間は、OCIBreak() の処理時間に依存します。このため、即時にはキャンセルされない場合があります。

次の状況では、タイムアウト発生によるキャンセルが受け付けられても、レコード収集はキャンセルされません。

- タイムアウト発生時に収集シーケンスが Store データベースへの書き込みに移っている場合にはキャンセルされません。
- タイムアウト発生によるキャンセルと Oracle アクセスの終了が重なった場合、「KAVL18636-I」のメッセージがログファイルに出力されますが、正常にレコード収集されます。

2.7 バックアップとリストア

PFM - RM for Oracle のバックアップおよびリストアについて説明します。

障害が発生してシステムが壊れた場合に備えて、PFM - RM for Oracle の設定情報のバックアップを取得してください。PFM - RM for Oracle をセットアップしたときなど、システムを変更したときにはバックアップを取得してください。

なお、Performance Management システム全体のバックアップおよびリストアについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、バックアップとリストアについて説明している章を参照してください。

2.7.1 バックアップ

バックアップはファイルをコピーするなど、任意の方法で取得してください。バックアップを取得する際は、PFM - RM for Oracle のサービスを停止した状態で行ってください。

！ 注意事項

バックアップを取得する際には、バックアップ元の PFM - RM for Oracle の製品バージョン番号を管理してください。製品バージョン番号の詳細については、リリースノートを参照してください。

Windows の場合の、PFM - RM for Oracle の設定情報のバックアップ対象ファイルを次の表に示します。

表 2-34 PFM - RM for Oracle のバックアップ対象ファイル (Windows の場合)

ファイル名	説明
インストール先フォルダ ¹ ¥agt1¥agent¥*.ini ファイル	Remote Monitor Collector サービスの設定ファイル
インストール先フォルダ ¹ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ² ¥*.ini ファイル	
インストール先フォルダ ¹ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ² ¥groups¥*.ini ファイル	
インストール先フォルダ ¹ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ² ¥targets¥*.ini ファイル	
インストール先フォルダ ¹ ¥agt1¥store¥*.ini ファイル	Remote Monitor Store サービスの設定ファイル
インストール先フォルダ ¹ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ² ¥*.ini ファイル	

注 1

論理ホストで運用する場合は「インストール先フォルダ」を「環境フォルダ ¥jplpc」に読み替えてください。環境フォルダとは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のフォルダを示します。

注 2

インスタンス環境で運用する場合のフォルダです。インスタンス構成の場合、これらのフォルダは、インスタンスの数と同じ数だけ作成されます。

UNIX の場合の、PFM - RM for Oracle の設定情報のバックアップ対象ファイルを次の表に示します。

表 2-35 PFM - RM for Oracle のバックアップ対象ファイル (UNIX の場合)

ファイル名	説明
/opt ¹ /jplpc/agt1/agent/*.ini ファイル	Remote Monitor Collector サービスの設定ファイル
/opt ¹ /jplpc/agt1/agent/ インスタンス名 ² /*.ini ファイル	
/opt ¹ /jplpc/agt1/agent/ インスタンス名 ² /groups/*.ini ファイル	
/opt ¹ /jplpc/agt1/agent/ インスタンス名 ² /targets/*.ini ファイル	
/opt ¹ /jplpc/agt1/store/*.ini ファイル	Remote Monitor Store サービスの設定ファイル
/opt ¹ /jplpc/agt1/store/ インスタンス名 ² /*.ini ファイル	

注 1

論理ホストで運用する場合は「/opt/jplpc」を「環境ディレクトリ /jplpc」に読み替えてください。環境ディレクトリとは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリを示します。

注 2

インスタンス環境で運用する場合のディレクトリです。インスタンス構成の場合、これらのディレクトリは、インスタンスの数と同じ数だけ作成されます。

2.7.2 リストア

PFM - RM for Oracle の設定情報をリストアする場合は、次に示す前提条件を確認した上で、バックアップ対象ファイルを元の位置にコピーしてください。バックアップした設定情報ファイルで、ホスト上の設定情報ファイルを上書きします。

前提条件

2. インストールとセットアップ

- PFM - RM for Oracle がインストール済みであること。
- PFM - RM for Oracle のサービスが停止していること。

! 注意事項

PFM - RM for Oracle の設定情報をリストアする場合、バックアップを取得した環境とリストアする環境の製品バージョン番号が完全に一致している必要があります。製品バージョン番号の詳細については、リリースノートを参照してください。

2.8 Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定

Performance Management では、PFM - Web Console がインストールされているホストに、プログラムプロダクトに標準添付されているマニュアル CD-ROM からマニュアルをコピーすることで、Web ブラウザでマニュアルを参照できるようになります。なお、PFM - Web Console をクラスタ運用している場合は、実行系、待機系それぞれの物理ホストでマニュアルをコピーしてください。

2.8.1 設定手順

(1) PFM - Web Console のヘルプからマニュアルを参照する場合

1. PFM - Web Console のセットアップ手順に従い、PFM - Web Console に PFM - RM を登録する (PFM - RM の追加セットアップを行う)。
2. PFM - Web Console がインストールされているホストに、マニュアルのコピー先ディレクトリを作成する。
 - Windows の場合: PFM - Web Console のインストール先フォルダ ¥doc¥ja¥ x x x x
 - UNIX の場合: /opt/jp1pcwebcon/doc/ja/ x x x x

x x x x には、PFM - RM のヘルプ ID を指定してください。ヘルプ ID については、「付録 C 識別子一覧」を参照してください。
3. 手順 2 で作成したディレクトリの直下に、マニュアル CD-ROM から次のファイルおよびディレクトリをコピーする。

HTML マニュアルの場合

Windows の場合: CD-ROM ドライブ ¥MAN¥3020¥ 資料番号 (03004A0D など)

下の、すべての htm ファイルおよび FIGURE フォルダ

UNIX の場合: /CD-ROM のマウントポイント /MAN/3020/ 資料番号

(03004A0D など) 下の、すべての htm ファイルおよび FIGURE ディレクトリ

PDF マニュアルの場合

Windows の場合: CD-ROM ドライブ ¥MAN¥3020¥ 資料番号 (03004A0D など)

下の PDF ファイル

UNIX の場合: /CD-ROM のマウントポイント /MAN/3020/ 資料番号

(03004A0D など) 下の PDF ファイル

コピーの際、HTML マニュアルの場合は index.htm ファイルが、PDF マニュアルの場合は PDF ファイル自身が、作成したディレクトリ直下に配置されるようにしてください。マニュアルファイルのコピー方法については、マニュアル CD-ROM の readme.txt を参照してください。

2. インストールとセットアップ

4. PFM - Web Console を再起動する。

(2) お使いのマシンのハードディスクから参照する場合

CD-ROM の setup.exe を使ってインストールするか、または直接 htm ファイル、PDF ファイル、および GIF ファイルを任意のディレクトリにコピーしてください。HTML マニュアルの場合、次のディレクトリ構成になるようにしてください。

html (htmファイルおよびPDFファイルを格納)
FIGURE (GIFファイルを格納)

2.8.2 参照手順

マニュアルの参照手順を次に示します。

1. PFM - Web Console の [メイン] 画面のメニューバーフレームにある [ヘルプ] メニューをクリックし、[ヘルプ選択] 画面を表示する。
2. マニュアル名またはマニュアル名の後ろの [PDF] をクリックする。
マニュアル名をクリックすると HTML 形式のマニュアルが表示されます。[PDF] をクリックすると PDF 形式のマニュアルが表示されます。

Web ブラウザでの文字の表示に関する注意事項

Windows の場合、[スタート] メニューからオンラインマニュアルを表示させると、すでに表示されている Web ブラウザの画面上に HTML マニュアルが表示されることがあります。

また、Internet Explorer 5 を使用している場合、文字が不正に表示されることがあります。この場合、次のように設定してください。

- [表示] - [エンコード] の [自動選択] のチェックを外す。
- [表示] - [エンコード] の日本語で [日本語 (シフト JIS)] を選択する。

2.9 コマンドプロンプトの起動方法

Windows Server 2008 の環境では、OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合、コマンドプロンプトは、次に示す 2 種類の特権モードで動作します。

- 管理者特権モードのコマンドプロンプト (管理者コンソール)
Windows のすべての操作ができるコマンドプロンプトです。
- 標準特権モードのコマンドプロンプト (標準コンソール)
ユーザー操作の権限が制限されたコマンドプロンプトです。

ユーザーアカウント制御機能 (UAC) を無効にしている場合は、常に管理者コンソールが起動されます。

Performance Management が提供しているコマンドは、必ず管理者コンソールで実行してください。

管理者ユーザーごとのコマンドプロンプトの起動方法を次の表に示します。

表 2-36 管理者ユーザーごとのコマンドプロンプトの起動方法

管理者グループ	管理者ユーザー	起動方法
Administrators	Administrator	コマンドプロンプトを起動すると、管理者コンソールが起動されます
	上記以外のユーザー	<p>UAC が有効な場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • コマンドプロンプトを起動すると、標準コンソールが起動されます。 • 管理者コンソールを起動すると、ユーザーアカウント制御のダイアログボックスが表示されます。ダイアログボックスの [続行] ボタンをクリックすると管理者コンソールが起動されます。[キャンセル] ボタンをクリックすると、コマンドプロンプトは起動されません。 <p>UAC が無効な場合</p> <ul style="list-style-type: none"> • コマンドプロンプトを起動すると、管理者コンソールが起動されます。

管理者コンソールは、OS が用意している管理者コンソールと、PFM - Base が提供している管理者コンソールがあります。それぞれの起動方法を次に説明します。

(1) OS が用意している管理者コンソールの起動方法

[スタート] メニューから [プログラム] - [アクセサリ] - [コマンドプロンプト] を右クリックし、[管理者として実行] を選択します。

起動されたコマンドプロンプトが管理者コンソールであるかどうかは、タイトルバーに [管理者] が表示されているどうかで判断できます。

2. インストールとセットアップ

(2) PFM - Base が提供している管理者コンソールの起動方法

[スタート]メニューから [プログラム] - [Performance Management] - [管理者コンソール] を選択します。

3

クラスタシステムでの運用

この章では、クラスタシステムで PFM - RM for Oracle を運用する場合のインストール、セットアップ、クラスタシステムで PFM - RM for Oracle を運用しているときの運用方式の変更などについて説明します。

-
- 3.1 クラスタシステムの概要

 - 3.2 フェールオーバー時の処理

 - 3.3 インストールとセットアップ (Windows の場合)

 - 3.4 インストールとセットアップ (UNIX の場合)

 - 3.5 アンインストールとアンセットアップ (Windows の場合)

 - 3.6 アンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合)

 - 3.7 PFM - RM for Oracle の運用方式の変更

 - 3.8 クラスタシステムで運用する場合の注意事項
-

3.1 クラスタシステムの概要

クラスタシステムとは、複数のサーバシステムを連携して一つのシステムとして運用するシステムです。PFM - RM for Oracle の監視対象プログラムである、Oracle Database は、次のクラスタシステムで運用できます。

- HA (High Availability) クラスタシステム構成の Oracle
- Oracle Real Application Clusters または Oracle Parallel Server

また、PFM - RM for Oracle 自体も HA クラスタシステム構成での運用に対応していません。

ここでは、クラスタシステムで PFM - RM for Oracle を運用する場合の構成について説明します。クラスタシステムの概要、および Performance Management システムをクラスタシステムで運用する場合のシステム構成については、マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

なお、この章で、単に「クラスタシステム」と記述している場合は、HA クラスタシステムのことを指します。

3.1.1 HA クラスタシステム

HA クラスタシステムで PFM - RM for Oracle を運用するためには、次の二つの方法があります。

- Oracle Database がクラスタシステムの場合に PFM - RM for Oracle を運用する
- PFM - RM for Oracle をクラスタシステムで運用する

それぞれの場合のシステム構成について説明します。

(1) HA クラスタシステムの Oracle を監視する PFM - RM for Oracle の構成

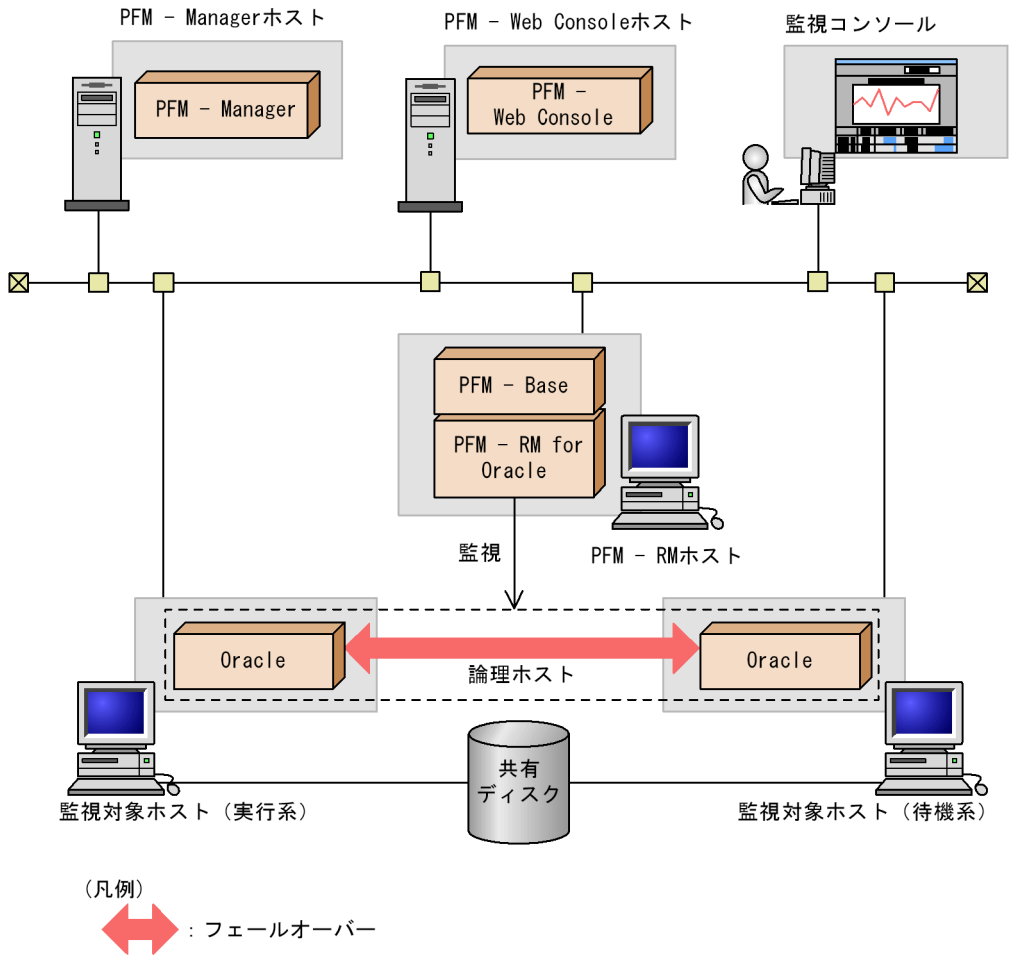
Oracle Database (シングルインスタンスの Oracle) を HA クラスタシステムで運用すると、障害発生時にフェールオーバーすることができ、可用性が向上します。

Oracle を HA クラスタシステムで運用する場合、一般的には、実行系ノードと待機系ノードの両方で同じ Oracle のインスタンスが実行できる環境を構築し、Oracle のデータ (データファイル、構成ファイル、ログファイルなど) 一式を共有ディスクに格納した構成にします。

PFM - RM for Oracle から HA クラスタシステムの Oracle を監視する場合、PFM - RM for Oracle が存在するホストから、論理ホスト名と論理 IP アドレスで、監視対象の論理ホストに接続できるようにネットワークを構成します。

PFM - RM for Oracle は、次の図のようにクラスタ構成された論理ホストの Oracle に対しては、非クラスタ構成の Oracle と同様の設定で運用できます。

図 3-1 HA クラスタシステムの Oracle を監視する PFM - RM for Oracle の構成例



なお、HA クラスタシステム上で Oracle を運用する場合、一般的にはクラスタソフトから Oracle を制御するためのソリューション製品を使用します。例えば、Windows MSCS の場合は Oracle Fail Safe を使います。UNIX のクラスタソフトの場合は、各クラスタソフトのベンダーが提供している製品を使います。

また、クラスタシステムでの Oracle の構成や運用方法は、システムによって異なる場合があります。

(2) HA クラスタシステムで PFM - RM for Oracle を運用する場合の構成

PFM - RM for Oracle を HA クラスタシステムで運用すると、障害発生時にフェールオーバーすることができ、可用性が向上します。

3. クラスタシステムでの運用

HA クラスタシステムで PFM - RM for Oracle を運用する場合の構成例を次の図に示します。

図 3-2 HA クラスタシステムでの PFM - RM for Oracle の構成例

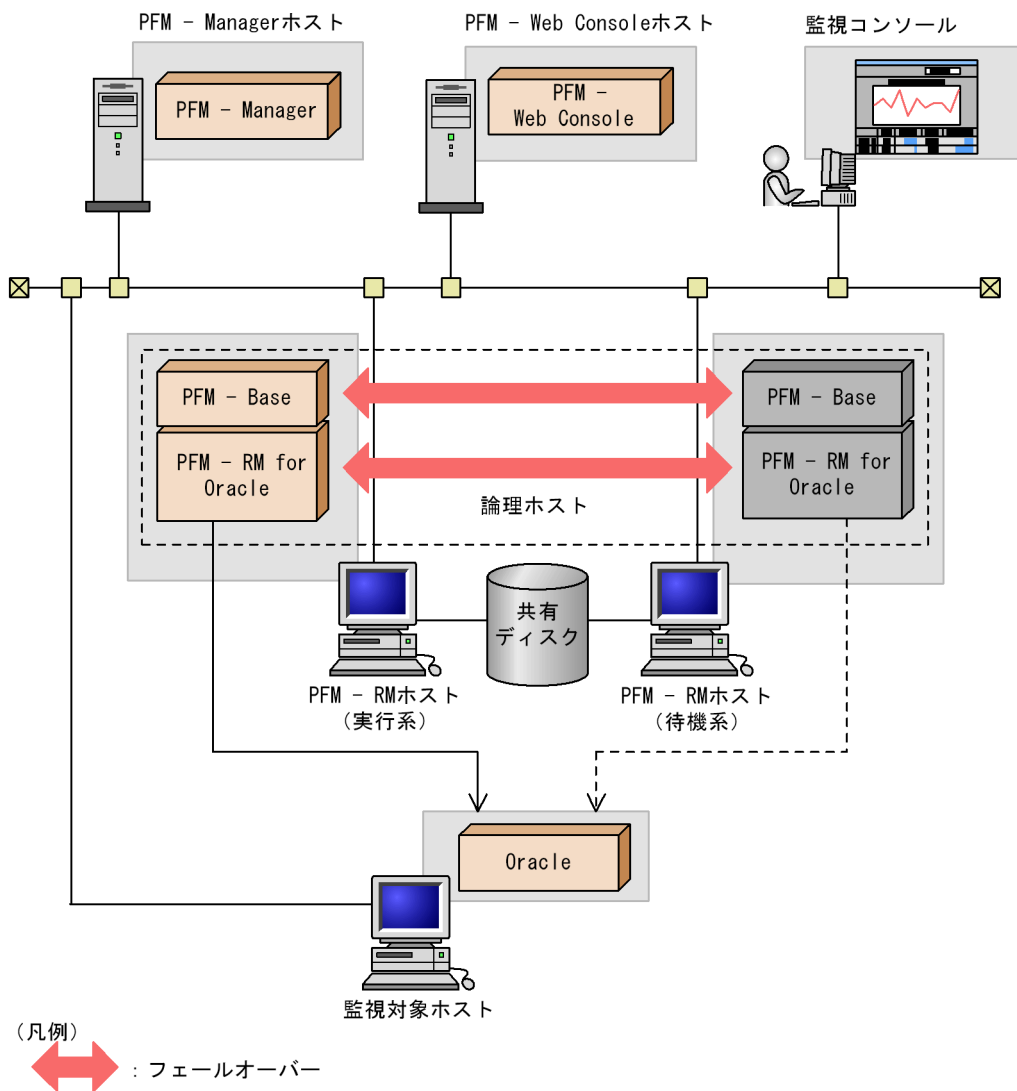


図 3-2 に示すように、PFM - RM for Oracle は論理ホスト環境で動作し、Oracle を監視します。障害発生時は Oracle のフェールオーバーに連動して PFM - RM for Oracle もフェールオーバーし、監視を継続できます。

また、共有ディスクに定義情報やパフォーマンス情報を格納し、フェールオーバー時に引き継ぎます。一つの論理ホストに複数の Performance Management のプログラムがある場合は、それぞれが同じ共有ディレクトリを使います。

監視対象の Oracle が複数ある場合、PFM - RM for Oracle を別々の論理ホスト環境に配置することで、それぞれの PFM - RM for Oracle を独立して動作させ、別々にフェールオーバーさせることができます。

3.1.2 負荷分散クラスタシステム

(1) 負荷分散クラスタシステムでの Oracle (Oracle Real Application Clusters) の構成

Oracle Real Application Clusters (または Oracle Parallel Server) は、一つのデータベースの処理を複数のノードの Oracle が連携して分散し、一つの Oracle として動作するシステムです。データは共有ディスクに格納され、すべてのノードで共有されます。

複数のノードで負荷を分散して処理することで、スケーラビリティと耐障害性が向上します。

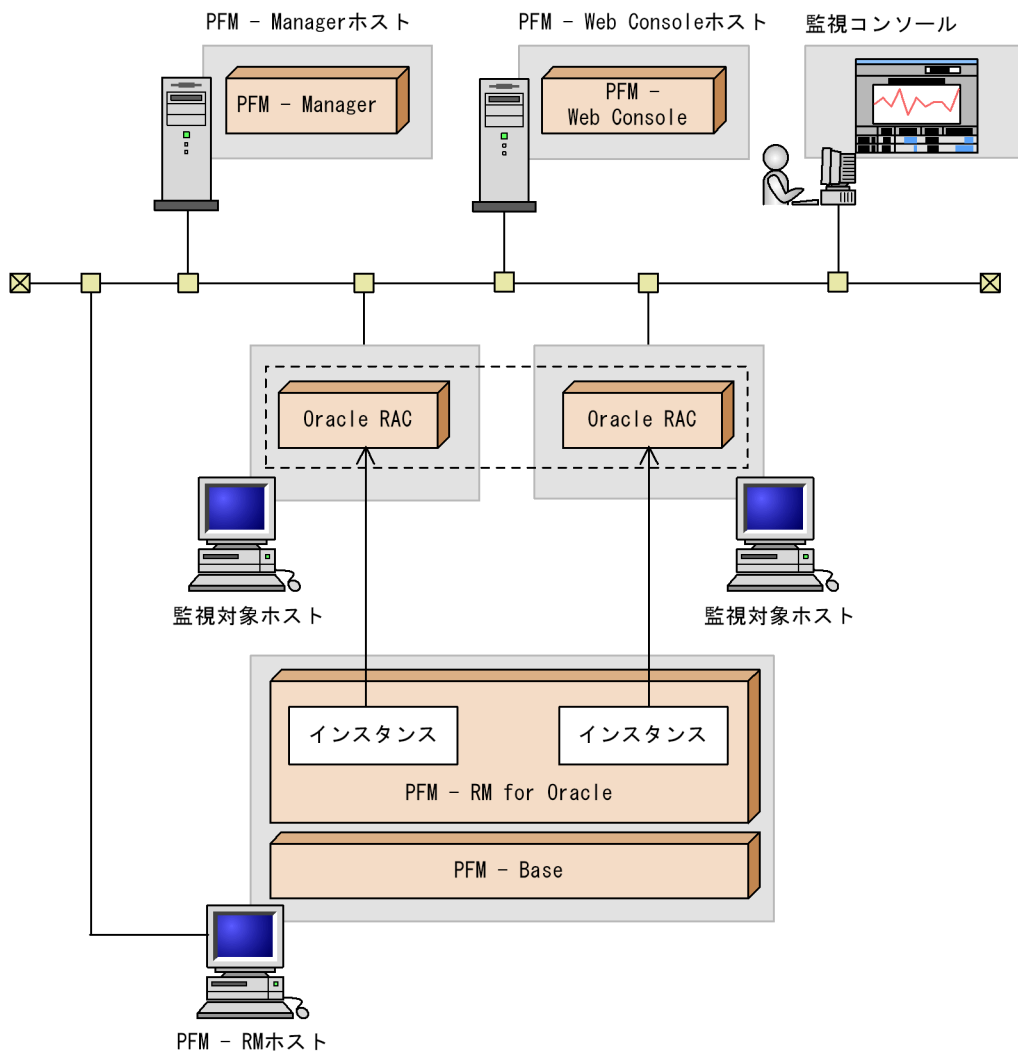
アプリケーションからは一つの Oracle として見えますが、各ノードでは固有のインスタンス名を持った Oracle が動作しています。例えば、node1 は SID=ora1、node2 は SID=ora2 の Oracle インスタンスが動作しているデータベースを、アプリケーションからは Oracle Net Services 経由でグローバル・データベース名でアクセスします。

Oracle Real Application Clusters (または Oracle Parallel Server) については、Oracle のマニュアルを参照してください。

(2) 負荷分散クラスタシステムでの PFM - RM for Oracle の構成

負荷分散クラスタシステムで PFM - RM for Oracle を運用する場合は、次の図のような構成で運用します。

図 3-3 負荷分散クラスタシステムでの PFM - RM for Oracle の構成例



各ノードでは固有のインスタンス名を持つ Oracle が動作しています。PFM - RM for Oracle は各ノードの Oracle インスタンスを監視します。

単体のノードと同様に、PFM - RM for Oracle をセットアップし、各ノードの Oracle Real Application Clusters インスタンスを監視する構成にします。この場合、クラスタソフトには登録しません。

注意

負荷分散クラスタシステムで PFM - RM for Oracle を運用し、Oracle Real Application Clusters (または Oracle Parallel Server) を監視する場合は、単体のノードが多数あるシステムと同様に運用します。通常の非クラスタシステムと同じ

ように運用してください。

3.2 フェールオーバー時の処理

実行系ホストに障害が発生すると、処理が待機系ホストに移ります。

ここでは、次に示す二つの場合の処理について説明します。

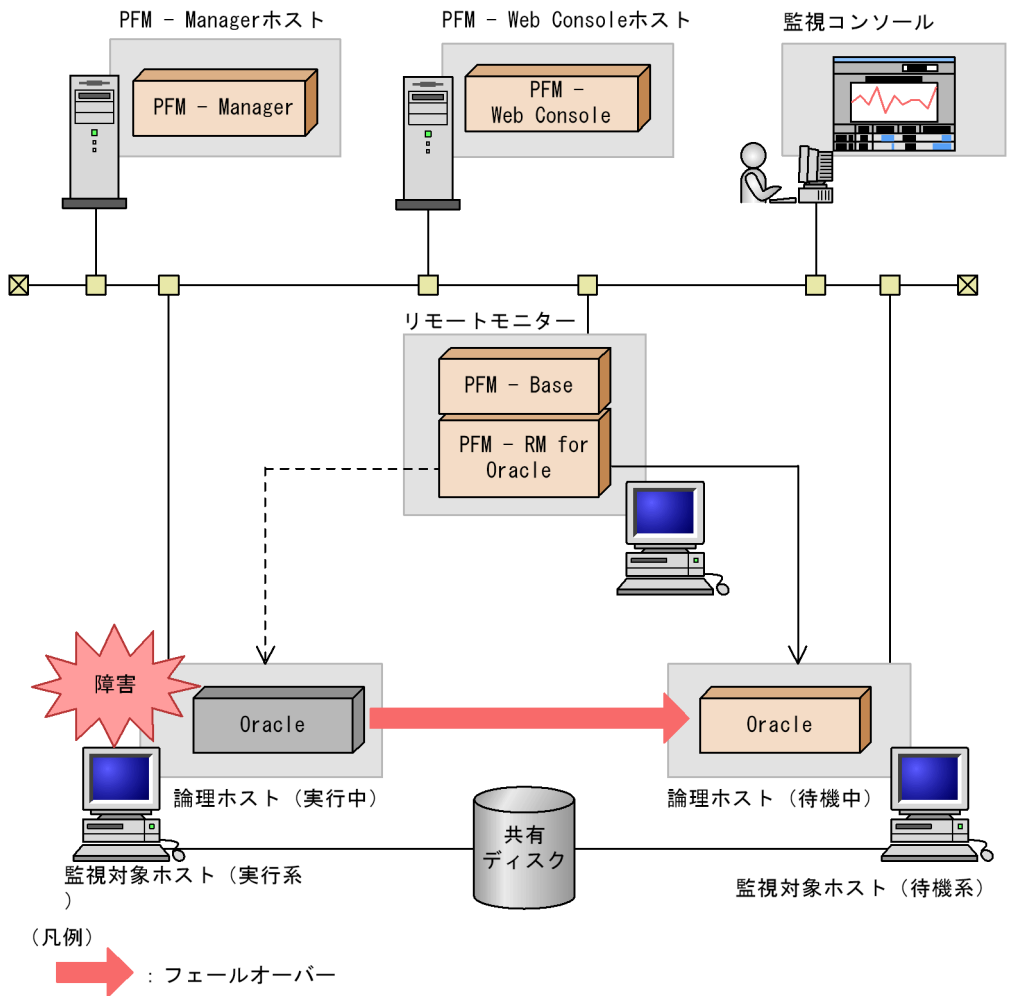
- 監視対象の Oracle に障害が発生し、フェールオーバーした場合の処理
- PFM - RM for Oracle に障害が発生し、フェールオーバーした場合の処理

また、PFM - Manager に障害が発生した場合の、PFM - RM for Oracle への影響についても説明します。

3.2.1 監視対象の Oracle がフェールオーバーした場合の処理

PFM - RM for Oracle の監視対象ホストの Oracle がフェールオーバーした場合の処理を次の図に示します。

図 3-4 PFM - RM for Oracle の監視対象ホストの Oracle がフェールオーバーした場合の処理



注意

監視対象の Oracle のフェールオーバー発生時にパフォーマンスデータの履歴収集がエラーとなる場合があります。

また、フェールオーバーの前後で収集データの値が「マイナス値」となる場合がありますが、フェールオーバー完了以降のデータに関しては、データの差分として、0以上の値となります。

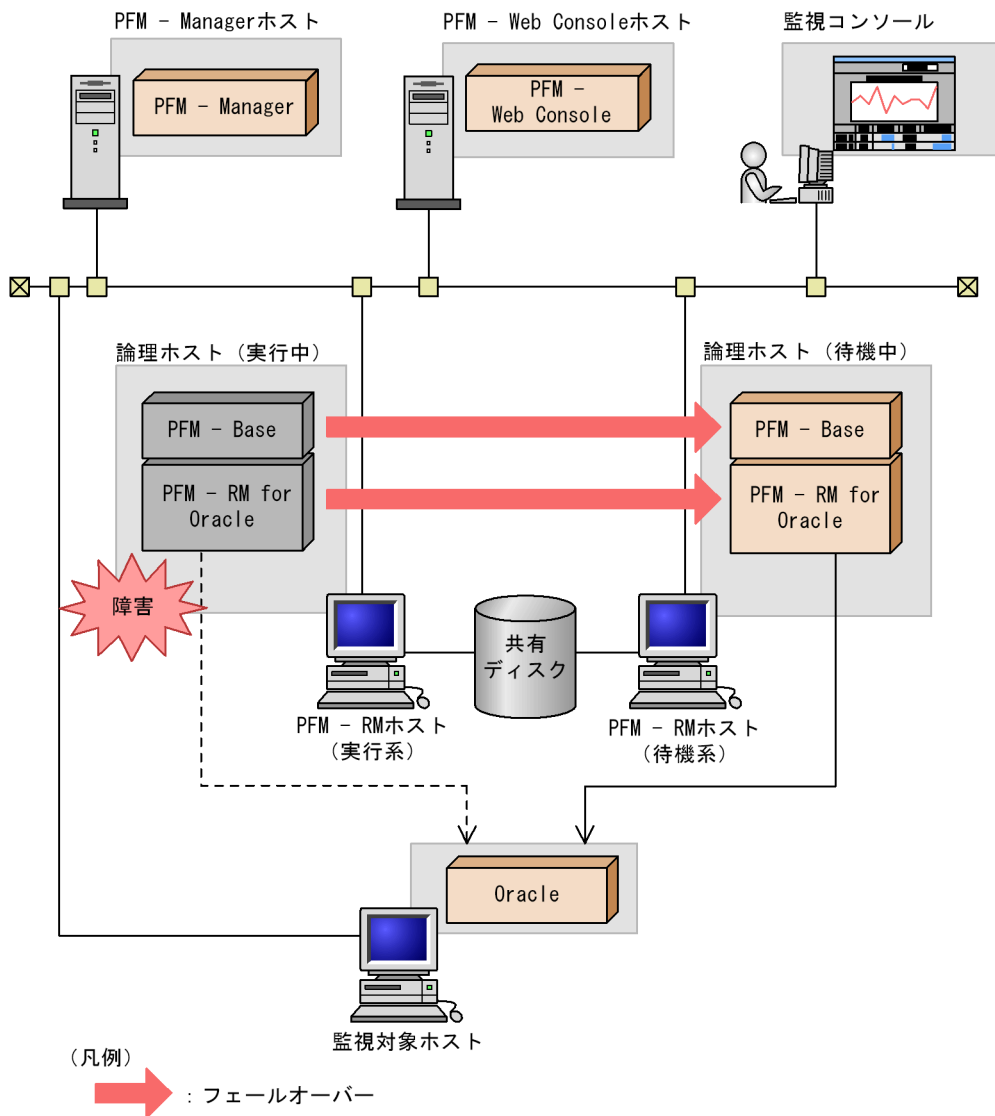
3.2.2 PFM - RM for Oracle がフェールオーバーした場合の処理

PFM - RM for Oracle のホストがフェールオーバーした場合の処理の例を次の図に示しま

3. クラスタシステムでの運用

す。

図 3-5 PFM - RM for Oracle のホストがフェールオーバーした場合の処理



PFM - RM for Oracle のフェールオーバー中に、PFM - Web Console で操作すると、「There was no answer (-6)」というメッセージが表示されます。この場合は、フェールオーバーが完了するまで待つてから操作してください。

PFM - RM for Oracle のフェールオーバー後に、PFM - Web Console で操作すると、フェールオーバー先のノードで起動した PFM - RM for Oracle に接続されます。

注意

PFM - RM for Oracle のフェールオーバー発生時、フェールオーバーの前後で収集データの値が「マイナス値」となる場合がありますが、フェールオーバー完了以降のデータに関しては、データの差分として、0以上の値となります。

3.2.3 PFM - Manager が停止した場合の影響

PFM - Manager が停止すると、Performance Management システム全体に影響があります。

PFM - Manager は、各ノードで動作している PFM - RM for Oracle のエージェント情報を一括管理しています。また、PFM - RM for Oracle がパフォーマンス監視中にしきい値を超えた場合のアラームイベントの通知や、アラームイベントを契機としたアクションの実行を制御しています。このため、PFM - Manager が停止すると、Performance Management システムに次の表に示す影響があります。

表 3-1 PFM - Manager が停止した場合の PFM - RM for Oracle への影響

プログラム名	影響	対処
PFM - RM for Oracle	<p>PFM - RM for Oracle の動作中に、PFM - Manager が停止した場合、次のように動作する。</p> <ul style="list-style-type: none"> パフォーマンスデータは継続して収集される。 発生したアラームイベントを PFM - Manager に通知できないため、アラーム定義ごとにアラームイベントが保持され、PFM - Manager が起動するまで通知をリトライする。保持しているアラームイベントが三つを超えると、古いアラームイベントは上書きされる。また、PFM - RM for Oracle を停止すると、保持しているアラームイベントは削除される。 PFM - Manager に通知済みのアラームステータスは、PFM - Manager が再起動したときに一度リセットされる。その後、PFM - Manager が PFM - RM for Oracle の状態を確認したあと、アラームステータスは最新の状態になる。 PFM - RM for Oracle を停止しようとした場合、PFM - Manager に停止することを通知できないため、停止に時間が掛かる。 	<p>PFM - Manager を起動する。</p> <p>動作中の PFM - RM for Oracle はそのまま運用できる。ただし、アラームが期待したとおり通知されない場合があるため、PFM - Manager 復旧後に、共通メッセージログに出力されているメッセージ KAVE00024-I を確認すること。</p>

PFM - Manager が停止した場合の影響を考慮の上、運用方法を検討してください。なお、トラブル以外にも、構成変更やメンテナンスの作業などで PFM - Manager の停止が必要になる場合もあります。運用への影響が少ないときに、メンテナンスをすることをお勧めします。

3.3 インストールとセットアップ (Windows の場合)

ここでは、クラスタシステムでの PFM - RM for Oracle のインストールとセットアップの手順について説明します。

監視対象の Oracle がクラスタシステム構成の場合でも、PFM - RM for Oracle を非クラスタ構成で運用するときは、通常のインストールとセットアップを実行してください。PFM - RM for Oracle が非クラスタ構成の場合のインストール方法およびセットアップ方法については、「2.1 インストールとセットアップ (Windows の場合)」を参照してください。

なお、PFM - Manager のインストールとセットアップの手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

3.3.1 インストールとセットアップの前に (Windows の場合)

インストールおよびセットアップを開始する前に前提条件、必要な情報、および注意事項について説明します。

(1) 前提条件

PFM - RM for Oracle をクラスタシステムで使用する場合、次に示す前提条件がありません。

(a) クラスタシステム

次の条件が整っていることを確認してください。

- クラスタシステムがクラスタソフトによって制御されていること。
- クラスタソフトが論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle の起動や停止などを制御するように設定されていること。

注意

- ワトソン博士でアプリケーションエラーのメッセージボックスが表示されると、フェールオーバーできないおそれがあるため、メッセージボックスによるエラーの通知を抑止する必要があります。抑止手順については、OS のマニュアルを参照してください。なお、エラーの通知を抑止すると、アプリケーションエラーが発生した際の情報取得に影響が出る場合があるため注意してください。
- Windows Server 2003 および Windows Server 2008 では、アプリケーションエラーが発生すると、Microsoft へエラーを報告するダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスが表示されるとフェールオーバーできないおそれ

があるため、エラー報告を抑止する必要があります。抑止手順については、OS のマニュアルを参照してください。

(b) 共有ディスク

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに共有ディスクがあり、実行系ノードから待機系ノードへ引き継げること。
- 共有ディスクが、各ノードに物理的に Fibre Channel や SCSI で接続されていること。Performance Management では、ネットワークドライブや、ネットワーク経由でレプリケーションしたディスクを共有ディスクとして使う構成はサポートされていません。
- フェールオーバーの際に、何らかの問題によって共有ディスクを使用中のプロセスが残った場合でも、クラスタソフトなどの制御によって強制的に共有ディスクをオフラインにしてフェールオーバーできること。
- 一つの論理ホストで複数の Performance Management の製品を運用する場合、共有ディスクのディレクトリ名が同じであること。
なお、Store データベースについては格納先を変更して、共有ディスク上のほかのディレクトリに格納できます。

(c) 論理ホスト名、論理 IP アドレス

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに論理ホスト名、および論理ホスト名と対応する論理 IP アドレスがあり、実行系ノードから待機系ノードに引き継げること。
- 論理ホスト名と論理 IP アドレスが、hosts ファイルやネームサーバに設定されていること。
- DNS 運用している場合は、FQDN 名ではなく、ドメイン名を除いたホスト名を論理ホスト名として使用していること。
- 物理ホスト名と論理ホスト名は、システムの中でユニークであること。

注意

- 論理ホスト名に、物理ホスト名 (hostname コマンドで表示されるホスト名) を指定しないでください。正常に通信処理がされなくなるおそれがあります。
- 論理ホスト名に使用できる文字は、1 ~ 32 バイトの半角英数字です。次の記号および空白文字は指定できません。
/ ¥ : ; * ? ' " < > | & = , .
- 論理ホスト名には、"localhost"、IP アドレス、"- " から始まるホスト名を指定できません。

(2) 論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle のセットアップに必要な情報

論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle をセットアップするには、通常の PFM - RM for Oracle のセットアップで必要になる環境情報に加えて、次の表の情報が必要です。

3. クラスタシステムでの運用

表 3-2 論理ホスト運用の PFM - RM for Oracle のセットアップに必要な情報

項目	例
論理ホスト名	jp1-halora
論理 IP アドレス	172.16.92.100
共有ディスク	S:¥jp1

なお、一つの論理ホストで論理ホスト運用する Performance Management のプログラムが複数ある場合も、同じ共有ディスクのディレクトリを使用します。

共有ディスクに必要な容量については、「付録 A システム見積もり」を参照してください。

(3) PFM - RM for Oracle で論理ホストをフェールオーバーさせる場合の注意事項

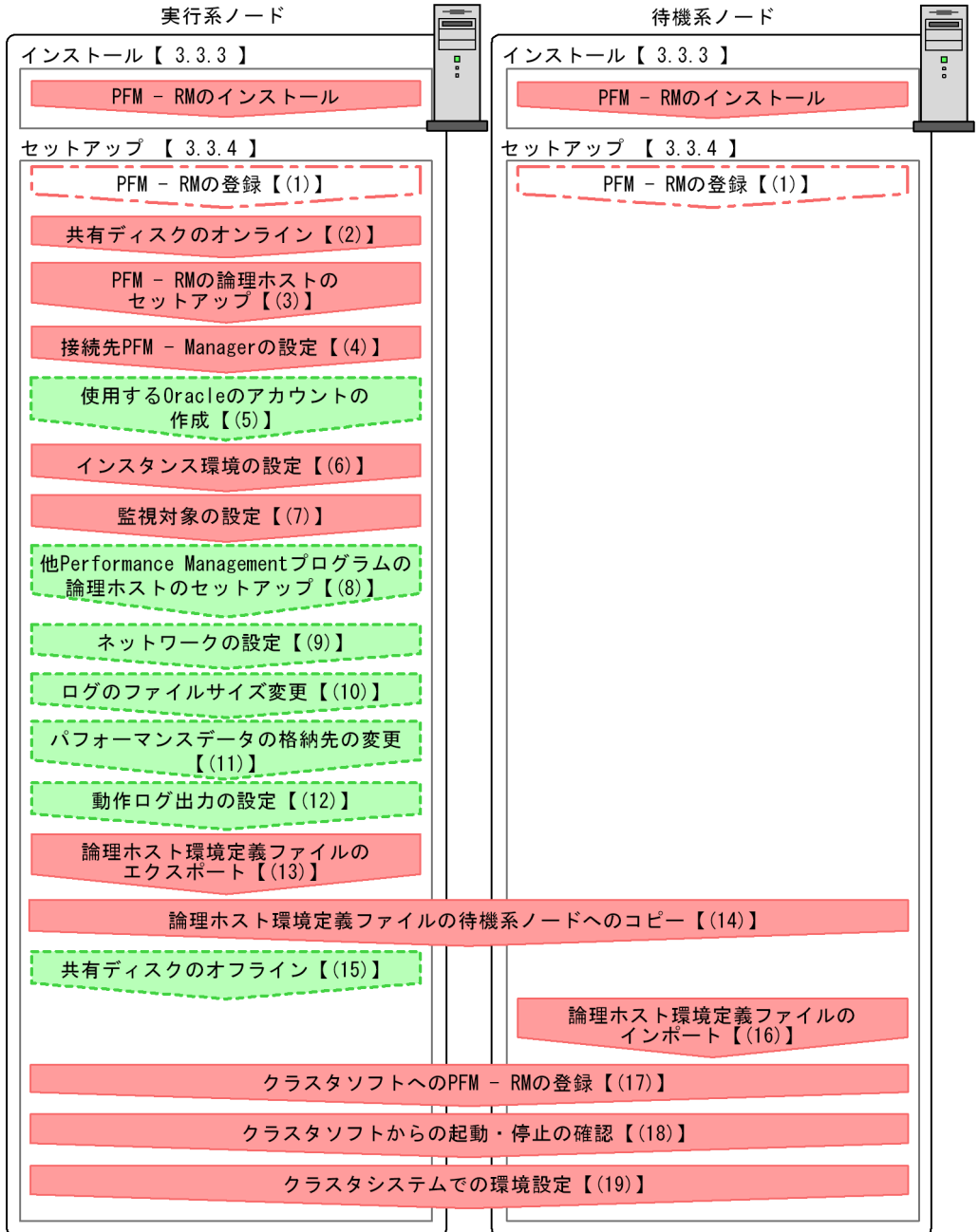
PFM - RM for Oracle を論理ホスト運用するシステム構成の場合、PFM - RM for Oracle の障害によって論理ホスト全体をフェールオーバーさせるかどうかを検討してください。

PFM - RM for Oracle の障害で論理ホスト全体をフェールオーバーさせると、同じ論理ホストで運用する業務アプリケーションもフェールオーバーすることになり、業務に影響を与えるおそれがあります。

3.3.2 インストールとセットアップの流れ (Windows の場合)

クラスタシステムで、論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle のインストールおよびセットアップの流れを次の図に示します。

図 3-6 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle のインストールおよびセットアップの流れ (Windows の場合)



- (凡例)
- : 必須セットアップ項目
 - : 場合によって必須となるセットアップ項目
 - : オプションのセットアップ項目
 - 【 】 : 参照先

3. クラスタシステムでの運用

注意

論理ホスト環境の PFM - RM をセットアップしても、物理ホスト環境の PFM - RM の定義内容は引き継がれません。論理ホスト環境および物理ホスト環境では、インスタンス環境を設定した時点で、新規に環境が作成されます。

3.3.3 インストール手順（Windows の場合）

実行系ノードおよび待機系ノードのそれぞれに PFM - RM for Oracle をインストールします。

！ 注意事項

インストール先はローカルディスクです。共有ディスクにはインストールしないでください。

インストール手順は非クラスタシステムの場合と同じです。インストール手順については、「2.1.3 インストール手順（Windows の場合）」を参照してください。

3.3.4 セットアップ手順（Windows の場合）

ここでは、クラスタシステムで Performance Management を運用するための、セットアップについて説明します。

セットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にセットアップしてください。

実行系 は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。

また、**オプション** は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

！ 注意事項

環境変数 JPC_HOSTNAME は、Performance Management で使用しています。このため、環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

(1) PFM - RM の登録 **実行系** **待機系** **オプション**

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - RM を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - RM for Oracle を登録する必要があります。

PFM - RM for Oracle を登録する必要があるのは次の場合です。

- Performance Management システムに新しく PFM - RM for Oracle を追加する場合
- すでに登録している PFM - RM for Oracle のデータモデルのバージョンを更新する場合

登録は PFM - Manager 上および PFM - Web Console 上で実施します。手順は非クラスタシステムの場合と同じです。

手順については、「2.1.4(1) PFM - RM for Oracle の登録」を参照してください。

(2) 共有ディスクのオンライン 実行系

共有ディスクがオンラインになっていることを確認します。共有ディスクがオンラインになっていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオンラインにしてください。

(3) PFM - RM の論理ホストのセットアップ 実行系

`jpccconf ha setup` コマンドを実行して論理ホスト環境を作成します。コマンドを実行すると、共有ディスクに必要なデータがコピーされ、論理ホスト用の定義が設定されて、論理ホスト環境が作成されます。

注意

コマンドを実行する前に、Performance Management システム全体で、Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management の Performance Management 起動と停止について説明している章を参照してください。

手順を次に示します。

1. `jpccconf ha setup` コマンドを実行して、PFM - RM for Oracle の論理ホスト環境を作成する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha setup -key RMOracle -lhost jp1-halora -d S:¥jp1
```

論理ホスト名は、`-lhost` オプションで指定します。ここでは、論理ホスト名を `jp1-halora` としています。DNS 運用をしている場合はドメイン名を省略した論理ホスト名を指定してください。

共有ディスクのディレクトリ名は、`-d` オプションの環境ディレクトリ名に指定します。例えば `-d S:¥jp1` と指定すると `S:¥jp1¥jp1pc` が作成されて、論理ホスト環境のファイルが作成されます。

注意

- PFM - RM for Oracle はファイルシステムで運用されています。ファイルシステムを共有ディスクに指定してください。
- 環境ディレクトリ名には、次の文字を含むパスは指定しないでください。

3. クラスタシステムでの運用

「(,「)」

これらの文字が含まれていた場合、論理ホストの環境作成には成功しますが、PFM - RM for Oracle の起動に失敗することがあります。

2. `jpccnf ha list` コマンドを実行して、論理ホストの設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccnf ha list all
```

作成した論理ホスト環境が正しいことを確認してください。

(4) 接続先 PFM - Manager の設定 実行系

`jpccnf mgrhost define` コマンドを実行して、PFM - RM for Oracle を管理する PFM - Manager を設定します。

1. `jpccnf mgrhost define` コマンドを実行して、接続先 PFM - Manager を設定する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccnf mgrhost define -host jp1-hal -lhost jp1-halora
```

接続先 PFM - Manager のホスト名は、`-host` オプションで指定します。接続先 PFM - Manager が論理ホスト運用されている場合は、`-host` オプションに接続先 PFM - Manager の論理ホスト名を指定します。ここでは、PFM - Manager の論理ホスト名を `jp1-hal` としています。

また、PFM - RM for Oracle の論理ホスト名は、`-lhost` オプションで指定します。ここでは、PFM - RM for Oracle の論理ホスト名を `jp1-halora` としています。

(5) 使用する Oracle のアカウントの作成 実行系 オプション

PFM - RM for Oracle で監視する Oracle Database のパフォーマンス情報を収集するために、特定のシステム権限を持つ Oracle のアカウントを作成します。

Oracle のアカウントの作成方法については、「2.1.4(2) PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの作成」を参照してください。

なお、`sys` アカウントを使用する場合には、このセットアップは不要です。

(6) インスタンス環境の設定 実行系

`jpccnf inst setup` コマンドを実行して、PFM - RM for Oracle のインスタンス環境を設定します。

設定手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。ただし、クラスタシステムの場合、`jpccnf inst setup` コマンドの実行時に、「`-lhost`」で論理ホスト名を指定する必要があります。

クラスタシステムの場合の `jpccnf inst setup` コマンドの指定方法を次に示します。

```
jpccconf inst setup -key RMOracle -lhost 論理ホスト名 -inst インスタンス名
```

なお、エージェントログの出力先フォルダ（log_path の値）には、共有ディスク上のパスを指定してください。

このほかの設定内容、および手順については、「2.1.4(3) インスタンス環境の設定」を参照してください。

(7) 監視対象の設定 実行系

jpccconf target setup コマンドを実行して、PFM - RM for Oracle の監視対象ホストの情報を設定します。

設定手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。ただし、クラスタシステムの場合、jpccconf target setup コマンドの実行時に、「-lhost」で論理ホスト名を指定する必要があります。

クラスタシステムの場合の jpccconf target setup コマンドの指定方法を次に示します。

```
jpccconf target setup -key RMOracle -inst インスタンス名 -target 監視対象名 -lhost 論理ホスト名
```

設定内容、および手順については、「2.1.4(3)(b) 監視対象を設定する」を参照してください。

(8) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ 実行系 オプション

PFM - RM for Oracle のほかに、同じ論理ホストにセットアップする PFM - Manager や PFM - RM がある場合は、この段階でセットアップしてください。

セットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM - RM マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(9) ネットワークの設定 実行系 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の二つの項目を設定できます。

IP アドレスを設定する

複数の LAN に接続されたネットワーク環境で Performance Management を運用する

3. クラスタシステムでの運用

ときに使用する IP アドレスを指定したい場合には、`jpchosts` ファイルの内容を直接編集します。

このとき、編集した `jpchosts` ファイルは、実行系ノードから待機系ノードにコピーしてください。

IP アドレスの設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ポート番号を設定する

ファイアウォール経由で Performance Management のプログラム間の通信をする場合には、`jpccconf port` コマンドを使用してポート番号を設定します。

ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびクラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(10) ログのファイルサイズ変更 実行系 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。共通メッセージログは、デフォルトで 2,048 キロバイトのファイルが 2 個使用されます。このファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(11) パフォーマンスデータの格納先の変更 実行系 オプション

PFM・RM で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先、エクスポート先、またはインポート先のフォルダを変更したい場合に必要な設定です。

設定方法については、「2.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更」を参照してください。

(12) 動作ログ出力の設定 実行系 オプション

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「付録 K 動作ログの出力」を参照してください。

(13) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

PFM・RM for Oracle の論理ホスト環境が作成できたら、環境定義をファイルにエクスポートします。エクスポートでは、その論理ホストにセットアップされている

Performance Management のプログラムの定義情報を一括してファイル出力します。同じ論理ホストにほかの Performance Management のプログラムをセットアップする場合は、セットアップがーとおり済んだあとにエクスポートしてください。

論理ホスト環境定義をエクスポートする手順を次に示します。

1. `jpccconf ha export` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。
 これまでの手順で作成した論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。
 例えば、`lhostexp.txt` ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha export -f lhostexp.txt
```

(14) 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系

待機系

「(13) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートした論理ホスト環境定義ファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

(15) 共有ディスクのオフライン 実行系 オプション

クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオフラインにして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、オフラインにする必要はありません。

(16) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート 待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードにインポートします。

実行系ノードで作成した論理ホストの Performance Management のプログラムを、待機系ノードで実行するための設定には、`jpccconf ha import` コマンドを使用します。一つの論理ホストに複数の Performance Management のプログラムがセットアップされている場合は、一括してインポートされます。

なお、このコマンドを実行するときには、共有ディスクをオンラインにしておく必要はありません。

1. `jpccconf ha import` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。
 次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha import -f lhostexp.txt
```

 コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストの PFM - RM for Oracle を起動するための設定が実施されます。

3. クラスタシステムでの運用

また、セットアップ時に `jpccconf ha import` コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、同様に設定されます。

2. `jpccconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list all
```

実行系ノードで `jpccconf ha list` を実行した時と同じ内容が表示されることを確認してください。

(17) クラスタソフトへの PFM - RM の登録 実行系 待機系

Performance Management のプログラムを論理ホスト環境で運用する場合は、クラスタソフトに登録して、クラスタソフトからの制御で Performance Management のプログラムを起動したり停止したりするように環境設定します。

クラスタソフトへ PFM - RM for Oracle を登録する方法は、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

PFM - RM for Oracle をクラスタソフトに登録するときの設定内容を、Windows MSCS に登録する項目を例として説明します。

PFM - RM for Oracle の場合、次の表のサービスをクラスタに登録します。

表 3-3 クラスタソフトに登録する PFM - RM for Oracle のサービス

項番	名前	サービス名	依存関係
1	PFM - RM Store for Oracle インスタンス名 [LHOST]	JP1PCAGT_1S_ インスタンス名 [LHOST]	IP アドレスリソース 物理ディスクリソース
2	PFM - RM for Oracle インスタンス名 [LHOST]	JP1PCAGT_1A_ インスタンス名 [LHOST]	項番 1 のクラスタリソース
3	PFM - Action Handler [LHOST]	JP1PCMGR_PH [LHOST]	IP アドレスリソース 物理ディスクリソース

注

共有ディスクのリソース

[LHOST] の部分は、論理ホスト名に置き換えてください。インスタンス名が SDC1、論理ホスト名が `jp1-halora` の場合、サービスの名前は「PFM - RM Store for Oracle SDC1 [jp1-halora]」、サービス名は「JP1PCAGT_1S_SDC1 [jp1-halora]」のようになります。

MSCS の場合は、これらのサービスを MSCS のリソースとして登録します。各リソースの設定は次のようにします。下記の [] は、MSCS の設定項目です。

- [リソースの種類] は「汎用サービス」として登録する。
- [名前],[依存関係], および [サービス名] を表 3-3 のとおりに設定する。
なお、名前はサービスを表示するときの名称で、サービス名は MSCS から制御するサービスを指定するときの名称です。
- [起動パラメータ] および [レジストリ複製] は設定しない。
- プロパティの [詳細設定] タブは、Performance Management のプログラムの障害時にフェールオーバーするかしないかの運用に合わせて設定する。
例えば、PFM - RM for Oracle の障害時に、フェールオーバーするように設定するには、次のように設定します。
[再開する]: チェックする
[グループに適用する]: チェックする
再起動試行回数の [しきい値]: 3

注

再起動試行回数の [しきい値] は 3 回を目安に設定してください。

注意

クラスタに登録するサービスは、クラスタから起動および停止を制御しますので、OS 起動時に自動起動しないよう [スタートアップの種類] を [手動] に設定してください。なお、jpcconf ha setup コマンドでセットアップした直後のサービスは [手動] に設定されています。また、次のコマンドで強制停止しないでください。
jpcspm stop all -lhost 論理ホスト名 -kill immediate

(18) クラスタソフトからの起動・停止の確認 実行系 待機系

クラスタソフトからの操作で、Performance Management のプログラムの起動および停止を各ノードで実行し、正常に動作することを確認してください。

(19) クラスタシステムでの環境設定 実行系 待機系

Performance Management のプログラムのセットアップ終了後、PFM - Web Console から、運用に合わせて監視対象の稼働状況についてのレポートを表示できるようにしたり、監視対象で問題が発生したときにユーザーに通知できるようにしたりするために、Performance Management のプログラムの環境を設定します。

Performance Management のプログラムの環境設定方法については、マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

3.4 インストールとセットアップ (UNIX の場合)

ここでは、クラスタシステムでの PFM - RM for Oracle のインストールとセットアップの手順について説明します。

監視対象の Oracle がクラスタシステム構成の場合でも、PFM - RM for Oracle を非クラスタ構成で運用するときは、通常のインストールとセットアップを実行してください。PFM - RM for Oracle が非クラスタ構成の場合のインストール方法およびセットアップ方法については、「2.2 インストールとセットアップ (UNIX の場合)」を参照してください。

なお、PFM - Manager のインストールとセットアップの手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

3.4.1 インストールとセットアップの前に (UNIX の場合)

インストールおよびセットアップを開始する前に前提条件、必要な情報、および注意事項について説明します。

(1) 前提条件

PFM - RM for Oracle をクラスタシステムで使用する場合、次に示す前提条件がありません。

(a) クラスタシステム

次の条件が整っていることを確認してください。

- クラスタシステムがクラスタソフトによって制御されていること。
- クラスタソフトが論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle の起動や停止などを制御するように設定されていること。

(b) 共有ディスク

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに共有ディスクがあり、実行系ノードから待機系ノードへ引き継げること。
- 共有ディスクが、各ノードに物理的に Fibre Channel や SCSI で接続されていること。Performance Management では、ネットワークドライブや、ネットワーク経由でレプリケーションしたディスクを共有ディスクとして使う構成はサポートされていません。
- フェールオーバーの際に、何らかの問題によって共有ディスクを使用中のプロセスが残った場合でも、クラスタソフトなどの制御によって強制的に共有ディスクをアンマウントしてフェールオーバーできること。

- 一つの論理ホストで複数の Performance Management 製品を運用する場合、共有ディスクのディレクトリ名が同じであること。
なお、Store データベースについては格納先を変更して、共有ディスク上のほかのディレクトリに格納できます。

(c) 論理ホスト名、論理 IP アドレス

次の条件が整っていることを確認してください。

- 論理ホストごとに論理ホスト名、および論理ホスト名に対応する論理 IP アドレスがあり、実行系ノードから待機系ノードに引き継げること。
- 論理ホスト名と論理 IP アドレスが、`hosts` ファイルやネームサーバに設定されていること。
- DNS 運用している場合は、FQDN 名ではなく、ドメイン名を除いたホスト名を論理ホスト名として使用していること。
- 物理ホスト名と論理ホスト名は、システムの中でユニークであること。

注意

- 論理ホスト名に、物理ホスト名 (`uname -n` コマンドで表示されるホスト名) を指定しないでください。正常に通信処理がされなくなる可能性があります。
- 論理ホスト名に使用できる文字は、1 ~ 32 バイトの半角英数字です。次の記号および空白文字は指定できません。
/ ¥ : ; * ? ' " < > | & = , .
- 論理ホスト名には、"localhost", IP アドレス, "-" から始まるホスト名を指定できません。

(2) 論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle のセットアップに必要な情報

論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle をセットアップするには、通常の PFM - RM for Oracle のセットアップで必要になる環境情報に加えて、次の表の情報が必要です。

表 3-4 論理ホスト運用の PFM - RM for Oracle のセットアップに必要な情報

項目	例
論理ホスト名	jp1-halora
論理 IP アドレス	172.16.92.100
共有ディスク	/jp1

なお、一つの論理ホストで論理ホスト運用する Performance Management のプログラムが複数ある場合も、同じ共有ディスクのディレクトリを使用します。

共有ディスクに必要な容量については、「付録 A システム見積もり」を参照してください。

3. クラスタシステムでの運用

(3) PFM - RM for Oracle で論理ホストをフェールオーバーさせる場合の 注意事項

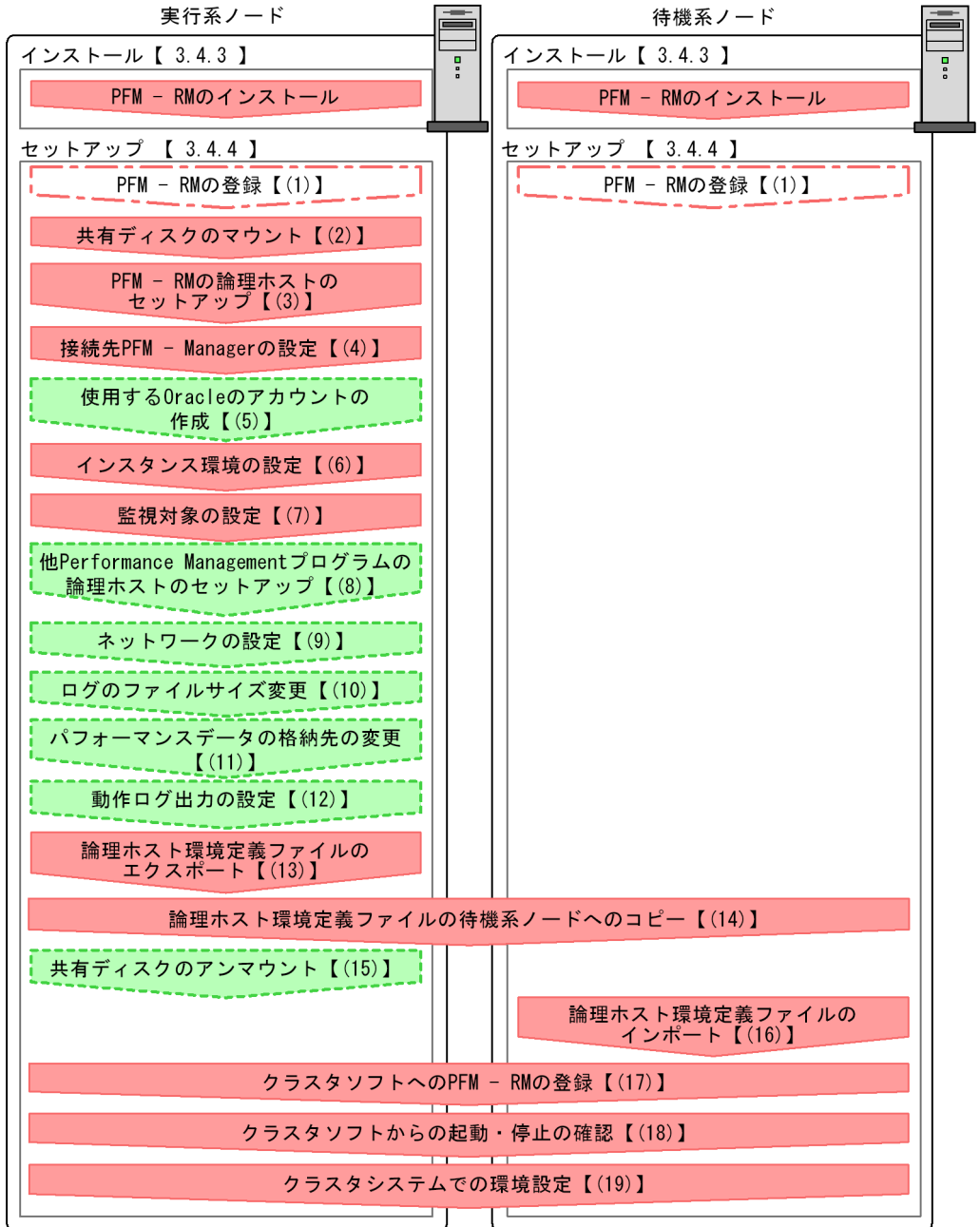
PFM - RM for Oracle を論理ホスト運用するシステム構成の場合、PFM - RM for Oracle の障害によって論理ホスト全体をフェールオーバーさせるかどうかを検討してください。

PFM - RM for Oracle の障害で論理ホスト全体をフェールオーバーさせると、同じ論理ホストで運用する業務アプリケーションもフェールオーバーすることになり、業務に影響を与えるおそれがあります。

3.4.2 インストールとセットアップの流れ (UNIX の場合)

クラスタシステムで、論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle のインストールおよびセットアップの流れを次の図に示します。

図 3-7 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle のインストールおよびセットアップの流れ (UNIX の場合)



- (凡例)
- : 必須セットアップ項目
 - : 場合によって必須となるセットアップ項目
 - : オプションのセットアップ項目
 - 【 】 : 参照先

3. クラスタシステムでの運用

注意

論理ホスト環境の PFM - RM をセットアップしても、物理ホスト環境の PFM - RM の定義内容は引き継がれません。論理ホスト環境および物理ホスト環境では、インスタンス環境を設定した時点で、新規に環境が作成されます。

3.4.3 インストール手順（UNIX の場合）

実行系ノードおよび待機系ノードに PFM - RM for Oracle をインストールします。

！ 注意事項

インストール先はローカルディスクです。共有ディスクにはインストールしないでください。

インストール手順は非クラスタシステムの場合と同じです。インストール手順については、「2.2.3 インストール手順（UNIX の場合）」を参照してください。

3.4.4 セットアップ手順（UNIX の場合）

ここでは、クラスタシステムで Performance Management を運用するための、セットアップについて説明します。

セットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にセットアップしてください。

実行系 は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。

また、**オプション** は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

！ 注意事項

環境変数 JPC_HOSTNAME は、Performance Management で使用しています。このため、環境変数として設定しないでください。設定した場合は、Performance Management が正しく動作しません。

(1) PFM - RM の登録 **実行系** **待機系** **オプション**

PFM - Manager および PFM - Web Console を使って PFM - RM を一元管理するために、PFM - Manager および PFM - Web Console に PFM - RM for Oracle を登録する必要があります。

PFM - RM for Oracle を登録する必要があるのは次の場合です。

- Performance Management システムに新しく PFM - RM for Oracle を追加する場合

- すでに登録している PFM - RM for Oracle のデータモデルのバージョンを更新する場合

登録は PFM - Manager 上および PFM - Web Console 上で実施します。手順は非クラスタシステムの場合と同じです。

手順については、「2.2.4(2) PFM - RM for Oracle の登録」を参照してください。

(2) 共有ディスクのマウント 実行系

共有ディスクがマウントされていることを確認します。共有ディスクがマウントされていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをマウントしてください。

(3) PFM - RM の論理ホストのセットアップ 実行系

`jpccconf ha setup` コマンドを実行して論理ホスト環境を作成します。コマンドを実行すると、共有ディスクに必要なデータがコピーされ、論理ホスト用の定義を設定されて、論理ホスト環境が作成されます。

注意

コマンドを実行する前に、Performance Management システム全体で、Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の Performance Management を運用するための操作について説明している章を参照してください。

手順を次に示します。

1. `jpccconf ha setup` コマンドを実行して、PFM - RM for Oracle の論理ホスト環境を作成する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha setup -key RMOracle -lhost jp1-halora -d /jp1
```

論理ホスト名は、`-lhost` オプションで指定します。ここでは、論理ホスト名を `jp1-halora` としています。DNS 運用をしている場合はドメイン名を省略した論理ホスト名を指定してください。

共有ディスクのディレクトリ名は、`-d` オプションの環境ディレクトリ名に指定します。例えば `-d /jp1` と指定すると `/jp1/jp1pc` が作成されて、論理ホスト環境のファイルが作成されます。

注意

PFM - RM for Oracle はファイルシステムで運用されています。ファイルシステムを共有ディスクに指定してください。

2. `jpccconf ha list` コマンドを実行して、論理ホストの設定を確認する。
次のようにコマンドを実行します。

3. クラスタシステムでの運用

```
jpccnf ha list all
```

作成した論理ホスト環境が正しいことを確認してください。

(4) 接続先 PFM - Manager の設定 実行系

jpccnf mgrhost define コマンドを実行して、PFM - RM for Oracle を管理する PFM - Manager を設定します。

1. jpccnf mgrhost define コマンドを実行して、接続先 PFM - Manager を設定する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccnf mgrhost define -host jp1-hal -lhost jp1-halora
```

接続先 PFM - Manager のホスト名は、-host オプションで指定します。接続先 PFM - Manager が論理ホスト運用されている場合は、-host オプションに接続先 PFM - Manager の論理ホスト名を指定します。ここでは、PFM - Manager の論理ホスト名を jp1-hal としています。

また、PFM - RM for Oracle の論理ホスト名は、-lhost オプションで指定します。ここでは、PFM - RM for Oracle の論理ホスト名を jp1-halora としています。

(5) 使用する Oracle のアカウントの作成 実行系 オプション

PFM - RM for Oracle で Oracle Database を監視し、パフォーマンス情報を収集するために、特定のシステム権限を持つ Oracle のアカウントを作成します。

Oracle のアカウントの作成方法については、「2.2.4(3) PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの作成」を参照してください。

なお、sys アカウントを使用する場合には、このセットアップは不要です。

(6) インスタンス環境の設定 実行系

jpccnf inst setup コマンドを実行して、PFM - RM for Oracle のインスタンス環境を設定します。

設定手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。ただし、クラスタシステムの場合、jpccnf inst setup コマンドの実行時に、「-lhost」で論理ホスト名を指定する必要があります。

クラスタシステムの場合の jpccnf inst setup コマンドの指定方法を次に示します。

```
jpccnf inst setup -key RMOracle -lhost 論理ホスト名 -inst インスタンス名
```

なお、エージェントログの出力先フォルダ (log_path の値) には、共有ディスク上のパスを指定してください。

このほかの設定内容、および手順については、「2.2.4(4) インスタンス環境の設定」を参照してください。

(7) 監視対象の設定 実行系

`jpccconf target setup` コマンドを実行して、PFM・RM for Oracle の監視対象ホストの情報を設定します。

設定手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。ただし、クラスタシステムの場合、`jpccconf target setup` コマンドの実行時に、「-lhost」で論理ホスト名を指定する必要があります。

クラスタシステムの場合の `jpccconf target setup` コマンドの指定方法を次に示します。

```
jpccconf target setup -key RMOracle -inst インスタンス名 -target 監視対象名 -lhost
論理ホスト名
```

設定内容、および手順については、「2.2.4(4)(b) 監視対象を設定する」を参照してください。

(8) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ 実行系 オプション

PFM・RM for Oracle のほかに、同じ論理ホストにセットアップする PFM・Manager や PFM・RM がある場合は、この段階でセットアップしてください。

セットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM・RM マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(9) ネットワークの設定 実行系 オプション

Performance Management を使用するネットワーク構成に応じて、変更する場合にだけ必要な設定です。

ネットワークの設定では次の二つの項目を設定できます。

IP アドレスを設定する

複数の LAN に接続されたネットワーク環境で Performance Management を運用するとき使用する IP アドレスを指定したい場合には、`jpchosts` ファイルの内容を直接編集します。

このとき、編集した `jpchosts` ファイルは、実行系ノードから待機系ノードにコピーしてください。

3. クラスタシステムでの運用

IP アドレスの設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

ポート番号を設定する

ファイアウォール経由で Performance Management のプログラム間の通信をする場合には、`jpccconf port` コマンドを使用してポート番号を設定します。

ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびクラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(10) ログのファイルサイズ変更 実行系 オプション

Performance Management の稼働状況を、Performance Management 独自のログファイルに出力します。このログファイルを「共通メッセージログ」と呼びます。共通メッセージログは、デフォルトで 2,048 キロバイトのファイルが 2 個使用されます。このファイルサイズを変更したい場合に必要な設定です。

詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(11) パフォーマンスデータの格納先の変更 実行系 オプション

PFM・RM で管理されるパフォーマンスデータを格納するデータベースの保存先、バックアップ先、エクスポート先、またはインポート先のディレクトリを変更したい場合に必要な設定です。

設定方法については、「2.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更」を参照してください。

(12) 動作ログ出力の設定 実行系 オプション

アラーム発生時に動作ログを出力したい場合に必要な設定です。動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

設定方法については、「付録 K 動作ログの出力」を参照してください。

(13) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

PFM・RM for Oracle の論理ホスト環境が作成できたら、環境定義をファイルにエクスポートします。エクスポートでは、その論理ホストにセットアップされている Performance Management のプログラムの定義情報を一括してファイル出力します。同じ論理ホストにほかの Performance Management のプログラムをセットアップする場合は、セットアップがとおり済んだあとにエクスポートしてください。

論理ホスト環境定義をエクスポートする手順を次に示します。

1. `jpccconf ha export` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。
 これまでの手順で作成した論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。
 例えば、`lhostexp.txt` ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha export -f lhostexp.txt
```

(14) 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系

待機系

「(13) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートした論理ホスト環境定義ファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

(15) 共有ディスクのアンマウント 実行系 オプション

ファイルシステムをアンマウントして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、ファイルシステムをアンマウントする必要はありません。

注意

共有ディスクがアンマウントされていても、指定した環境ディレクトリに `jp1pc` ディレクトリがあり、`jp1pc` ディレクトリ以下にファイルがある場合は、共有ディスクをマウントしないでセットアップしています。この場合は次の手順で対処してください。

1. ローカルディスク上の指定した環境ディレクトリにある `jp1pc` ディレクトリを `tar` コマンドでアーカイブする。
2. 共有ディスクをマウントする。
3. 共有ディスク上に指定した環境ディレクトリがない場合は、環境ディレクトリを作成する。
4. 共有ディスク上の環境ディレクトリに `tar` ファイルを展開する。
5. 共有ディスクをアンマウントする。
6. ローカルディスク上の指定した環境ディレクトリにある `jp1pc` ディレクトリ以下を削除する。

(16) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート 待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードにインポートします。

実行系ノードで作成した論理ホストの Performance Management のプログラムを、待機系ノードで実行するための設定には、`jpccconf ha import` コマンドを使用します。一つの論理ホストに複数の Performance Management のプログラムがセットアップされている場合は、一括してインポートされます。

3. クラスタシステムでの運用

なお、このコマンドを実行するときには、共有ディスクをマウントしておく必要はありません。

1. `jpccnf ha import` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。次のようにコマンドを実行します。

```
jpccnf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストの PFM - RM for Oracle を起動するための設定が実施されます。

また、セットアップ時に `jpccnf port` コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、同様に設定されます。

2. `jpccnf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccnf ha list all
```

実行系ノードで `jpccnf ha list` を実行した時と同じ内容が表示されることを確認してください。

(17) クラスタソフトへの PFM - RM の登録 実行系 待機系

Performance Management のプログラムを論理ホスト環境で運用する場合は、クラスタソフトに登録して、クラスタソフトからの制御で Performance Management のプログラムを起動したり停止したりするように環境設定します。

ここでは、PFM - RM for Oracle をクラスタソフトに登録するときに設定する内容を説明します。

一般に UNIX のクラスタソフトに、アプリケーションを登録する場合に必要な項目は「起動」「停止」「動作監視」「強制停止」の四つがあります。

PFM - RM for Oracle での設定方法を次の表に示します。

表 3-5 クラスタソフトに登録する PFM - RM for Oracle の制御方法

項目	説明
起動	次のコマンドを順に実行して、PFM - RM for Oracle を起動する。 <code>/opt/jplpc/tools/jpcspm start -key AH -lhost 論理ホスト名</code> <code>/opt/jplpc/tools/jpcspm start -key RMOracle -lhost 論理ホスト名 -inst インスタンス名</code> 起動するタイミングは、共有ディスクおよび論理 IP アドレスが使用できる状態になったあととする。

項目	説明
停止	<p>次のコマンドを順に実行して、PFM - RM for Oracle を停止する。</p> <pre data-bbox="591 278 1245 369">/opt/jplpc/tools/jpcspm stop -key RMOracler -lhost 論理ホスト名 /opt/jplpc/tools/jpcspm stop -key AH -lhost 論理ホスト名</pre> <p>停止するタイミングは、共有ディスクおよび論理 IP アドレスを使用できない状態にする前とする。</p> <p>なお、障害などでサービスが停止しているときは、jpcspm stop コマンドの戻り値が 3 になる。この場合はサービスが停止されているので、正常終了と扱う。戻り値で実行結果を判定するクラスタソフトの場合は、戻り値を 0 にするなどに対応すること。</p>
動作監視	<p>次のプロセスが動作していることを、ps コマンドで確認する。</p> <pre data-bbox="591 608 1236 653">ps -ef grep "プロセス名 論理ホスト名" grep -v "grep 監視対象のプロセス"</pre> <p>監視対象のプロセスは、次のとおり。</p> <pre data-bbox="591 701 913 724">jpcagt1, agt1/jpcsto, jpcah</pre> <p>プロセス名については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の 9 章およびマニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照のこと。</p> <p>なお、運用中にメンテナンスなどで Performance Management を一時的に停止する場合を想定して、動作監視を抑止する方法（例えば、メンテナンス中のファイルがあると監視をしないなど）を用意しておくことを勧める。</p>
強制停止	<p>強制停止が必要な場合は、次のコマンドを実行する。</p> <pre data-bbox="591 989 1236 1033">/opt/jplpc/tools/jpcspm stop all -lhost 論理ホスト名 -kill immediate</pre> <p>第一引数のサービスキーに指定できるのは、all だけである。</p> <p>注意</p> <p>コマンドを実行すると、指定した論理ホスト環境すべての Performance Management のプロセスが、SIGKILL 送信によって強制停止される。このとき、サービス単位ではなく、論理ホスト単位で Performance Management が強制停止される。</p> <p>なお、強制停止は、通常の停止を実行しても停止できない場合に限って実行するよう設定すること。</p>

注意

- クラスタに登録する Performance Management のプログラムは、クラスタから起動および停止を制御しますので、OS 起動時の自動起動設定をしないでください。
- Performance Management のプログラムを日本語環境で実行する場合、クラスタソフトに登録するスクリプトで LANG 環境変数を設定してから、Performance Management のコマンドを実行するようにしてください。
- クラスタソフトがコマンドの戻り値で実行結果を判定する場合は、Performance Management のコマンドの戻り値をクラスタソフトの期待する値に変換するように設定してください。Performance Management のコマンドの戻り値については、各コマンドのリファレンスを確認してください。
- ps コマンドで動作を監視する場合、事前に ps コマンドを実行して、論理ホスト

3. クラスタシステムでの運用

名とインスタンス名をつなげた文字列がすべて表示されることを確認してください。文字列が途中までしか表示されない場合は、インスタンス名を短くしてください。

- Oracle を起動してから、PFM - RM for Oracle を起動してください。また、停止する場合は、PFM - RM for Oracle を停止してから、Oracle を停止してください。

(18) クラスタソフトからの起動・停止の確認 実行系 待機系

クラスタソフトからの操作で、Performance Management のプログラムの起動および停止を各ノードで実行し、正常に動作することを確認してください。

(19) クラスタシステムでの環境設定 実行系 待機系

Performance Management のプログラムのセットアップ終了後、PFM - Web Console から、運用に合わせて監視対象の稼働状況についてのレポートを表示できるようにしたり、監視対象で問題が発生したときにユーザーに通知できるようにしたりするために、Performance Management のプログラムの環境を設定します。

Performance Management のプログラムの環境設定方法については、マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

3.5 アンインストールとアンセットアップ (Windows の場合)

ここでは、クラスタシステムで運用していた PFM - RM for Oracle を、アンインストールする方法とアンセットアップする方法について説明します。

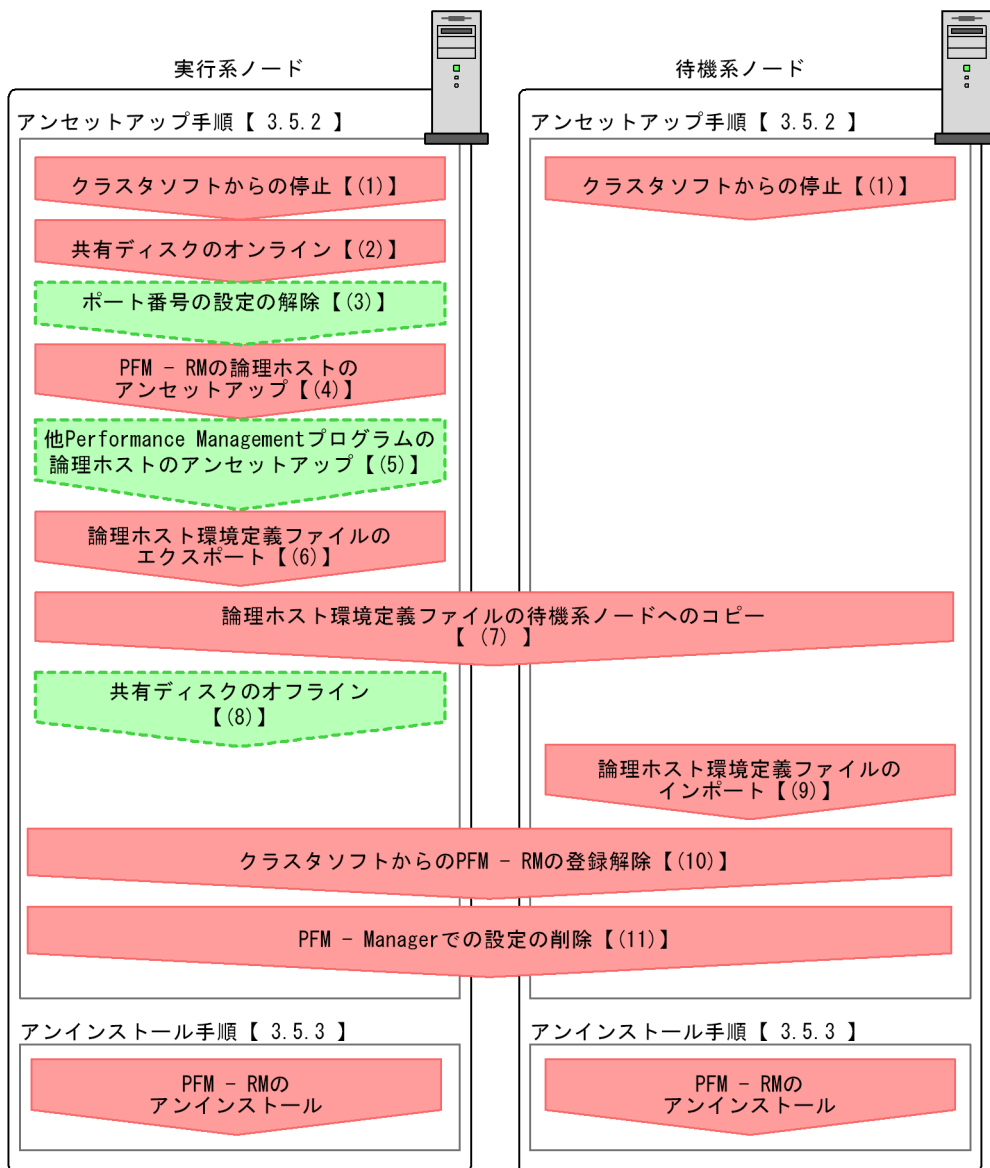
なお、PFM - Manager のアンインストールとアンセットアップについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

3.5.1 PFM - RM for Oracle のアンインストールとアンセットアップの流れ (Windows の場合)


クラスタシステムで運用していた PFM - RM for Oracle のアンインストールおよびアンセットアップの流れを次の図に示します。


3. クラスタシステムでの運用

図 3-8 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle のアンインストールおよびアンセットアップの流れ (Windows の場合)



(凡例)

 : 必須項目

 : オプション項目

【 】 : 参照先

3.5.2 アンセットアップ手順 (Windows の場合)

論理ホスト環境をアンセットアップします。アンセットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にアンセットアップしてください。

実行系 は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。

また、**オプション** は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

PFM - RM for Oracle のアンセットアップ手順について説明します。

(1) クラスタソフトからの停止 **実行系** **待機系**

クラスタソフトからの操作で、実行系ノードと待機系ノードで起動している Performance Management のプログラムおよびサービスを停止してください。停止する方法については、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

(2) 共有ディスクのオンライン **実行系**

共有ディスクがオンラインになっていることを確認します。共有ディスクがオンラインになっていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオンラインにしてください。

(3) ポート番号の設定の解除 **実行系** **オプション**

この手順は、ファイアウォールを使用する環境で、セットアップ時に `jpccconf port` コマンドでポート番号を設定した場合だけに必要な手順です。

ポート番号の解除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびクラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

(4) PFM - RM の論理ホストのアンセットアップ **実行系**

手順を次に示します。

注意

共有ディスクがオフラインになっている状態で論理ホスト環境を削除した場合は、物理ホスト上に存在する論理ホストの設定だけが削除され、共有ディスク上のディレクトリやファイルは削除されません。この場合、共有ディスクをオンラインにし、環境ディレクトリ以下の `jp1pc` ディレクトリを手動で削除する必要があります。

1. `jpccconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list all -lhost jp1-halora
```

3. クラスタシステムでの運用

論理ホスト環境をアンセットアップする前に、現在の設定を確認します。論理ホスト名や共有ディスクのパスなどを確認してください。

2. `jpccconf target unsetup` コマンドを実行して、監視対象ホストの情報を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf target unsetup -key RMOracle -inst SDC1 -target 監視対象名  
-lhost jp1-halrmp
```

`jpccconf target unsetup` コマンドを実行すると、論理ホストの監視対象ホストは監視対象外となります。

3. PFM - RM for Oracle のインスタンス環境を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf inst unsetup -key RMOracle -lhost jp1-halora -inst SDC1
```

`jpccconf inst unsetup` コマンドを実行すると、論理ホストのインスタンスを起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上のインスタンス用のファイルが削除されます。

4. `jpccconf ha unsetup` コマンドを実行して、PFM - RM for Oracle の論理ホスト環境を削除する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha unsetup -key RMOracle -lhost jp1-halora
```

`jpccconf ha unsetup` コマンドを実行すると、論理ホストの PFM - RM for Oracle を起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上の論理ホスト用のファイルが削除されます。

5. `jpccconf ha list` コマンドで、論理ホスト設定を確認する。

次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list all
```

論理ホスト環境から PFM - RM for Oracle が削除されていることを確認してください。

6. Oracle Database からオブジェクトを削除する。

PFM - RM for Oracle が Oracle を監視する時に必要なオブジェクト（監視用のプロシージャや作業用のテーブル）を Oracle から削除します。このオブジェクトは、PFM - RM for Oracle が提供している削除用の SQL スクリプトを実行して削除します。Oracle Database からのオブジェクトの削除方法については、「2.3.2(1)(c) Oracle Database へ登録したオブジェクトを削除する」を参照してください。

7. Oracle の初期化パラメーターを元に戻す。

PFM - RM for Oracle のレコード収集のために、Oracle の初期化パラメーター「TIMED_STATISTICS」の値を変更している場合は、必要に応じて元に戻してください

8. Oracle のアカウントおよび Oracle のアカウントが使用していた表領域を削除する。

PFM - RM for Oracle で使用しなくなった Oracle のアカウントを削除します。
 また、Oracle のアカウントを削除したことによって、そのアカウントが使用していた表領域が必要なくなった場合、その表領域を削除します。
 Oracle のアカウントの削除方法については、「2.3.2(2) PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの削除」を参照してください。

(5) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのアンセットアップ 実行系 オプション

PFM - RM for Oracle のほかに、同じ論理ホストからアンセットアップする Performance Management プログラムがある場合は、この段階でアンセットアップしてください。

アンセットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM - RM マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

論理ホストの PFM - RM for Oracle を削除したら、環境定義をファイルにエクスポートします。

Performance Management では、環境定義のエクスポートおよびインポートによって実行系と待機系の環境を合わせる方式を採っています。

実行系ノードでエクスポートした環境定義（Performance Management の定義が削除されている）を、待機系ノードにインポートすると、待機系ノードの既存の環境定義（Performance Management の定義が削除前のままの状態）と比較して差分（実行系ノードで削除された部分）を確認して Performance Management の環境定義を削除します。

手順を次に示します。

1. `jpccconf ha export` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。

Performance Management の論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

例えば、`lhostexp.txt` ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha export -f lhostexp.txt
```

(7) 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系

待機系

「(6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートしたファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

(8) 共有ディスクのオフライン 実行系 オプション

クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをオフラインにして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、オフラインにする必要はありません。

(9) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート 待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードに反映させるためにインポートします。なお、待機系ノードでは、インポート時に共有ディスクをオフラインにする必要はありません。

手順を次に示します。

1. `jpccconf ha import` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストの PFM - RM for Oracle を起動するための設定が削除されます。ほかの論理ホストの Performance Management のプログラムをアンセットアップしている場合は、それらの設定も削除されます。

また、セットアップ時に `jpccconf port` コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、解除されます。

2. `jpccconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list all
```

実行系ノードで `jpccconf ha list` コマンドを実行したときと同じ内容が表示されることを確認してください。

(10) クラスタソフトからの PFM - RM の登録解除 実行系 待機系

クラスタソフトから、論理ホストの PFM - RM for Oracle に関する設定を削除してください。

設定を削除する方法は、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

(11) PFM - Manager での設定の削除 実行系 待機系

PFM - Web Console で PFM - Manager にログインし、アンセットアップする PFM - RM for Oracle に関連する定義を削除してください。

手順を次に示します。

1. PFM - Web Console から、エージェントを削除する。
2. PFM - Manager のエージェント情報を削除する。
例えば、PFM - Manager が論理ホスト jp1-hal 上で動作し、PFM - RM for Oracle が論理ホスト jp1-halora 上で動作している場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpctool service delete -id サービスID -host jp1-halora -lhost
jp1-hal
```

サービス ID には削除するエージェントのサービス ID を指定してください。

3. PFM - Manager サービスを再起動する。
サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
4. PFM - Web Console を再起動する。
サービス情報の削除を PFM - Web Console で有効にするには、PFM - Manager サービスを再起動したあと、PFM - Web Console を再起動する必要があります。

3.5.3 アンインストール手順 (Windows の場合)

PFM - RM for Oracle を実行系ノード、待機系ノードそれぞれからアンインストールします。

アンインストール手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。詳細は、「2.3.3 アンインストール手順 (Windows の場合)」を参照してください。

注意

- PFM - RM for Oracle をアンインストールする場合は、PFM - RM for Oracle をアンインストールするノードの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。
- 論理ホスト環境を削除しないで PFM - RM for Oracle をアンインストールした場合、環境ディレクトリが残ることがあります。その場合は、環境ディレクトリを削除してください。

3.6 アンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合)

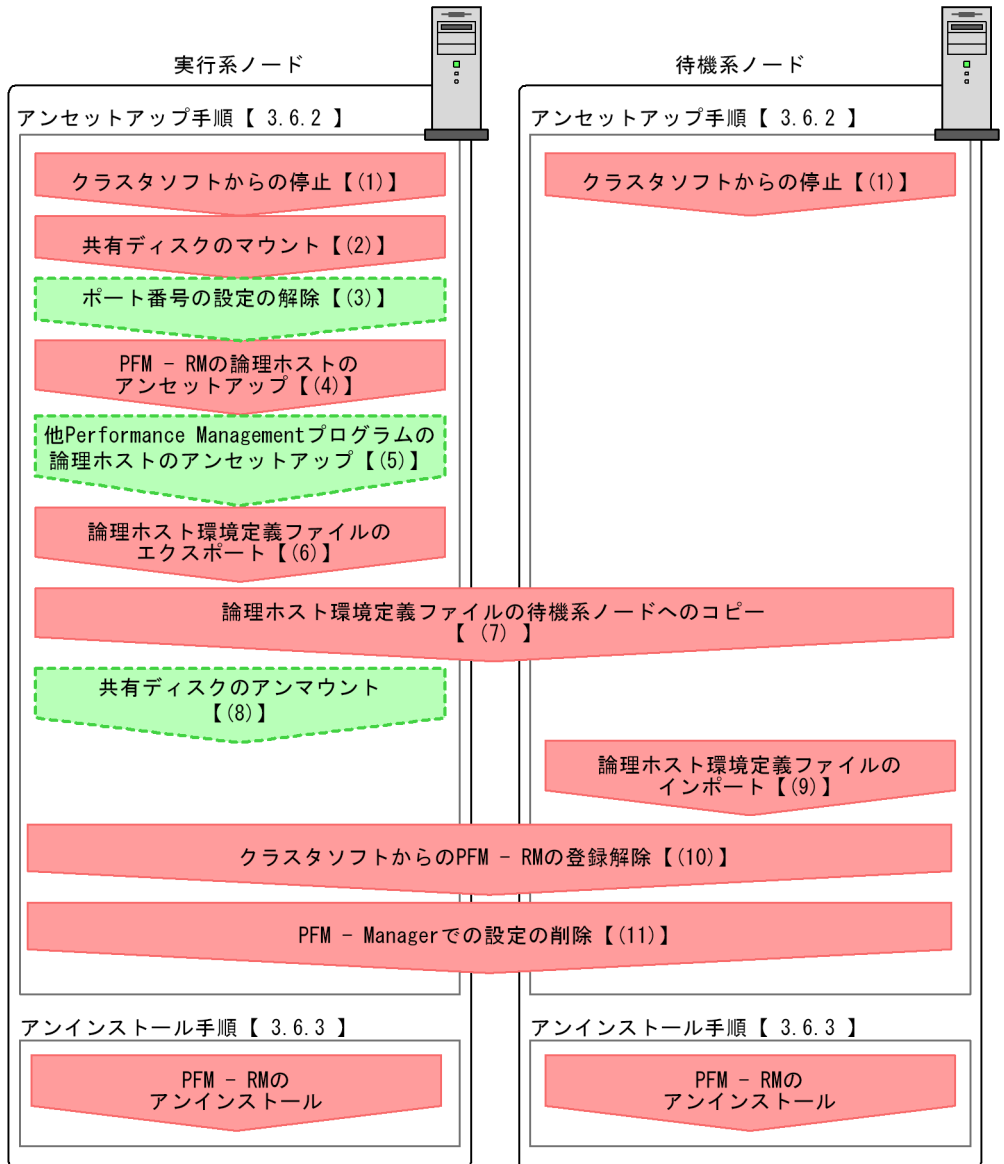
ここでは、クラスタシステムで運用していた PFM - RM for Oracle を、アンインストールする方法とアンセットアップする方法について説明します。

なお、PFM - Manager のアンインストールとアンセットアップについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章を参照してください。

3.6.1 アンインストールとアンセットアップの流れ (UNIX の場合)

クラスタシステムで運用していた PFM - RM for Oracle のアンインストールおよびアンセットアップの流れを次の図に示します。

図 3-9 クラスタシステムで論理ホスト運用する PFM - RM for Oracle のアンインストールおよびアンセットアップの流れ (UNIX の場合)



(凡例)

: 必須項目

: オプション項目

【 】 : 参照先

3.6.2 アンセットアップ手順（UNIX の場合）

論理ホスト環境をアンセットアップします。アンセットアップ手順には、実行系ノードの手順と、待機系ノードの手順があります。実行系ノード、待機系ノードの順にアンセットアップしてください。

実行系 は実行系ノードで行う項目を、**待機系** は待機系ノードで行う項目を示します。

また、**オプション** は使用する環境によって必要になるセットアップ項目、またはデフォルトの設定を変更する場合のオプションのセットアップ項目を示します。

PFM - RM for Oracle のアンセットアップ手順について説明します。

（1）クラスタソフトからの停止 **実行系** **待機系**

クラスタソフトからの操作で、実行系ノードと待機系ノードで起動している Performance Management のプログラムおよびサービスを停止してください。停止する方法については、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

（2）共有ディスクのマウント **実行系**

共有ディスクがマウントされていることを確認します。共有ディスクがマウントされていない場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをマウントしてください。

注意

共有ディスクがアンマウントされていても、アンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリに `jp1pc` ディレクトリがあり、`jp1pc` ディレクトリ以下にファイルがある場合は、共有ディスクをマウントしないでセットアップしています。この場合は次の手順で対処してください。

1. ローカルディスク上のアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリにある `jp1pc` ディレクトリを `tar` コマンドでアーカイブする。
2. 共有ディスクをマウントする。
3. 共有ディスク上にアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリがない場合は、環境ディレクトリを作成する。
4. 共有ディスク上のアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリに `tar` ファイルを展開する。
5. 共有ディスクをアンマウントする。
6. ローカルディスク上のアンセットアップする論理ホストの環境ディレクトリにある `jp1pc` ディレクトリ以下を削除する。

（3）ポート番号の設定の解除 **実行系** **オプション**

この手順は、ファイアウォールを使用する環境で、セットアップ時に `jpccconf port` コマンドでポート番号を設定した場合だけに必要な手順です。

ポート番号の解除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章、およびクラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(4) PFM - RM の論理ホストのアンセットアップ 実行系

手順を次に示します。

注意

共有ディスクがマウントされていない状態で論理ホスト環境を削除した場合は、物理ホスト上に存在する論理ホストの設定が削除され、共有ディスク上のディレクトリやファイルは削除されません。この場合、共有ディスクをマウントして、環境ディレクトリ以下の `jp1pc` ディレクトリを手動で削除する必要があります。

1. `jpccconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha list all -lhost jp1-halora
```


論理ホスト環境をアンセットアップする前に、現在の設定を確認します。論理ホスト名や共有ディスクのパスなどを確認してください。
2. `jpccconf target unsetup` コマンドを実行して、監視対象ホストの情報を削除する。
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf target unsetup -key RMOracle -inst SDC1 -target 監視対象名 -lhost jp1-halrmp
```


`jpccconf target unsetup` コマンドを実行すると、論理ホストの監視対象ホストは監視対象外となります。
3. PFM - RM for Oracle のインスタンス環境を削除する。
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf target unsetup -key RMOracle -lhost jp1-halora -inst SDC1
```


`jpccconf target unsetup` コマンドを実行すると、論理ホストのインスタンスを起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上のインスタンス用のファイルが削除されます。
4. `jpccconf ha unsetup` コマンドを実行して、PFM - RM for Oracle の論理ホスト環境を削除する。
次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha unsetup -key RMOracle -lhost jp1-halora
```


`jpccconf ha unsetup` コマンドを実行すると、論理ホストの PFM - RM for Oracle を起動するための設定が削除されます。また、共有ディスク上の論理ホスト用のファイルが削除されます。
5. `jpccconf ha list` コマンドで、論理ホスト設定を確認する。
次のようにコマンドを実行します。

3. クラスタシステムでの運用

```
jpccconf ha list all
```

論理ホスト環境から PFM・RM for Oracle が削除されていることを確認してください。

6. Oracle Database からオブジェクトを削除する。

PFM・RM for Oracle が Oracle を監視する時に必要なオブジェクト（監視用のプロシージャや作業用のテーブル）を Oracle から削除します。このオブジェクトは、PFM・RM for Oracle が提供している削除用の SQL スクリプトを実行して削除します。Oracle Database からのオブジェクトの削除方法については、「2.4.2(1)(c) Oracle Database へ登録したオブジェクトを削除する」を参照してください。

7. Oracle の初期化パラメーターを元に戻す。

PFM・RM for Oracle のレコード収集のために、Oracle の初期化パラメーター「TIMED_STATISTICS」の値を変更している場合は、必要に応じて元に戻してください。

8. Oracle のアカウントおよび Oracle のアカウントが使用していた表領域を削除する。

PFM・RM for Oracle で使用しなくなった Oracle のアカウントを削除します。また、Oracle のアカウントを削除したことによって、そのアカウントが使用していた表領域が必要なくなった場合、その表領域を削除します。Oracle のアカウントの削除方法については、「2.4.2(2) PFM・RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントの削除」を参照してください。

(5) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのアンセットアップ 実行系 オプション

PFM・RM for Oracle のほかに、同じ論理ホストからアンセットアップする PFM・RM がある場合は、この段階でアンセットアップしてください。

アンセットアップ手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの構築と運用について説明している章、または各 PFM・RM マニュアルの、クラスタシステムでの運用について説明している章を参照してください。

(6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート 実行系

論理ホストの PFM・RM for Oracle を削除したら、環境定義をファイルにエクスポートします。

Performance Management では、環境定義のエクスポートおよびインポートによって実行系と待機系の環境を合わせる方式を採っています。

実行系ノードでエクスポートした環境定義（Performance Management の定義が削除されている）を、待機系ノードにインポートすると、待機系ノードの既存の環境定義（Performance Management の定義が削除前のままの状態）と比較

して差分（実行系ノードで削除された部分）を確認して Performance Management の環境定義を削除します。

手順を次に示します。

1. `jpccconf ha export` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をエクスポートする。

Performance Management の論理ホスト環境の定義情報を、エクスポートファイルに出力します。エクスポートファイル名は任意です。

例えば、`lhostexp.txt` ファイルに論理ホスト環境定義をエクスポートする場合、次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha export -f lhostexp.txt
```

(7) 論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノードへのコピー 実行系

待機系

「(6) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」でエクスポートしたファイルを、実行系ノードから待機系ノードにコピーします。

(8) 共有ディスクのアンマウント 実行系 オプション

ファイルシステムをアンマウントして、作業を終了します。なお、その共有ディスクを続けて使用する場合は、ファイルシステムをアンマウントする必要はありません。

(9) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート 待機系

実行系ノードからコピーしたエクスポートファイルを、待機系ノードに反映させるためにインポートします。なお、待機系ノードでは、インポート時に共有ディスクをアンマウントする必要はありません。

手順を次に示します。

1. `jpccconf ha import` コマンドを実行して、論理ホスト環境定義をインポートする。次のようにコマンドを実行します。

```
jpccconf ha import -f lhostexp.txt
```

コマンドを実行すると、待機系ノードの環境を、エクスポートファイルの内容と同じ環境になるように設定変更します。これによって、論理ホストの PFM・RM for Oracle を起動するための設定が削除されます。ほかの論理ホストの Performance Management のプログラムをアンセットアップしている場合は、それらの設定も削除されます。

また、セットアップ時に `jpccconf port` コマンドで固定のポート番号を設定している場合も、解除されます。

2. `jpccconf ha list` コマンドを実行して、論理ホスト設定を確認する。次のようにコマンドを実行します。

3. クラスタシステムでの運用

```
jpccconf ha list all
```

実行系ノードで `jpccconf ha list` コマンドを実行したときと同じ内容が表示されることを確認してください。

(10) クラスタソフトからの PFM - RM の登録解除 実行系 待機系

クラスタソフトから、論理ホストの PFM - RM for Oracle に関する設定を削除してください。

設定を削除する方法は、クラスタソフトのマニュアルを参照してください。

(11) PFM - Manager での設定の削除 実行系 待機系

PFM - Web Console で PFM - Manager にログインし、アンセットアップする PFM - RM for Oracle に関連する定義を削除してください。

手順を次に示します。

1. PFM - Web Console から、エージェントを削除する。

2. PFM - Manager のエージェント情報を削除する。

例えば、PFM - Manager が論理ホスト `jp1-hal` 上で動作し、PFM - RM for Oracle が論理ホスト `jp1-halora` 上で動作している場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpctool service delete -id サービスID -host jp1-halora -lhost  
jp1-hal
```

サービス ID には削除するエージェントのサービス ID を指定してください。

3. PFM - Manager サービスを再起動する。

サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

4. PFM - Web Console を再起動する。

サービス情報の削除を PFM - Web Console で有効にするには、PFM - Manager サービスを再起動したあと、PFM - Web Console を再起動する必要があります。

3.6.3 アンインストール手順 (UNIX の場合)

PFM - RM for Oracle を実行系ノード、待機系ノードそれぞれからアンインストールします。

アンインストール手順は、非クラスタシステムの場合と同じです。詳細は、「2.4.3 アンインストール手順 (UNIX の場合)」を参照してください。

注意

- PFM - RM for Oracle をアンインストールする場合は、PFM - RM for Oracle をアンインストールするノードの Performance Management のプログラムおよびサービスをすべて停止してください。
- 論理ホスト環境を削除しないで PFM - RM for Oracle をアンインストールした場合、環境ディレクトリが残ることがあります。その場合は、環境ディレクトリを削除してください。

3.7 PFM - RM for Oracle の運用方式の変更

クラスタシステムの場合の、PFM - RM for Oracle の運用方式の変更方法について説明します。

3.7.1 監視対象の更新の設定

クラスタシステムで監視対象を更新したい場合は、論理ホスト名、インスタンス名、および監視対象名を確認し、監視対象を更新します。監視対象の設定は、実行系ノードの PFM - RM ホストで実施します。

更新する情報については、「2.6.2 監視対象の更新の設定」を参照してあらかじめ確認してください。

論理ホスト名、およびインスタンス名を確認するには `jpccconf ha list` コマンドを、監視対象名を確認するには `jpccconf target list` コマンドを使用します。

また、監視対象名を更新するには、`jpccconf target setup` コマンドを使用します。

監視対象を更新する手順を次に示します。複数の監視対象を更新する場合は、この手順を繰り返し実施します。

1. 監視対象名を確認する。

PFM - RM for Oracle を示すサービスキー、およびインスタンス名を指定して、

`jpccconf target list` コマンドを実行します。

```
jpccconf target list -key RMOracle -inst インスタンス名 -lhost 論理ホスト名
```

Targets:

targethost1

targethost2

Groups:

All

2. PFM - RM for Oracle を示すサービスキー、インスタンス名、および監視対象名を指定して、`jpccconf target setup` コマンドを実行する。

監視対象名が `targethost1` の監視対象を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf target setup -key RMOracle -inst インスタンス名 -target targethost1
```

3. PFM - RM for Oracle の監視対象を更新する。

表 2-28 に示した項目を、コマンドの指示に従って入力します。現在設定されている値が表示されます。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押ししてください。すべての入力が終了すると、監視対象が更新されます。

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

3.7.2 インスタンス環境の更新の設定

クラスタシステムでインスタンス環境を更新したい場合は、論理ホスト名とインスタンス名を確認し、インスタンス情報を更新します。インスタンス情報の設定は、実行系ノードの PFM - RM ホストで実施します。

更新する情報については、あらかじめ次の個所を参照して確認してください。

- Windows の場合 : 「2.6.3(1) Windows の場合」
- UNIX の場合 : 「2.6.3(2) UNIX の場合」

Oracle のインスタンス情報の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

インスタンス名を確認するには、`jpccconf ha list` コマンドを使用します。また、インスタンス環境を更新するには、`jpccconf inst setup` コマンドを使用します。

インスタンス環境を更新する手順を次に示します。複数のインスタンス環境を更新する場合は、この手順を繰り返し実施します。

1. 論理ホスト名とインスタンス名を確認する。

更新したいインスタンス環境で動作している PFM - RM for Oracle を示すサービスキーを指定して、`jpccconf ha list` コマンドを実行します。

```
jpccconf ha list -key RMOracl
```

例えば、設定されている論理ホスト名が `jp1_Ora`、インスタンス名が `Ora1` の場合、次のように表示されます。

Logical Host Name	Key	Environment Directory	Instance Name
jp1_Ora	RMOracl	論理ホストのパス	Ora1

2. 更新したいインスタンス環境の PFM - RM for Oracle のサービスが起動されている場合は、クラスタソフトからサービスを停止する。

サービスの停止方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

3. 手順 2 で共有ディスクがアンマウントされる場合は、クラスタソフトからの操作やボリュームマネージャの操作などで、共有ディスクをマウントする。

4. 更新したいインスタンス環境の PFM - RM for Oracle を示すサービスキーおよびインスタンス名を指定して、`jpccconf inst setup` コマンドを実行する。

例えば、PFM - RM for Oracle の論理ホスト名が `jp1_Ora`、インスタンス名が `Ora1` のインスタンス環境を更新する場合、次のように指定してコマンドを実行します。

```
jpccconf inst setup -key RMOracl -lhost jp1_Ora -inst Ora1
```

5. Oracle のインスタンス情報を更新する。

Windows の場合は、表 2-29、UNIX の場合は、表 2-31 に示した項目を、コマンドの

3. クラスタシステムでの運用

指示に従って入力します。現在設定されている値が表示されます(ただし、`oracle_passwd`の値は表示されません)。表示された値を変更しない場合は、リターンキーだけを押してください。すべての入力が終了すると、インスタンス環境が更新されます。

6. クラスタソフトから、更新したインスタンス環境のサービスを再起動する。
サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、クラスタシステムでの Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

注意

ユーザーを変更する場合は、次の手順で行ってください。

1. 変更前のユーザーが作成していたオブジェクトを削除する。
2. 変更後のユーザーで、新しくオブジェクトを登録する。

なお、ユーザーを変更しても、パフォーマンスデータは削除されません。

オブジェクトの削除方法については、それぞれ次の個所を参照してください。

Windows の場合：「2.3.2(1)(c) Oracle Database へ登録したオブジェクトを削除する」

UNIX の場合：「2.4.2(1)(c) Oracle Database へ登録したオブジェクトを削除する」

また、オブジェクトの登録方法については、それぞれ次の個所を参照してください。

Windows の場合：「2.1.4(3)(c) Oracle Database へオブジェクトを登録する」

UNIX の場合：「2.2.4(4)(c) Oracle Database へオブジェクトを登録する」

コマンドについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

3.8 クラスタシステムで運用する場合の注意事項

ここでは、PFM・RM for Oracle をクラスタシステムで運用する場合の注意事項について説明します。

3.8.1 収集するパフォーマンスデータ中のホスト名について

PFM・RM for Oracle が収集するパフォーマンスデータには、ホスト名に関するフィールドが含まれているレコードがあります。論理ホスト運用の PFM・RM for Oracle の場合、次の表に示すレコードのフィールドに格納されるのは、物理ホスト名になります。

レコード名	フィールド名	格納されるホスト名	説明
Instance (PD_PDI)	Host	物理ホスト名	接続しているインスタンスが起動しているホスト名。

3.8.2 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポート

論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポートは、次のどれかの操作を実行した場合だけ実施します。

- 論理ホストのセットアップ、またはインスタンス環境の設定時に、論理ホスト上のノード構成を変更した。
PFM・RM の論理ホストのセットアップ方法については、次の個所を参照してください。
 - Windows の場合：「3.3.4(3) PFM・RM の論理ホストのセットアップ」
 - UNIX の場合：「3.4.4(3) PFM・RM の論理ホストのセットアップ」
- また、インスタンス環境の設定方法については、次の個所を参照してください。
 - Windows の場合：「3.3.4(6) インスタンス環境の設定」
 - UNIX の場合：「3.4.4(6) インスタンス環境の設定」
- 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ時に、論理ホスト環境定義ファイルのエクスポートが必要な操作を実行した。
他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ方法については、次の個所を参照してください。
 - Windows の場合：「3.3.4(8) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ」
 - UNIX の場合：「3.4.4(8) 他 Performance Management プログラムの論理ホストのセットアップ」
- ネットワークの設定時に、ポート番号を設定した。

3. クラスタシステムでの運用

ネットワークの設定方法については、次の個所を参照してください。

- Windows の場合：「3.3.4(9) ネットワークの設定」
- UNIX の場合：「3.4.4(9) ネットワークの設定」

論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポートの手順については次の個所を参照してください。

- Windows の場合：「3.3.4(13) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」～
「3.3.4(16) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート」
- UNIX の場合：「3.4.4(13) 論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート」～
「3.4.4(16) 論理ホスト環境定義ファイルのインポート」

なお、監視対象およびインスタンス環境の更新を実施した場合は、論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート・インポートは不要です。

監視対象の更新方法については「3.7.1 監視対象の更新の設定」を、インスタンス環境の更新方法については「3.7.2 インスタンス環境の更新の設定」を参照してください。

4

監視テンプレート

この章では、PFM - RM for Oracle の監視テンプレートについて説明します。

監視テンプレートの概要

アラームの記載形式

アラーム一覧

レポートの記載形式

レポートのフォルダ構成

レポート一覧

監視テンプレートの概要

Performance Management では、次の方法でアラームとレポートを定義できます。

PFM・RM で定義されているアラームやレポートをそのまま使用する

PFM・RM で定義されているアラームやレポートをコピーしてカスタマイズする

ウィザードを使用して新規に定義する

PFM・RM で用意されているアラームやレポートを「監視テンプレート」と呼びます。監視テンプレートのレポートとアラームは、必要な情報があらかじめ定義されているので、コピーしてそのまま使用したり、ユーザーの環境に合わせてカスタマイズしたりできます。そのため、ウィザードを使用して新規に定義をしなくても、監視対象の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。

この章では、PFM・RM for Oracle で定義されている監視テンプレートのアラームとレポートの設定内容について説明します。

監視テンプレートの使用方法の詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成またはアラームによる稼働監視について説明している章を参照してください。

アラームの記載形式

ここでは、アラームの記載形式を示します。アラームは、アルファベット順に記載しています。

アラーム名

監視テンプレートのアラーム名を示します。

概要

このアラームで監視できる監視対象の概要について説明します。


主な設定

このアラームの主な設定値を表で説明します。この表では、アラームの設定値と、PFM - Web Console の [アラーム階層] 画面でアラームアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックしたときに表示される、[プロパティ] 画面の設定項目との対応を示しています。各アラームの設定の詳細については、PFM - Web Console のアラームの [プロパティ] 画面で確認してください。

設定値の「 - 」は、設定が常に無効であることを示します。

なお、条件式で異常条件と警告条件が同じ場合は、アラームイベントは異常のものが発行されます。

関連レポート

このアラームに関連する、監視テンプレートのレポートを示します。PFM - Web Console の [エージェント階層] 画面でエージェントアイコンをクリックし、[アラームの状態の表示] メソッドで表示される  アイコンをクリックすると、このレポートを表示できます。

アラーム一覧

PFM - RM for Oracle の監視テンプレートで定義されているアラームは、「PFM RM Oracle Template Alarms 09.00」というアラームテーブルにまとめられています。「09.00」は、アラームテーブルのバージョンを示します。このアラームテーブルは、PFM - Web Console の [アラーム階層] 画面に表示される「RM Oracle」フォルダに格納されています。監視テンプレートで定義されているアラームを次の表に示します。

表 4-1 アラーム一覧

アラーム名	監視対象
Buffer Cache Usage	バッファ・キャッシュ使用率。
Buffer Cache Waits	データベースのデータやロールバック・ブロックの競合。
Dict. Cache Usage	共有プール。
Disk Sorts	メモリーやディスク I/O の使用で、すべてのソートについてのディスク上で実行したソートの割合。
Free List Waits	フリー・リストの競合。
Full Table Scans	全件検索の割合。
Library Cache Usage	ライブラリー・キャッシュ。
Redo Log Contention	ログ待機の発生頻度。
Server Status	Oracle インスタンスの有効性。
Tablespace Usage	テーブルスペースの空き領域。

注意

監視対象の Oracle と接続していない場合は、Server Status 以外のアラームを検知しません。

Buffer Cache Usage

概要

Buffer Cache Usage アラームは、バッファ・キャッシュ使用率を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する	する
	インターバル中	3
	回しきい値超過	2
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常
条件式	レコード	System Stat Summary Interval (PI)
	フィールド	Cache Hit %
	異常条件	Cache Hit % < 85
	警告条件	Cache Hit % < 95

関連レポート

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Recent Past/Cache Usage

Buffer Cache Waits

概要

Buffer Cache Waits アラームは、データベースのデータやロールバック・ブロックの競合を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		
項目	詳細項目	設定値
基本情報	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する	する
	インターバル中	3
	回しきい値超過	2
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常
条件式	レコード	System Stat Summary Interval (PI)
	フィールド	Buffer Busy Wait %
	異常条件	Buffer Busy Wait % > 5
	警告条件	Buffer Busy Wait % > 3

関連レポート

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Recent Past/Cache Usage

Dict. Cache Usage

概要

Dict. Cache Usage アラームは、共有プールを監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する	する
	インターバル中	3
	回しきい値超過	2
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常
条件式	レコード	System Stat Summary Interval (PI)
	フィールド	Dict Cache Get Miss %
	異常条件	Dict Cache Get Miss % > 15
	警告条件	Dict Cache Get Miss % > 10

関連レポート

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Recent Past/Cache Usage

Disk Sorts

概要

Disk Sorts アラームは、メモリーやディスク I/O の使用で、すべてのソートについてのディスク上で実行したソートの割合を監視します。

PFM - RM for Oracle だけが Oracle Database を操作していて、ほかの業務などが稼働していない場合、このアラームが発生することがあります。この状態でアラームが常時発生する場合、SORT_AREA_SIZE の値 (SORT_AREA_RETAINED_SIZE が設定されている場合はその値) を増やすことで、アラームが発生しないようにできます。値の目安は「204,800」です。設定したあと、設定内容を有効にするために、Oracle Database を再起動してください。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		
項目	詳細項目	設定値
基本情報	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する	しない
	インターバル中	-
	回しきい値超過	-
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常
条件式	レコード	System Stat Summary Interval (PI)
	フィールド	Sort Overflow %
	異常条件	Sort Overflow % > 15
	警告条件	Sort Overflow % > 10

関連レポート

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/Disk Sorts - Top 10 Sessions

Free List Waits

概要

Free List Waits アラームは、フリー・リストの競合を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する	しない
	インターバル中	-
	回しきい値超過	-
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常
条件式	レコード	System Stat Summary Interval (PI)
	フィールド	Free List Wait Events
	異常条件	Free List Wait Events > 2
	警告条件	Free List Wait Events > 1

関連レポート

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/Longest Transactions - Top 10 Sessions

Full Table Scans

概要

Full Table Scans アラームは、全件検索の割合を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		
項目	詳細項目	設定値
基本情報	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する	しない
	インターバル中	-
	回しきい値超過	-
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常
条件式	レコード	System Stat Summary Interval (PI)
	フィールド	Non-Index Lookups %
	異常条件	Non-Index Lookups % > 10
	警告条件	Non-Index Lookups % > 5

関連レポート

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Recent Past/Full Table Scans

Library Cache Usage

概要

Library Cache Usage アラームは、ライブラリー・キャッシュを監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する	する
	インターバル中	3
	回しきい値超過	2
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常
条件式	レコード	System Stat Summary Interval (PI)
	フィールド	Lib Cache Miss %
	異常条件	Lib Cache Miss % > 2
	警告条件	Lib Cache Miss % > 1

関連レポート

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Recent Past/Cache Usage

Redo Log Contention

概要

Redo Log Contention アラームは、ログ待機の発生頻度を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する	しない
	インターバル中	-
	回しきい値超過	-
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常
条件式	レコード	System Stat Summary Interval (PI)
	フィールド	Redo Log Space Requests
	異常条件	Redo Log Space Requests > 2
	警告条件	Redo Log Space Requests > 1

関連レポート

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Recent Past/Redo Log Buffer Contention

Server Status

概要

Server Status アラームは、Oracle インスタンス（リスナーおよび Oracle Database）の有効性を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		設定値
項目	詳細項目	
基本情報	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する	しない
	インターバル中	-
	回しきい値超過	-
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常
条件式	レコード	Instance Availability (PD_PDIA)
	フィールド	Availability
	異常条件	Availability = 0
	警告条件	Availability = 0

関連レポート

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Real-Time/System Overview

Tablespace Usage

概要

Tablespace Usage アラームは、テーブルスペースの空き領域を監視します。

主な設定

PFM - Web Console のアラームのプロパティ		
項目	詳細項目	設定値
基本情報	発生頻度を満たしたときにアラーム通知する	しない
	インターバル中	-
	回しきい値超過	-
アクション	SNMP	異常, 警告, 正常
条件式	レコード	Tablespace (PD_PDTS)
	フィールド	Free %
	異常条件	Free % < 10
	警告条件	Free % < 20

関連レポート

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Real-Time/Tablespace Status

レポートの記載形式

ここでは、レポートの記載形式を示します。レポートは、アルファベット順に記載しています。

レポート名

監視テンプレートのレポート名を示します。

- レポート名に「(Multi-Agent)」が含まれるレポートは、複数のインスタンスについて情報を表示するレポートです。
- レポート名に「(Multi-Agent)」が含まれないレポートは、単数のインスタンスについて情報を表示するレポートです。

データモデルについては、「5. レコード」を参照してください。

概要

このレポートで表示できる情報の概要について説明します。

格納先

このレポートの格納先を示します。

レコード

このレポートで使用するパフォーマンスデータが、格納されているレコードを示します。履歴レポートを表示するためには、この欄に示すレコードを収集するように、あらかじめ設定しておく必要があります。レポートを表示する前に、PFM・Web Consoleの[エージェント階層]画面でエージェントのプロパティを表示して、このレコードが「Log = Yes」に設定されているか確認してください。リアルタイムレポートの場合、設定する必要はありません。

フィールド

このレポートで使用するレコードのフィールドについて、表で説明します。

ドリルダウンレポート（レポートレベル）

このレポートに関連づけられた、監視テンプレートのレポートを表で説明します。このドリルダウンレポートを表示するには、PFM・Web Consoleのレポートウィンドウのドリルダウンレポートプルダウンメニューから、該当するドリルダウンレポート名を選択し、[レポートの表示]をクリックしてください。なお、レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

このレポートのフィールドに関連づけられた、監視テンプレートのレポートを表で説明

4. 監視テンプレート レポートの記載形式

します。このドリルダウンレポートを表示するには、PFM - Web Console のレポートウィンドウに表示されているレポートのグラフまたはレポートウィンドウ下部に表示されているフィールド名をクリックしてください。履歴レポートの場合、レポート中の青色で表示されている時間をクリックすることで、より詳細な時間間隔でレポートを表示できます。なお、レポートによってドリルダウンレポートを持つものと持たないものがあります。

レポートのフォルダ構成

PFM - RM for Oracle のレポートのフォルダ構成を次に示します。< >内は、フォルダ名を示します。

```
<RM Oracle>
+-- <Monthly Trend>
|   +-- Cache Usage Trend(Multi-Agent)
|   +-- Database Activity Trend(Multi-Agent)
|   +-- <Advanced>
|       +-- Database Space Trend(Multi-Agent)
|       +-- Datafile I/O Trend Summary
|       +-- SGA Status Summary
|       +-- <Drilldown Only>
|           +-- Datafile I/O Trend Detail(Reads)
|           +-- Datafile I/O Trend Detail(Writes)
+-- <Status Reporting>
|   +-- <Daily Trend>
|       +-- Cache Usage Status(Multi-Agent)
|       +-- Database Activity Status(Multi-Agent)
|       +-- <Advanced>
|           +-- Database Space Summary(Multi-Agent)
|           +-- Datafile I/O Status Summary
|           +-- <Drilldown Only>
|               +-- Datafile I/O Status Detail(Reads)
|               +-- Datafile I/O Status Detail(Writes)
|   +-- <Real-Time>
|       +-- Database Activity Status
|       +-- Database Space Overview
|       +-- Server Configuration Status
|       +-- SGA Status
|       +-- System Overview
|       +-- Tablespace Status
|       +-- <Drilldown Only>
|           +-- Database Activity Status Detail
|           +-- Tablespace Status Detail
+-- <Troubleshooting>
|   +-- <Real-Time>
|       +-- Blocking Locks
|       +-- Disk Sorts - Top 10 Sessions
|       +-- I/O Activity - Top 10 Datafiles
|       +-- Locked Objects
|       +-- Lock Usage - Top 10 Sessions
|       +-- Longest Transactions - Top 10 Sessions
|       +-- Memory Usage - Top 10 Sessions
|       +-- Physical I/O - Top 10 Sessions
|       +-- System Overview
|       +-- <Drilldown Only>
|           +-- Datafile I/O Activity Detail
|           +-- Open Cursors
|           +-- Session Detail
|           +-- Session Statistics Detail
|           +-- SQL Text
|   +-- <Recent Past>
|       +-- Cache Usage
|       +-- Full Table Scans
|       +-- Redo Log Buffer Contention
```

各フォルダの説明を次に示します。

「Monthly Trend」フォルダ

4. 監視テンプレート レポートのフォルダ構成

最近 1 か月間の 1 日ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。
1 か月のシステムの傾向を分析するために使用します。

「Status Reporting」フォルダ

日ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。システムの総合的な状態を見るために使用します。また、履歴レポートのほかにリアルタイムレポートの表示もできます。

- 「Daily Trend」フォルダ

最近 24 時間の 1 時間ごとに集計された情報を表示するレポートが格納されています。1 日ごとにシステムの状態を確認するために使用します。

- 「Real-Time」フォルダ

システムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。

「Troubleshooting」フォルダ

トラブルを解決するのに役立つ情報を表示するレポートが格納されています。システムに問題が発生した場合、問題の原因を調査するために使用します。

- 「Real-Time」フォルダ

現在のシステムの状態を確認するためのリアルタイムレポートが格納されています。

- 「Recent Past」フォルダ

最近 1 時間の 1 分ごとに集計された情報を表示する履歴レポートが格納されています。

さらに、これらのフォルダの下位には、次のフォルダがあります。上位のフォルダによって、どのフォルダがあるかは異なります。各フォルダについて次に説明します。

「Advanced」フォルダ

デフォルトで「Log=No」に設定されているレコードを使用しているレポートが格納されています。このフォルダのレポートを表示するには、使用しているレコードの設定を PFM - Web Console で「Log = Yes」にする必要があります。

「Drilldown Only」フォルダ

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）として表示されるレポートが格納されています。そのレポートのフィールドに関連する詳細な情報を表示するために使用します。

レポート一覧

監視テンプレートで定義されているレポートをアルファベット順に次の表に示します。

表 4-2 レポート一覧

レポート名	表示する情報	格納先
Blocking Locks	ほかのセッションを待機させているロックを含むセッション。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/
Cache Usage	最近 1 時間のバッファ・キャッシュ使用率（分単位）	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Recent Past/
Cache Usage Status(Multi-Agent)	最近 24 時間の複数エージェントのバッファ・キャッシュ使用率の概要（時単位）	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Daily Trend/
Cache Usage Trend(Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数エージェントのバッファ・キャッシュ使用率についての概要（日単位）	Reports/RM Oracle/Monthly Trend/
Database Activity Status	データベースの稼働状況。	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Real-Time/
Database Activity Status Detail	データベースの稼働状況の詳細情報。	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Real-Time/Drilldown Only/
Database Activity Status(Multi-Agent)	最近 24 時間の複数エージェントのデータベース・インスタンスについての I/O 統計情報（時単位）	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Daily Trend/
Database Activity Trend(Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数エージェントの I/O 処理についての概要（日単位）	Reports/RM Oracle/Monthly Trend/
Database Space Overview	テーブルスペースとデータファイルについてのパフォーマンスデータと一般的なデータベース情報。	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Real-Time/
Database Space Summary(Multi-Agent)	最近 24 時間の複数エージェントのインスタンス・レベルでの空き領域の概要（時単位）	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Daily Trend/Advanced/
Database Space Trend(Multi-Agent)	最近 1 か月間の複数エージェントのインスタンスについての空き領域の概要（日単位）	Reports/RM Oracle/Monthly Trend/ Advanced/
Datafile I/O Activity Detail	任意のデータファイルについてのディスク I/O の詳細。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/Drilldown Only/
Datafile I/O Status Detail(Reads)	最近 24 時間の任意のデータファイルの平均ディスク読み込みの詳細（時単位）	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

4. 監視テンプレート レポート一覧

レポート名	表示する情報	格納先
Datafile I/O Status Detail(Writes)	最近 24 時間の任意のデータファイルの平均ディスク書き込みの詳細 (時単位)	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/
Datafile I/O Status Summary	最近 24 時間のデータファイルごとのディスク I/O の回数 (時単位)	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Daily Trend/Advanced/
Datafile I/O Trend Detail(Reads)	1 か月間の任意のデータファイルについてのディスク読み込みの詳細 (日単位)	Reports/RM Oracle/Monthly Trend/ Advanced/Drilldown Only/
Datafile I/O Trend Detail(Writes)	1 か月間の任意のデータファイルについてのディスク書き込みの詳細 (日単位)	Reports/RM Oracle/Monthly Trend/ Advanced/Drilldown Only/
Datafile I/O Trend Summary	最近 1 か月間のデータファイルについてのディスク I/O 回数の概要 (日単位)	Reports/RM Oracle/Monthly Trend/ Advanced/
Disk Sorts - Top 10 Sessions	頻繁にディスク・ソートを実行しているセッションの上位 10 個。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/
Full Table Scans	最近 1 時間のインデックスを使用しないテーブル・ルックアップの割合 (分単位)	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Recent Past/
I/O Activity - Top 10 Datafiles	データファイルごとのディスク I/O 回数の上位 10 個。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/
Lock Usage - Top 10 Sessions	各セッションによって保持されているロック数の上位 10 個。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/
Locked Objects	トランザクションによってロックされているオブジェクト。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/
Longest Transactions - Top 10 Sessions	ほかのセッションを待機させていたトランザクションの上位 10 個。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/
Memory Usage - Top 10 Sessions	メモリー使用が多いセッションの上位 10 個。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/
Open Cursors	セッションによって開かれているカーソル。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/Drilldown Only/
Physical I/O - Top 10 Sessions	I/O が集中しているセッションの上位 10 個。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/
Redo Log Buffer Contention	最近 1 時間の Oracle が REDO ログ・エントリにディスク領域が割り当てられるまで待機する必要のある回数 (分単位)	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Recent Past/
Server Configuration Status	設定パラメーターについての情報。	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Real-Time/

レポート名	表示する情報	格納先
Session Detail	セッションについての詳細情報。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/Drilldown Only/
Session Statistics Detail	セッションの統計情報。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/Drilldown Only/
SGA Status	SGA 内の各コンポーネントの状態。	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Real-Time/
SGA Status Summary	最近 1 か月間の、SGA 内の各コンポーネントの概要（日単位）	Reports/RM Oracle/Monthly Trend/ Advanced/
SQL Text	SQL Text フィールドと Explain Plan フィールドのパフォーマンスデータ。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/Drilldown Only/
System Overview (インスタンスの全体的な状態を示すリアルタイムレポート)	インスタンスの全体的な状態を示す主なパフォーマンスデータ。	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Real-Time/
System Overview (インスタンスの一般的な状態を示すリアルタイムレポート)	インスタンスの一般的な状態を示す主なパフォーマンスデータ。	Reports/RM Oracle/Troubleshooting/ Real-Time/
Tablespace Status	データベース内にあるすべてのテーブルスペースの状態。	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Real-Time/
Tablespace Status Detail	指定したテーブルスペースについての詳細情報。	Reports/RM Oracle/Status Reporting/ Real-Time/Drilldown Only/

Blocking Locks

概要

Blocking Locks レポートは、ほかのセッションを待機させているロックを含むセッションをリアルタイムで表示します。

このレポートが表示できない場合、Oracle の静的ディクショナリー・ビュー DBA_WAITERS を作成してください。静的ディクショナリー・ビュー DBA_WAITERS を作成するためには、Oracle が提供する CATBLOCK.SQL スクリプトを実行する必要があります。

このレポートが表示されるのに必要なパフォーマンスデータが Oracle Database がない場合、レポートは、表示されません。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Lock Waiters (PD_PDLW)

フィールド

フィールド名	説明
Holding Session	ロックを保持しているセッション識別子。Locked Objects レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Holding User	ロックを保持しているユーザー名。
Mode Held	データ収集時に保持されていたロックのモード。
Mode Requested	データ収集時に要求されたロックのモード。
Waiting Session	ロック解放待ちのセッション識別子。Session Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Waiting User	ロックの解放を待っているユーザー名。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Longest Transactions - Top 10 Sessions	ほかのセッションを待機させていたトランザクションの上位 10 個を表示する。

ドリルダウンレポート（フィールドレベル）

レポート名	説明
Locked Objects	セッションによってロックされているオブジェクトを表示する。このレポートを表示するには、Holding Session フィールドをクリックする。
Session Detail	セッションについての詳細情報を表示する。このレポートを表示するには、Waiting Session フィールドをクリックする。

Cache Usage

概要

Cache Usage レポートは、最近 1 時間のバッファ・キャッシュ使用率を分単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

System Stat Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
Cache Hit %	バッファ・キャッシュ使用率。
Dict Cache Get Miss %	キャッシュ・ミスになったデータ要求の割合。
Lib Cache Miss %	ライブラリー・キャッシュ中の確保の総数に対するリロードの総数の割合。

Cache Usage Status(Multi-Agent)

概要

Cache Usage Status(Multi-Agent) レポートは、最近 24 時間の複数エージェントのバッファ・キャッシュ使用率の概要を時単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

System Stat Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
Cache Hit %	バッファ・キャッシュ使用率。

Cache Usage Trend(Multi-Agent)

概要

Cache Usage Trend(Multi-Agent) レポートは、最近 1 か月間の複数エージェントのバッファ・キャッシュ使用率についての概要を日単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Monthly Trend/

レコード

System Stat Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
Cache Hit %	バッファ・キャッシュ使用率。

Database Activity Status

概要

Database Activity Status レポートは、データベースの稼働状況をリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Real-Time/

レコード

Activity Summary (PD_PDAS)

フィールド

フィールド名	説明
DML Locks %	初期化パラメーターファイル「init.ora」の DML_LOCKS パラメーターに対する DML ロックの割合。
Open Cursors %	初期化パラメーターファイル「init.ora」の OPEN_CURSORS パラメーターに対するオープン・カーソルの割合。
Processes %	初期化パラメーターファイル「init.ora」の PROCESSES パラメーターに対するプロセスの割合。
Sessions %	初期化パラメーターファイル「init.ora」の SESSIONS パラメーターに対するセッションの割合。
Transactions %	初期化パラメーターファイル「init.ora」の TRANSACTIONS パラメーターに対するトランザクションの割合。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Database Activity Status Detail	データベース稼働状況の詳細な情報を表示する。

Database Activity Status Detail

概要

Database Activity Status Detail レポートは、データベースの稼働状況の詳細をリアルタイムで表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

Activity Summary (PD_PDAS)

フィールド

フィールド名	説明
Active Transactions	アクティブ・セッションのアクティブ・トランザクション数。
DML Locks %	初期化パラメーターファイル「init.ora」の DML_LOCKS パラメーターに対する DML ロックの割合。
DML Locks Held	現在の DML ロック数。
Open Cursors	現在のオープン・カーソル数。
Open Cursors %	初期化パラメーターファイル「init.ora」の OPEN_CURSORS パラメーターに対するオープン・カーソルの割合。
Processes	現在の Oracle プロセス数。
Processes %	初期化パラメーターファイル「init.ora」の PROCESSES パラメーターに対するプロセスの割合。
Sessions	現在のセッション数。
Sessions %	初期化パラメーターファイル「init.ora」の SESSIONS パラメーターに対するセッションの割合。
Transactions %	初期化パラメーターファイル「init.ora」の TRANSACTIONS パラメーターに対するトランザクションの割合。

Database Activity Status(Multi-Agent)

概要

Database Activity Status(Multi-Agent) レポートは、最近 24 時間の複数エージェントのデータベース・インスタンスについての I/O 統計情報を時単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Daily Trend/

レコード

System Stat Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
I/O Ops/sec	1 秒ごとの I/O 回数。

Database Activity Trend(Multi-Agent)

概要

Database Activity Trend(Multi-Agent) レポートは、最近 1 か月間の複数エージェントの I/O 処理についての概要を日単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Monthly Trend/

レコード

System Stat Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
I/O Ops/sec	1 秒ごとの I/O 回数。

Database Space Overview

概要

Database Space Overview レポートは、テーブルスペースとデータファイルについてのパフォーマンスデータと一般的なデータベース情報をリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Real-Time/

レコード

Database (PD_PDDDB)

フィールド

フィールド名	説明
Datafiles	テーブルスペースが使用しているデータファイル数。
DB Name	データベース名。
Extents	エクステント数。
Free %	空き領域の割合。
Free Extents	空きエクステント数。
Free Mbytes	空き領域。メガバイト単位。
Rollback Segments	ロールバック・セグメント数。
Segments	セグメント数。
Tablespaces	テーブルスペース数。
Used Mbytes	使用済み領域。メガバイト単位。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Tablespace Status	インスタンス中のすべてのテーブルスペースの使用情報を表示する。

Database Space Summary(Multi-Agent)

概要

Database Space Summary(Multi-Agent) レポートは、最近 24 時間の複数エージェントのインスタンス・レベルでの空き領域の概要を時単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

Database Interval (PI_PIDB)

フィールド

フィールド名	説明
Datafiles	テーブルスペースが使用しているデータファイル数。
Free %	空き領域の割合。
Free Extents	空きエクステント数。
Mbytes	テーブルスペースのサイズ。メガバイト単位。
Tablespaces	テーブルスペース数。

Database Space Trend(Multi-Agent)

概要

Database Space Trend(Multi-Agent) レポートは、最近 1 か月間の複数エージェントのインスタンスについての空き領域の概要を日単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Monthly Trend/Advanced/

レコード

Database Interval (PI_PIDB)

フィールド

フィールド名	説明
Datafiles	テーブルスペースが使用しているデータファイル数。
Free %	空き領域の割合。
Free Extents	空きエクステント数。
Mbytes	テーブルスペースのサイズ。メガバイト単位。
Tablespaces	テーブルスペース数。

Datafile I/O Activity Detail

概要

Datafile I/O Activity Detail レポートは、任意のデータファイルについてのディスク I/O の詳細をリアルタイムで表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

Data File (PD_PDDF)

フィールド

フィールド名	説明
File #	ファイル番号。
File Name	ファイル名。
Physical Blocks Read	物理ブロックの読み込み回数。
Physical Blocks Written	物理ブロックの書き込み回数。
Physical Reads	物理読み込み回数。
Physical Writes	物理書き込み回数。
Tablespace Name	テーブルスペース名。

Datafile I/O Status Detail(Reads)

概要

Datafile I/O Status Detail(Reads) レポートは、最近 24 時間の任意のデータファイルの平均ディスク読み込みの詳細を時単位で表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

フィールド

フィールド名	説明
File #	ファイル番号。
File Name	ファイル名。
Physical Blocks Read	物理ブロックの読み込み回数。
Physical Blocks Written	物理ブロックの書き込み回数。
Physical Reads	完了した物理読み込み回数。
Physical Writes	完了した物理書き込み回数。
Tablespace Name	テーブルスペース名。

Datafile I/O Status Detail(Writes)

概要

Datafile I/O Status Detail(Writes) レポートは、最近 24 時間の任意のデータファイルの平均ディスク書き込みの詳細を時単位で表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

フィールド

フィールド名	説明
File #	ファイル番号。
File Name	ファイル名。
Physical Blocks Read	物理ブロックの読み込み回数。
Physical Blocks Written	物理ブロックの書き込み回数。
Physical Reads	完了した物理読み込み回数。
Physical Writes	完了した物理書き込み回数。
Tablespace Name	テーブルスペース名。

Datafile I/O Status Summary

概要

Datafile I/O Status Summary レポートは、最近 24 時間のデータファイルごとのディスク I/O の概要を時単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Daily Trend/Advanced/

レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

フィールド

フィールド名	説明
File #	ファイル番号。
File Name	ファイル名。
Physical Reads(Total)	物理読み込みの総数。Datafile I/O Status Detail(Reads) レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Physical Writes(Total)	物理書き込みの総数。Datafile I/O Status Detail(Writes) レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Datafile I/O Status Detail(Reads)	最近 24 時間の任意のデータファイルの平均ディスク読み込みの詳細を時単位で表示する。このレポートを表示するには、Physical Reads(Total) フィールドをクリックする。
Datafile I/O Status Detail(Writes)	最近 24 時間の任意のデータファイルの平均ディスク書き込みの詳細を時単位で表示する。このレポートを表示するには、Physical Writes(Total) フィールドをクリックする。

Datafile I/O Trend Detail(Reads)

概要

Datafile I/O Trend Detail(Reads) レポートは、1 か月間の任意のデータファイルについてのディスク読み込みの詳細を日単位で表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/RM Oracle/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

フィールド

フィールド名	説明
File #	ファイル番号。
File Name	ファイル名。
Physical Blocks Read	物理ブロックの読み込み回数。
Physical Blocks Written	物理ブロックの書き込み回数。
Physical Reads	完了した物理読み込み回数。
Physical Writes	完了した物理書き込み回数。
Tablespace Name	テーブルスペース名。

Datafile I/O Trend Detail(Writes)

概要

Datafile I/O Trend Detail(Writes) レポートは、1 か月間の任意のデータファイルについてのディスク書き込みの詳細を日単位で表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/RM Oracle/Monthly Trend/Advanced/Drilldown Only/

レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

フィールド

フィールド名	説明
File #	ファイル番号。
File Name	ファイル名。
Physical Blocks Read	物理ブロックの読み込み回数。
Physical Blocks Written	物理ブロックの書き込み回数。
Physical Reads	完了した物理読み込み回数。
Physical Writes	完了した物理書き込み回数。
Tablespace Name	テーブルスペース名。

Datafile I/O Trend Summary

概要

Datafile I/O Trend Summary レポートは、最近 1 か月間のデータファイルについてのディスク I/O の概要を日単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Monthly Trend/Advanced/

レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

フィールド

フィールド名	説明
File #	ファイル番号。
File Name	ファイル名。
Physical Reads	インターバル中に完了した物理読み込み回数。Datafile I/O Status Detail(Reads) レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Physical Writes	インターバル中に完了した物理書き込み回数。Datafile I/O Status Detail(Writes) レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Datafile I/O Trend Detail(Reads)	最近 1 か月間の任意のデータファイルについてのディスク読み込みの詳細を日単位で表示する。このレポートを表示するには、Physical Reads フィールドをクリックする。
Datafile I/O Trend Detail(Writes)	最近 1 か月間の任意のデータファイルについてのディスク書き込みの詳細を日単位で表示する。このレポートを表示するには、Physical Writes フィールドをクリックする。

Disk Sorts - Top 10 Sessions

概要

Disk Sorts - Top 10 Sessions レポートは、頻繁にディスク・ソートを実行しているセッションの上位 10 個をリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Session Statistics Summary (PD_PDS2)

フィールド

フィールド名	説明
SID	セッション識別子。
Sort Overflow %	テンポラリー・セグメントを使用していたソートの割合。Session Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
User	Oracle ユーザー名。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Session Detail	セッションについての詳細情報を表示する。このレポートを表示するには、Sort Overflow % フィールドをクリックする。

Full Table Scans

概要

Full Table Scans レポートは、最近 1 時間のインデックスを使用しないテーブル・ルックアップの割合を分単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

System Stat Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
Non-Index Lookups %	キャッシュが行われない全表走査の割合。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Cache Usage	バッファ・キャッシュ使用率を表示する。このレポートを表示するには、Non Index Lookups % フィールドをクリックする。

I/O Activity - Top 10 Datafiles

概要

I/O Activity - Top 10 Datafiles レポートは、データファイルごとのディスク I/O 回数の上位 10 個をリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Data File (PD_PDDF)

フィールド

フィールド名	説明
File #	ファイル番号。
File Name	ファイル名。
Physical Reads	物理読み込み回数。Datafile I/O Activity Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Physical Writes	物理書き込み回数。Datafile I/O Activity Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Datafile I/O Activity Detail	すべてのデータファイルについての I/O の詳細を表示する。このレポートを表示するには、Physical Read または Physical Writes フィールドをクリックする。
Physical I/O - Top 10 Sessions	I/O の発生が多いセッションの上位 10 個を表示する。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Datafile I/O Activity Detail	任意のデータファイルについてのディスク I/O の詳細を表示する。このレポートを表示するには、Physical Reads フィールドまたは Physical Writes フィールドをクリックする。

Lock Usage - Top 10 Sessions

概要

Lock Usage - Top 10 Sessions レポートは、各セッションによって保持されているロック数の上位 10 個をリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Session Detail (PD_PDS)

フィールド

フィールド名	説明
Locks Held	データ収集時に保持されていたロック数。Session Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
SID	セッション識別子。
User	Oracle ユーザー名。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Session Detail	セッションについての詳細情報を表示する。このレポートを表示するには、Locks Held フィールドをクリックする。

Locked Objects

概要

Locked Objects レポートは、トランザクションによってロックされているオブジェクトをリアルタイムで表示します。

このレポートが表示されるのに必要なパフォーマンスデータが Oracle Database がない場合、レポートは、表示されません。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Transaction Lock (PD_PDTL)

フィールド

フィールド名	説明
Locked Mode	保持されているロックモード。有効な値を次に示す。 <ul style="list-style-type: none"> • 1 (null) • 2 (row share : 行共有) • 3 (row exclusive : 行排他) • 4 (share : 共有) • 5 (share row exclusive : 共有 / 行排他) • 6 (exclusive : 排他)
Object Name	オブジェクト名。
Object Type	オブジェクトタイプ。
Owner	オブジェクトの所有者。
SID	セッション識別子。Session Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
User	Oracle ユーザー名。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Session Detail	セッションについての詳細情報を表示する。このレポートを表示するには、SID フィールドをクリックする。

Longest Transactions - Top 10 Sessions

概要

Longest Transactions - Top 10 Sessions レポートは、ほかのセッションを待機させていたトランザクションの上位 10 個をリアルタイムで表示します。

このレポートが表示されるのに必要なパフォーマンスデータが Oracle Database がない場合、レポートは、表示されません。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Transaction (PD_PDTR)

フィールド

フィールド名	説明
Cache Hit %	物理 I/O に対する論理 I/O の割合。
Locks	トランザクションによって保持されているロック数。Blocking Locks を表示するには、このフィールドをクリックする。
Logical I/O	論理 I/O。
Physical I/O	物理 I/O。
SID	セッション識別子。Open Cursors レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Tran Secs	トランザクションの開始からの秒数。
User	Oracle ユーザー名。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Blocking Locks	ほかのセッションを待機させているロックを含むセッションを表示する。このレポートを表示するには、Locks フィールドをクリックする。
Open Cursors	セッションによって開かれているカーソルを表示する。このレポートを表示するには、SID フィールドをクリックする。

Memory Usage - Top 10 Sessions

概要

Memory Usage - Top 10 Sessions レポートは、メモリー使用が多いセッションの上位 10 個をリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Session Statistics Summary (PD_PDS2)

フィールド

フィールド名	説明
PGA Memory	セッションの PGA サイズを表示する。Session Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
SID	セッション識別子。
UGA Memory	セッションの UGA サイズを表示する。Session Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
User	Oracle ユーザー名。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Session Detail	セッションについての詳細情報を表示する。このレポートを表示するには、PGA Memory フィールドまたは UGA Memory フィールドをクリックする。

Open Cursors

概要

Open Cursors レポートは、セッションによって開かれているカーソルをリアルタイムで表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

Open Cursor (PD_PDOC)

フィールド

フィールド名	説明
Addrhash	実行されている SQL 文を固有に識別する文字列。
Program	実行中のプログラム名。
SID	セッション識別子。
SQL Text	オープン・カーソルによって解析された SQL 文の最初の 60 文字。 SQL Text レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
User	Oracle ユーザー名。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
SQL Text	SQL Text フィールドと Explain Plan フィールドのパフォーマンスデータを表示する。このレポートを表示するには、SQL Text フィールドをクリックする。

Physical I/O - Top 10 Sessions

概要

Physical I/O - Top 10 Sessions レポートは、I/O が集中しているセッションの上位 10 個をリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

Session I/O Interval (PI_PIIO)

フィールド

フィールド名	説明
Physical Reads	物理読み込み回数。Session Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
SID	セッション識別子。
User	Oracle ユーザー名。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
I/O Activity - Top 10 Datafiles	データファイルごとのディスク I/O 回数の上位 10 個を表示する。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Session Detail	セッションについての詳細情報を表示する。このレポートを表示するには、Physical Reads フィールドをクリックする。

Redo Log Buffer Contention

概要

Redo Log Buffer Contention レポートは、最近 1 時間の Oracle が REDO ログ・エントリにディスク領域が割り当てられるまで待機する必要がある回数を分単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Recent Past/

レコード

System Stat Summary Interval (PI)

フィールド

フィールド名	説明
Redo Log Space Requests	アクティブ・ログ・ファイルが満杯であるため、REDO ログ・エントリにディスク領域が割り当てられるまで Oracle が待機する必要がある回数。

Server Configuration Status

概要

Server Configuration Status レポートは、設定パラメーターについての情報をリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Real-Time/

レコード

Parameter Values (PD_PDP)

フィールド

フィールド名	説明
Is Default	デフォルト値。有効な値は「TRUE」と「FALSE」。
Parameter Name	パラメーター名。次の二つのパラメーターがある。 <ul style="list-style-type: none">容量制限値があり、パフォーマンスに影響しないパラメーター容量制限値がなく、パフォーマンスに影響するパラメーター
Value	パラメーターの値。

Session Detail

概要

Session Detail レポートは、セッションについての詳細情報をリアルタイムで表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

Session Detail (PD_PDS)

フィールド

フィールド名	説明
Addrhash	実行されている SQL 文を固有に識別する文字列。
Blocking Locks	ほかのロックを待機させているロック数。
Command	実行中のコマンド。SQL Text レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Locks Held	データ収集時に保持されていたロック数。
Open Cursors	オープン・カーソル数。Open Cursors レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Program	実行中のプログラム名。
Session Events	セッションの待機イベント数。
Session Waits	セッションが待機したリソースおよびイベント数。
Sessions Blocked	セッションによって待機されているセッション数。
SID	セッション識別子。Session Statistics Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Table Accesses	テーブル・アクセス数。
Transactions	アクティブなトランザクション数。
User	Oracle ユーザー名。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Open Cursors	セッションでのオープン・カーソルについての詳細情報を表示する。このレポートを表示するには、Open Cursors フィールドをクリックする。
Session Statistics Detail	セッションについての詳細な統計情報を表示する。このレポートを表示するには、SID フィールドをクリックする。

レポート名	説明
SQL Text	SQL Text フィールドと Explain Plan フィールドのパフォーマンスデータを表示する。このレポートを表示するには、Command フィールドをクリックする。

Session Statistics Detail

概要

Session Statistics Detail レポートは、セッションの統計情報をリアルタイムで表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

Session Statistics Summary (PD_PDS2)

フィールド

フィールド名	説明
Blocking Locks	セッションがほかのロックを待機させているロック数。
Cache Hit %	バッファ・キャッシュ使用率。
Disk Sorts	ディスクでのソート回数。
Lock Requests	ロック要求回数。
Lock Waits	ロック要求が待たされた回数。
Memory Sorts	メモリー内でのソート回数。
PGA Memory	セッションの PGA サイズ。
Physical Reads	ディスクからのデータベース・ブロックの実読み込み回数。
Program	プログラム名。
SID	セッション識別子。
Sort Overflow %	テンポラリー・セグメントを使用したソートの割合。
UGA Memory	セッションの UGA サイズ。
User	Oracle ユーザー名。

SGA Status

概要

SGA Status レポートは、SGA 内のコンポーネントの状態をリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Real-Time/

レコード

SGA Components (PD_PDSG)

フィールド

フィールド名	説明
Bytes	メモリーサイズ (単位 : バイト)
Component Name	SGA コンポーネント名。

SGA Status Summary

概要

SGA Status Summary レポートは、最近 1 か月間の SGA 内コンポーネントの概要を日単位で表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Monthly Trend/Advanced/

レコード

SGA Components (PD_PDSG)

フィールド

フィールド名	説明
Bytes	メモリーサイズ (単位: バイト)
Component Name	SGA コンポーネント名。
Total Bytes	各 SGA コンポーネントが使用しているメモリーサイズの合計値 (単位: バイト)

SQL Text

概要

SQL Text レポートは、SQL Text フィールドと Explain Plan フィールドのパフォーマンスデータをリアルタイムで表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

注意

このレポートを単独で使用しないでください。このレポートは、Open Cursors レポートまたは Session Detail レポートからドリルダウンした場合に表示されます。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

SQL Text (PD_PDSQ)

フィールド

フィールド名	説明
Explain Plan	Oracle オプティマイザによって選択された SELECT , UPDATE , INSERT , および DELETE 文の実行計画。
SQL Text	SQL テキストの一部。

System Overview (インスタンスの全体的な状態を示すリアルタイムレポート)

概要

System Overview レポートは、インスタンスの全体的な状態を示す主なパフォーマンスデータをリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Real-Time/

レコード

System Stat Summary (PD)

フィールド

フィールド名	説明
Cache Hit %	バッファ・キャッシュ使用率。Physical I/O - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Continued Row %	ブロックより長い、または移動された（行連鎖または行移行）行の総数の割合。
Current Logons	データ収集時の Oracle Database へのログイン数。
Deadlocks	DML 操作によるエンキュー（ロック）によって発生したプロセス・デッドロック数。
Disk Sorts	ディスクでのソート数。Disk Sorts - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Lock Requests	ロック要求の回数。Lock Usage - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Memory Sorts	メモリー内でのソート数。Disk Sorts - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Session CPU Usage	使用された CPU 時間。1/100 秒単位。
Session PGA Memory	データ収集時にアクティブ・セッションによって使用されていた PGA サイズ。Memory Usage - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Session UGA Memory	アクティブ・セッションによって使用された UGA サイズ。Memory Usage - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Sort Overflow %	テンポラリー・セグメントを使用したソートの割合。Disk Sorts - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Total SQL Executions	SQL 文の実行回数。

フィールド名	説明
User Calls	アプリケーションからデータベースへの処理済み要求回数。
User Commits	トランザクション数。Longest Transaction - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
User Rollbacks	ロールバック回数。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Database Activity Status	インスタンスの稼働状況を表示する。
Database Space Overview	インスタンスのテーブルスペースとデータファイルの使用情報を表示する。
Server Configuration Status	サーバのすべての設定パラメーター情報を表示する。
Tablespace Status	すべてのテーブルスペース情報を表示する。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Disk Sorts - Top 10 Sessions	頻繁にディスク・ソートを実行しているセッションの上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには、次のフィールドをクリックする。 <ul style="list-style-type: none"> • Disk Sorts • Memory Sorts • Sort Overflow %
Lock Usage - Top 10 Sessions	各セッションによって保持されているロック数の上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには、Lock Requests フィールドをクリックする。
Longest Transaction - Top 10 Sessions	ほかのセッションを待機させていたトランザクションの上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには、User Commits フィールドをクリックする。
Memory Usage - Top 10 Sessions	メモリー使用が多いセッションの上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには、Session PGA Memory フィールドまたは Session UGA Memory フィールドをクリックする。
Physical I/O - Top 10 Sessions	I/O が集中しているセッションの上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには、Cache Hit % フィールドをクリックする。

System Overview (インスタンスの一般的な状態を示すリアルタイムレポート)

概要

System Overview レポートは、インスタンスの一般的な状態を示す主なパフォーマンスデータをリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Troubleshooting/Real-Time/

レコード

System Stat Summary (PD)

フィールド

フィールド名	説明
Cache Hit %	バッファ・キャッシュ使用率。Physical I/O - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Continued Row %	ブロックより長い、または移動された（行連鎖または行移行）行の総数の割合。
Current Logons	データ収集時の Oracle Database のログイン数。
Deadlocks	DML 操作によるエンキュー（ロック）によって発生したプロセス・デッドロック数。
Disk Sorts	ディスクでのソート回数。Disk Sorts - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Lock Requests	ロック要求の回数。Lock Usage - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Memory Sorts	メモリー内でのソート回数。Disk Sorts - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Session CPU Usage	使用された CPU 時間。1/100 秒単位。
Session PGA Memory	データ収集時にアクティブ・セッションによって使用された PGA サイズ。Memory Usage - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Session UGA Memory	アクティブ・セッションによって使用された UGA サイズ。Memory Usage - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Sort Overflow %	テンポラリー・セグメントを使用したソートのパーセンテージ。Disk Sorts - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Total SQL Executions	SQL の総実行回数。

フィールド名	説明
User Calls	アプリケーションからデータベースへの処理済みの要求数。
User Commits	トランザクション数。Longest Transaction - Top 10 Sessions レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
User Rollbacks	ロールバックの回数。

ドリルダウンレポート (レポートレベル)

レポート名	説明
Database Activity Status	インスタンスの稼働状況を表示する。
Database Space Overview	インスタンスのテーブルスペースとデータファイルの使用情報を表示する。
Server Configuration Status	サーバのすべての設定パラメーター情報を表示する。
Tablespace Status	すべてのテーブルスペースの情報を表示する。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Disk Sorts - Top 10 Sessions	頻繁にディスク・ソートを実行しているセッションの上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには、次のフィールドをクリックする。 <ul style="list-style-type: none"> • Disk Sorts • Memory Sorts • Sort Overflow %
Lock Usage - Top 10 Sessions	各セッションによって保持されているロック数の上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには、Lock Requests フィールドをクリックする。
Longest Transaction - Top 10 Sessions	ほかのセッションを待機させていたトランザクションの上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには、User Commits フィールドをクリックする。
Memory Usage - Top 10 Sessions	メモリー使用が多いセッションの上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには、Session PGA Memory フィールドまたは Session UGA Memory フィールドをクリックする。
Physical I/O - Top 10 Sessions	I/O が集中しているセッションの上位 10 個を表示する。このレポートを表示するには、Cache Hit % フィールドをクリックする。

Tablespace Status

概要

Tablespace Status レポートは、データベース内にあるすべてのテーブルスペースの状態をリアルタイムで表示します。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Real-Time/

レコード

Tablespace (PD_PDTS)

フィールド

フィールド名	説明
Free %	空き領域の割合。
Free Mbytes	空き領域。メガバイト単位。Tablespace Status Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。
Tablespace Name	インスタンスに関連するテーブルスペース名。
Used Mbytes	使用済み領域。メガバイト単位。Tablespace Status Detail レポートを表示するには、このフィールドをクリックする。

ドリルダウンレポート (フィールドレベル)

レポート名	説明
Tablespace Status Detail	指定したテーブルスペースについての詳細情報を表示する。このレポートを表示するには、Free Mbytes フィールドまたは Used Mbytes フィールドをクリックする。

Tablespace Status Detail

概要

Tablespace Status Detail レポートは、指定したテーブルスペースについての詳細をリアルタイムで表示します。このレポートは、ドリルダウンレポートです。

格納先

Reports/RM Oracle/Status Reporting/Real-Time/Drilldown Only/

レコード

Tablespace (PD_PDTS)

フィールド

フィールド名	説明
Data Files	テーブルスペースが使用しているデータファイル数。
Extents	エクステント数。
Free %	空き領域の割合。
Free Extents	空きエクステント数。
Free Mbytes	空き領域。メガバイト単位。
Mbytes	テーブルスペースのサイズ。メガバイト単位。
Segments	セグメント数。
Tablespace Name	テーブルスペース名。

5

レコード

この章では、PFM・RM for Oracle のレコードについて説明します。各レコードのパフォーマンスデータの収集方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の Performance Management の機能、またはマニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

データモデルについて

レコードの記載形式

ODBC キーフィールド一覧

要約ルール

データ型一覧

フィールドの値

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド

レコードの注意事項

レコード一覧

データモデルについて

各 PFM・RM が持つレコードおよびフィールドの総称を「データモデル」と呼びます。各 PFM・RM と、その PFM・RM が持つデータモデルには、それぞれ固有のバージョン番号が付与されています。

PFM・RM for Oracle のバージョンとデータモデルのバージョンの関係は、「付録 J バージョン互換」を参照してください。

各 PFM・RM のデータモデルのバージョンは、PFM・Web Console の [エージェント階層] 画面でエージェントのプロパティを表示して確認してください。

データモデルについては、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

レコードの記載形式

この章では、PFM - RM for Oracle のレコードをアルファベット順に記載しています。各レコードの説明は、次の項目から構成されています。

機能

各レコードに格納されるパフォーマンスデータの概要および注意事項について説明します。

デフォルト値および変更できる値

各レコードに設定されているパフォーマンスデータの収集条件のデフォルト値およびユーザーが変更できる値を表で示します。「デフォルト値および変更できる値」に記載している項目とその意味を次の表に示します。この表で示す各項目については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

表 5-1 デフォルト値および変更できる値

項目	意味	変更可否
Collection Interval	パフォーマンスデータの収集間隔（秒単位）。	: 変更できる。
Collection Offset ¹	パフォーマンスデータの収集を開始するオフセット値（秒単位）。オフセット値については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。 また、パフォーマンスデータの収集開始時刻については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。	× : 変更できない。
Log ²	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうか。 Yes : 記録する。ただし、「Collection Interval=0」の場合、記録しない。 No : 記録しない。	
LOGIF	収集したパフォーマンスデータを Store データベースに記録するかどうかの条件。	

注 1

指定できる値は、0 ~ 32,767 秒（Collection Interval で指定した値の範囲内）です。これは、複数のデータを収集する場合に、一度にデータの収集処理が実行されると負荷が集中するので、収集処理の負荷を分散するために使用します。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値に関係なく、Collection Interval と同様の時間となります。

Collection Offset の値を変更する場合は、収集処理の負荷を考慮した上で値を指定してください。

5. レコード

レコードの記載形式

注 2

各レコードに記載されているデフォルト値は、リモートエージェントの値です。
PFM・RM for Oracle では、グループエージェントのデフォルト値はすべて No となります。

ODBC キーフィールド

PFM・Manager で、SQL を使用して Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合に必要な ODBC キーフィールドを示します。ODBC キーフィールドには、全レコード共通のものと同レコード固有のものがあります。ここで示すのは、各レコード固有の ODBC キーフィールドです。複数インスタンスレコードだけが、固有の ODBC キーフィールドを持っています。

全レコード共通の ODBC キーフィールドについては、この章の「ODBC キーフィールド一覧」を参照してください。ODBC キーフィールドの使用方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ODBC に準拠したアプリケーションプログラムとの連携について説明している章を参照してください。

ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間を示します。ライフタイムについては、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

レコードサイズ

1 回の収集で各レコードに格納されるパフォーマンスデータの容量を示します。

フィールド

各レコードのフィールドについて表で説明します。表の各項目について次に説明します。

PFM・View 名 (PFM・Manager 名)

- PFM・View 名

PFM・Web Console で表示されるフィールド名 (PFM・View 名) を示します。

- PFM・Manager 名

PFM・Manager で、SQL を使用して Store データベースに格納されているフィールドのデータを利用する場合、SQL 文で記述するフィールド名 (PFM・Manager 名) を示します。

SQL 文では、先頭に各レコードのレコード ID を付加した形式で記述します。例えば、System Stat Summary (PD) レコードの Disk Sorts (SORTS_DISK) フィールドの場合、「PD_SORTS_DISK」と記述します。

説明

各フィールドに格納されるパフォーマンスデータについて説明します。

表中の ¹ と ² は、次の内容を示します。

注 1

このフィールドの値は、収集時に OS から返された最新の監視値です。

注 2

このフィールドを履歴レポートで表示すると、"PFM - View 名 (Total)" のフィールドが追加されます。

各フィールドのパフォーマンスデータの求め方には、次の種類があります。

- 今回収集したデータと前回のインターバルで収集したデータによって求められた平均や割合を求めるもの。
- 今回収集したデータだけで求められるもの (OS 内部で累積された値を含む。表中の ¹ が該当する)。
- ほかのフィールドのデータから求めるもの (各レコードのフィールドの表にある「データソース」参照)。

特に断り書きがない場合、データの収集間隔によって求められる値となります。

履歴レポートで、PI レコードタイプのレコードを、レポート間隔に「分」以外を設定して要約した場合に表示される値には、次の種類があります。

- 要約した間隔の平均値を表示するもの。
- 最後に収集した値を表示するもの。
- 合計値を表示するもの。
- 最小値を表示するもの。
- 最大値を表示するもの。

特に断り書きがないフィールドの値は、要約した間隔の平均値が表示されます。

要約

Remote Monitor Store がデータを要約するときの方法 (要約ルール) を示します。要約ルールについては、この章の「要約ルール」を参照してください。

形式

double 型など、各フィールドの値のデータ型を示します。データ型については、この章の「データ型一覧」を参照してください。

デルタ

累積値として収集するデータに対し、変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。デルタについては、この章の「フィールドの値」を参照してください。

サポートバージョン

そのフィールドを使用できる Oracle のバージョン番号を示します。

バージョン番号が記述してある場合、そのバージョン以降でそのフィールドが使用できます。「すべて」と記述してある場合、すべての Oracle のバージョンで使用できます。「対象外」と記述してある場合、サポート対象外のフィールドであることを示します。

データソース

5. レコード

レコードの記載形式

該当するフィールドの値の計算方法または取得先を示します。フィールドの値については、この章の「フィールドの値」を参照してください。

ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールドには、全レコード共通のものと各レコード固有のものがあります。ここで示すのは、全レコード共通の ODBC キーフィールドです。PFM・Manager で、SQL を使用して Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合、ODBC キーフィールドが必要です。

全レコード共通の ODBC キーフィールド一覧を次の表に示します。各レコード固有の ODBC キーフィールドについては、各レコードの説明を参照してください。

表 5-2 全レコード共通の ODBC キーフィールド一覧

ODBC キーフィールド	ODBC フォーマット	データ	説明
レコード ID_DATE	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された日付を表すレコードのキー。
レコード ID_DATETIME	SQL_INTEGER	内部	レコード ID_DATE フィールドとレコード ID_TIME フィールドの組み合わせ。
レコード ID_DEVICEID	SQL_VARCHAR	内部	インスタンス名 [ホスト名]。
レコード ID_DRAWER_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	区分。有効な値を次に示す。 m : 分 H : 時 D : 日 W : 週 M : 月 Y : 年
レコード ID_PROD_INST	SQL_VARCHAR	内部	PFM・RM のインスタンス名。
レコード ID_PRODID	SQL_VARCHAR	内部	PFM・RM のプロダクト ID。
レコード ID_RECORD_TYPE	SQL_VARCHAR	内部	レコードタイプを表す識別子 (4 バイト)。
レコード ID_TIME	SQL_INTEGER	内部	レコードが生成された時刻 (グリニッジ標準時)。

要約ルール

PI レコードタイプのレコードでは、Collection Interval に設定された間隔で収集されるデータと、あらかじめ定義されたルールに基づき一定の期間（分，時，日，週，月，または年単位）ごとに要約されたデータが、Store データベースに格納されます。要約の種類はフィールドごとに定義されています。この定義を「要約ルール」と呼びます。

要約ルールによっては、要約期間中の中間データを保持する必要があるものがあります。この場合、中間データを保持するためのフィールドが Store データベース内のレコードに追加されます。このフィールドを「追加フィールド」と呼びます。追加フィールドの一部は、PFM - Web Console でレコードのフィールドとして表示されます。PFM - Web Console に表示される追加フィールドは、履歴レポートに表示するフィールドとして使用できます。

なお、要約によって追加される「追加フィールド」と区別するために、ここでは、この章の各レコードの説明に記載されているフィールドを「固有フィールド」と呼びます。

追加フィールドのフィールド名は次のようになります。

- Store データベースに格納される追加フィールド名
固有フィールドの PFM - Manager 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。
- PFM - Web Console で表示される追加フィールド名
固有フィールドの PFM - View 名にサフィックスが付加されたフィールド名になります。

PFM - Manager 名に付加されるサフィックスと、それに対応する PFM - View 名に付加されるサフィックス、およびフィールドに格納されるデータを次の表に示します。

表 5-3 追加フィールドのサフィックス一覧

PFM - Manager 名に付加される サフィックス	PFM - View 名に付加され るサフィク ス	格納データ
_TOTAL	(Total)	要約期間内のレコードのフィールドの値の総和
_COUNT	-	要約期間内の収集レコード数
_HI	(Max)	要約期間内のレコードのフィールド値の最大値
_LO	(Min)	要約期間内のレコードのフィールド値の最小値

（凡例）

- : 追加フィールドがないことを示します。

要約ルールの一覧を次の表に示します。

表 5-4 要約ルール一覧

要約 ルール名	要約ルール
COPY	要約期間内の最新のレコードのフィールド値がそのまま格納される。
AVG	要約期間内のフィールド値の平均値が格納される。 次に計算式を示す。 (フィールド値の総和) / (収集レコード数) 追加フィールド (Store データベース) • _TOTAL • _COUNT 追加フィールド (PFM - Web Console) • (Total)
HILO	要約期間内のデータの最大値, 最小値, および平均値が格納される。 固有フィールドには平均値が格納される。 次に計算式を示す。 (フィールド値の総和) / (収集レコード数) 追加フィールド (Store データベース) • _HI • _LO • _TOTAL • _COUNT 追加フィールド (PFM - Web Console) • (Max) • (Min) • (Total)
-	要約されないことを示す。

データ型一覧

各フィールドの値のデータ型と、対応する C および C++ のデータ型の一覧を次の表に示します。この表で示す「データ型」の「フィールド」の値は、各レコードのフィールドの表にある「形式」の列に示されています。

表 5-5 データ型一覧

データ型		サイズ (バイト)	説明
フィールド	C および C++		
char(n)	char()	() 内の数	n バイトの長さを持つ文字データ。
double	double	8	数値 ($1.7E \pm 308$ (15 桁))。
long	long	4	数値 (-2,147,483,648 ~ 2,147,483,647)。
short	short	2	数値 (-32,768 ~ 32,767)。
string(n)	char[]	() 内の数	n バイトの長さを持つ文字列 (7 ビットアスキー以外は格納できない)。最後の文字は、 <code>'null'</code> 。
time_t	unsigned long	4	数値 (0 ~ 4,294,967,295)。
timeval	構造体	8	数値 (最初の 4 バイトは秒、次の 4 バイトはマイクロ秒を表す)。
ulong	unsigned long	4	数値 (0 ~ 4,294,967,295)。
ushort	unsigned short	2	数値 (0 ~ 65,535)。
utime	構造体	8	数値 (最初の 4 バイトは秒、次の 4 バイトはマイクロ秒を表す)。
word	unsigned short	2	数値 (0 ~ 65,535)。
(該当なし)	unsigned char	1	数値 (0 ~ 255)。

フィールドの値

ここでは、各フィールドに格納される値について説明します。

データソース

各フィールドには、Performance Management や監視対象プログラムから取得した値や、これらの値をある計算式に基づいて計算した値が格納されます。各フィールドの値の取得先または計算方法は、フィールドの表の「データソース」列で示します。

PFM・RM for Oracle の「データソース」列の文字列は、Oracle から取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定している場合、そのフィールドに設定される値の計算方法を示します。例を次に示します。

- 大文字で書かれている場合
大文字で書かれているものは、Oracle の OCI (Oracle Call Interface) を使用して Oracle Database にアクセスするときの Oracle Database のテーブル名です。例えば、Activity Summary (PD_PDAS) レコードの Cursor Open Hits (CURSOR_OPEN_HITS) フィールドには、Oracle の OCI を使用して収集される値が格納されます。
テーブルの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。
- 小文字で書かれている場合
小文字で書かれているものは、Oracle Database のテーブルに格納されているパフォーマンスデータを取得するためのキー文字列を表します。
例えば、System Stat Summary (PD) レコード Calls/Tran (CALLS_PER_TRANSACTION) フィールドには、V\$SYSSTAT テーブルの Name 列に格納されている user calls から取得した値を、同じく V\$SYSSTAT テーブルの Name 列に格納されている user commits から取得した値で割った値が格納されます。
- 「RM Collector」と書かれている場合
そのフィールドに格納される値の取得先が、RM Collector サービスであることを示します。
- 「init.ora パラメーター名」と書かれている場合
Oracle の初期化パラメーター・ファイル `init.ora` に設定されている「パラメーター名」の値が使用されることを示します。
- 「-」と書かれている場合
パフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定していないことを示します。

デルタ

累積値として収集するデータに対し、変化量でデータを表すことを「デルタ」と呼びます。例えば、1 回目に収集されたパフォーマンスデータが「3」、2 回目に収集されたパフォーマンスデータが「4」とすると、累積値の場合は「7」、変化量の場合は「1」が格納されます。各フィールドの値がデルタ値かどうかは、フィールドの表の「デルタ」列

5. レコード
フィールドの値

で示します。なお、デルタの値は、前回のデータからの相対値のため、マイナス値になる場合があります。

PFM - RM for Oracle で収集されるパフォーマンスデータは、次の表のように異なります。

表 5-6 PFM - RM for Oracle で収集されるパフォーマンスデータ

レコードタイプ	デルタ	データ種別	[デルタ値で表示]のチェック	レコードの値
PI レコードタイプ	Yes	リアルタイムデータ	あり	変化量が表示される。
			なし	変化量が表示される。
		<ul style="list-style-type: none"> • 履歴データ • アラームの監視データ 	-	変化量が表示される。
	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		<ul style="list-style-type: none"> • 履歴データ • アラームの監視データ 	-	収集時点の値が表示される。
PD レコードタイプ	Yes	リアルタイムデータ	あり	変化量が表示される。
			なし	累積値が表示される。
		<ul style="list-style-type: none"> • 履歴データ • アラームの監視データ 	-	累積値が表示される。
	No	リアルタイムデータ	あり	収集時点の値が表示される。
			なし	収集時点の値が表示される。
		<ul style="list-style-type: none"> • 履歴データ • アラームの監視データ 	-	収集時点の値が表示される。

(凡例)

- : 該当しない

注

次に示す PFM - Web Console のダイアログボックスの項目でチェックされていることを示します。

- レポートウィザードの [編集 > 表示設定 (リアルタイムレポート)] 画面の [デルタ値で表示]

- レポートウィンドウの [Properties] タブの [表示設定 (リアルタイムレポート)] の [デルタ値で表示]

パフォーマンスデータが収集される際の注意事項を次に示します。

- PI レコードタイプのレコードが保存されるためには、2 回以上パフォーマンスデータが収集されている必要があります。
PI レコードタイプのレコードには、PFM - Web Console で設定した収集間隔ごとにパフォーマンスデータが収集されます。しかし、パフォーマンスデータの Store データベースへの格納は、PFM - Web Console でパフォーマンスデータの収集の設定をした時点では実行されません。
PI レコードタイプの履歴データには、前回の収集データとの差分を必要とするデータ (デルタ値) が含まれているため、2 回分のデータが必要になります。このため、履歴データが Store データベースに格納されるまでには、設定した時間の最大 2 倍の時間が掛かります。
例えば、PFM - Web Console でパフォーマンスデータの収集間隔を、18:32 に 300 秒 (5 分) で設定した場合、最初のデータ収集は 18:35 に開始されます。次のデータ収集は 18:40 に開始されます。履歴のデータは、18:35 と 18:40 に収集されたデータを基に作成され、18:40 に (設定時 18:32 から 8 分後) 履歴データとして Store データベースに格納されます。
- リアルタイムレポートには、最初にデータが収集されたときから値が表示されます。ただし、前回のデータを必要とするレポートの場合、初回の値は 0 で表示されます。2 回目以降のデータ収集は、レポートによって動作が異なります。
- 次の場合、2 回目のデータ収集以降は、収集データの値が表示されます。
 - PI レコードタイプのリアルタイムレポートの設定で、[デルタ値で表示] がチェックされていない場合
 - PD レコードタイプのリアルタイムレポートの設定で、[デルタ値で表示] がチェックされている場合
- 次の場合、2 回目のデータ収集では、1 回目のデータと 2 回目のデータの差分が表示されます。3 回目以降のデータ収集では、収集データの値が表示されます。
 - PI レコードタイプのリアルタイムレポートの設定で、[デルタ値で表示] がチェックされている場合
- PFM - RM for Oracle 起動中に、監視対象の Oracle の再起動、または Oracle 起動中のリソースの再割り当てなどが行なわれると、収集データの値が「マイナス値」となる場合があります。しかし、2 回目以降のデータに関しては、データの差分として、0 以上の値となります。

5. レコード

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールドを次の表に示します。

表 5-7 Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	形式	デルタ	サポート バージョ ン	データソース
RM Host (DEVICEID)	PFM・RM が動作している ホスト名。	string(256)	No	すべて	-
RM Instance (PROD_INS T)	PFM・RM のインスタンス 名。	string(256)	No	すべて	-
RM Type (PRODID)	PFM・RM のプロダクト ID。1 バイトの識別子で表 される。	char	No	すべて	-
Date (DATE)	レコードが作成された日。 グリニッジ標準時。 ¹	char(3)	No	すべて	-
Date and Time (DATETIME)	Date (DATE) フィールド と Time (TIME) フィール ドの組み合わせ。	char(6)	No	すべて	-
Drawer Type (DRAWER_T YPE)	PI レコードタイプのレコー ドの場合、データが要約さ れる区分。PFM・Web Console のレポートで表示 する場合と ODBC ドライバ を使用して表示する場合と で、区分の表示が異なる。 ²	char	No	すべて	-
GMT Offset (GMT_ADJU ST)	グリニッジ標準時とローカ ル時間の差。秒単位。	long	No	すべて	-
Time (TIME)	レコードが作成された時刻。 グリニッジ標準時。 ¹	char(3)	No	すべて	-

(凡例)

- : Oracle から取得したパフォーマンスデータを加工してフィールドの値を設定して
いないことを意味します。

注 1

PI レコードタイプのレコードでは、データが要約されるため、要約される際の基準
となる時刻が設定されます。レコード区分ごとの設定値を次の表に示します。

表 5-8 レコード区分ごとの設定値

区分	レコード区分ごとの設定値
分	レコードが作成された時刻の 0 秒
時	レコードが作成された時刻の 0 分 0 秒
日	レコードが作成された日の 0 時 0 分 0 秒
週	レコードが作成された週の月曜日の 0 時 0 分 0 秒
月	レコードが作成された月の 1 日の 0 時 0 分 0 秒
年	レコードが作成された年の 1 月 1 日の 0 時 0 分 0 秒

注 2

PFM - Web Console のレポートで表示する場合と ODBC ドライバを使用して表示する場合の違いを次の表に示します。

表 5-9 表示方法によるデータ要約区分の違い

区分	PFM - Web Console	ODBC ドライバ
分	Minute	m
時	Hour	H
日	Day	D
週	Week	W
月	Month	M
年	Year	Y

Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド

jpctool db dump コマンドで、Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると、次のフィールドが出力されます。これらのフィールドも、Store データベースにデータが格納される際追加されますが、PFM・RM が内部で使用するため、レポートに表示するフィールドとして使用できません。運用で使用しないでください。

- レコード ID_DATE_F
- レコード ID_DEVICEID_F
- レコード ID_DRAWER_TYPE_F
- レコード ID_DRAWER_COUNT
- レコード ID_DRAWER_COUNT_F
- レコード ID_INST_SEQ
- レコード ID_PRODID_F
- レコード ID_PROD_INST_F
- レコード ID_RECORD_TYPE
- レコード ID_RECORD_TYPE_F
- レコード ID_SEVERITY
- レコード ID_SEVERITY_F
- レコード ID_TIME_F
- レコード ID_UOWID
- レコード ID_UOWID_F
- レコード ID_UOW_INST
- レコード ID_UOW_INST_F
- レコード ID_PFM - Manager 名_COUNT
- レコード ID_PFM - Manager 名_SEC
- レコード ID_PFM - Manager 名_MSEC

レコードの注意事項

レコードを収集する場合の注意事項を次に示します。

データを取得できない場合のレコード生成結果

フィールドに格納するデータを取得できない場合のレコード生成結果について説明します。

レコードが生成されない

次の場合、レコードは生成されません。

- ODBC キーフィールドとして定義されたフィールドに格納するパフォーマンスデータを PFM・RM for Oracle が収集できない場合
- Oracle の性能値を表すフィールドに格納するパフォーマンスデータを PFM・RM for Oracle が収集できない場合

レコード一覧

ここでは、PFM - RM for Oracle で収集できるレコードの一覧を記載します。

PFM - RM for Oracle で収集できるレコードおよびそのレコードに格納される情報を、レコード名順で次の表に示します。

表 5-10 PFM - RM for Oracle のレコード一覧

レコード名	レコード ID	格納される情報
Activity Summary	PD_PDAS	Oracle の稼働状況についての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Collection Instance 2	PD_PCI	インスタンスについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Collection Tablespace 2	PD_PCTS	データベース中のテーブルスペースについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Data File	PD_PDDF	データファイルについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Data File Interval	PI_PIDF	データファイルについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
Database	PD_PDDB	ある時点での状態を示す次のパフォーマンスデータ。 <ul style="list-style-type: none"> データベースについての一般情報 テーブルスペースについての統計情報 データファイルについての統計情報
Database Interval	PI_PIDB	データベースについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
Instance	PD_PDI	インスタンスについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Instance Availability	PD_PDIA	インスタンスの有効性についての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Lock Waiters	PD_PDLW	ロックを待機しているすべてのセッションおよびロックを保留中のセッションについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Minimum Database Interval 2	PI_PMDB	データベースについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
Minimum Data File Interval 2	PI_P MDF	データファイルについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
Minimum Tablespace Interval 2	PI_PMTS	データベース中のテーブルスペースについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
Open Cursor	PD_PDOC	カーソルについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Parameter Values	PD_PDP	現在のパラメーター値についての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Session Detail	PD_PDS	セッションについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。

レコード名	レコード ID	格納される情報
Session I/O Interval	PI_PIIO	すべてのアクティブ・セッションの I/O についての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
Session Statistics Summary	PD_PDS2	インスタンスの各セッションおよびパフォーマンス・インジケータについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
SGA Components	PD_PDSG	システム・グローバル・エリア (SGA) についての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
SQL Text	PD_PDSQ	共有カーソル・キャッシュにあるカーソルの SQL テキストについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
System Stat Summary	PD	インスタンスを開始してからのキー・パフォーマンス・インジケータについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
System Stat Summary Interval	PI	インスタンスを開始してからのキー・パフォーマンス・インジケータについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
Tablespace	PD_PDTS	データベース中のテーブルスペースについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Tablespace Fragmentation	PD_PDTF	テーブルスペースのフラグメンテーションについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Tablespace Interval	PI_PITS	データベース中のテーブルスペースについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータ。
Transaction	PD_PDTR	トランザクションについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Transaction Lock	PD_PDTL	トランザクション・ロックについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ。
Database Link	PD_PDDL	予約レコードのため使用できない。
Ping Activity Interval	PI_PIPP	
SQL*Net Handler	PD_PDNH	

Activity Summary (PD_PDAS)

機能

Activity Summary (PD_PDAS) レコードには、システムの稼働状況についての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	300	
Collection Offset	30	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

Oracle インスタンスの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：838 バイト

可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Active Transactions (ACTIVE_TRA NSACTIONS)	アクティブ・セッションのアクティブ・トランザクション数。	-	long	No	すべて	SUM(V\$ROLLSTAT.XACTS)
Avg Wait (AVERAGE_W AIT)	すべてのセッションのすべてのイベントに対する平均待機時間。	-	ulong	No	すべて	AVG(V\$SESSION_EVENT.AVERAGE_WAIT)
Avg Wait String (AVERAGE_W AIT_STRING)	すべてのセッションのすべてのイベントに対する平均待機時間 (文字列)。	-	string(20)	No	すべて	AVG(V\$SESSION_EVENT.AVERAGE_WAIT)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Cursor Open Hit % (CURSOR_OPEN_HIT_PERCENTAGE)	カーソルを検索してオープン・カーソルが見つかった割合。	-	double	No	すべて	V\$SYSTEM_CURSOR_CACHE_HIT_RATIO * 100
Cursor Open Hits (CURSOR_OPEN_HITS)	カーソル・オープン・ヒットの合計。	-	ulong	No	すべて	V\$SYSTEM_CURSOR_CACHE_HITS
Cursor Opens (CURSOR_OPENENS)	カーソル・オープンの合計。	-	ulong	No	すべて	V\$SYSTEM_CURSOR_OPENENS
DML Locks % (PERCENT_DML_LOCKS)	init.ora ファイルの DML_LOCKS パラメーターに対する DML ロックの割合。	-	double	No	すべて	(COUNT(DBA_DML_LOCKS) / init.ora DML_LOCKS) * 100
DML Locks Held (DML_LOCKS_HELD)	現在の DML ロック数。	-	long	No	すべて	COUNT(DBA_DML_LOCKS)
Enqueue Resources % (PERCENT_ENQUEUE_RESOURCES)	init.ora ファイルの ENQUEUE_RESOURCES パラメーターに対するロックの割合。 監視対象が Oracle 10g Release2 以降のインスタンスの場合、常に 0 となる。	-	double	No	すべて	(COUNT(V\$LOCK) where V\$LOCK.LMODE is NOT NULL / init.ora ENQUEUE_RESOURCES) * 100
Locks Held (LOCKS_HELD)	現在のロック数。	-	long	No	すべて	COUNT(V\$LOCK) where V\$LOCK.LMODE is NOT NULL
Open Cursors (OPEN_CURSORS)	現在のオープン・カーソル数。	-	long	No	すべて	COUNT(V\$OPEN_CURSOR)
Open Cursors % (PERCENT_OPEN_CURSORS)	init.ora ファイルの OPEN_CURSORS パラメーターに対するオープン・カーソルの割合。	-	double	No	すべて	(COUNT(V\$OPEN_CURSOR) / init.ora OPEN_CURSORS) * 100

5. レコード

Activity Summary (PD_PDAS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Processes (PROCESSES)	現在の Oracle プロ セス数。	-	short	No	すべて	COUNT(V\$PRO CESS)
Processes % (PERCENT_P ROCESSES)	init.ora ファイ ルの PROCESSES パ ラメーターに対す るプロセスの割合。	-	double	No	すべて	(COUNT(V\$PRO CESS) / init.ora PROCESSES) * 100
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集終 了時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PDAS」。	-	string(4)	No	すべて	RM Collector
Session Events (SESSION_EV ENTS)	セッションが待機 しているイベント 数。	-	ulong	No	すべて	COUNT(V\$SESS ION_EVENT)
Session Waits (SESSION_W AITS)	各セッションの待 機数。	-	short	No	すべて	COUNT(V\$SESS ION_WAIT)
Sessions (SESSIONS)	現在のセッション 数。	-	short	No	すべて	COUNT(V\$SESS ION)
Sessions % (PERCENT_S SESSIONS)	init.ora ファイ ルの SESSIONS パ ラメーターに対す るセッションの割 合。	-	double	No	すべて	(COUNT(V\$SES SION) / init.ora SESSIONS) * 100
Start Time (START_TIM E)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集開 始時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
System Sessions (SESSIONS_S YSTEM)	現在のシステム・ セッション数。	-	short	No	すべて	COUNT(V\$SESS ION) where V\$SESSION.TYP E <> 'USER'
Table Accesses (TABLE_ACC ESSES)	現在のテーブル・ アクセス数。	-	long	No	すべて	COUNT(V\$ACC ESS)
Time Waited (TIME_WAIT ED)	すべてのセッション がすべてのイベ ントを待機させ ていた合計時間。	-	double	No	すべて	SUM(V\$SESSIO N_EVENT.TIME _WAITED)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Time Waited String (TIME_WAIT ED_STRING)	すべてのセッションがすべてのイベントを待機させていた合計時間 (文字列)	-	string(20)	No	すべて	SUM(V\$SESSIO N_EVENT.TIME _WAITED)
Total Timeouts (TOTAL_TIM EOUTS)	すべてのセッションのすべてのイベントに対する合計タイムアウト時間。	-	ulong	No	すべて	SUM(V\$SESSIO N_EVENT.TOTA L_TIMEOUTS)
Total Waits (TOTAL_WAI TS)	すべてのセッションのすべてのイベントに対する待機数。	-	ulong	No	すべて	SUM(V\$SESSIO N_EVENT.TOTA L_WAITS)
Transactions % (PERCENT_T RANSACTION S)	init.ora ファイルの TRANSACTIONS パ ラメーターに対す るトランザクショ ン数の割合。	-	double	No	すべて	(SUM(V\$ROLLS TAT.XACTS) / init.ora TRANSACTION) * 100
User Sessions (SESSIONS_U SER)	現在のユーザー・ セッション数。	-	short	No	すべて	COUNT(V\$SESS ION) where V\$SESSION.TYP E = 'USER'
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェント のデバイス ID。	-	string(256)	No	すべて	RM Collector

Collection Instance 2 (PD_PCI)

機能

Collection Instance 2 (PD_PCI) レコードには、インスタンスについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	40	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

Oracle インスタンスの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：1,017 バイト

可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Host (HOST)	接続しているインスタンスが起動されている、物理ホスト名。	-	string (30)	No	すべて	V\$INSTANCE.HOST_NAME
ORACLE_HOME (ORACLE_HOME)	ORACLE_HOME 環境変数。	-	string (255)	No	すべて	-
ORACLE_SID (ORACLE_SID)	ORACLE_SID 環境変数。	-	string (30)	No	すべて	-

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集終了時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PCI」。	-	string (4)	No	すべて	RM Collector
Start Time (START_TIM E)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集開始時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェントの デバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector
Version (VERSION)	Oracle Database の バージョン。	-	string (20)	No	すべて	PRODUCT_COM PONENT_VERSI ON

Collection Tablespace 2 (PD_PCTS)

機能

Collection Tablespace 2 (PD_PCTS) レコードには、データベース中のテーブルスペースについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。データベース中のテーブルスペースごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	
Collection Offset	30	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

PD_PCTS_TABLESPACE_NAME

ライフタイム

テーブルスペースの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：47 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Free Mbytes (FREE_BYTE S)	空き領域。メガバイ ト単位。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> • ディクショナリ管理永続表領域，ローカル管理永続表領域，またはディクショナリ管理一時表領域の場合 SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) / (1024 * 1024) • ローカル管理一時表領域で，localtemp_option=Y の場合 SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED) / (1024 * 1024) • ローカル管理一時表領域で，localtemp_option=N の場合 SUM(V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE) / (1024 * 1024)
Mbytes (BYTES)	テーブルスペース容 量。メガバイト単 位。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> • ディクショナリ管理永続表領域，ローカル管理永続表領域，またはディクショナリ管理一時表領域の場合 SUM(DBA_DATA_FILES.BYTES) / (1024 * 1024) • ローカル管理一時表領域の場合 SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES) / (1024 * 1024)

5. レコード

Collection Tablespace 2 (PD_PCTS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集終了時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「 PCTS 」。	-	string (4)	No	すべて	RM Collector
Start Time (START_TIM E)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集開始時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Tablespace Name (TABLESPAC E_NAME)	テーブルスペース 名。	-	string (30)	No	すべて	DBA_TABLESPA CES.TABLESPA CE_NAME
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェントの デバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector

Data File (PD_PDDF)

機能

Data File (PD_PDDF) レコードには、データファイルについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。データベースのデータファイルごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	300	
Collection Offset	10	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

- PD_PDDF_FILE_NUM
- PD_PDDF_NAME

ライフタイム

データファイルの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：408 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポー ト VR	データソース
Blocks (BLOCKS)	Oracle ブロック・ サイズ。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 DBA_DATA_FILES.BLOCKS ローカル管理一時表領域の場合 DBA_TEMP_FILES.BLOCKS
Checkpoint Change # (CHECKPOINT_CHANGE_NUMBER)	最後のチェックポイントのシステム変更番号 (SCN : System Change Number)	-	ulong	No	すべて	V\$DATAFILE.CHECKPOINT_CHANGE#
Enabled (ENABLED)	SQL でファイルにアクセスする方法を示す。このフィールドの値は、次のとおり。 DISABLED READ ONLY READ WRITE UNKNOWN	-	string (10)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE.ENABLED ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE.ENABLED
File # (FILE_NUM)	ファイル識別番号。	-	short	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE.FILE# ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE.FILE#

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポート VR	データソース
File Name (NAME)	ファイル名。	-	string (255)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE. NAME ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE. NAME
Free % (PERCENT_F REE)	空き領域の割合。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 (SUM(DBA_FR EE_SPACE.BY TES) / V\$DATAFILE. BYTES) * 100 ローカル管理一時表領域で, localtemp_opti on=Y の場合 ((V\$TEMPFIL E.BYTES - V\$TEMP_EXT ENT_POOL.B YTES_USED) / V\$TEMPFILE. BYTES) * 100 ローカル管理一時表領域で, localtemp_opti on=N の場合 (V\$TEMP_SPA CE_HEADER / V\$TEMPFILE. BYTES) * 100

5. レコード

Data File (PD_PDDF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Free Mbytes (FREE)	空き領域。メガバイト単位。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域で, localtemp_option=Y の場合 (V\$TEMPFILE.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED) / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域で, localtemp_option=N の場合 (V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE) / (1024 * 1024)
MBytes (BYTES)	ファイルシステム上のディスク占有量。メガバイト単位。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE.BYTES / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE.BYTES / (1024 * 1024)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Physical Blocks Read (PHYSICAL_ BLOCKS_REA D)	物理ブロック読み込 み処理の数。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域, ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 V\$FILESTAT.P HYBLKRD ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPSTAT. PHYBLKRD
Physical Blocks Written (PHYSICAL_ BLOCKS_WRI TTEN)	物理ブロック書き込 み処理の数。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域, ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 V\$FILESTAT.P HYBLKWRT ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPSTAT. PHYBLKWRT
Physical Reads (PHYSICAL_ READS)	完了した物理読み込 み処理の数。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域, ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 V\$FILESTAT.P HYRDS ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPSTAT. PHYRDS

5. レコード

Data File (PD_PDDF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Physical Writes (PHYSICAL_ WRITES)	完了した物理書き込 み処理の数。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域, ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 V\$FILESTAT.P HYWRTS ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPSTAT. PHYWRTS
Read Time (READ_TIME)	読み込み処理時間。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域, ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 V\$FILESTAT. READTIM ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPSTAT. READTIM
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集終了時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PDDF」。	-	string (4)	No	すべて	RM Collector
Start Time (START_TIM E)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集開始時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポート VR	データソース
Status (STATUS)	ファイルの種類 (シ ステムファイルまた はユーザーファイ ル) と状態 (「 OFFLINE 」 , 「 SYSOFF 」 , 「 ONLINE 」 , 「 SYSTEM 」 , およ び 「 RECOVER 」) .	-	string (7)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域 , ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 V\$DATAFILE. STATUS ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPFILE. STATUS
Tablespace Name (TABLESPAC E_NAME)	ファイルが関連づけ られているテーブル スペース名。	-	string (30)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域 , ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 DBA_DATA_FI LES.TABLESP ACE_NAME ローカル管理一 時表領域の場合 DBA_TEMP_F ILES.TABLES PACE_NAME

5. レコード

Data File (PD_PDDF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポー ト VR	データソース
Used Mbytes (USED)	使用済み領域。メガ バイト単位。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 (V\$DATAFILE.BYTES - SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES)) / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域で, localtemp_option=Y の場合 (V\$TEMPFILE.BYTES - (V\$TEMPFILE.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED)) / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域で, localtemp_option=N の場合 (V\$TEMPFILE.BYTES - V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE) / (1024 * 1024)
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェントの デバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Write % (WRITE_PER CENTAGE)	書き込み処理率。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 (V\$FILESTAT.PHYWRSTS / (V\$FILESTAT.PHYRDS + V\$FILESTAT.PHYWRSTS)) * 100 ローカル管理一時表領域の場合 ((V\$TEMPSTAT.PHYWRSTS / (V\$TEMPSTAT.PHYRDS + V\$TEMPSTAT.PHYWRSTS)) * 100
Write Time (WRITE_T IME)	書き込み処理時間。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$FILESTAT.WRITETIM ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPSTAT.WRITETIM

Data File Interval (PI_PIDF)

機能

Data File Interval (PI_PIDF) レコードには、データファイルについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。データベースのデータファイルごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	300	
Collection Offset	40	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

- PI_PIDF_FILE_NUM
- PI_PIDF_NAME

ライフタイム

データファイルの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：632 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポー ト VR	データソース
Blocks (BLOCKS)	Oracle ブロック・ サイズ。 ¹	COPY	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 DBA_DATA_FILES.BLOCKS ローカル管理一時表領域の場合 DBA_TEMP_FILES.BLOCKS
Checkpoint Change # (CHECKPOINT_CHANGE_NUMBER)	最後のチェックポイントのシステム変更番号 (SCN : System Change Number) ¹ 。	COPY	double	No	すべて	V\$DATAFILE.CHECKPOINT_CHANGE#
Enabled (ENABLED)	SQL でファイルにアクセスする方法を示す。このフィールドの値は, 次のとおり。 ¹ DISABLED READ ONLY READ WRITE UNKNOWN	COPY	string (10)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE.ENABLED ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE.ENABLED
File # (FILE_NUM)	ファイル識別番号。 ¹	COPY	ushort	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE.FILE# ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE.FILE#

5. レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
File Name (NAME)	ファイル名。 ¹	COPY	string (255)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE. NAME ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE. NAME
Free % (PERCENT_F REE)	空き領域の割合。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 (SUM(DBA_FR EE_SPACE.BY TES) / V\$DATAFILE. BYTES) * 100 ローカル管理一時表領域で, localtemp_opti on=Y の場合 ((V\$TEMPFIL E.BYTES - V\$TEMP_EXT ENT_POOL.B YTES_USED) / V\$TEMPFILE. BYTES) * 100 ローカル管理一時表領域で, localtemp_opti on=N の場合 (V\$TEMP_SPA CE_HEADER / V\$TEMPFILE. BYTES) * 100

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Free Change (FREE_CHAN GE)	空き領域の変化量 (今回取得した値と 前回取得した値の差 分)。メガバイト単 位。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域, ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 SUM(DBA_FR EE_SPACE.BY TES) / (1024 * 1024) ローカル管理一 時表領域で, localtemp_opti on=Y の場合 (V\$TEMPFILE .BYTES - V\$TEMP_EXT ENT_POOL.B YTES_USED) / (1024 * 1024) ローカル管理一 時表領域で, localtemp_opti on=N の場合 (V\$TEMP_SPA CE_HEADER. BYTES_FREE) / (1024 * 1024)

5. レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ー ト VR	データソース
Free Mbytes (FREE_BYTE S)	空き領域。メガバイト単位。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域で、localtemp_option=Y の場合 (V\$TEMPFILE.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED) / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域で、localtemp_option=N の場合 (V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE) / (1024 * 1024)
I/O Ops/sec (IO_RATE)	1 秒当たりの I/O 回数。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 (V\$FILESTAT.PHYRDS + V\$FILESTAT.PHYWRTS) / seconds in interval ローカル管理一時表領域の場合 (V\$TEMPSTAT.PHYRDS + V\$TEMPSTAT.PHYWRTS) / seconds in interval

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Mbytes (BYTES)	ファイルシステム上のディスク占有量。 メガバイト単位。 ¹	COPY	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE. BYTES / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE. BYTES / (1024 * 1024)
Physical Blocks Read (PHYSICAL_ BLOCKS_ READ)	インターバル中の物理ブロック読み込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$FILESTAT.PHYBLKRD ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPSTAT.PHYBLKRD
Physical Blocks Written (PHYSICAL_ BLOCKS_ WRITTEN)	インターバル中の物理ブロック書き込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$FILESTAT.PHYBLKWRT ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPSTAT.PHYBLKWRT

5. レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Physical Reads (PHYSICAL_ READS)	インターバル中に完了した物理読み込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$FILESTAT.PHYRDS ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPSTAT.PHYRDS
Physical Writes (PHYSICAL_ WRITES)	インターバル中に完了した物理書き込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$FILESTAT.PHYWRTS ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPSTAT.PHYWRTS
Read Time (READ_TIME)	init.ora ファイルの TIMED_STATISTICS パラメーターが 「TRUE」のときインター バル中の読み込み 処理時間、 「FALSE」のとき 「0」を示す。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$FILESTAT.READTIM ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPSTAT.READTIM

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Reads/sec (READ_RATE)	1 秒当たりの読み込み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$FILESTAT.PHYRDS / seconds in interval ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPSTAT.PHYRDS / seconds in interval
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PIDF」。 ¹	COPY	string (4)	No	すべて	RM Collector
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Status (STATUS)	ファイルの種類 (システムファイルまたはユーザーファイル) と状態 (「OFFLINE」, 「SYSOFF」, 「ONLINE」, 「SYSTEM」, および 「RECOVER」)。 ¹	COPY	string (7)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE.STATUS ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE.STATUS

5. レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Tablespace Name (TABLESPAC E_NAME)	ファイルが関連づけ られているテーブル スペース名。 ¹	COPY	string (30)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域、ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 DBA_DATA_FI LES.TABLESP ACE_NAME ローカル管理一 時表領域の場合 DBA_TEMP_F ILES.TABLES PACE_NAME
Used Change (USED_CHAN GE)	使用済み領域 (今回 取得した値と前回取 得した値の差分)。 メガバイト単位。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域、ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 (V\$DATAFILE. BYTES - SUM(DBA_FR EE_SPACE.BY TES)) / (1024 * 1024) ローカル管理一 時表領域で、 localtemp_opti on=Y の場合 (V\$TEMPFILE .BYTES - (V\$TEMPFILE .BYTES - V\$TEMP_EXT ENT_POOL.B YTES_USED)) / (1024 * 1024) ローカル管理一 時表領域で、 localtemp_opti on=N の場合 (V\$TEMPFILE .BYTES - V\$TEMP_SPA CE_HEADER. BYTES_FREE) / (1024 * 1024)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Used Mbytes (USED_BYTE S)	使用済み領域の変化 量。メガバイト単 位。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域, ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 (V\$DATAFILE. BYTES - SUM(DBA_FR EE_SPACE.BY TES)) / (1024 * 1024) ローカル管理一 時表領域で, localtemp_opti on=Y の場合 (V\$TEMPFILE .BYTES - (V\$TEMPFILE .BYTES - V\$TEMP_EXT ENT_POOL.B YTES_USED)) / (1024 * 1024) ローカル管理一 時表領域で, localtemp_opti on=N の場合 (V\$TEMPFILE .BYTES - V\$TEMP_SPA CE_HEADER. BYTES_FREE) / (1024 * 1024)
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェントの デバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector

5. レコード

Data File Interval (PI_PIDF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ- ト VR	データソース
Write % (WRITE_PER CENTAGE)	書き込み処理率。 2	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 (V\$FILESTAT.PHYWRSTS / (V\$FILESTAT.PHYRDS + V\$FILESTAT.PHYWRSTS)) * 100 ローカル管理一時表領域の場合 ((V\$TEMPSTAT.PHYWRSTS / (V\$TEMPSTAT.PHYRDS + V\$TEMPSTAT.PHYWRSTS)) * 100
Write Time (WRITE_TIM E)	init.ora の TIMED_STATISTICS パラメーターが 「TRUE」のときイン ターバル中の書き込 み処理時間, 「FALSE」のとき 「0」を示す。 2	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ディクショナリー管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$FILESTAT.WRITETIM ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPSTAT.WRITETIM

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Writes/sec (WRITES_RA TE)	1 秒当たりの書き込 み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域, ディク ショナリー管理 一時表領域また はローカル管理 永続表領域の場 合 V\$FILESTAT.P HYWRTS / seconds in interval ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPSTAT. PHYWRTS / seconds in interval

Database (PD_PDDB)

機能

Database (PD_PDDB) レコードには、ある時点での状態を示す次のパフォーマンスデータが格納されます。

- データベースについての一般情報
- テーブルスペースについての統計情報
- データファイルについての統計情報

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	
Collection Offset	20	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

データベースの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部 : 874 バイト

可変部 : 0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Archive Change # (ARCHIVE_C HANGE_NUM)	アーカイブされた最後のシステム変更番号 (SCN : System Change Number)	-	double	No	すべて	V\$DATABASE.ARCHIVE_CHANGE#

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポート VR	データソース
Blocks (BLOCKS)	テーブルスペース容 量。単位は Oracle ブロック。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一 時表領域がない 場合 SUM(DBA_DA TA_FILES.BL OCKS) ローカル管理一 時表領域がある 場合 SUM(DBA_DA TA_FILES.BL OCKS) + SUM(DBA_TE MP_FILES.BL OCKS)
Checkpoint Change # (CHECKPOIN T_CHANGE_N UM)	最後のチェックポイ ントのシステム変更 番号 (SCN : System Change Number)	-	ulong	No	すべて	V\$DATABASE.C HECKPOINT_C HANGE#
Created (CREATED)	作成日付。	-	string (20)	No	すべて	V\$DATABASE.C REATED
DB Files % (PERCENT_D B_FILES)	init.ora ファイ ルの DB_FILES パ ラメーターに対する データファイルの割 合。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一 時表領域がない 場合 (COUNT(V\$DA TAFILE) / init.ora DB_FILES) * 100 ローカル管理一 時表領域がある 場合 ((COUNT(V\$D ATAFILE) + COUNT(DBA_ TEMP_FILES)) / init.ora DB_FILES) * 100
DB Name (NAME)	データベース名。	-	string (9)	No	すべて	V\$DATABASE.N AME

5. レコード

Database (PD_PDDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Datafiles (DATAFILES)	データファイル数。	-	short	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 COUNT(V\$DATAFILE) ローカル管理一時表領域がある場合 COUNT(V\$DATAFILE) + COUNT(DBA_TEMP_FILES)
Extents (EXTENTS)	このフィールドは正しい値を収集できない。 エクステント数。	-	long	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 SUM(DBA_SEGMENTS.EXTENTS) ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=Y の場合 SUM(DBA_SEGMENTS.EXTENTS) + SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES / V\$TEMP_EXTENT_MAP.BYTES) ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=N の場合 SUM(DBA_SEGMENTS.EXTENTS) + SUM(V\$SORT_SEGMENT.TOTAL_EXTENTS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Free % (PERCENT_F REE)	空き領域の割合。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) / DBA_DATA_FILES.BYTES) * 100 ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=Y の場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) + SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES) - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED) / (DBA_DATA_FILES.BYTES + DBA_TEMP_FILES.BYTES) * 100 ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=N の場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) + SUM(V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE)) / (DBA_DATA_FILES.BYTES + DBA_TEMP_FILES.BYTES) * 100

5. レコード

Database (PD_PDDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ー ト VR	データソース
Free Extents (FREE_EXTE NTS)	空きエクステン ト 数。	-	long	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> • ローカル管理一時表領域がない場合 COUNT(DBA_FREE_SPACE) • ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=Y の場合 COUNT(DBA_FREE_SPACE) + SUM((DBA_TEMP_FILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED) / V\$TEMP_EXTENT_MAP.BYTES) • ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=N の場合 COUNT(DBA_FREE_SPACE) + COUNT(V\$TEMP_SPACE_HEADER)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ー ト V R	デー タ ソ ー ス
Free Mbytes (FREE_BYTE S)	空き領域。メガバイト単位。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> • ローカル管理一時表領域がない場合 SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) / (1024 * 1024) • ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=Y の場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) + SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED)) / (1024 * 1024) • ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=N 場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) + SUM(V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE)) / (1024 * 1024)

5. レコード

Database (PD_PDDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ー ト VR	データソース
High Max Extents (HIGH_MAX_ EXTENTS)	このフィールドは正しい値を収集できない。 PCT_MAX_EXTE NTS が 90% を超えるセグメント数。	-	short	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) where DBA_SEGMENTS.EXTENTS > 0.9 * DBA_SEGMENTS.MAX_EXTENTS ローカル管理一時表領域がある場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) where DBA_SEGMENTS.EXTENTS > 0.9 * DBA_SEGMENTS.MAX_EXTENTS + COUNT(V\$SORT_SEGMENT)) where V\$SORT_SEGMENTS.TOTAL_EXTENTS > 0.9 * V\$SORT_SEGMENT.MAX_SIZE
Links (LINKS)	このフィールドは、サポート対象外である。 データベース・リンク数。	-	short	No	対象外	COUNT(V\$DBLINK)
Links In Tran (LINKS_IN_TRANSACTION)	このフィールドは、サポート対象外である。トランザクション中の現在のデータベース・リンク数。	-	short	No	対象外	SUM(V\$DBLINK.IN_TRANSACTION)
Links Logged On (LINKS_LOGGED_ON)	このフィールドは、サポート対象外である。現在ログインしているデータベース・リンク数。	-	short	No	対象外	SUM(V\$DBLINK.LOGGED_ON)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Links Open Cursors (LINKS_OPE N_CURSORS)	このフィールドは、サポート対象外である。オープン・カーソルがあるデータベース・リンク数。	-	short	No	対象外	SUM(V\$DBLINK.OPEN_CURSOR S)
Log Files % (PERCENT_L OG_FILES)	init.ora ファイルの LOG_FILES パラメータに対する REDO ログファイルの割合。 このフィールドは正しい値を収集できない。常に 0 となる。	-	double	No	すべて	-
Log Mode (LOG_MODE)	アーカイブ・ログ・モード。このフィールドで有効な値は、「NOARCHIVELOG」および「ARCHIVELOG」。	-	string (12)	No	すべて	V\$DATABASE.L OG_MODE
Mbytes (BYTES)	データベース・ファイル容量。メガバイト単位。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 SUM(DBA_DATA_FILES.BYTES) / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域がある場合 (SUM(DBA_DATA_FILES.BYTES) + SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES)) / (1024 * 1024)
Next Alloc Fails (NEXT_ALLO C_FAILURES)	このフィールドは正しい値を収集できない。 NEXT_EXTENT が最大で利用できるフラグメントを超えるセグメント数。ローカル管理表領域の場合、常に 0 となる。	-	short	No	すべて	COUNT(DBA_SEGMENTS) where NEXT_EXTENT > MAX(FETS\$.LENGTH) * DB_BLOCK_SIZE

5. レコード

Database (PD_PDDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Overextended (OVEREXTE NDED)	このフィールドは正しい値を収集できない。 エクステント数が5個を超えるセグメント数。	-	short	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) where EXTENTS > 5 ローカル管理一時表領域がある場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) where EXTENTS > 5 + COUNT(V\$SORT_SEGMENT)) where TOTAL_EXTE NTS > 5
Physical Blocks Read (PHYSICAL_ BLOCKS_REA D)	物理ブロック読み込み処理の数。	-	double	No	すべて	SUM(V\$FILESTAT.PHYBLKRD)
Physical Blocks Written (PHYSICAL_ BLOCKS_WRI TTEN)	物理ブロック書き込み処理の数。	-	double	No	すべて	SUM(V\$FILESTAT.PHYBLKWRT)
Physical Reads (PHYSICAL_ READS)	完了した物理読み込み処理の数。	-	double	No	すべて	SUM(V\$FILESTAT.PHYRDS)
Physical Writes (PHYSICAL_ WRITES)	完了した物理書き込み処理の数。	-	double	No	すべて	SUM(V\$FILESTAT.PHYWRTS)
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に「PDDB」。	-	string (4)	No	すべて	RM Collector
Redo Files (REDO_FILE S)	REDO ログファイル数。	-	short	No	すべて	COUNT(V\$LOGFILE)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Rollback Segments (ROLLBACK_ SEGMENTS)	ロールバック・セグ メント数。	-	short	No	すべて	COUNT(V\$ROLL NAME)
Rollback Segments Hit % (ROLLBACK_ SEGMENTS_H IT_PERCENTA GE)	待機しないでロー ルバック・セグメン ト・ヘッダーを取得 した割合。	-	double	No	すべて	((SUM(V\$ROLLS TAT.GETS) - SUM(V\$ROLLST AT.WAITS)) / SUM(V\$ROLLST AT.GETS)) * 100
Rollback Segments Trans (ROLLBACK_ SEGMENTS_T RANS)	現在のアクティブ・ トランザクション 数。	-	short	No	すべて	SUM(V\$ROLLST AT.XACTS)
Segments (SEGMENTS)	このフィールドは正 しい値を収集できな い。 セグメント数。	-	long	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> • ローカル管理一 時表領域がない 場合 COUNT(DBA_ SEGMENTS) • ローカル管理一 時表領域があ り、 localtemp_opti on=Y の場合 COUNT(DBA_ SEGMENTS) + COUNT(DBA_ TEMP_FILES GROUP BY TABLESPACE _NAME) • ローカル管理一 時表領域があ り、 localtemp_opti on=N の場合 COUNT(DBA_ SEGMENTS) + COUNT(V\$SO RT_SEGMENT)
Sort Segments (SORT_SEGM ENTS)	このフィールドは正 しい値を収集できな い。 ソート・セグメント 数。	-	short	No	すべて	COUNT(V\$SORT _SEGMENT)

5. レコード

Database (PD_PDDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Sorting Users (SORTING_U SERS)	現在のソート・セグ メントのアクティ ブ・ユーザー数。	-	long	No	すべて	SUM(V\$SORT_S EGMENT.CURR ENT_USERS)
Start Time (START_TIM E)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集開始時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Tablespaces (TABLESPAC ES)	テーブルスペース 数。	-	short	No	すべて	COUNT(DBA_TA BLESPPACES)
Used Mbytes (USED_BYTE S)	使用済み領域。メガ バイト単位。監視対 象がローカル管理一 時表領域のパフォー マンスデータは収集 しない。	-	double	No	すべて	SUM(sm\$ts_used .bytes) / (1024 * 1024)
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェントの デバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector
Write % (WRITE_PER CENTAGE)	書き込み処理率。	-	double	No	すべて	(SUM(V\$FILEST AT.PHYWRTS) / (SUM(V\$FILEST AT.PHYRDS) + SUM(V\$FILEST AT.PHYWRTS))) * 100

Database Interval (PI_PIDB)

機能

Database Interval (PI_PIDB) レコードには、データベースについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	
Collection Offset	10	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

データベースの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：1,398 バイト

可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポート VR	データソース
Archive Change # (ARCHIVE_C HANGE_NUM)	アーカイブされた最後のシステム変更番号 (SCN: System Change Number) 1	COPY	double	No	すべて	V\$DATABASE.ARCHIVE_CHANGE#

5. レコード

Database Interval (PI_PIDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Blocks (BLOCKS)	データベース容量。 単位は Oracle ブ ロック。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一 時表領域がない 場合 SUM(DBA_DA TA_FILES.BL OCKS) ローカル管理一 時表領域がある 場合 SUM(DBA_DA TA_FILES.BL OCKS) + SUM(DBA_TE MP_FILES.BL OCKS)
Checkpoint Change # (CHECKPOIN T_CHANGE_N UM)	最後のチェックポ イントのシステム変更 番号 (SCN : System Change Number) ¹	COPY	double	No	すべて	V\$DATABASE.C HECKPOINT_C HANGE#
Created (CREATED)	作成日付。 ¹	COPY	string (20)	No	すべて	V\$DATABASE.C REATED
DB Files % (PERCENT_D B_FILES)	init.ora ファ イルの DB_FILES パ ラメーターに対する データファイルの割 合。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一 時表領域がない 場合 (COUNT(V\$DA TAFILE) / init.ora DB_FILES) * 100 ローカル管理一 時表領域がある 場合 ((COUNT(V\$D ATAFILE) + COUNT(DBA_ TEMP_FILES))/ init.ora DB_FILES) * 100
DB Name (NAME)	データベース名。 ¹	COPY	string (9)	No	すべて	V\$DATABASE.N AME

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Datafiles (DATAFILES)	データファイル数。 2	AVG	ushort	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 COUNT(V\$DATAFILE) ローカル管理一時表領域がある場合 COUNT(V\$DATAFILE) + COUNT(DBA_TEMP_FILES)
Extents (EXTENTS)	このフィールドは正しい値を収集できない。 エクステント数。 2	AVG	ulong	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 SUM(DBA_SEGMENTS.EXTENTS) ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=Y の場合 SUM(DBA_SEGMENTS.EXTENTS) + SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES / V\$TEMP_EXTENT_MAP.BYTES) ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=N の場合 SUM(DBA_SEGMENTS.EXTENTS) + SUM(V\$SORT_SEGMENT.TOTAL_EXTENTS)

5. レコード

Database Interval (PI_PIDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ- ト VR	データソース
Free % (PERCENT_F REE)	空き領域の割合。 2	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) / DBA_DATA_FILES.BYTES) * 100 ローカル管理一時表領域があり、localtemp_option=Y の場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) + SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED)) / (DBA_DATA_FILES.BYTES + DBA_TEMP_FILES.BYTES)) * 100 ローカル管理一時表領域があり、localtemp_option=N 場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) + SUM(V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE)) / (DBA_DATA_FILES.BYTES + DBA_TEMP_FILES.BYTES)) * 100
Free Change (FREE_CHAN GE)	空き領域の変化量。 バイト単位。 2	AVG	double	No	すべて	SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Free Extents (FREE_EXTE NTS)	空きエクステント 数。 ²	AVG	ulong	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 COUNT(DBA_FREE_SPACE) ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=Y の場合 COUNT(DBA_FREE_SPACE) + SUM((DBA_TEMP_FILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED) / V\$TEMP_EXTENT_MAP.BYTES) ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=N の場合 COUNT(DBA_FREE_SPACE) + COUNT(V\$TEMP_SPACE_HEADER)

5. レコード

Database Interval (PI_PIDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ- VR	データソース
Free Mbytes (FREE_BYTE S)	空き領域。メガバイ ト単位。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=Y の場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) + SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED)) / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=N の場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) + SUM(V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE)) / (1024 * 1024)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
High Max Extent (HIGH_MAX_ EXTENTS)	このフィールドは正しい値を収集できない。 PCT_MAX_EXTENTS が 90% を超えるセグメント数。 ²	HILO	ulong	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) where DBA_SEGMENTS.EXTENTS > 0.9 * DBA_SEGMENTS.MAX_EXTENTS ローカル管理一時表領域がある場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) where DBA_SEGMENTS.EXTENTS > 0.9 * DBA_SEGMENTS.MAX_EXTENTS + COUNT(V\$SORT_SEGMENT)) where V\$SORT_SEGMENTS.TOTAL_EXTENTS > 0.9 * V\$SORT_SEGMENT.MAX_SIZE
I/O Ops/sec (IO_RATE)	1 秒当たりの I/O 回数。 ²	AVG	double	No	すべて	(SUM(V\$FILESTAT.PHYRDS) + SUM(V\$FILESTAT.PHYWRSTS)) / seconds in interval
Links (LINKS)	このフィールドは、サポート対象外である。データベース・リンク数。 ²	AVG	short	No	対象外	COUNT(V\$DBLINK)
Links In Tran (LINKS_IN_TRANSACTION)	このフィールドは、サポート対象外である。トランザクション中の現在のデータベース・リンク数。 ²	AVG	short	No	対象外	SUM(V\$DBLINK.IN_TRANSACTION)

5. レコード

Database Interval (PI_PIDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Links Logged On (LINKS_LOG GED_ON)	このフィールドは、 サポート対象外であ る。現在ログインし ているデータベー ス・リンク数。 ²	AVG	short	No	対象外	SUM(V\$DBLINK .LOGGED_ON)
Links Open Cursors (LINKS_OPE N_CURSORS)	このフィールドは、 サポート対象外であ る。オープン・カー ソルがあるデータ ベース・リンク数。 ²	AVG	short	No	対象外	SUM(V\$DBLINK .OPEN_CURSOR S)
Log Files % (PERCENT_L OG_FILES)	init.ora ファイ ルの LOG_FILES パ ラメーターに対する REDO ログファイル の割合。 ² このフィールドは正 しい値を収集できな い。常に 0 となる。	AVG	double	No	すべて	-
Log Mode (LOG_MODE)	アーカイブ・ログ・ モード。このフィー ルドで有効な値は、 「NOARCHIVELOG」および 「ARCHIVELOG」。 ¹	COPY	string (12)	No	すべて	V\$DATABASE.L OG_MODE
Mbytes (BYTES)	データベース容量。 メガバイト単位。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> • ローカル管理一 時表領域がない 場合 SUM(DBA_DA TA_FILES.BY TES) / (1024 * 1024) • ローカル管理一 時表領域がある 場合 (SUM(DBA_D ATA_FILES.B YTES) + SUM(DBA_TE MP_FILES.BY TES)) / (1024 * 1024)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Next Alloc Fails (NEXT_ALLO C_FAILS)	このフィールドは正しい値を収集できない。 NEXT_EXTENT が最大で使用できるフラグメントを超えるセグメント数。ローカル管理表領域の場合、常に0となる。 ²	HILO	ulong	No	すべて	COUNT(DBA_SEGMENTS) where NEXT_EXTENT > MAX(FET\$.LENGTH) * DB_BLOCK_SIZE
Overextended (OVEREXTE NDED)	このフィールドは正しい値を収集できない。 エクステント数が5個を超えるセグメント数。 ²	HILO	ulong	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) where EXTENTS > 5 ローカル管理一時表領域がある場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) where EXTENTS > 5 + COUNT(V\$SORT_SEGMENT) where TOTAL_EXTENTS > 5
Physical Blocks Read (PHYSICAL_ BLOCKS_REA D)	物理ブロック読み込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	SUM(V\$FILESTAT.PHYBLKRD)
Physical Blocks Written (PHYSICAL_ BLOCKS_WRI TTEN)	物理ブロック書き込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	SUM(V\$FILESTAT.PHYBLKWRT)
Physical Reads (PHYSICAL_ READS)	完了した物理読み込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	SUM(V\$FILESTAT.PHYRDS)
Physical Writes (PHYSICAL_ WRITES)	完了した物理書き込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	SUM(V\$FILESTAT.PHYWRTS)

5. レコード

Database Interval (PI_PIDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Reads/sec (READ_RATE)	1 秒当たりの読み込み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	SUM(V\$FILESTAT.PHYRDS) / seconds in interval
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PIDB」。 ¹	COPY	string (4)	No	すべて	RM Collector
Redo Files (REDO_FILE_S)	REDO ログファイル数。 ²	AVG	ushort	No	すべて	COUNT(V\$LOGFILE)
Rollback Segments (ROLLBACK_SEGMENTS)	ロールバック・セグメント数。 ²	AVG	ulong	No	すべて	COUNT(V\$ROLLNAME)
Rollback Segments Hit % (ROLLBACK_SEGMENTS_HIT_PERCENTAGE)	待機しないでロールバック・セグメント・ヘッダーを取得した割合。 ²	AVG	double	No	すべて	((SUM(V\$ROLLSTAT.GETS) - SUM(V\$ROLLSTAT.WAITS)) / SUM(V\$ROLLSTAT.GETS)) * 100
Rollback Segments Trans (ROLLBACK_SEGMENTS_TRANS)	現在のアクティブ・トランザクション数。 ²	AVG	long	No	すべて	SUM(V\$ROLLSTAT.XACTS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Segments (SEGMENTS)	このフィールドは正しい値を収集できない。 セグメント数。 ²	AVG	ulong	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理一時表領域がない場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=Y の場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) + COUNT(DBA_TEMP_FILES GROUP BY TABLESPACE_NAME) ローカル管理一時表領域があり、 localtemp_option=N の場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) + COUNT(V\$SORT_SEGMENT)
Sort Segments (SORT_SEGMENTS)	このフィールドは正しい値を収集できない。 ソート・セグメント数。 ²	AVG	ulong	No	すべて	COUNT(V\$SORT_SEGMENT)
Sorting Users (SORTING_USERS)	現在のソート・セグメントのアクティブ・ユーザー数。 ²	AVG	long	No	すべて	SUM(V\$SORT_SEGMENT.CURRENT_USERS)
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Tablespaces (TABLESPACES)	テーブルスペース数。 ²	AVG	double	No	すべて	COUNT(DBA_TABLESPACES)
Used Change (USED_CHANGE)	使用済み領域の変化量。バイト単位。 ²	AVG	double	No	すべて	SUM(sm\$ts_uses.bytes)

5. レコード

Database Interval (PI_PIDB)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Used Mbytes (USED_BYTE S)	使用済み領域。メガ バイト単位。監視対 象がローカル管理一 時表領域のパフォー マンスデータは収集 しない。 ²	AVG	double	No	すべて	SUM(sm\$ts_used .bytes) / (1024 * 1024)
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェントの デバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector
Write % (WRITE_PER CENTAGE)	書き込み処理率。 ²	AVG	double	No	すべて	(SUM(V\$FILEST AT.PHYWRTS) / (SUM(V\$FILEST AT.PHYRDS) + SUM(V\$FILEST AT.PHYWRTS))) * 100
Writes/sec (WRITES_RA TE)	1 秒当たりの書き込 み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	SUM(V\$FILEST AT.PHYWRTS) / seconds in interval

Instance (PD_PDI)

機能

Instance (PD_PDI) レコードには、インスタンスについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	50	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

Oracle インスタンスの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：1,094 バイト

可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Host (HOST)	接続しているインスタンスが起動されている、物理ホスト名。	-	string (30)	No	すべて	V\$INSTANCE.H OST_NAME
ORACLE_H OME (ORACLE_ HOME)	ORACLE_HOME 環境変数。	-	string (255)	No	すべて	-
ORACLE_SI D (ORACLE_ SID)	ORACLE_SID 環境変数。	-	string (30)	No	すべて	-

5. レコード

Instance (PD_PDI)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Record Time (RECORD_ TIME)	レコードに格納された パフォーマンスデー タの収集終了時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_R ECORD_TY PE)	レコード名。常に 「PDI」。	-	string (4)	No	すべて	RM Collector
Restricted Mode (RESTRIC TED_MODE)	このフィールドは、サ ポート対象外である。 制限付きモードであ れば「1」、制限付き モードでなければ「0」。	-	short	No	対象外	V\$INSTANCE.L OGINS
SGA Database Buffers (SGA_DAT ABASE_BU FFERS)	SGA データベース・ バッファのメモリー容 量。バイト単位。	-	double	No	すべて	V\$SGA.VALUE where V\$SGA.NAME = 'Database Buffers'
SGA Fixed Size (SGA_FIXE D_SIZE)	SGA の固定メモリー容 量。バイト単位。	-	double	No	すべて	V\$SGA.VALUE where V\$SGA.NAME = 'Fixed Size'
SGA Redo Buffers (SGA_RED O_BUFFER S)	SGA REDO バッファ のメモリー容量。パイ ト単位。	-	double	No	すべて	V\$SGA.VALUE where V\$SGA.NAME = 'Redo Buffers'
SGA Variable Size (SGA_VARI ABLE_SIZE)	SGA の可変メモリー容 量。バイト単位。	-	double	No	すべて	V\$SGA.VALUE where V\$SGA.NAME = 'Variable Size'
Session Current (SESSION_ CURRENT)	現在の同時ユーザー・ セッション数。	-	ulong	No	すべて	V\$LICENSE.SES SIONS_CURREN T
Session Highwater (SESSION_ HIGHWATE R)	インスタンスが開始し てからの同時ユー ザー・セッションの最 大数。	-	ulong	No	すべて	V\$LICENSE.SES SIONS_HIGHWA TER
Sessions Max (SESSION S_MAX)	インスタンスに認めら れている最大同時ユー ザー・セッション数。	-	ulong	No	すべて	V\$LICENSE.SES SIONS_MAX

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポート VR	データソース
Sessions Warning (SESSION S_WARNIN G)	インスタンスの同時 ユーザー・セッション の警告限界。	-	ulong	No	すべて	V\$LICENSE.SES SIONS_WARNIN G
Shutdown Pending (SHUTDO WN_PENDI NG)	シャットダウンが保留 中であれば「1」、保留 中でなければ「0」。	-	short	No	すべて	V\$INSTANCE.S HUTDOWN_PE NDING
Start Time (START_TI ME)	レコードに格納された パフォーマンスデータ の収集開始時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Startup Time (STARTUP _TIME)	開始日時。	-	string (20)	No	すべて	V\$INSTANCE.ST ARTUP_TIME
Users Max (USERS_M AX)	データベースで認めら れている最大ユーザー 数。	-	long	No	すべて	V\$LICENSE.US ERS_MAX
VA DeviceID (VADEVIC EID)	仮想エージェントのデ バイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector
Version (VERSION)	Oracle Database の バージョン。	-	string (20)	No	すべて	PRODUCT_COM PONENT_VERSI ON

Instance Availability (PD_PDIA)

機能

Instance Availability (PD_PDIA) レコードには、インスタンスの有効性についての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。このレコードは、Oracle Database への接続を試み、接続に成功した場合は直ちに切断を行います。そのため、ほかのレコードのデータ収集により、すでに Oracle Database に接続している場合、一時的に接続が 2 本になります。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	
Collection Offset	0	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

Oracle インスタンスの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：695 バイト

可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Availability (AVAILABI LITY)	可用性ステータス。 3, 4 有効な値は、「0 (停止)」または「1 (稼働)」。	-	short	No	すべて	RM Collector
Collect Time (COLLECT_T IME)	Oracle Database へ の接続、切断処理 に掛かった時間 (ミリ秒)。	-	long	No	すべて	RM Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポー ト VR	データソース
Error # (ERROR_NU M)	Oracle Database に 接続を試みてエ ラーとなった場合、 エラーコード。 ⁵ 接続できた場合、 空白。	-	string(10)	No	すべて	RM Collector
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集終 了時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PDIA」。	-	string(4)	No	すべて	RM Collector
Start Time (START_TIM E)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集開 始時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェント のデバイス ID。	-	string(256)	No	すべて	RM Collector

注 3

PFM - RM for Oracle は、リスナーを経由して Oracle Database へ接続しています。このため Availability フィールドは、リスナーおよび Oracle Database の可用性ステータスを意味します。

注 4

PD_PDIA レコードは Oracle Database への接続を試みるため、PD_PDIA レコード収集前に Oracle インスタンスに認められている最大同時ユーザー・セッション数に達している場合、PD_PDIA レコードの Availability フィールドでは「0 (停止)」を示しますが、その他のレコードが正常に取得できる場合があります。

また、レコード収集中に Oracle インスタンスが稼働を停止した場合、PD_PDIA レコードの Availability フィールドでは「0 (停止)」を示しますが、その他のレコードが正常に取得できる場合があります。

また、レコード収集中に停止していた Oracle インスタンスが稼働した場合、PD_PDIA レコードの Availability フィールドでは「1 (稼働)」を示しますが、その他のレコードが取得できない場合があります。

注 5

Error # フィールドの出力例と対応するメッセージコードを次の表に示します。次の表のエラーコードは、Oracle が物理的に切断されている場合に出力されます。

Oracle のメッセージコードに対応するメッセージの詳細は、Oracle のマニュアルを

5. レコード

Instance Availability (PD_PDIA)

参照してください。

表 5-11 Error # フィールドの出力例と対応するメッセージコード

Error # フィールドの出力例 (Oracle のエラーコード)	対応する Oracle のメッセージコード
28	ORA-00028
1012	ORA-01012
3113	ORA-03113
3114	ORA-03114
12571	ORA-12571

Lock Waiters (PD_PDLW)

機能

Lock Waiters (PD_PDLW) レコードには、ロックを待機しているすべてのセッションおよびロックを保留中のセッションについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。セッションが待機しているロックごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

このレコードのパフォーマンスデータが表示できない場合、Oracle の静的ディクショナリー・ビュー DBA_WAITERS を作成してください。静的ディクショナリー・ビュー DBA_WAITERS を作成するためには、Oracle が提供する CATBLOCK.SQL スクリプトを実行する必要があります。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	60	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

デッドロック開始から終了まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：424 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Holding OS PID (HOLDING_PI D)	保留しているセッ ションに対応する OS のクライアン ト・プロセス ID。	-	string (30)	No	すべて	V\$SESSION.PR OCESS

5. レコード

Lock Waiters (PD_PDLW)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Holding Session (HOLDING_S SESSION)	ロックを保留して いるセッションの 識別子。	-	short	No	すべて	DBA_WAITERS. HOLDING_SESS ION
Holding User (HOLDING_U SER)	保留しているセッ ションに対応する ユーザー名。	-	string (30)	No	すべて	V\$SESSION.US ERNAME
Lock ID1 (LOCK_ID1)	ロック ID1。	-	string (40)	No	すべて	DBA_WAITERS. LOCK_ID1
Lock ID2 (LOCK_ID2)	ロック ID2。	-	string (40)	No	すべて	DBA_WAITERS. LOCK_ID2
Lock Type (TYPE)	ロックの種類。	-	string (30)	No	すべて	DBA_WAITERS. TYPE
Mode Held (MODE_HEL D)	データ収集時に保 留されていたロッ クのモード。	-	string (40)	No	すべて	DBA_WAITERS. MODE_HELD
Mode Requested (MODE_REQ UESTED)	データ収集時に要 求されていたロッ クのモード。	-	string (40)	No	すべて	DBA_WAITERS. MODE_REQUES TED
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集終 了時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PDLW」。	-	string (4)	No	すべて	RM Collector
Start Time (START_TIME)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集開 始時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェント のデバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector
Waiting OS PID (WAITING_P ID)	待機中のセッシ ョンに対応する OS のクライアント・ プロセス ID。	-	string (30)	No	すべて	V\$SESSION.PR OCESS
Waiting Session (WAITING_SE SSION)	ロックを待機中の セッションの識別 子。	-	short	No	すべて	DBA_WAITERS. WAITING_SESSI ON
Waiting User (WAITING_US ER)	待機中のセッシ ョンに対応するユー ザー名。	-	string (30)	No	すべて	V\$SESSION.US ERNAME

5. レコード
Lock Waiters (PD_PDLW)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ- ート VR	データソース
XID (XID)	内部的にレコードを固有に識別するために使用される ID。	-	string (100)	No	すべて	DBA_WAITERS. WAITING_SESSI ON + DBA_WAITERS. HOLDING_SESS ION + DBA_WAITERS. LOCK_ID1 + DBA_WAITERS. LOCK_ID2

Minimum Database Interval 2 (PI_PMDB)

機能

Minimum Database Interval 2 (PI_PMDB) レコードには、データベースについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	
Collection Offset	1810	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

データベースの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：688 バイト

可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ー ス
DB Name (NAME)	データベース名。 1	COPY	string (9)	No	すべて	V\$DATABASE.N AME
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集終 了時刻。 1	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PMDB」 1	COPY	string (4)	No	すべて	RM Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポート VR	データソース
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェントのデバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector

Minimum Data File Interval 2 (PI_P MDF)

機能

Minimum Data File Interval 2 (PI_P MDF) レコードには、データファイルについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。データベースのデータファイルごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	300	
Collection Offset	50	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

- PI_P MDF_FILE_NUM
- PI_P MDF_NAME

ライフタイム

データファイルの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：397 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ー ト VR	データソース
File # (FILE_NUM)	ファイル識別番号。 1	COPY	ushort	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ管理永続表領域, ディクショナリ管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE.FILE# ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE.FILE#
File Name (NAME)	ファイル名。 1	COPY	string (255)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ管理永続表領域, ディクショナリ管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$DATAFILE.NAME ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPFILE.NAME
I/O Ops/sec (IO_RATE)	1 秒当たりの I/O 回数。 2	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ管理永続表領域, ディクショナリ管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 (V\$FILESTAT.PHYRDS + V\$FILESTAT.PHYWRTS) / seconds in interval ローカル管理一時表領域の場合 (V\$TEMPSTAT.PHYRDS + V\$TEMPSTAT.PHYWRTS) / seconds in interval

5. レコード

Minimum Data File Interval 2 (PI_P MDF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポー ト VR	データソース
Mbytes (BYTES)	ファイルシステム 上のディスク占有 量。メガバイト単 位。 ¹	COPY	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ 管理永続表領 域、ディクショ ナリ管理一時表 領域またはロー カル管理永続表 領域の場合 V\$DATAFILE. BYTES / (1024 * 1024) ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPFILE. BYTES / (1024 * 1024)
Physical Reads (PHYSICAL_R EADS)	インターバル中に 完了した物理読み 込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ 管理永続表領 域、ディクショ ナリ管理一時表 領域またはロー カル管理永続表 領域の場合 V\$FILESTAT.P HYRDS ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPSTAT. PHYRDS
Physical Writes (PHYSICAL_ WRITES)	インターバル中に 完了した物理書き 込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ 管理永続表領 域、ディクショ ナリ管理一時表 領域またはロー カル管理永続表 領域の場合 V\$FILESTAT.P HYWRTS ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPSTAT. PHYWRTS

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ- ト VR	データソース
Reads/sec (READ_RATE)	1 秒当たりの読み込み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ管理永続表領域, ディクショナリ管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 V\$FILESTAT.PHYRDS / seconds in interval ローカル管理一時表領域の場合 V\$TEMPSTAT.PHYRDS / seconds in interval
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PMDF」 ¹	COPY	string (4)	No	すべて	RM Collector
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Tablespace Name (TABLESPACE_NAME)	ファイルが関連づけられているテーブルスペース名。 ¹	COPY	string (30)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ管理永続表領域, ディクショナリ管理一時表領域またはローカル管理永続表領域の場合 DBA_DATA_FILES.TABLESPACE_NAME ローカル管理一時表領域の場合 DBA_TEMP_FILES.TABLESPACE_NAME
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェントのデバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector

5. レコード

Minimum Data File Interval 2 (PI_P MDF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Writes/sec (WRITES_RA TE)	1 秒当たりの書き込 み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ 管理永続表領 域, ディクショ ナリ管理一時表 領域またはロー カル管理永続表 領域の場合 V\$FILESTAT.P HYWRTS / seconds in interval ローカル管理一 時表領域の場合 V\$TEMPSTAT. PHYWRTS / seconds in interval

Minimum Tablespace Interval 2 (PI_PMTS)

機能

Minimum Tablespace Interval 2 (PI_PMTS) レコードには、データベース中のテーブルスペースについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。データベース中のテーブルスペースごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	
Collection Offset	1510	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

PI_PMTS_TABLESPACE_NAME

ライフタイム

テーブルスペースの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：163 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポート VR	データソース
I/O Ops/sec (IO_RATE)	1 秒当たりの I/O 処 理数。 ²	AVG	double	No	すべて	(SUM(V\$FILEST AT.PHYRDS) + SUM(V\$FILEST AT.PHYWRTS)) / seconds in interval

5. レコード

Minimum Tablespace Interval 2 (PI_PMTS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポー ト VR	データソース
Physical Reads (PHYSICAL_R EADS)	完了した物理読み 込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ 管理永続表領 域, ローカル管 理永続表領域, またはディク ショナリ管理一 時表領域の場合 SUM(V\$FILES TAT.PHYRDS) ローカル管理一 時表領域の場合 SUM(V\$TEMP STAT.PHYRDS)
Physical Writes (PHYSICAL_ WRITES)	完了した物理書き 込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ 管理永続表領 域, ローカル管 理永続表領域, またはディク ショナリ管理一 時表領域の場合 SUM(V\$FILES TAT.PHYWRT S) ローカル管理一 時表領域の場合 SUM(V\$TEMP STAT.PHYWR TS)
Reads/sec (READ_RATE)	1 秒当たりの読み込 み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	SUM(V\$FILEST AT.PHYRDS) / seconds in interval
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集終 了時刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PMTS」。 ¹	COPY	string (4)	No	すべて	RM Collector
Rollback Segments (ROLLBACK_ SEGMENTS)	ロールバック・セ グメント数。ロー カル管理表領域の パフォーマンス データは収集しな い。 ²	AVG	ulong	No	すべて	COUNT(DBA_R OLLBACK_SEG S)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Sort Segments (SORT_SEGMENTS)	ソート・セグメント数。ローカル管理永続表領域のパフォーマンスデータは収集しない。 ²	AVG	ulong	No	すべて	COUNT(V\$SORT_SEGMENT)
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Tablespace Name (TABLESPACE_NAME)	テーブルスペース名。 ¹	COPY	string (30)	No	すべて	DBA_TABLESPACES.TABLESPACE_NAME
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェントのデバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector
Writes/sec (WRITES_RATE)	1 秒当たりの書き込み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ管理永続表領域、ローカル管理永続表領域、またはディクショナリ管理一時表領域の場合 SUM(V\$FILES_TAT.PHYWRITES) / seconds in interval ローカル管理一時表領域の場合 SUM(V\$TEMP_STAT.PHYWRITES) / seconds in interval

Open Cursor (PD_PDOC)

機能

Open Cursor (PD_PDOC) レコードには、カーソルについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。システムのオープン・カーソルごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	75	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

- PD_PDOC_SID
- PD_PDOC_ADDRHASH

ライフタイム

カーソルのオープンからクローズまで。

レコードサイズ

固定部 : 678 バイト

可変部 : 184 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Addrhash (ADDRHASH)	実行されている SQL 文を固有に識 別する文字列。	-	string (38)	No	すべて	V\$OPEN_CURS OR.ADDRESS + V\$OPEN_CURS OR.HASH_VALU E
Program (PROGRAM)	実行しているプロ グラム名。	-	string (48)	No	すべて	V\$SESSION.PR OGRAM where V\$OPEN_CURS OR.SID = V\$SESSION.SID

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集終了時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PDOC」。	-	string (4)	No	すべて	RM Collector
SID (SID)	セッション識別子。	-	ulong	No	すべて	V\$SESSION.SID where V\$OPEN_CURS OR.SADDR = V\$SESSION.AD DR
SQL Text (SQL_TEXT)	オープン・カーソル に解析される SQL 文の初めの 60 文 字。	-	string (60)	No	すべて	V\$OPEN_CURS OR.SQL_TEXT
Start Time (START_TIM E)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集開始時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
User (USERNAME)	Oracle ユーザー名。	-	string (30)	No	すべて	V\$SESSION.US ERNAME where V\$OPEN_CURS OR.SID = V\$SESSION.SID
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェントの デバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector

Parameter Values (PD_PDP)

機能

Parameter Values (PD_PDP) レコードには、現在のパラメーター値についての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。パラメーターごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	85	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

PD_PDP_NAME

ライフタイム

Oracle インスタンスの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：588 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Is Default (IS_DEFAULT)	デフォルト値かどうかを示す。有効な値は、「TRUE」と「FALSE」。	-	string(9)	No	すべて	V\$PARAMETER.ISDEFAULT
Parameter Name (NAME)	パラメーター名。	-	string(64)	No	すべて	V\$PARAMETER.NAME
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。 常に「PDP」。	-	string(4)	No	すべて	RM Collector
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェントのデバイス ID。	-	string(256)	No	すべて	RM Collector
Value (VALUE)	パラメーター値。	-	string(512)	No	すべて	V\$PARAMETER.VALUE

Session Detail (PD_PDS)

機能

Session Detail (PD_PDS) レコードには、セッションについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。インスタンス中のセッションごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

このレコードのパフォーマンスデータが表示できない場合、Oracle の静的ディクショナリー・ビュー DBA_WAITERS を作成してください。静的ディクショナリー・ビュー DBA_WAITERS を作成するためには、Oracle が提供する CATBLOCK.SQL スクリプトを実行する必要があります。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	100	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

- PD_PDS_SID
- PD_PDS_SERIAL_NUM

ライフタイム

セッションの開始から終了まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：682 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Action (ACTION)	データ収集時に DBMS_APPLICATION_INFO.SET_ACTION プロシージャを呼び出すことで設定される実行アクション名。	-	string(32)	No	すべて	V\$SESSION.ACTION
Addrhash (ADDRHASH)	実行されている SQL 文を固有に識別する文字列。	-	string(38)	No	すべて	V\$SESSION.SQL_ADDRESS + V\$SESSION.SQL_HASH_VALUE
Auditing SID (AUDSID)	監査セッション識別子。監視対象が Oracle Database 10g または User フィールドの値が SYS の場合、値は「-1」。	-	ulong	No	すべて	V\$SESSION.AUDSID
Avg Wait (AVERAGE_WAIT)	セッションが待機しているすべてのイベントの平均時間。このフィールドの値を収集するには、init.ora ファイルの TIMED_STATISTICS パラメータを「TRUE」にする必要がある。	-	ulong	No	すべて	AVG(V\$SESSION_EVENT.AVERAGE_WAIT)

5. レコード

Session Detail (PD_PDS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Avg Wait String (AVERAGE_WAIT_STRING)	セッションが待機しているすべてのイベントの平均時間 (文字列) 。このフィールドの値を収集するには、init.ora ファイルのTIMED_STATISTICS パラメータを「TRUE」にする必要がある。	-	string(20)	No	すべて	AVG(V\$SESSION_EVENT.AVERAGE_WAIT)
Blocking Locks (BLOCKING_LOCKS)	ほかのロックをブロックしているロック数。	-	double	No	すべて	COUNT(V\$LOCK) where V\$LOCK.BLOCK > 0
Client Info (CLIENT_INFO)	DBMS_APPLICATION_INFO.SET_CLIENT_INFO プロシージャを呼び出すことによって設定される情報。	-	string(64)	No	すべて	V\$SESSION.CLIENT_INFO
Client PID (PROCESS)	OS のクライアント ID。	-	string(12)	No	すべて	V\$SESSION.PROCESS
Command (COMMAND)	実行しているコマンド。	-	string(32)	No	すべて	V\$SESSION.COMMAND
Fixed Table Sequence (FIXED_TABLE_SEQUENCE)	セッションがデータベースへの呼び出しを完了するたびに増加する値。	-	double	No	すべて	V\$SESSION.FIXED_TABLE_SEQUENCE
Locks Held (LOCKS_HELD)	データ収集時にセッションによって保持されているロック数。	-	double	No	すべて	COUNT(V\$LOCK) where V\$LOCK.LMODE is NOT NULL
Locks Requested (LOCKS_REQUESTED)	要求したが、セッションが保持していないロック数。	-	double	No	すべて	COUNT(V\$LOCK) where V\$LOCK.LMODE is NULL

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポ ー ト VR	データソース
Lockwait (LOCKWAIT)	待機中のロックのアドレス。 なければ 「 null 」。	-	string(8)	No	すべて	V\$SESSION.L OCKWAIT
Logon Seconds (LOGON_SECONDS)	ログインからの秒数。	-	ulong	No	すべて	V\$SESSION.L OGON_TIME
Logon Time (LOGON_TIME)	セッション接続時間。	-	string(20)	No	すべて	V\$SESSION.L OGON_TIME
Machine (MACHINE)	OS のマシン名。	-	string(64)	No	すべて	V\$SESSION.M ACHINE
Module (MODULE)	データ収集時に DBMS_APPLICATION_INFO.SET_MODULE プロシージャを呼び出すことによって設定される、実行しているモジュール名。	-	string(48)	No	すべて	V\$SESSION.M ODULE
OS User (OSUSER)	OS のクライアント・ユーザー名。	-	string(30)	No	すべて	V\$SESSION.O SUSER
Open Cursors (OPEN_CURSORS)	オープン・カーソル数。	-	ulong	No	すべて	COUNT(V\$OP EN_CURSOR)
Oracle PID (PID)	Oracle プロセス識別子。	-	long	No	すべて	V\$PROCESS.P ID where V\$SESSION.P ADDR = V\$PROCESS.A DDR
Oracle Server (SERVER)	Oracle サーバ・タイプ。 このフィールドで有効な値は、 「 DEDICATE D 」、「 NONE 」、 「 PSEUDO 」、 および 「 SHARED 」。	-	string(9)	No	すべて	V\$SESSION.S ERVER
Program (PROGRAM)	OS のプログラム名。	-	string(64)	No	すべて	V\$SESSION.P ROGRAM

5. レコード

Session Detail (PD_PDS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	-	time _t	No	す べ て	RM Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PDS」。	-	string(4)	No	す べ て	RM Collector
SID (SID)	セッション識別子。	-	ulong	No	す べ て	V\$SESSION.SID
Schema # (SCHEMA_NUM)	スキーマ・ユーザー識別子。	-	long	No	す べ て	V\$SESSION.SCHEMA#
Schema Name (SCHEMANAME)	スキーマ・ユーザー名。	-	string(30)	No	す べ て	V\$SESSION.SCHEMANAME
Serial # (SERIAL_NUM)	セッションのオブジェクトを固有に識別するセッション・シリアル番号。セッションが終了し、別のセッションが同じセッション識別子で開始しても、セッション・レベルのコマンドが正しいセッション・オブジェクトに適用されるのを保証する。	-	ulong	No	す べ て	V\$SESSION.SERIAL#
Session Events (SESSION_EVENTS)	セッションによって待たされているイベント数。	-	short	No	す べ て	COUNT(V\$SESSION_EVENT)
Session Waits (SESSION_WAITS)	セッションによる待機数。	-	short	No	す べ て	COUNT(V\$SESSION_WAIT)
Sessions Blocked (SESSIONS_BLOCKED)	セッションによってブロックされているセッション数。	-	ulong	No	す べ て	COUNT(DBA_WAITERS)
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。	-	time _t	No	す べ て	RM Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Status (STATUS)	セッションの 状態。有効な 値は、 「 ACTIVE」、 「 INACTIVE」、 「 KILLED」、 「 CACHED」、 および 「 SNIPED」。	-	string(8)	No	すべ て	V\$SESSION.S TATUS
Table Accesses (TABLE_ACSESSES)	テーブル・ア クセス数。	-	double	No	すべ て	COUNT(V\$AC CESS)
Terminal (TERMINAL)	OS の端末名。	-	string(16)	No	すべ て	V\$SESSION.T ERMINAL
Time Waited (TIME_WAITED)	セッションが すべてのイベ ントを待った 時間の合計。 このフィール ドの値を収集 するには、 init.ora ファイルの TIMED_ STATISTICS パラメータ を「 TRUE」に する必要があ る。	-	ulong	No	すべ て	SUM(V\$SESSI ON_EVENT.TI ME_WAITED)
Time Waited String (TIME_WAITED_STRING)	セッションが すべてのイベ ントを待機し ていた時間の 合計 (文字 列)。この フィールドの 値を収集する には、 init.ora ファイルの TIMED_ STATISTICS パラメータ を「 TRUE」に する必要があ る。	-	string(20)	No	すべ て	SUM(V\$SESSI ON_EVENT.TI ME_WAITED)

5. レコード

Session Detail (PD_PDS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Total Timeouts (TOTAL_TIMEOUTS)	セッションのイベントに対するタイムアウトの合計回数。	-	ulong	No	すべて	SUM(V\$SESSION_EVENT.TOTAL_TIMEOUTS)
Total Waits (TOTAL_WAITS)	セッションのすべてのイベントに対する待機数。	-	double	No	すべて	SUM(V\$SESSION_EVENT.TOTAL_WAITS)
Transaction Address (TRANSACTION_ADDRESSES)	トランザクション・サブジェクトのアドレス。	-	string(8)	No	すべて	V\$SESSION.ADDR
Transactions (TRANSACTIONS)	アクティブ・トランザクション数。	-	ushort	No	すべて	COUNT(V\$TRANSACTION)
Type (TYPE)	セッションタイプ。	-	string(10)	No	すべて	V\$SESSION.TYPE
User (USERNAME)	Oracle ユーザー名。このフィールドには常に SYS ユーザーの情報として NULL が設定されるレコードがある。特定のユーザー A 以外の接続を条件とする場合は NULL を指定できないため、User # フィールドを使用して次の条件式を指定する。 User<> "A" AND User #<> "0"	-	string(30)	No	すべて	V\$SESSION.USERNAME
User # (USER_NUM)	Oracle ユーザー識別子。	-	long	No	すべて	V\$SESSION.USER#
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェントのデバイス ID。	-	string(256)	No	すべて	RM Collector

Session I/O Interval (PI_PIIO)

機能

Session I/O Interval (PI_PIIO) レコードには、すべてのアクティブ・セッションの I/O についての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。アクティブなセッションごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	300	
Collection Offset	25	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

PI_PIIO_SID

ライフタイム

セッションの開始から終了まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：186 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Block Changes (BLOCK_CHA NGES)	セッションのブロッ ク変更回数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SESS_IO.BLO CK_CHANGES
Block Gets (BLOCK_GET S)	セッションのブロッ ク取得回数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SESS_IO.BLO CK_GETS

5. レコード

Session I/O Interval (PI_PPIO)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Cache Hit % (CACHE_HIT _PERCENTAG E)	バッファ・キャッ シュ使用率。 ²	AVG	double	No	すべて	100 * (BLOCK_GETS + CONSISTENT_G ETS - PHYSICAL_REA DS) / (BLOCK_GETS + CONSISTENT_G ETS)
Consistent Changes (CONSISTEN T_CHANGES)	セッションの整合性 のある変更回数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SESS_IO.CON SISTENT_CHAN GES
Consistent Gets (CONSISTEN T_GETS)	セッションの整合性 のある取得回数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SESS_IO.CON SISTENT_GETS
OS PID (PID)	OS のクライアン ト・プロセス ID。 ¹	COPY	string (30)	No	すべて	V\$SESSION.PR OCESS
Physical Reads (PHYSICAL_ READS)	セッションの物理読 み込み数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SESS_IO.PHY SICAL_READS
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集終了時 刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PIIO」。 ¹	COPY	string (4)	No	すべて	RM Collector
SID (SID)	セッション識別子。 ¹	COPY	ulong	No	すべて	V\$SESS_IO.SID
Start Time (START_TIM E)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集開始時 刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
User (USERNAME)	セッションのユー ザー名。 ¹	COPY	string (30)	No	すべて	V\$SESSION.US ERNAME
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェントの デバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector

Session Statistics Summary (PD_PDS2)

機能

Session Statistics Summary (PD_PDS2) レコードには、インスタンスの各セッションおよびパフォーマンス・インジケータについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。インスタンス中のセッションごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

このレコードのパフォーマンスデータが表示できない場合、Oracle の静的ディクショナリー・ビュー DBA_WAITERS を作成してください。静的ディクショナリー・ビュー DBA_WAITERS を作成するためには、Oracle が提供する CATBLOCK.SQL スクリプトを実行する必要があります。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	105	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

PD_PDS2_SID

ライフタイム

セッションの開始から終了まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：412 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デ ル タ	サ ポ ー ト VR	データソース
Block Changes/Tran (BLOCK_CHANGES_PER_ TRANSACTION)	各トランザク ションが DML 作業を実行し た割合。	-	doub le	No	す べ て	db block changes / user commits

5. レコード

Session Statistics Summary (PD_PDS2)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Block Visits/Tran (BLOCK_VISITS_PER_TRANSACTION)	実行された作業用データベース読み込みのトランザクション当たりの回数。	-	doub le	No	す べ て	(db block gets + consistent gets) / user commits
Blocking Locks (BLOCKING_LOCKS)	セッションによって所有され、ほかのロックをブロックしているロック数。このフィールドは正しい値を収集できない。常に0となる。	-	doub le	No	す べ て	RM Collector
Cache Hit % (CACHE_HIT_PERCENTAGE)	バッファ・キャッシュ使用率。	-	doub le	No	す べ て	(1 - (physical reads cache / (consistent gets from cache + db block gets from cache))) * 100
Calls/Tran (CALLS_PER_TRANSACTION)	クライアント要求が実行されたトランザクション当たりの割合。	-	doub le	No	す べ て	user calls / user commits
Changed Block % (CHANGED_BLOCK_PERCENTAGE)	データベースアプリケーション内のクエリーと DML のバランスを表す割合。インデックスやアプリケーションの利用状況によって変化する。	-	doub le	No	す べ て	(db block changes / (block gets + consistent gets)) * 100
Consistent Change % (CONSISTENT_CHANGE_PERCENTAGE)	アプリケーションが読み込み処理の整合性を調べる必要のあったエクステントを表す割合。	-	doub le	No	す べ て	(consistent changes / consistent gets) * 100

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Continued Row % (CONTINUED_ROW_PERC ENTAGE)	入手した合計 行数のうち、1 ブロックより 長い行、また は移動されて いた行だった 割合。	-	doub le	No	すべ て	(table fetch continued row / (table fetch by rowid + table scan rows gotten)) * 100
Deadlocks (LOCK_DEADLOCKS)	DML 処理のエン キュー (ロック) が原 因で発生した プロセス・ デッドロック 数。	-	doub le	No	すべ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Disk Sorts (SORTS_DISK)	ディスクソー ト数。	-	doub le	No	すべ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Lock Conversions (LOCK_CONVERSIONS)	「共有」から 「排他」のよう に、モードが 変更されたエン キュー (ロック) 数。	-	doub le	No	すべ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Lock Releases (LOCK_RELEASES)	エンキュー (ロック) が解 放された回数。 この統計情報 は、ロック要 求回数と同じ。	-	doub le	No	すべ て	SUM(V\$SESST AT.VALUE)
Lock Requests (LOCK_REQUESTS)	エンキュー (ロック) が要 求された回数。	-	doub le	No	すべ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Lock Timeouts (LOCK_TIMEOUTS)	エンキュー (ロック) の要 求が指定され た待機時間内 に認められな かった回数。	-	doub le	No	すべ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Lock Waits (LOCK_WAITS)	ロック要求が 待機状態に なった回数。 ロック要求回 数からエン キュー待機回 数を引いた値 が、待たな かったロック 要求数。	-	doub le	No	すべ て	V\$SESSTAT.V ALUE

5. レコード

Session Statistics Summary (PD_PDS2)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポ ー ト VR	データソース
Logical Reads (LOGICAL_READS)	読み込み整合性モードでの論理読み込みの数と、ブロックの現在のコピーに対する要求数の和。	-	doub le	No	す べ て	db block gets + consistent gets
Memory Sorts (SORTS_MEMORY)	メモリー内ソート回数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Non-Index Lookups % (NON_INDEX_LOOKUPS)	キャッシュが行われない全表走査の割合。	-	doub le	No	す べ て	(table scans (long tables) / (table scans (short tables) + table scans (long tables))) * 100
PGA Memory (PGA_MEMORY)	データ収集時に使用中だったPGAメモリーの量。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Physical Writes (PHYSICAL_WRITES)	DBWRによるディスクへの物理書き込み処理の数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Physical Reads (PHYSICAL_READS)	ディスクからデータベース・ブロックの実際の読み込みが実行された回数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Program (PROGRAM)	OSのプログラム名。	-	strin g(48)	No	す べ て	V\$SESSION.P ROGRAM
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	-	time _t	No	す べ て	RM Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PDS2」。	-	strin g(4)	No	す べ て	RM Collector
Recursive Calls (RECURSIVE_CALLS)	処理されたユーザーコール数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポ ー ト VR	データソース
Recursive to User Call % (RECURSIVE_TO_USER_C ALL_PERCENTAGE)	このフィールドは正しい値を収集できない。 オーバーヘッドを示す割合。	-	doub le	No	す べ て	(recursive calls / user calls) * 100
Redo Log Space Requests (REDO_LOG_SPACE_REQ UESTS)	ユーザー・プロセスが REDO ログ・バッファのスペースを待った回数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Redo Log Space Wait % (REDO_LOG_SPACE_WAIT _PERCENTAGE)	メモリー割り当てを示す割合。	-	doub le	No	す べ て	(redo log space requests / redo entries) * 100
Row Source % (ROW_SOURCE_PERCENT AGE)	フル・テーブル・スキャンで取得したすべての行の割合。	-	doub le	No	す べ て	(table scan rows gotten / (table fetch by rowid + table scan rows gotten)) * 100
SID (SID)	セッション識別子。	-	ulon g	No	す べ て	V\$SESSION.SI D
SQL Net Bytes Revd (SQL_NET_BYTES_RECEI VED)	SQL*Net を介してクライアントから受信したバイト数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
SQL Net Bytes Sent (SQL_NET_BYTES_SENT)	SQL*Net を介してクライアントに送信したバイト数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Session Cursor Cache Count (SESSION_CURSOR_CACH E_COUNT)	カーソルに対する参照の合計数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
Session Cursor Cache Hit % (SESSION_CURSOR_CACH E_HIT_PERCENTAGE)	セッション・カーソルへのアクセスが実行され、キャッシュで見つからなかった回数。	-	doub le	No	す べ て	(session cursor cache hits / session cursor cache count) * 100
Session Cursor Cache Hits (SESSION_CURSOR_CACH E_HITS)	記録されたセッション・カーソル・キャッシュ・ヒット数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE

5. レコード

Session Statistics Summary (PD_PDS2)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポ ー ト VR	データソース
Sort Overflow % (SORT_OVERFLOW_PERC ENTAGE)	一時セグメントを使用したソートの割合。	-	doub le	No	す べ て	(sorts (disk) / (sorts (memory) + sorts (disk))) * 100
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。	-	time _t	No	す べ て	RM Collector
Statement CPU (STATEMENT_CPU)	データ収集時にアクティブなステートメントで使用された CPU 時間の合計。このフィールドの値を収集するには、 init.ora ファイルの TIMED_STATI STICS パラ メーターを 「TRUE」にして おく必要がある。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
UGA Memory (UGA_MEMORY)	使用されたセッション・メモリー数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
User (USERNAME)	Oracle ユーザー名。	-	strin g(30)	No	す べ て	V\$SESSION.U SERNAME
User Calls (USER_CALLS)	処理されたユーザーコール数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE
User Calls / Parse (USER_CALLS_PER_PARS E)	アプリケーションがそのコンテキスト領域をどの程度良好に管理しているかを示す割合。	-	doub le	No	す べ て	user calls / parse count (total)
User Commits (USER_COMMITS)	トランザクション数。	-	doub le	No	す べ て	V\$SESSTAT.V ALUE

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
User Rollback % (USER_ROLLBACK_PERC ENTAGE)	失敗した (ロールバック された) アプ リケーション トランザク ションの割合。	-	doub le	No	すべ て	(user rollbacks / (user commits + user rollbacks)) * 100
User Rollbacks (USER_ROLLBACKS)	ロールバック 数。	-	doub le	No	すべ て	V\$SESSTAT.V ALUE
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェ ントのデバイ ス ID。	-	strin g(25 6)	No	すべ て	RM Collector
Waiting Locks (WAITING_LOCKS)	現在別のセッ ションによっ て所有され、 このセッショ ンが待機して いるロック数。 このフィール ドは正しい値 を収集できな い。常に 0 と なる。	-	doub le	No	すべ て	-
Write % (WRITE_PERCENTAGE)	すべての物理 I/ O に対する書 き込み処理の 割合。	-	doub le	No	すべ て	(physical writes / (physical reads + physical writes)) * 100

SGA Components (PD_PDSG)

機能

SGA Components (PD_PDSG) レコードには、システム・グローバル・エリア (SGA) についての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。システム・グローバル・エリア (SGA) ごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	115	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

PD_PDSG_NAME

ライフタイム

Oracle インスタンスの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部 : 678 バイト

可変部 : 43 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Bytes (BYTES)	メモリーサイズ。バイト単位。	-	doub le	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> V\$SGASTATBYTES V\$SGA_DYNAMIC_COMPONENTS.CURRENT_SIZE

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポー ト VR	データソース
Component Name (NAME)	SGA コンポー ネント名。	-	string(26)	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> V\$SGASTAT. NAME V\$SGA_DYNA MIC_COMP ONENTS.CO MPONENT
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格 納されたパ フォーマンス データの収集 終了時刻。	-	time _t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。 常に「PDSG」。	-	string(4)	No	すべて	RM Collector
Start Time (START_TIME)	レコードに格 納されたパ フォーマンス データの収集 開始時刻。	-	time _t	No	すべて	RM Collector
Total Bytes (TOTAL_BYTES)	各 SGA コン ポーネントが 使用している メモリーサイ ズの合計値。 バイト単位。	-	doub le	No	すべて	V\$SGASTAT.B BYTES
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェ ントのデバイ ス ID。	-	string(25 6)	No	すべて	RM Collector

SQL Text (PD_PDSQ)

機能

SQL Text (PD_PDSQ) レコードには、共有カーソル・キャッシュにあるカーソルの SQL テキストについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。共有カーソル・キャッシュにあるカーソルの SQL テキストごとに、一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

このレコードは、リアルタイムでだけ使用できるレコードなので、PFM - Web Console の [エージェント階層] タブでエージェントアイコンをクリックし、[プロパティの表示] メソッドをクリックして表示される [プロパティ] 画面には表示されません。

このレコードは、監視テンプレートで提供されている SQL Text レポートをドリルダウンレポートとして呼び出すときにだけ使用してください。このレコードを単独で使用しても、レポートは表示されません。

このレコードを使用して SQL でレポートを表示する場合、SQL の実行ユーザーと `sp_inst.sql` スクリプトで `LSC_14_PLAN_TABLE` を作成したユーザーが異なる場合、`Explain Plan (EXPLAIN_PLAN)` フィールドに「`FAILED`」のメッセージが出力されません。正しく表示したい場合、`oracle_user` プロパティに指定したユーザーで `sp_inst.sql` スクリプトを実行してください。

このレコードは、`SELECT` 文、`INSERT` 文、`UPDATE` 文、`DELETE` 文のドリルダウンレポートを表示します。`SELECT` 文、`INSERT` 文、`UPDATE` 文、`DELETE` 文以外の SQL 文と PL/SQL パッケージのドリルダウンレポートは表示されません。

注意

- PFM - RM for Oracle が使用するアカウントを `sys` 以外に設定した場合、`SYS` スキーマに属するオブジェクトへの操作に対する、SQL Text (PD_PDSQ) レコードの `Explain Plan (EXPLAIN_PLAN)` フィールドの値を取得できません。この場合、`Explain Plan (EXPLAIN_PLAN)` フィールドには「`Explain Plan Failed`」というメッセージが格納されます。`SYS` スキーマのオブジェクトに対する、SQL Text (PD_PDSQ) レコードの `Explain Plan (EXPLAIN_PLAN)` フィールドの値を取得したい場合は、PFM - RM for Oracle の使用するアカウントに、`sys` を指定してください。
- SQL を実行したユーザーのスキーマに属するオブジェクトに対して、PFM - RM for Oracle の使用するアカウントにアクセスする権限がない場合、またはオブジェクトを参照できない場合、SQL Text (PD_PDSQ) レコードの `Explain Plan (EXPLAIN_PLAN)` フィールドの値を取得できません。この場合、`Explain Plan (EXPLAIN_PLAN)` フィールドには「`Explain Plan Failed`」というメッセージが格納されます。`Explain Plan (EXPLAIN_PLAN)` フィールドの値を取得したい場合は、スキーマに対してアクセスする権限を付加するか、またはこのフィール

ドの対象となる SQL を <所有者>.<テーブル名> で実行してください。

デフォルト値および変更できる値

なし

ODBC キーフィールド

PD_PDSQ_ADDRHASH

ライフタイム

なし。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：30,051 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Addrhash (ADDRHASH)	キャッシュされた カーソルを固有に識 別するのに使用する アドレスとハッシュ の値。	-	string (38)	No	すべて	V\$SQLTEXT.AD DRESS V\$SQLTEXT.HA SH_VALUE
Command Type (COMMAND_ TYPE)	SQL 文の種類。	-	string (10)	No	すべて	V\$SQLTEXT.CO MMAND_TYPE
Explain Plan (EXPLAIN_P LAN)	Oracle オプティマ イザによって選択さ れた SELECT , UPDATE , INSERT , および DELETE 文の実行 計画。	-	string (3000 0)	No	すべて	RM Collector
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集終了時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PDSQ」。	-	string (4)	No	すべて	RM Collector
SQL Text (SQL_TEXT)	SQL テキストの一 部。	-	string (3000 0)	No	すべて	V\$SQLTEXT.SQ L_TEXT

5. レコード

SQL Text (PD_PDSQ)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ- ト VR	データソース
Start Time (START_TIM E)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集開始時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェントの デバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector

System Stat Summary (PD)

機能

System Stat Summary (PD) レコードには、インスタンスが起動してからの累積値についての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	300	
Collection Offset	0	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

Oracle インスタンスの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：1,114 バイト

可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポート VR	データソース
Block Changes/ Tran (BLOCK_CHA NGES_PER_TR ANSACTION)	各トランザクション が DML 作業を実行 した割合。	-	double	No	すべて	db block changes / user commits
Block Visits/ Tran (BLOCK_VISI TS_PER_TRAN SACTION)	トランザクション当 たりのワーク・デー タベースのロード回 数。	-	double	No	すべて	(db block gets + consistent gets) / user commits

5. レコード

System Stat Summary (PD)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Buffer Busy Wait % (BUFFER_BU SY_WAIT_PER CENTAGE)	バッファビジー待機 率。	-	double	No	すべて	(V\$SYSTEM_EV ENT.TOTAL_WA ITS where EVENT = 'buffer busy waits' / (consistent gets + db block gets)) * 100
Cache Hit % (CACHE_HIT _PERCENTAG E)	バッファ・キャッ シュ使用率。	-	double	No	すべて	(1 - (physical reads cache / (consistent gets from cache + db block gets from cache))) * 100
Calls/Tran (CALLS_PER _TRANSACTION)	クライアント要求が 実行されたトランザ クション当たりの割 合。	-	double	No	すべて	user calls / user commits
Changed Block % (CHANGED_ BLOCK_PERC ENTAGE)	データベースアプリ ケーション内のクエ リーと DML の差異 の割合。インデック スやアプリケーション の利用状況によっ て変化する。	-	double	No	すべて	(db block changes / (block gets + consistent gets)) * 100
Consistent Change % (CONSISTEN T_CHANGE_P ERCENTAGE)	アプリケーションの 読み込み処理の整合 性のためのエクステ ントを表す割合。	-	double	No	すべて	(consistent changes / consistent gets) * 100
Continued Row % (CONTINUE D_ROW_PERC ENTAGE)	連続行の割合。長い LONG 列を扱うア プリケーション以外 では「0」に近い。	-	double	No	すべて	(table fetch continued row / (table fetch by rowid + table scan rows gotten)) * 100
Current Logons (CURRENT_L OGONS)	現在の Oracle Database のログイ ン数。	-	long	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Deadlocks (LOCK_DEAD LOCKS)	DML 処理のロック が原因で発生した デッドロック数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Dict Cache Get Misses % (DICTIONARY_CACHE_GET_MISSES_PERCENTAGE)	キャッシュミスによるデータ要求の割合。	-	double	No	すべて	(SUM(V\$ROWCACHE.GETMISSES) / SUM(V\$ROWCACHE.GETS)) * 100
Disk Sorts (SORTS_DISK)	ディスクソート数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Free List Wait Events (FREE_LIST_WAIT_EVENTS)	空きリストの待機イベント。	-	double	No	すべて	V\$WAITSTAT.COUNT where class = 'free list'
Lib Cache Miss % (LIBRARY_CACHE_MISS_PERCENTAGE)	ライブラリー・キャッシュ・ミス率。ライブラリー・キャッシュに確保されているオブジェクトがリロードされる割合。このフィールドの値が増加するとリソース使用量も増加する。	-	double	No	すべて	(SUM(V\$LIBRARYCACHE.RELOADS) / SUM(V\$LIBRARYCACHE.PINS)) * 100
Lock Conversions (LOCK_CONVERSIONS)	「共有」から「排他」のように、モードが変更されたエンキュー（ロック）数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Lock Releases (LOCK_RELEASES)	エンキュー（ロック）が解放された回数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Lock Requests (LOCK_REQUESTS)	エンキュー（ロック）が要求された回数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Lock Timeouts (LOCK_TIMEOUTS)	エンキュー（ロック）の要求が割り当てられた時間内に認められなかった回数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Lock Waits (LOCK_WAITS)	エンキュー（ロック）要求が待機状態になった回数。エンキュー要求回数とエンキュー待機回数の差がエンキュー要求にならなかった回数とする。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE

5. レコード

System Stat Summary (PD)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Logical Reads (LOGICAL_R EADS)	読み込み整合性モ ードの論理読み込み処 理回数およびブロッ クの現在のコピーに 対する要求数。	-	double	No	すべて	db block gets + consistent gets
Memory Sorts (SORTS_ME MORY)	メモリー内ソート回 数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Non-Index Lookups % (NON_INDEX _LOOKUPS)	キャッシュが行われ ない全表走査の割 合。	-	double	No	すべて	(table scans (long tables) / (table scans (short tables) + table scans (long tables))) * 100
Physical Reads (PHYSICAL_ READS)	ディスクからのデー タベース・ブロック の物理読み込み処理 回数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Physical Writes (PHYSICAL_ WRITES)	DBWR によるディ スクへの物理書き込 み処理の数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集終了時 刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PD」。	-	string (4)	No	すべて	RM Collector
Recursive Calls (RECURSIVE _CALLS)	処理されたユーザー コール数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Recursive To User Call % (RECURSIVE _TO_USER_CA LL_PERCENT AGE)	このフィールドは正 しい値を収集できな い。 オーバーヘッドを示 す割合。	-	double	No	すべて	(recursive calls / user calls) * 100

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Redo Alloc Immediate % (REDO_ALLO C_IMMEDIAT E_HIT_PERCE NTAGE)	REDO アロケー ション・ラッチをす ぐに取得する要求に 成功した割合。	-	double	No	すべて	(1 - (V\$LATCH.IMM EDIATE_MISSE S / (V\$LATCH.IMM EDIATE_GETS + V\$LATCH.IMME DIATE_MISSES))) * 100 where V\$LATCH.NAM E = 'redo allocation'
Redo Alloc Willing to Wait % (REDO_ALLO C_WILLING_T O_WAIT_HIT_ PERCENTAGE)	キャッシュからの REDO アロケー ション・ラッチの取 得に成功した割合。	-	double	No	すべて	(1 - (V\$LATCH.MISS ES / V\$LATCH.GETS)) * 100 where name = 'redo allocation'
Redo Copy Immediate % (REDO_COPY _IMMEDIATE_ HIT_PERCENT AGE)	REDO コピー・ ラッチをすぐに取得 する要求に成功した 割合。	-	double	No	すべて	(1 - (V\$LATCH.IMM EDIATE_MISSE S / (V\$LATCH.MME DIATE_GETS + V\$LATCH.IMME DIATE_MISSES))) * 100 where name = 'redo copy'
Redo Copy Willing to Wait % (REDO_COPY _WILLING_TO _WAIT_HIT_P ERCENTAGE)	キャッシュからの REDO コピー・ ラッチの取得に成功 した割合。	-	double	No	すべて	(1 - (V\$LATCH.MISS ES / V\$LATCH.GETS)) * 100 where name = 'redo copy'
Redo Log Space Requests (REDO_LOG_ SPACE_REQU ESTS)	アクティブ・ログ・ ファイルが満杯であ るため、REDO ロ グ・エントリにディ スク領域が割り当て られるまで Oracle が待機する必要のあ る回数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VA LUE

5. レコード

System Stat Summary (PD)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Redo Log Space Wait % (REDO_LOG_ SPACE_WAIT_ PERCENTAGE)	メモリー割り当てが 適切であるかを示 す。	-	double	No	すべて	(redo log space requests / redo entries) * 100
Row Source % (ROW_SOUR CE_PERCENT AGE)	フル・テーブル・ス キャンで取得した行 の割合。	-	double	No	すべて	(table scan rows gotten / (table fetch by rowid + table scan rows gotten)) * 100
SQL Executing (SQL_EXECU TING)	このフィールドは、 サポート対象外であ る。 現在の SQL 実行 数。	-	double	No	対象外	RM Collector
SQL Net Bytes Rcvd (SQL_NET_B YTES_RECEIV ED)	SQL*Net を介して クライアントから受 信したデータ量。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
SQL Net Bytes Sent (SQL_NET_B YTES_SENT)	SQL*Net を介して クライアントに送信 されたデータ量。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Session CPU Usage (SESSION_C PU_USAGE)	使用された CPU 時 間。 1/100 秒単位。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Session Cursor Cache Count (SESSION_C URSOR_CACH E_COUNT)	キャッシュされた セッション・カーソ ル数。このフィール ドの値の最大値は、 init.ora ファイ ルの SESSION_CACHED_ CURSORS パラメー ターで設定する。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Session Cursor Cache Hit % (SESSION_C URSOR_CACH E_HIT_PERCE NTAGE)	セッションのカーソ ル・キャッシュで ヒットした解析コー ルの割合。	-	double	No	すべて	(session cursor cache hits / session cursor cache count) * 100

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タ ソ ース
Session Cursor Cache Hits (SESSION_C URSOR_CACH E_HITS)	解析コールによって セッションのカーソ ル・キャッシュに カーソルが見つか った回数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Session PGA Memory (SESSION_P GA_MEMORY)	現在使用中の PGA メモリー容量。バ イト単位。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Session UGA Memory (SESSION_U GA_MEMORY)	使用済みセッシ ョン・メモリー容 量。バイト単位。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Sort Overflow % (SORT_OVE RFLOW_PERCE NTAGE)	一時セグメントを 使用しているソ ート回数の割合。	-	double	No	すべて	(sorts (disk) / (sorts (memory) + sorts (disk))) * 100
Start Time (START_TIM E)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集開始 時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Sys Undo Blk Wait Events (SYSTEM_UN DO_BLOCK_W AIT_EVENTS)	システムのロール バック・セグメン トのブロック待機 イベント数。	-	double	No	すべて	V\$WAITSTAT.CO UNT where class = 'system undo block'
Sys Undo Hdr Wait Events (SYSTEM_UN DO_HEADER_ WAIT_EVENT S)	システムのロール バック・セグメン トのヘッダーブ ロック待機イベ ント数。	-	double	No	すべて	V\$WAITSTAT.CO UNT where class = 'system undo header'
Total Logons (TOTAL_LOG ONS)	サーバへのログイン 回数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Total SQL Executions (TOTAL_SQL _EXECUTION S)	SQL の実行回数 の合計。	-	double	No	すべて	execute count
Undo Blk Wait Events (UNDO_BLO CK_WAIT_EVE NTS)	ほかのロールバ ック・セグメン トのブ ロック待機イベ ント数。	-	double	No	すべて	V\$WAITSTAT.CO UNT where class = 'undo block'

5. レコード

System Stat Summary (PD)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Undo Hdr Wait Events (UNDO_HEA DER_WAIT_EV ENTS)	ほかのロールバック・セグメントのヘッダーブロック待機イベント数。	-	double	No	すべて	V\$WAITSTAT.CO UNT where class = 'undo header'
User Calls (USER_CALL S)	処理されたユーザーコール数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VA LUE
User Calls / Parse (USER_CALL S_PER_PARSE)	コンテキスト領域でのアプリケーションの管理状況を示す。	-	double	No	すべて	user calls / parse count (total)
User Commits (USER_COM MITS)	トランザクション数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VA LUE
User Rollback % (USER_ROLL BACK_PERCE NTAGE)	アプリケーショントランザクションの失敗率。	-	double	No	すべて	(user rollbacks / (user commits + user rollbacks)) * 100
User Rollbacks (USER_ROLL BACKS)	ロールバック数。	-	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VA LUE
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェントのデバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector
Write % (WRITE_PER CENTAGE)	書き込み処理率。	-	double	No	すべて	(physical writes / (physical reads + physical writes)) * 100

System Stat Summary Interval (PI)

機能

System Stat Summary Interval (PI) レコードには、インスタンスを開始してからのキー・パフォーマンス・インジケータについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	60	
Collection Offset	0	
Log	Yes	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

なし

ライフタイム

Oracle インスタンスの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：1,930 バイト

可変部：0 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポート VR	データソース
Block Changes/ Tran (BLOCK_CHA NGES_PER_TR ANSACTION)	各トランザクション が DML 作業を実行 した割合。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	db block changes / user commits
Block Get/sec (BLOCK_GET _RATE)	アプリケーションが データベースを参照 している割合。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(db block gets + consistent gets) / user commits

5. レコード

System Stat Summary Interval (PI)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Block Visits/ Tran (BLOCK_VISI TS_PER_TRAN SACTION)	トランザクション当 たりのワーク・デー タベースのロード回 数。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(db block gets + consistent gets) / user commits
Buffer Busy Wait % (BUFFER_BU SY_WAIT_PER CENTAGE)	バッファビジー待機 率。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(V\$SYSTEM_EV ENT.TOTAL_WA ITS where EVENT = 'buffer busy waits' / (consistent gets + db block gets)) * 100
Cache Hit % (CACHE_HIT _PERCENTAG E)	バッファ・キャッ シュ使用率。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(1 - (physical reads cache / (consistent gets from cache + db block gets from cache))) * 100
Call/sec (CALL_RATE)	すべてのワーク・リ ソースからインスタ ンスに適用された ワーク・デマンド 率。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	recursive calls + user calls / seconds in interval
Calls/Tran (CALLS_PER _TRANSACTION)	クライアント要求が 実行されたトランザ クション当たりの割 合。このフィールド の値は、アプリケー ションの変更、また は利用状況の変化を 検出するために使用 できる。このフィー ルドの値は、非定型 クエリーが増加した ときに大きく増加す ることがある。 ²	AVG	double	No	すべて	user calls / user commits
Changed Block % (CHANGED_ BLOCK_PERC ENTAGE)	データベースアプリ ケーション内のクエ リーと DML の差異 の割合。インデック スやアプリケーション の利用状況によっ て変化する。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(db block changes / (block gets + consistent gets)) * 100
Consistent Change % (CONSISTEN T_CHANGE_P ERCENTAGE)	アプリケーションが 読み込み処理の整合 性を調べる必要の あったエクステン トを表す割合。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(consistent changes / consistent gets) * 100

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Continued Row % (CONTINUE D_ROW_PERC ENTAGE)	連続行の割合。長い LONG 列を扱うア プリケーション以外 では「0」に近い。 2	AVG	short	Yes 8	すべて	(table fetch continued row / (table fetch by rowid + table scan rows gotten)) * 100
Current Logons (CURRENT_L OGONS)	現在の Oracle Database のログイ ン数。 2	AVG	long	No	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Deadlocks (LOCK_DEAD LOCKS)	DML 処理のロック が原因で発生した デッドロック数。 2	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Dict Cache Get Miss % (DICTIO NARY_CACH E_GET_MIS SES_P ERCENTAGE)	キャッシュミスによ るデータ要求の割 合。 2	AVG	double	Yes 8	すべて	(SUM(V\$ROWCA CHE.GETMISSE S) / SUM(V\$ROWCA CHE.GETS)) * 100
Disk Sorts (SORTS_DIS K)	ディスクソート数。 2	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Free List Wait Events (FREE_LIST_ WAIT_EVENT S)	空きリストの待機イ ベント。 2	AVG	double	Yes	すべて	V\$WAITSTAT.CO UNT where class = 'free list'
I/O Ops/sec (IO_RATE)	1 秒当たりの I/O 処 理数。 2	AVG	double	No	すべて	(physical reads + physical writes) / seconds in interval
Lib Cache Miss % (LIBRARY_C ACHE_MISS_P ERCENTAGE)	ライブラリー・ キャッシュ・ミス 率。ライブラリー・ キャッシュに確保さ れているオブジェク トがリロードされる 割合。このフィール ドの値が増加すると リソース使用量も増 加する。 2	AVG	double	Yes 8	すべて	(SUM(V\$LIBRAR YCACHE.RELO ADS) / SUM(V\$LIBRAR YCACHE.PINS)) * 100
Lock Conversions (LOCK_CON VERSIONS)	「共有」から「排他」 のように、モードが 変更されたエン キュー（ロック） 数。 2	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE

5. レコード

System Stat Summary Interval (PI)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Lock Hit % (LOCK_HIT_ PERCENTAGE)	データブロックア クセスの総数と比較し たデータブロックへ のアクセスの割合。 ただし、ロック変換 を要求しないものに 限る。パラレルサー バでだけ有効であ る。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	((consistent gets - global lock converts (async)) / consistent gets) * 100
Lock Releases (LOCK_RELE ASES)	エンキュー (ロッ ク) が解放された回 数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Lock Requests (LOCK_REQ UESTS)	エンキュー (ロッ ク) が要求された回 数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Lock Timeouts (LOCK_TIME OUTS)	エンキュー (ロッ ク) の要求が割り当 てられた時間内に認 められなかった回 数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Lock Waits (LOCK_WAIT S)	エンキュー (ロッ ク) 要求が待機状態 になった回数。エン キュー要求回数とエン キュー待機回数の 差がエンキュー要求 にならなかった回数 とする。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Logical Reads (LOGICAL_R EADS)	読み込み整合性モ ードの論理読み込み処 理回数およびブロッ クの現在のコピーに 対する要求数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	db block gets + consistent gets
Memory Sorts (SORTS_ME MORY)	メモリー内ソート回 数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Non-Index Lookups % (NON_INDEX _LOOKUPS)	キャッシュが行われ ない全表走査の割 合。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(table scans (long tables) / (table scans (short tables) + table scans (long tables))) * 100
Physical Reads (PHYSICAL_ READS)	ディスクからのデー タベース・ブロック の物理読み込み処理 回数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Physical Writes (PHYSICAL_ WRITES)	DBWR によるディ スクへの物理書き込 み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Ping Write % (PING_WRIT E_PERCENTA GE)	このフィールドの値 が大きくなると、 ロック変換が頻繁に 起こっていることを 示す。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(DBWR cross instance writes / physical writes) * 100
Read/sec (READ_RATE)	1 秒当たりの読み込 み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	physical reads / seconds in interval
Record Time (RECORD_TI ME)	レコードに格納され たパフォーマンス データの収集終了時 刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_REC ORD_TYPE)	レコード名。常に 「PI」。 ¹	COPY	string (4)	No	すべて	RM Collector
Recursive Calls (RECURSIVE _CALLS)	処理されたユーザー コール数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Recursive To User Call % (RECURSIVE _TO_USER_CA LL_PERCENT AGE)	このフィールドは正 しい値を収集できな い。 オーバーヘッドを示 す割合。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(recursive calls / user calls) * 100
Redo Alloc Immediate % (REDO_ALLO C_IMMEDIAT E_HIT_PERCE NTAGE)	REDO アロケー ション・ラッチをす ぐに取得する要求に 成功した割合。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(1 - (V\$LATCH.IMM EDIATE_MISSE S / (V\$LATCH.IMM EDIATE_GETS + V\$LATCH.IMME DIATE_MISSES))) * 100 where V\$LATCH.NAM E = 'redo allocation'
Redo Alloc Willing to Wait % (REDO_ALLO C_WILLING_T O_WAIT_HIT_ PERCENTAGE)	キャッシュからの REDO アロケー ション・ラッチの取 得に成功した割合。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(1 - (V\$LATCH.MISS ES / V\$LATCH.GETS)) * 100 where name = 'redo allocation'

5. レコード

System Stat Summary Interval (PI)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Redo Copy Immediate % (REDO_COPY _IMMEDIATE_ HIT_PERCENT AGE)	REDO コピー・ ラッチをすぐに取得 する要求に成功した 割合。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(1 - (V\$LATCH.IMM EDIATE_ MISSES / (V\$LATCH.IMM EDIATE_GETS + V\$LATCH.IMME DIATE_MISSES))) * 100 where V\$LATCH.NAM E = 'redo copy'
Redo Copy Willing to Wait % (REDO_COPY _WILLING_TO _WAIT_HIT_P ERCENTAGE)	キャッシュからの REDO コピー・ ラッチの取得に成功 した割合。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(1 - (V\$LATCH.MISS ES / V\$LATCH.GETS)) * 100 where name = 'redo copy'
Redo Log Space Requests (REDO_LOG_ SPACE_REQU ESTS)	アクティブ・ログ・ ファイルが満杯であ るため、REDO ロ グ・エントリにディ スク領域が割り当て られるまで Oracle が待機する必要のあ る回数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Redo Log Space Wait % (REDO_LOG_ SPACE_WAIT_ PERCENTAGE)	メモリー割り当てが 適切であるかを示 す。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(redo log space requests / redo entries) * 100
Row Source % (ROW_SOUR CE_PERCENT AGE)	フル・テーブル・ス キャンで取得した行 の割合。 ²	AVG	double	Yes 8	すべて	(table scan rows gotten / (table fetch by rowid + table scan rows gotten)) * 100
SQL Executing (SQL_EXECU TING)	このフィールドは、 サポート対象外であ る。 現在の SQL 実行 数。	AVG	double	No	対象外	RM Collector
SQL Net Bytes Rcvd (SQL_NET_B YTES_RECEIV ED)	SQL*Net を介して クライアントから受 信したデータ量。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
SQL Net Bytes Sent (SQL_NET_BYTES_SENT)	SQL*Net を介してクライアントに送信されたデータ量。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Session CPU Usage (SESSION_CPU_USAGE)	使用された CPU 時間。1/100 秒単位。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Session Cursor Cache Count (SESSION_CURSOR_CACHE_COUNT)	セッションのカーソル・コールに対する解析コールの数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Session Cursor Cache Hit % (SESSION_CURSOR_CACHE_HIT_PERCENTAGE)	セッションのカーソル・キャッシュでヒットした解析コールの割合。 ²	AVG	double	No	すべて	(session cursor cache hits / session cursor cache count) * 100
Session Cursor Cache Hits (SESSION_CURSOR_CACHE_HITS)	解析コールによってセッションのカーソル・キャッシュにカーソルが見つかった回数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Session PGA Memory (SESSION_PGA_MEMORY)	現在使用中の PGA メモリー容量。バイト単位。 ²	AVG	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Session UGA Memory (SESSION_UGA_MEMORY)	使用済みセッション・メモリー容量。バイト単位。 ²	AVG	double	No	すべて	V\$SYSSTAT.VALUE
Sort Overflow % (SORT_OVERFLOW_PERCENTAGE)	一時セグメントを使用しているソート回数の割合。 ²	AVG	double	Yes ₈	すべて	(sorts (disk) / (sorts (memory) + sorts (disk))) * 100
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。 ¹	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Sys Undo Blk Wait Events (SYSTEM_UNDO_BLOCK_WAIT_EVENTS)	システムのロールバック・セグメントのブロック待機イベント数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$WAITSTAT.COUNT where class = 'system undo block'

5. レコード

System Stat Summary Interval (PI)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Sys Undo Hdr Wait Events (SYSTEM_UN DO_HEADER_ WAIT_EVENT S)	システムのロール バック・セグメント のヘッダーブロック 待機イベント数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$WAITSTAT.CO UNT where class = 'system undo header'
Total Logons (TOTAL_LOG ONS)	サーバへのログイン 回数。 ²	AVG	long	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
Total SQL Executions (TOTAL_SQL _EXECUTION S)	SQL の実行回数の 合計。 ²	AVG	double	Yes	すべて	execute count
Trans/sec (TRANSACTI ON_RATE)	1 秒当たりのトラン ザクション数。 ²	AVG	double	No	すべて	user commits / seconds in interval
Undo Blk Wait Events (UNDO_BLO CK_WAIT_EVE NTS)	ほかのロールバッ ク・セグメントのブ ロック待機イベン ト。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$WAITSTAT.CO UNT where class = 'undo block'
Undo Hdr Wait Events (UNDO_HEA DER_WAIT_EV ENTS)	ほかのロールバッ ク・セグメントの ヘッダーブロック待 機。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$WAITSTAT.CO UNT where class = 'undo header'
User Calls (USER_CALL S)	処理されたユーザー コール数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
User Calls / Parse (USER_CALL S_PER_PARSE)	コンテキスト領域で のアプリケーション の管理状況を示す。 ²	AVG	double	Yes ⁸	すべて	user calls / parse count (total)
User Commits (USER_COM MITS)	トランザクション 数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
User Rollback % (USER_ROLL BACK_PERCE NTAGE)	アプリケーショント ランザクションの失 敗率。 ²	AVG	double	No	すべて	(user rollbacks / (user commits + user rollbacks)) * 100

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
User Rollbacks (USER_ROLL BACKS)	ロールバック数。 2	AVG	double	Yes	すべて	V\$SYSSTAT.VAL UE
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェントの デバイス ID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector
Write % (WRITE_PER CENTAGE)	書き込み処理率。 2	AVG	double	No	すべて	(physical writes / (physical reads + physical writes))* 100
Writes/sec (WRITES_RA TE)	1 秒当たりの書き込 み処理回数。 2	AVG	double	No	すべて	physical writes / seconds in interval

注 8

Oracle データベースから取得するデータの変化量をもとに算出しています。

Tablespace (PD_PDTs)

機能

Tablespace (PD_PDTs) レコードには、データベース中のテーブルスペースについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。データベース中のテーブルスペースごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	
Collection Offset	30	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

PD_PDTs_TABLESPACE_NAME

ライフタイム

テーブルスペースの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：117 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポ ート VR	データソース
Blocks (BLOCKS)	テーブルスペース容量。 単位は Oracle ブロック。	-	ulong	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域，ローカル管理永続表領域，またはディクショナリー管理一時表領域の場合 SUM(DBA_DATA_FILES.BLOCKS) ローカル管理一時表領域の場合 SUM(DBA_TEMP_FILES.BLOCKS)
Data Files (DATAFILES)	テーブルスペースが使用しているデータファイル数。	-	ushort	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域，ローカル管理永続表領域，またはディクショナリー管理一時表領域の場合 COUNT(DBA_DATA_FILES) ローカル管理一時表領域の場合 COUNT(DBA_TEMP_FILES)

5. レコード

Tablespace (PD_PDTS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Extents (EXTENTS)	エクステン ト数。	-	ulo ng	No	すべ て	<ul style="list-style-type: none"> • ディクショナ リー管理永続表 領域, ローカル 管理永続表領 域, またはディ クショナリー管 理一時表領域の 場合 SUM(DBA_SE GMENTS.EXT ENTS) • ローカル管理一 時表領域で, localtemp_opti on=Y の場合 SUM(DBA_TE MP_FILES.BY TES / V\$TEMP_EXT ENT_MAP.BY TES) • ローカル管理一 時表領域で, localtemp_opti on=N の場合 SUM(V\$SORT _SEGMENT.T OTAL_EXTEN TS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サ ポ ー ト VR	データソース
Free % (PERCENT_FREE)	空き領域の割合。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ローカル管理永続表領域、またはディクショナリー管理一時表領域の場合 (SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) / DBA_DATA_FILES.BYTES) * 100 ローカル管理一時表領域で、localtemp_option=Y の場合 (SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED) / (DBA_TEMP_FILES.BYTES)) * 100 ローカル管理一時表領域で、localtemp_option=N の場合 (SUM(V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE) / (DBA_TEMP_FILES.BYTES)) * 100

5. レコード

Tablespace (PD_PDTs)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Free Extents (FREE_EXTENTS)	空きエクステン ト数。	-	ulo ng	No	すべ て	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域，ローカル 管理永続表領 域，またはディ クショナリー管 理一時表領域の 場合 COUNT(DBA_ FREE_SPACE) ローカル管理一 時表領域で， localtemp_opti on=Y の場合 SUM((DBA_TE MP_FILES.BY TES - V\$TEMP_EXT ENT_POOL.B YTES_USED) / V\$TEMP_EXT ENT_MAP.BY TES) ローカル管理一 時表領域で， localtemp_opti on=N の場合 COUNT(V\$TE MP_SPACE_H EADER)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポ ート VR	データソース
Free Mbytes (FREE_BYTES)	空き領域。メガバイト単位。	-	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> • ディクショナリー管理永続表領域，ローカル管理永続表領域，またはディクショナリー管理一時表領域の場合 SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) / (1024 * 1024) • ローカル管理一時表領域で，localtemp_option=Y の場合 SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED) / (1024 * 1024) • ローカル管理一時表領域で，localtemp_option=N の場合 SUM(V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE) / (1024 * 1024)
Increase % (PCT_INCREASE)	エクステントのサイズのデフォルト増加率。	-	short	No	すべて	DBA_TABLESPACES.PCT_INCREASE
Initial Extent (INITIAL_EXTENT)	デフォルトの初期エクステントのサイズ。	-	double	No	すべて	DBA_TABLESPACES.INITIAL_EXTENT
Max Extents (MAX_EXTENTS)	デフォルトの最大エクステント数。	-	ulong	No	すべて	DBA_TABLESPACES.MAX_EXTENTS

5. レコード

Tablespace (PD_PDTS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Mbytes (BYTES)	テーブルスペース容量。 メガバイト単位。	-	dou ble	No	すべ て	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ローカル管理永続表領域, またはディクショナリー管理一時表領域の場合 SUM(DBA_DATA_FILES.BYTES) / (1024 * 1024) ローカル管理一時表領域の場合 SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES) / (1024 * 1024)
Min Extents (MIN_EXTENTS)	デフォルトの最小エクステント数。	-	long	No	すべ て	DBA_TABLESPACES.MIN_EXTENTS
Next Extent (NEXT_EXTENT)	デフォルトの増加エクステントサイズ。	-	dou ble	No	すべ て	DBA_TABLESPACES.NEXT_EXTENT
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	-	tim e_t	No	すべ て	RM Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。 常に 「PDTS」	-	stri ng(4)	No	すべ て	RM Collector

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サ ポ ー ト VR	データソース
Segments (SEGMENTS)	セグメント数。 ローカル管理 一時表領域で, localtemp_opt ion=Y の場合 は常に「1」。	-	ulo ng	No	す べ て	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナ リー管理永続表 領域, ローカル 管理永続表領 域, またはディ クショナリー管 理一時表領域の 場合 COUNT(DBA_ SEGMENTS) ローカル管理一 時表領域で, localtemp_opti on=Y の場合 RM Collector ローカル管理一 時表領域で, localtemp_opti on=N の場合 COUNT(V\$SO RT_SEGMENT)
Start Time (START_TIME)	レコードに格 納されたパ フォーマンス データの収集 開始時刻。	-	tim e_t	No	す べ て	RM Collector
Status (STATUS)	テーブルス ペースの状態。 有効な値は 「INVALID (テーブルス ペースが削除 された)」, 「OFFLINE」, および 「ONLINE」。	-	stri ng(9)	No	す べ て	DBA_TABLESPA CES.STATUS
Tablespace Name (TABLESPACE_NAME)	テーブルス ペース名。	-	stri ng(30)	No	す べ て	DBA_TABLESPA CES.TABLESPA CE_NAME

5. レコード

Tablespace (PD_PDTs)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポー ト VR	データソース
Used Mbytes (USED_BYTES)	使用済み領域。 メガバイト単 位。	-	dou ble	No	すべ て	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリ 管理永続表領 域，ローカル管 理永続表領域， またはディスク シヨナリ管理一 時表領域の場合 (SUM(DBA_D ATA_FILES.B YTES) -SUM(DBA_FR EE_SPACE.BY TES)) / (1024 *1024) ローカル管理一 時表領域で， localtemp_opti on=Y の場合 (SUM(DBA_TE MP_FILES.BY TES) - SUM(DBA_TE MP_FILES.BY TES - V\$TEMP_EXT ENT_POOL.B YTES_USED)) / (1024 *1024) ローカル管理一 時表領域で， localtemp_opti on=N の場合 (SUM(DBA_TE MP_FILES.BY TES) - SUM(V\$TEMP _SPACE_HEA DER.BYTES_F REE)) / (1024 *1024)
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェ ントのデバイ ス ID。	-	stri ng(256)	No	すべ て	RM Collector

Tablespace Fragmentation (PD_PDTF)

機能

Tablespace Fragmentation (PD_PDTF) レコードには、テーブルスペースのフラグメンテーションについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。データベース中のテーブルスペースごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	135	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

PD_PDTF_TABLESPACE_NAME

ライフタイム

テーブルスペースの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部 : 678 バイト

可変部 : 75 バイト

5. レコード

Tablespace Fragmentation (PD_PDTF)

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Avg Fragment (AVERAGE_ FRAGMENT)	フラグメントサイズの平均。バイト単位。ローカル管理一時表領域で localtemp_option =Y の場合は、テーブルスペースに対してフラグメントが 1 のため空き容量となる。	-	doub le	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域，ローカル管理永続表領域，またはディクショナリー管理一時表領域の場合 SUM(DBA_FREE_SPACE.BYTES) / COUNT(DBA_FREE_SPACE) where DBA_TABLESPACE.S.TABLESPACE_NAME = DBA_FREE_SPACE.TABLESPACE_NAME(+) ローカル管理一時表領域で， localtemp_option=Y の場合 SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED) ローカル管理一時表領域で， localtemp_option=N の場合 SUM(V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE) / COUNT(V\$TEMP_SPACE_HEADER) where DBA_TEMP_FILES.FILE_ID = V\$TEMP_SPACE_HEADER.FILE_ID(+)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Extents (EXTENTS)	エクステント数。	-	ulong	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ローカル管理永続表領域, またはディクショナリー管理一時表領域の場合 SUM(DBA_SEGMENTS.EXTENTS) ローカル管理一時表領域で, localtemp_option=Y の場合 SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES / V\$TEMP_EXTENT_MAP.BYTES) ローカル管理一時表領域で, localtemp_option=N の場合 SUM(V\$SORT_SEGMENT.TOTAL_EXTENTS)
Fragments (FRAGMENT S)	フラグメント数。 ローカル管理一時表領域で, localtemp_option=Y の場合は常に「1」。	-	ulong	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ローカル管理永続表領域, またはディクショナリー管理一時表領域の場合 COUNT(DBA_FREE_SPACE) where DBA_TABLESPACE.S.TABLESPACE_NAME = DBA_FREE_SPACE.TABLESPACE_NAME(+) ローカル管理一時表領域で, localtemp_option=Y の場合 RM Collector ローカル管理一時表領域で, localtemp_option=N の場合 COUNT(V\$TEMP_SPACE_HEADER) where DBA_TEMP_FILES.FILE_ID = V\$TEMP_SPACE_HEADER.FILE_ID(+)

5. レコード

Tablespace Fragmentation (PD_PDTF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
High Max Extents (HIGH_MAX_EXTENTS)	PCT_MAX_EXTENTS が 90% より大きいセグメント数。	-	ulong	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域，ローカル管理永続表領域，またはディクショナリー管理一時表領域の場合 COUNT(DBA_SEGMENTS) where EXTENTS > MAX_EXTENTS * 0.9 ローカル管理一時表領域の場合 COUNT(V\$SORT_SEGMENT) where EXTENT_SIZE > TOTAL_EXTENTS * 0.9
Largest Fragment (LARGEST_FRAGMENT)	最大のフラグメントサイズ。バイト単位。ローカル管理一時表領域で localtemp_option =Y の場合は，テーブルスペースに対してフラグメントが 1 のため空き容量となる。	-	ulong	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域，ローカル管理永続表領域，またはディクショナリー管理一時表領域の場合 MAX(DBA_FREE_SPACE.BYTES) where DBA_TABLESPACE.S.TABLESPACE_NAME = DBA_FREE_SPACE.TABLESPACE_NAME(+) ローカル管理一時表領域で，localtemp_option=Y の場合 SUM(DBA_TEMP_FILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_POOL.BYTES_USED) ローカル管理一時表領域で，localtemp_option=N の場合 MAX(V\$TEMP_SPACE_HEADER.BYTES_FREE) where DBA_TEMP_FILES.FILE_ID = V\$TEMP_SPACE_HEADER.FILE_ID(+)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	データソース
Largest Fragment % (LARGEST_ FRAGMENT_ PERCENT)	最大フラグメント のテーブルスベ ースの割合。	-	doub le	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管 理永続表領域，ロー カル管理永続表領域， またはディクショナ リー管理一時表領域 の場合 MAX(DBA_FREE_S PACE.BYTES) / SUM(DBA_DATA_F ILES.BYTES)) * 100 ローカル管理一時表 領域で， localtemp_option=Y の場合 SUM(DBA_TEMP_F ILES.BYTES - V\$TEMP_EXTENT_ POOL.BYTES_USE D) / SUM(DBA_TEMP_F ILES.BYTES)) * 100 ローカル管理一時表 領域で， localtemp_option=N の場合 (MAX(V\$TEMP_SPA CE_HEADER.BYTE S_FREE) / SUM(DBA_TEMP_F ILES.BYTES)) * 100
Next Alloc Fails (NEXT_ALL OC_FAILS)	次のエクステント 割り当ての失敗を 示す。 失敗の場合 「1」 成功の場合 「0」 これらの結果は， 次の条件のときに 有効。 <ul style="list-style-type: none"> 表領域がローカ ル管理永続表領 域。 エクステントを 「均一のエク ステント管理」し ている。 これらの条件以外 は，「0」を返す。	-	ulon g	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ローカル管理永続表 領域の場合 MAX(DBA_SEGME NTS.NEXT_EXTEN T) > MAX(DBA_FREE_S PACE.BYTES)

5. レコード

Tablespace Fragmentation (PD_PDTF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
Overextended (OVEREXTEN DED)	エクステント数が 5個を超えるセグ メント数。	-	ulon g	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理 永続表領域，ロー カル管理永続表領域， またはディクショナ リー管理一時表領域 の場合 COUNT(DBA_SEG MENTS) where EXTENTS > 5 ローカル管理一時表 領域の場合 COUNT(V\$SORT_S EGMENT) where TOTAL_EXTENTS > 5
Record Time (RECORD_T IME)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集終 了時刻。	-	time _t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_RE CORD_TYPE)	レコード名。常に 「PDTF」。	-	strin g(4)	No	すべて	RM Collector
Segments (SEGMENT S)	セグメント数。 ローカル管理一時 表領域で， localtemp_option =Y の場合は常に 「1」。	-	ulon g	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理 永続表領域，ロー カル管理永続表領域， またはディクショナ リー管理一時表領域 の場合 COUNT(DBA_SEG MENTS) ローカル管理一時表 領域で， localtemp_option=Y の場合 RM Collector ローカル管理一時表 領域で， localtemp_option=N の場合 COUNT(V\$SORT_S EGMENT)
Start Time (START_T IME)	レコードに格納さ れたパフォーマンス データの収集開 始時刻。	-	time _t	No	すべて	RM Collector
Tablespace Name (TABLESPA CE_NAME)	テーブルスペース 名。	-	strin g(30)	No	すべて	DBA_TABLESPACES. TABLESPACE_NAME

5. レコード
Tablespace Fragmentation (PD_PDTF)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サポ ート VR	デー タソ ース
VA DeviceID (VADEVICEI D)	仮想エージェント のデバイス ID。	-	string(25 6)	No	すべて	RM Collector

Tablespace Interval (PI_PITS)

機能

Tablespace Interval (PI_PITS) レコードには、データベース中のテーブルスペースについての、ある一定の時間を単位としたパフォーマンスデータが格納されます。データベース中のテーブルスペースごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	3600	
Collection Offset	50	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

PI_PITS_TABLESPACE_NAME

ライフタイム

テーブルスペースの作成から削除まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：291 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート VR	データソース
Datafiles (DATAFILES)	テーブルスペースが使用しているデータファイル数。 ²	AV G	us ho rt	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ローカル管理永続表領域、またはディクショナリー管理一時表領域の場合 COUNT(DBA_DATA_FILES) ローカル管理一時表領域の場合 COUNT(DBA_TEMP_FILES)
I/O Ops/sec (IO_RATE)	1 秒当たりの I/O 処理数。 ²	AV G	do ubl e	No	すべて	(SUM(V\$FILESTAT.PHYRDS) + SUM(V\$FILESTAT.PHYWRTS)) / seconds in interval
Physical Blocks Read (PHYSICAL_BLOCKS_READ)	読み込まれた物理ブロックの数。 ²	AV G	do ubl e	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ローカル管理永続表領域、またはディクショナリー管理一時表領域の場合 SUM(V\$FILESTAT.PHYBLKR) ローカル管理一時表領域の場合 SUM(V\$TEMPSTAT.PHYBLKR)

5. レコード

Tablespace Interval (PI_PITS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート VR	データソース
Physical Blocks Written (PHYSICAL_BLOCKS_WRITTEN)	書き込まれた物理ブロックの数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ローカル管理永続表領域、またはディクショナリー管理一時表領域の場合 SUM(V\$FILES_TAT.PHYBLKWRT) ローカル管理一時表領域の場合 SUM(V\$TEMP_STAT.PHYBLKWRT)
Physical Reads (PHYSICAL_READS)	完了した物理読み込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ローカル管理永続表領域、またはディクショナリー管理一時表領域の場合 SUM(V\$FILES_TAT.PHYRDS) ローカル管理一時表領域の場合 SUM(V\$TEMP_STAT.PHYRDS)
Physical Writes (PHYSICAL_WRITES)	完了した物理書き込み処理の数。 ²	AVG	double	Yes	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ローカル管理永続表領域、またはディクショナリー管理一時表領域の場合 SUM(V\$FILES_TAT.PHYWRTS) ローカル管理一時表領域の場合 SUM(V\$TEMP_STAT.PHYWRTS)
Reads/sec (READ_RATE)	1 秒当たりの読み込み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	SUM(V\$FILESTAT.PHYRDS) / seconds in interval

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート VR	データソース
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。 1	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PITS」。 1	COPY	string (4)	No	すべて	RM Collector
Rollback Segments (ROLLBACK_SEGMENTS)	ロールバック・セグメント数。ローカル管理表領域のパフォーマンスデータは収集しない。 2	AVG	ulong	No	すべて	COUNT(DBA_ROLLBACK_SEGS)
Rollback Segments Hit % (ROLLBACK_SEGMENTS_HIT_PERCENTAGE)	GET に対する HIT の割合。ローカル管理表領域のパフォーマンスデータは収集しない。 2	AVG	double	No	すべて	((SUM(V\$ROLLSTAT.GETS) - SUM(V\$ROLLSTAT.WAITS)) / SUM(V\$ROLLSTAT.GETS)) * 100
Rollback Segments Trans (ROLLBACK_SEGMENTS_TRANS)	データ収集時にアクティブだったトランザクション数。ローカル管理表領域のパフォーマンスデータは収集しない。 2	AVG	long	No	すべて	SUM(V\$ROLLSTAT.XACTS)
Sort Segments (SORT_SEGMENTS)	ソート・セグメント数。ローカル管理永続表領域のパフォーマンスデータは収集しない。 2	AVG	ulong	No	すべて	COUNT(V\$SORT_SEGMENT)
Sorting Users (SORTING_USERS)	データ収集時にソート・セグメントでアクティブだったユーザー数。ローカル管理永続表領域のパフォーマンスデータは収集しない。 2	AVG	long	No	すべて	SUM(V\$SORT_SEGMENT.CURRENT_USERS)

5. レコード

Tablespace Interval (PI_PITS)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポートVR	データソース
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。 1	COPY	time_t	No	すべて	RM Collector
Tablespace Name (TABLESPACE_NAME)	テーブルスペース名。 1	COPY	string (30)	No	すべて	DBA_TABLESPACES.TABLESPACE_NAME
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェントのデバイスID。	-	string (256)	No	すべて	RM Collector
Write % (WRITE_PERCENTAGE)	すべての物理 I/O に対する書き込み処理の割合。 2	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域、ローカル管理永続表領域、またはディクショナリー管理一時表領域の場合 (SUM(V\$FILESTAT.PHYWRTS) / (SUM(V\$FILESTAT.PHYRDS) + SUM(V\$FILESTAT.PHYWRTS))) * 100 ローカル管理一時表領域の場合 (SUM(V\$TEMPSTAT.PHYWRTS) / (SUM(V\$TEMPSTAT.PHYRDS) + SUM(V\$TEMPSTAT.PHYWRTS))) * 100

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポ ート VR	データソース
Writes/sec (WRITES_RATE)	1 秒当たりの書き込み処理回数。 ²	AVG	double	No	すべて	<ul style="list-style-type: none"> ディクショナリー管理永続表領域, ローカル管理永続表領域, またはディクショナリー管理一時表領域の場合 SUM(V\$FILES TAT.PHYWRTS) / seconds in interval ローカル管理一時表領域の場合 SUM(V\$TEMP STAT.PHYWRT S) / seconds in interval

Transaction (PD_PDTR)

機能

Transaction (PD_PDTR) レコードには、トランザクションについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータが格納されます。トランザクションごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	145	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

- PD_PDTR_SID
- PD_PDTR_ADDRESS

ライフタイム

トランザクションの開始から終了まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：240 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デ ル タ	サ ポ ー ト VR	データソース
Address (ADDRESS)	トランザクション状態オブジェクトのアドレス。	-	string(16)	No	すべて	V\$TRANSACTION.ADDR
Cache Hit % (CACHE_HIT_PERCENTAGE)	キャッシュ・ヒット率。	-	double	No	すべて	((V\$TRANSACTION.LOG_IO - V\$TRANSACTION.PHY_IO) / V\$TRANSACTION.LOG_IO) * 100

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サ ポー ト VR	データソース
Consistent Change % (CONSISTENT_CHANGE_PERCENTAGE)	トランザクションの読み込み処理の整合性のためのエクステントを表す割合。	-	double	No	すべて	(V\$TRANSACTION.CR_CHANGE / V\$TRANSACTION.CR_GET) * 100
Consistent Changes (CONSISTENT_CHANGES)	一貫性のある変更回数。	-	double	No	すべて	V\$TRANSACTION.CR_CHANGE
Consistent Gets (CONSISTENT_GETS)	一貫性のある取得回数。	-	double	No	すべて	V\$TRANSACTION.CR_GET
Locks (LOCKS)	トランザクションのロック数。	-	double	No	すべて	COUNT(V\$LOCKED_OBJECT)
Logical I/O (LOGICAL_IO)	論理 I/O。	-	double	No	すべて	V\$TRANSACTION.LOG_IO
No Undo (NO_UNDO)	非 UNDO トランザクション識別子。非 UNDO トランザクションの場合、このフィールドの値は「Yes」、そうでない場合、「No」。	-	string(3)	No	すべて	V\$TRANSACTION.NOUNDO
Physical I/O (PHYSICAL_IO)	物理 I/O。	-	double	No	すべて	V\$TRANSACTION.PHY_IO
Previous XID (PREVIOUS_XID)	親トランザクション ID。	-	string(30)	No	すべて	V\$TRANSACTION.PRIV_XIDUSN + V\$TRANSACTION.PRIV_XIDSLT + V\$TRANSACTION.PRIV_XIDSQN
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	-	time	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PDTR」。	-	string(4)	No	すべて	RM Collector

5. レコード

Transaction (PD_PDTR)

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サポート VR	データソース
Recursive (RECURSIVE)	再帰的トランザクション識別子。再帰的トランザクションである場合、このフィールドの値は「Yes」、そうでない場合、「No」。	-	string(3)	No	すべて	V\$TRANSACTION.RECURSIVE
SID (SID)	セッション識別子。	-	ulong	No	すべて	V\$SESSION.SID where V\$TRANSACTION.SES_ADDR = V\$SESSION.ADDR
Space (SPACE)	領域トランザクション識別子。領域トランザクションである場合、このフィールドの値は「Yes」、そうでない場合、「No」。	-	string(3)	No	すべて	V\$TRANSACTION.SPACE
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Status (STATUS)	トランザクションの状態。	-	string(16)	No	すべて	V\$TRANSACTION.STATUS
Tran Secs (TRANS_SECS)	開始時刻以降の秒数。	-	ulong	No	すべて	V\$TRANSACTION.START_TIME
Tran Start (TRANS_START)	開始時刻。	-	string(20)	No	すべて	V\$TRANSACTION.START_TIME
Used Undo Blocks (USED_UNDO_BLOCKS)	使用された UNDO ブロック数。	-	double	No	すべて	V\$TRANSACTION.USED_UBLK
Used Undo Records (USED_UNDO_RECORDS)	使用された UNDO レコード数。	-	double	No	すべて	V\$TRANSACTION.USED_UREC
User (USERNAME)	Oracle ユーザー名。	-	string(30)	No	すべて	V\$SESSION.USERNAME

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サ ポー ト VR	データソース
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェントのデバイス ID。	-	string(256)	No	すべて	RM Collector
XID (XID)	UNDO セグメント番号, スロット番号, および順序番号。トランザクションがアクティブでない場合は無効。	-	string(30)	No	すべて	V\$TRANSACTION.XIDUSN + V\$TRANSACTION.XIDSLOT + V\$TRANSACTION.XIDSQN

Transaction Lock (PD_PDTL)

機能

Transaction Lock (PD_PDTL) レコードには、トランザクション・ロックについての、ある時点での状態を示すパフォーマンスデータ情報が格納されます。各トランザクションによって保持されているロックごとに一つのレコードが作られます。このレコードは、複数インスタンスレコードです。

デフォルト値および変更できる値

項目	デフォルト値	変更可否
Collection Interval	600	
Collection Offset	140	
Log	No	
LOGIF	空白	

ODBC キーフィールド

PD_PDTL_XID

ライフタイム

オブジェクトがロックされてからロック解除まで。

レコードサイズ

固定部：678 バイト

可変部：180 バイト

フィールド

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デル タ	サ ポ ー ト VR	データソース
Locked Mode (LOCKED_MODE)	ロック・モード。	-	string(20)	No	すべて	V\$LOCKED_OBJECT.LOCKED_MODE
Object Name (OBJECT_NAME)	ロックされているオブジェクト名。	-	string(30)	No	すべて	DBA_OBJECTS. OBJECT_NAME where DBA_OBJECTS. OBJECT_ID = V\$LOCKED_OBJECT.OBJECT_ID

PFM - View 名 (PFM - Manager 名)	説明	要約	形式	デルタ	サ ポ ー ト VR	データソース
Object Type (OBJECT_TYPE)	オブジェクトの種類。	-	string(30)	No	すべて	DBA_OBJECTS. OBJECT_TYPE where DBA_OBJECTS. OBJECT_ID = V\$LOCKED_OBJ ECT.OBJECT_ID
Owner (OWNER)	オブジェクトの所有者。	-	string(30)	No	すべて	DBA_OBJECTS. OWNER where DBA_OBJECTS. OBJECT_ID = V\$LOCKED_OBJ ECT.OBJECT_ID
Record Time (RECORD_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集終了時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
Record Type (INPUT_RECORD_TYPE)	レコード名。常に「PDTL」。	-	string(4)	No	すべて	RM Collector
SID (SID)	セッション識別子。	-	ulong	No	すべて	V\$LOCKED_OBJ ECT.SESSION_I D
Start Time (START_TIME)	レコードに格納されたパフォーマンスデータの収集開始時刻。	-	time_t	No	すべて	RM Collector
User (USER_NAME)	Oracle ユーザー名。	-	string(30)	No	すべて	V\$LOCKED_OBJ ECT.ORACLE_U SERNAME
VA DeviceID (VADEVICEID)	仮想エージェントのデバイスID。	-	string(256)	No	すべて	RM Collector
XID (XID)	Undo セグメント番号、スロット番号、およびシーケンス番号を示す。	-	string(30)	No	すべて	V\$LOCKED_OBJ ECT.XIDUSN + V\$LOCKED_OBJ ECT.XIDSLOT + V\$LOCKED_OBJ ECT.XIDSQN

6

メッセージ

この章では、PFM・RM for Oracle のメッセージ形式，出力先一覧，syslog と Windows イベントログの一覧，およびメッセージ一覧について説明します。

6.1 メッセージの形式

6.2 メッセージの出力先一覧

6.3 syslog と Windows イベントログの一覧

6.4 メッセージ一覧

6.1 メッセージの形式

PFM・RM for Oracle が出力するメッセージの形式と、マニュアルでの記載形式を示します。

6.1.1 メッセージの出力形式

PFM・RM for Oracle が出力するメッセージの形式を説明します。メッセージは、メッセージ ID とそれに続くメッセージテキストで構成されます。形式を次に示します。

KAVLnnnnn-Yメッセージテキスト

メッセージ ID は、次の内容を示しています。

K

システム識別子を示します。

AVL

PFM・RM のメッセージであることを示します。

nnnnn

メッセージの通し番号を示します。PFM・RM for Oracle のメッセージ番号は、「18xxx」です。

Y

メッセージの種類を示します。

- E: エラー
処理は中断されます。
- W: 警告
メッセージ出力後、処理は続けられます。
- I: 情報
ユーザーに情報を知らせます。
- Q: 応答
ユーザーに応答を促します。

メッセージの種類と syslog の priority レベルとの対応を次に示します。

-E

- レベル: LOG_ERR
- 意味: エラーメッセージ。

-W

- レベル: LOG_WARNING
- 意味: 警告メッセージ。

-I

- レベル: LOG_INFO
- 意味: 付加情報メッセージ。

-Q

(出力されない)

メッセージの種類と Windows イベントログの種類との対応を次に示します。

-E

- レベル: エラー
- 意味: エラーメッセージ。

-W

- レベル: 警告
- 意味: 警告メッセージ。

-I

- レベル: 情報
- 意味: 付加情報メッセージ。

-Q

(出力されない)

6.1.2 メッセージの記載形式

このマニュアルでのメッセージの記載形式を示します。メッセージテキストで太字になっている部分は、メッセージが表示される状況によって表示内容が変わることを示しています。また、メッセージをメッセージ ID 順に記載しています。記載形式の例を次に示します。

メッセージ ID

英語メッセージテキスト
日本語メッセージテキスト

メッセージの説明文

(S)

システムの処置を示します。

(O)

メッセージが表示されたときに、オペレーターがとる処置を示します。

参考

システム管理者がオペレーターから連絡を受けた場合は、「7. トラブルへの対処方法」を参照してログ情報を採取し、初期調査をしてください。
トラブル要因の初期調査をする場合は、OS のログ情報 (Windows イベントログ) や、PFM・RM for Oracle が出力する各種ログ情報を参照してください。これらのログ情報のトラブル発生時間帯の内容を参照して、トラブルを回避したり、トラブルに対処したりしてください。また、トラブルが発生するまでの操作方法などを記録してください。同時に、できるだけ再現性の有無を確認するようにしてください。

6.2 メッセージの出力先一覧

ここでは、PFM・RM for Oracle が出力する各メッセージ (凡例) の出力先を一覧で示します。
 : 出力する
 - : 出力しない

表中では、出力先を凡例のように表記しています。

表 6-1 PFM - RM for Oracle のメッセージの出力先一覧

メッセージ ID	出力先								
	syslog	Windows イベント ログ	共通メッ セージ ログ	標準 出力	標準エ ラー出 力	エージェントロ グ		JP1 シス テム イベ ント 1	エー ジェ ント イベ ント 2
						通常 ログ	異常ロ グ		
KAVL18001-I				-	-	-	-	-	-
KAVL18002-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18003-I				-	-	-	-	-	-
KAVL18004-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18009-W	-	-		-	-	-	-	-	-
KAVL18010-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18011-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18014-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18015-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18017-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18018-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18019-W	-	-		-	-	-	-	-	-
KAVL18020-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18021-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18022-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18023-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18301-W	-	-		-	-	-	-	-	-
KAVL18302-W	-	-		-	-	-	-	-	-
KAVL18303-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18304-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18305-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18306-W	-	-		-	-	-	-	-	-
KAVL18401-W	-	-		-	-	-	-	-	-
KAVL18402-E				-	-	-	-	-	-
KAVL18501-E	-	-	-	3	-	-	-	-	-

6. メッセージ

メッセージID	出力先								
	syslog	Windows イベント ログ	共通メッ セージ ログ	標準 出力	標準エ ラー出 力	エージェントロ グ		JP1 シス テム イベ ント 1	エー ジェ ント イベ ント 2
						通常 ログ	異常ロ グ		
KAVL18502-E	-	-	-	3	-	-	-	-	-
KAVL18504-E	-	-	-	4	-	-	-	-	-
KAVL18505-I	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18506-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18507-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18508-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18509-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18510-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18511-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18512-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18513-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18514-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18515-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18516-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18517-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18518-E	-	-	-	5	-	-	-	-	-
KAVL18519-E	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18600-E	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18601-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18602-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18603-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18604-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18605-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18606-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18607-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18608-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18609-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18610-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18611-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18612-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-

メッセージ ID	出力先								
	syslog	Windows イベント ログ	共通メッ セージ ログ	標準 出力	標準エ ラー出 力	エージェントロ グ		JP1 シス テム イベ ント 1	エー ジェ ント イベ ント 2
						通常 ログ	異常ロ グ		
KAVL18613-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18614-E	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18615-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18616-E	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18617-E	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18618-E	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18619-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18620-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18621-E	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18622-E	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18623-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18624-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18625-E	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18629-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18630-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18631-E	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18632-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18633-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18634-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18635-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18636-I	-	-	-	-	-	-	-	-	-
KAVL18638-W	-	-	-	-	-	-		-	-
KAVL18639-E	-	-	-	-	-	-		-	-

注 1

JP1 システムイベントは、エージェントの状態の変化を JP1/IM に通知するイベントです。JP1 システムイベントの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、統合管理製品 (JP1/IM) と連携した稼働監視について説明している章を参照してください。

JP1 システムイベントを発行するための前提プログラムを次の表に示します。

表 6-2 JP1 システムイベントを発行するための前提プログラム

ホスト種別	前提プログラム	バージョン
PFM - Manager ホスト	PFM - Manager	09-00 以降
PFM - Web Console ホスト	PFM - Web Console	08-00 以降

6. メッセージ

ホスト種別	前提プログラム	バージョン
PFM・RM ホスト	PFM・RM for Oracle	09-00 以降
	PFM・Manager または PFM・Base	09-00 以降
	JP1/Base	08-50 以降

注 2

エージェントイベントは、エージェントの状態の変化を PFM・Manager に通知するイベントです。エージェントイベントの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、イベントの表示について説明している章を参照してください。

エージェントイベントを発行するための前提プログラムを次の表に示します。

表 6-3 エージェントイベントを発行するための前提プログラム

ホスト種別	前提プログラム	バージョン
PFM・Manager ホスト	PFM・Manager	09-00 以降
PFM・Web Console ホスト	PFM・Web Console	08-00 以降
PFM・RM ホスト	PFM・Manager または PFM・Base	09-00 以降

注 3

このメッセージは、sp_rist.sql スクリプト実行時に出力されます。

注 4

このメッセージは、sp_rist.sql スクリプトまたは mk_rmus.sql スクリプト実行時に出力されます。

注 5

このメッセージは、mk_rmus.sql スクリプト実行時に出力されます。

6.3 syslog と Windows イベントログの一覧

ここでは、PFM・RM for Oracle が syslog と Windows イベントログに出力するメッセージ情報の一覧を示します。

syslog は、syslog ファイルに出力されます。syslog ファイルの格納場所については、syslog デモンコンフィギュレーションファイル (デフォルトは /etc/syslogd.conf) を参照してください。

Windows イベントログは、[イベントビューア] ウィンドウのアプリケーションログに表示されます。

参考

[イベントビューア] ウィンドウは、Windows の [スタート] メニューから表示される [管理ツール] - [イベントビューア] を選択することで表示できます。

PFM・RM for Oracle が出力するイベントの場合、[イベントビューア] ウィンドウの [ソース] に識別子「PFM-RMOracle」が表示されます。

PFM・RM for Oracle が syslog と Windows イベントログに出力するメッセージ情報の一覧を次の表に示します。

表 6-4 syslog と Windows イベントログ出力メッセージ情報一覧

メッセージ ID	syslog		Windows イベントログ	
	ファシリティ	レベル	イベント ID	種類
KAVL18001-I	LOG_DAEMON	LOG_INFO	18001	情報
KAVL18002-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18002	エラー
KAVL18003-I	LOG_DAEMON	LOG_INFO	18003	情報
KAVL18004-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18004	エラー
KAVL18010-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18010	エラー
KAVL18011-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18011	エラー
KAVL18014-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18014	エラー
KAVL18015-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18015	エラー
KAVL18017-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18017	エラー
KAVL18018-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18018	エラー
KAVL18020-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18020	エラー
KAVL18021-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18021	エラー
KAVL18022-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18022	エラー
KAVL18023-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18023	エラー
KAVL18303-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18303	エラー
KAVL18304-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18304	エラー
KAVL18305-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18305	エラー
KAVL18402-E	LOG_DAEMON	LOG_ERR	18402	エラー

6.4 メッセージ一覧

PFM・RM for Oracle が出力するメッセージと対処方法について説明します。PFM・RM for Oracle のメッセージ一覧を次に示します。

KAVL18001-I

Remote Monitor Collector has stopped. (host=ホスト名, service=ホスト名<RMOracle>)

Remote Monitor Collectorが停止しました (host=ホスト名, service=ホスト名<RMOracle>)

Remote Monitor Collector サービスが正常に終了しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。

KAVL18002-E

Remote Monitor Collector failed to start.

Remote Monitor Collectorの起動に失敗しました

Remote Monitor Collector サービスの起動に失敗しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。
- (O) 共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってください。

KAVL18003-I

Remote Monitor Collector has started. (host=ホスト名, service=ホスト名<RMOracle>)

Remote Monitor Collectorが起動しました (host=ホスト名, service=ホスト名<RMOracle>)

Remote Monitor Collector サービスの起動が完了しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスのパフォーマンスデータ収集処理を開始します。

KAVL18004-E

Remote Monitor Collector stopped abnormally.

Remote MonitorCollectorが異常終了しました

Remote Monitor Collector サービスが異常終了しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了しま

す。

- (O) 共通メッセージログに出力されている直前のメッセージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってください。

KAVL18009-W

The object to be monitored is not available. (host=ホスト名, service=ホスト名<RMOracle>)

監視対象のオブジェクトが利用できません (host=ホスト名, service=ホスト名<RMOracle>)

監視対象の Oracle Database に接続できません。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を続行します。
- (O) Oracle Database が起動されているかどうか確認してください。また、インスタンス環境のセットアップ時に設定した次の項目に誤りがないか確認してください。
- net_service_name
 - oracle_home
 - oracle_sid
 - oracle_user
 - oracle_passwd

KAVL18010-E

An attempt to read the initialization file failed.

サービス起動情報ファイルの読み込みに失敗しました

Remote Monitor Collector サービス起動処理中に、サービス起動情報ファイルの読み込み処理に失敗しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。
- (O) サービス起動情報ファイル (jpcagt.ini) が、次のディレクトリ下にあるかどうか確認してください。
- Windows の場合
インストール先フォルダ %agt1%agent¥インスタンス名
 - UNIX の場合
/opt/jplpc/agt1/agent/ インスタンス名

サービス起動情報ファイルがない場合、jpcagt.ini.model ファイルを jpcagt.ini ファイルにコピーしてください。要因が判明しない場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル

ル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、
トラブルへの対処方法について説明している章を参照
してください。

KAVL18011-E

Initialization of interprocess communication failed.
プロセス間通信の初期化に失敗しました

Remote Monitor Collector サービスとパフォーマンスデー
タ収集プログラムとの通信の準備に失敗しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了しま
す。
- (O) 共通メッセージログに出力されている直前のメッセ
ージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってくだ
さい。
直前に出力されているメッセージがない場合は、保守
資料を採取したあと、システム管理者に連絡してくだ
さい。保守資料の採取方法については、マニュアル
「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ト
ラブルへの対処方法について説明している章を参照し
てください。

KAVL18014-E

The [Agent | Collector] semaphore could not be obtained.
[Agent | Collector] セマフォの取得に失敗しました

セマフォの取得に失敗しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了しま
す。
- (O) カーネルパラメーターのセマフォを確認し、正しく設
定し直してください。セマフォの値については、「付
録 B カーネルパラメーター」を参照してください。

KAVL18015-E

The Collector process could not start.
コレクタープロセスの起動に失敗しました

パフォーマンスデータ収集プログラムの起動に失敗しま
した。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了しま
す。
- (O) 保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡して
ください。保守資料の採取方法については、マニユアル
「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、
トラブルへの対処方法について説明している章を参照
してください。

KAVL18017-E

The environment variable [環境変数] could not be set.
環境変数[環境変数]を設定できません

環境変数を設定できませんでした。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了しま
す。
- (O) 保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡して
ください。保守資料の採取方法については、マニユアル
「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、
トラブルへの対処方法について説明している章を参照
してください。

KAVL18018-E

An attempt to start the collector failed. (GetProgram=プ
ログラム名)
コレクターの起動処理に失敗しました (GetProgram=プ
ログラム名)

データベースを監視するための設定が正しくないため、パ
フォーマンスデータ収集プログラムの起動に失敗しまし
た。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了しま
す。
- (O) Oracle Database が起動されているかどうか確認して
ください。また、インスタンス環境のセットアップ時
に設定した次の項目に誤りがないか確認してくださ
い。
- oracle_home
 - oracle_sid
 - oracle_user
 - oracle_passwd

KAVL18019-W

External command could not be called while collecting レ
コード名. (Command=コマンド行)
レコード名 を収集中に外部コマンドの呼び出しに失敗し
ました (Command=コマンド行)

外部コマンドの呼び出しに失敗しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を続行しま
す。
- (O) OS や Oracle が正常に稼働していることを確認して
ください。
コマンド行に出力されるコマンドが実行できることを
確認してください。

KAVL18020-E

While executing 関数名 function 呼び出し先関数名 failed.
関数名 関数の実行中に呼び出し先関数名 が失敗しました

関数名で示される関数の実行中に、エラーが発生しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。
- (O) 次のように対処してください。
- Load Library() に失敗した場合
インスタンス環境のセットアップ時に設定した「oracle_home」に誤りがないか確認してください。
 - その他の場合
保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVL18021-E

Error occurred by function 関数名. (en=エラーコード, arg1=引数1, arg2=引数2, arg3=引数3)
関数 関数名でエラーが発生しました (en=エラーコード, arg1=引数1, arg2=引数2, arg3=引数3)

関数名で示される関数の実行中に、エラーが発生しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。
- (O) 保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVL18022-E

Processing was interrupted by signal. (signal=シグナル番号)
シグナルによって処理が中断されました (signal=シグナル番号)

シグナルによって処理が中断されました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。
- (O) 保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル

ル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVL18023-E

Remote Monitor Collector is going to stop because the error has occurred.

エラーが発生したためRemote Monitor Collectorを停止します

エラーが発生したため、Remote Monitor Collector サービスを停止します。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。
- (O) 共通メッセージログの直前に出力されているメッセージを確認し、そのメッセージの対処方法に従ってください。

KAVL18301-W

At Remote Monitor Collector startup, the system could not connect to Oracle. (rc=リターンコード)
Remote Monitor Collector開始時にOracleに接続できませんでした (rc=リターンコード)

Oracle Database への接続に失敗しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を続行します。
- (O) このメッセージのあとに出力されるメッセージの対処方法に従ってください。

KAVL18302-W

An OCI call failed because of function 関数名. (rc=リターンコード, errcode=エラー番号)
OCIコールが関数 関数名 (rc=リターンコード, errcode=エラー番号) で失敗しました

Oracle Database への接続時、OCI コールでエラーが発生しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を続行します。
- (O) エラー番号を基に、次のように対処してください。
- errcode に 942 が表示された場合
現在の構成で収集できないレコードを収集していないか確認してください。または、oracle_user に指定した Oracle アカウントに必要なシステム権限を付与しているか確認してください。ロールとして権限を付与している場合は、明示的にシステム権限

(GRANT " 権限 ") を付与してください。

- errcode に 1017 または 1031 が表示された場合
ユーザー名またはパスワードが無効なため、監視対象の Oracle Database へのログインに失敗しています。インスタンス環境の設定時に指定したユーザー名とパスワードが誤っていないか確認してください。インスタンス環境の確認方法については、「2.6.3 インスタンス環境の更新の設定」(UNIX の場合) を参照してください。
- errcode に 6550 が表示された場合
収集対象の Oracle Database で「sp_rist.sql」スクリプトを実行する必要があります。スクリプトの実行方法については、「2.1.4(3) インスタンス環境の設定」(Windows の場合)、または「2.2.4(4) インスタンス環境の設定」(UNIX の場合) を参照してください。
- errcode に 1013 が表示された場合
キャンセル機能を使用したことにより、パフォーマンスデータの収集がキャンセルされた場合があります。エージェントログの通常ログに「KAVL18636-I」のメッセージが出力されているかどうか確認してください。収集データをキャンセルさせたくない場合、タイムアウト値を見直してください。
- errcode に 12546 が表示された場合
Oracle ホームのディレクトリ (環境変数 ORACLE_HOME と同じ値) 以下のファイルに対し、その他のユーザー (OTHER ユーザー) に実行パーミッションがない場合、Oracle Database に接続できないことがあります。インスタンス環境の確認方法については、「2.6.3 インスタンス環境の更新の設定」を参照してください。
- errcode にその他の番号が表示された場合
Oracle のマニュアルを参照し、対処してください。

KAVL18303-E

An attempt to allocate memory failed. (RecordName=レコード名, Size=取得サイズ)
メモリーの割り当てに失敗しました (RecordName=レコード名, Size=取得サイズ)

メモリーの確保に失敗しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。
- (O) 空きメモリーを増やしてください。

KAVL18304-E

Semaphore is insufficient.
セマフォが不足しています

セマフォが不足しています。

- (S)

Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。

- (O) カーネルパラメーターのセマフォの値を増やしてください。セマフォの値については、「付録 B カーネルパラメーター」を参照してください。

KAVL18305-E

例外名 exception raised. (Detail: 詳細情報)

例外名 例外が発生しました (詳細情報: 詳細情報)

例外名に示される例外が発生しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。
- (O) 保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVL18306-W

An attempt to allocate memory failed. (RecordName=レコード名, Size=取得サイズ)

メモリーの割り当てに失敗しました (RecordName=レコード名, Size=取得サイズ)

メモリーが不足しているため、メモリーの確保に失敗しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を続行しません。
- (O) 空きメモリーを増やしてください。

KAVL18401-W

An attempt to collect a record failed. (RecordName=レコード名)

レコードの収集に失敗しました (RecordName=レコード名)

レコード名に示されるレコードの取得に失敗しました。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を続行しません。
- (O) このメッセージが連続して出力されている場合、監視対象のシステム環境の設定に誤りがないかどうか確認してください。要因が判明しない場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/

Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVL18402-E

An unexpected abnormality occurred during the collection of records. (RecordName=レコード名)
レコードの収集中に予期しない異常が発生しました (RecordName=レコード名)

予期しない異常が発生したため、レコードの収集を中止します。

- (S) Remote Monitor Collector サービスの処理を終了します。
- (O) 保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVL18501-E

This Oracle Version is not supported.

Oracle Database のバージョンがサポート対象外です。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) 監視対象の Oracle Database が、サポート対象とされているバージョンのものか確認してください。サポート対象外の Oracle Database の場合、監視できません。

KAVL18502-E

The permission for monitoring the Oracle Database is insufficient.

Oracle Database を監視するための権限が不足しています。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) oracle_user に指定したユーザーでスクリプトを実行していない場合は、oracle_user に指定したユーザーで、再度スクリプトを実行してください。oracle_user に指定したユーザーでスクリプトを実行した場合は、oracle_user に指定したユーザーに SYS スキーマのオブジェクトを参照および実行できる権限を設定したあと、再度スクリプトを実行してください。

KAVL18504-E

An unexpected error occurred.

予期しないエラーが発生しました。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) 権限が正しく付与されているかどうか確認してください。権限の付与に問題がない場合は、実行したスクリプトと保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVL18505-I

The script ended normally.

スクリプトは正常に終了しました。

- (S) スクリプトの実行を終了します。

KAVL18506-E

Script processing will now stop because an error occurred.

エラーが発生したため、スクリプトの処理を停止します。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) このメッセージのあとに出力されるメッセージの対処方法に従ってください。

KAVL18507-E

The number of entered characters exceeded the maximum.

入力された文字列が最大長を超えました。入力できる文字列は、最大 30 バイトまでです。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) 入力値を見直したあと、スクリプトを再実行してください。

KAVL18508-E

The entered value is invalid.

入力値が不正です。

- (S) スクリプトの実行を中止します。

- (O) 入力値を見直したあと、スクリプトを再実行してください。

KAVL18509-E

A user with the same name already exists.

同じアカウント名が、すでにデータベース内にあります。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) アカウント名を見直したあと、スクリプトを再実行してください。

KAVL18510-E

The specified user name is invalid.

指定されたアカウント名が無効です。指定されたアカウント名に、使用できない記号が含まれています。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) アカウント名を見直したあと、スクリプトを再実行してください。

KAVL18511-E

The password is not specified or is invalid.

パスワードが指定されていないか、無効です。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) パスワードを指定しなかった場合は、パスワードを指定したあと、再実行してください。パスワードを指定した場合は、指定したパスワード内に使用できない記号が含まれています。パスワードを見直したあと、スクリプトを再実行してください。

KAVL18512-E

The password did not meet the necessary complexity specifications.

パスワードが要求された複雑度を満たしていません。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) 指定したパスワードが、Oracleによって要求されている複雑度を満たしていません。データベース管理者に、要求されるパスワードの複雑度について問い合わせてください。その後、パスワードを見直し、スクリプトを再実行してください。

KAVL18513-E

The tablespace name is not specified.

デフォルト表領域名またはデフォルト一時表領域名が指定されていません。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) デフォルト表領域名またはデフォルト一時表領域名を指定して、スクリプトを再実行してください。

KAVL18514-E

The specified tablespace name is invalid.

指定されたデフォルト表領域名またはデフォルト一時表領域名は無効です。指定された表領域名に、使用できない記号が含まれています。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) デフォルト表領域名またはデフォルト一時表領域名を見直したあと、スクリプトを再実行してください。

KAVL18515-E

The specified tablespace does not exist.

指定されたデフォルト表領域またはデフォルト一時表領域が、データベース内にありません。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) デフォルト表領域またはデフォルト一時表領域を見直したあと、スクリプトを再実行してください。

KAVL18516-E

The specified tablespace cannot be used as the default tablespace.

指定された表領域名は、一時表領域などデフォルト表領域に使用できない表領域です。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) デフォルト表領域名の指定を見直したあと、スクリプトを再実行してください。

KAVL18517-E

The specified tablespace cannot be used as the default temporary tablespace.

指定された一時表領域名は、UNDO 表領域などデフォルト

KAVL18518-E ~ KAVL18606-I

ト一時表領域に使用できない表領域です。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) デフォルト一時表領域名の指定を見直したあと、スクリプトを再実行してください。

KAVL18518-E

The permission for executing the script is insufficient.

スクリプトを実行するための権限が不足しています。

- (S) スクリプトの実行を中止します。
- (O) スクリプトを実行した Oracle アカウントに、CREATE USER システム権限および GRANT ANY PRIVILEGE システム権限が付与されているかを確認してください。
スクリプトを実行したアカウントに必要な権限が付与されていない場合、必要な権限を付与するか、権限を持つ別のアカウントでスクリプトを再実行してください。

KAVL18519-E

Failed to output to Agent log. OS関数 failed. Error code = エラーコード.

エージェントログの出力に失敗しました。OS 関数がエラーコードで失敗しました。

- (S) Remote Monitor Collector の処理を続行します。これ以降、エラー原因が取り除かれるまで、エージェントログは採取されません。
- (O) エージェントログの出力先のパス、アクセス権限などを確認してください。

KAVL18600-E

An error occurred in OS function 関数名. (rc=エラーコード)

関数名に示される関数の実行中にエラーが発生しました。エラーコードはシステムコールが返却する値です。

- (S) Remote Monitor Collector の処理を続行します。
- (O) OS のリソースが不足していないこと、OS 全般に障害が発生していないことを確認してください。このメッセージが連続して出力されている場合、監視対象のシステム環境の設定に誤りがないかどうか確認してください。要因が判明しない場合、保守資料を採取し

たあと、システム管理者に連絡してください。
保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVL18601-I

Agent : Started : Collecting records.

エージェントがレコード収集の処理を開始しました。

- (S) Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18602-I

Agent : Started : Sending a request to the collector. (プロセスID)

エージェントがプロセス ID のコレクターに対して処理の依頼を開始しました。

- (S) Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18603-I

Collector : Started : Receive a request.

コレクタープロセスがエージェントからの処理依頼の受信を開始しました。

- (S) Remote MonitorCollector の処理を続行します。

KAVL18604-I

Agent : Ended : Sending a request to the collector. (プロセスID)

エージェントがプロセス ID のコレクタープロセスに対して処理の依頼を完了しました。結果受信待ちに移行します。

- (S) Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18605-I

Collector : Ended : Receive a request. (レコード名)

コレクタープロセスがエージェントからのレコード名に対する処理依頼の受信を終了しました。

- (S) Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18606-I

Agent : Waiting for the results.

エージェントがコレクタープロセスからの結果の受信待ち

状態に入りました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18607-I

Collector : Started : Sending the results.

コレクタープロセスが Oracle データベースへのアクセスを終了し、エージェントへの結果の送信処理を開始しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18608-I

Agent : Received the results.

エージェントがコレクタープロセスからの結果受信を完了しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18609-I

Collector : Ended : Sending the results.

コレクタープロセスがエージェントへの結果の送信処理を完了しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18610-I

Agent : Started : Storing the results to the Store DB. (レコード名) count=レコード数

エージェントが、レコード名に示されるレコードを、レコード数に示される数だけ Store データベースに保存する処理を開始します。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18611-I

Agent : Ended : Storing the results to the Store DB. (レコード名)

エージェントが、レコード名に示されるレコードを Store データベースに保存する処理を完了しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18612-I

Agent : Ended : Collecting records.

エージェントがレコード収集の処理を完了しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18613-W

The object to be monitored is not available. (host=ホスト名, service=ホスト名<RMOracle>)

監視対象の Oracle のサーバに接続できません。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

(O)

Oracle Database が起動されているかどうか確認してください。また、インスタンス環境のセットアップ時に設定した次の項目に誤りがないか確認してください。

- oracle_sid
- oracle_home
- oracle_user
- oracle_passwd

KAVL18614-E

The environment variable [環境変数名] could not be set.

環境変数を設定できませんでした。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVL18615-W

External command could not be called while collecting レコード名. (Command=コマンド行)

外部コマンドの呼び出しに失敗しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

(O)

OS や Oracle が正常に稼働しているか確認してください。コマンド行に出力されるコマンドが実行できることを確認してください。

KAVL18616-E

While executing 関数名 function 呼び出し先関数名 failed.

関数 関数名の実行中にエラーが発生しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVL18617-E

Error occurred by function 関数名. (en=エラーコード, arg1=引数1, arg2=引数2, arg3=引数3)

関数名に示される関数の実行中にエラーが発生しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVL18618-E

Processing was interrupted by signal. (signal=シグナル番号)

シグナルにより処理が中断されました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVL18619-W

At Remote Monitor Collector startup, the system could not connect to Oracle. (rc=リターンコード)

Oracle サーバへの接続に失敗しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

(O)

このメッセージのあとに出力されるメッセージの対処方法に従ってください。

KAVL18620-W

An OCI call failed because of function 関数名. (rc=リターンコード, errcode=エラー番号)

Oracle サーバへの接続時、OCI コールでエラーが発生しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

(O)

エラー番号を基に、次のように対処してください。

- errcode に 942 が表示された場合
現在の構成で収集できないレコードを収集していないか確認してください。または、oracle_user に指定した Oracle アカウントに必要なシステム権限を付与しているか確認してください。ロールとして

権限を付与している場合は、明示的にシステム権限 (GRANT "権限") を付与してください。

- errcode に 6550 が表示された場合
収集対象の Oracle Database で「sp_rist.sql」スクリプトを実行する必要があります。スクリプトの実行方法については、「2.1.4(3) インスタンス環境の設定」(Windows の場合)、または「2.2.4(4) インスタンス環境の設定」(UNIX の場合)を参照してください。
- errcode に 1013 が表示された場合
キャンセル機能を使用したことにより、パフォーマンスデータの収集がキャンセルされた可能性があります。エージェントログの通常ログに「KAVL18636-I」のメッセージが出力されているかどうか確認してください。収集データをキャンセルさせたくない場合、タイムアウト値を見直してください。
- errcode に 12546 が表示された場合
Oracle ホームのディレクトリ (環境変数 ORACLE_HOME と同じ値) 以下のファイルに対して、その他のユーザー (OTHER ユーザー) に実行パーミッションがない場合、Oracle Database に接続できないことがあります。インスタンス環境の確認方法については、「2.6.3 インスタンス環境の更新の設定」を参照してください。
- errcode にその他の番号が表示された場合
Oracle のマニュアルを参照して、対処してください。

KAVL18621-E

An attempt to allocate memory failed. (RecordName=レコード名, Size=取得サイズ)

メモリーの確保に失敗しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を終了します。

(O)

空きメモリーを増やしてください。

KAVL18622-E

例外名 exception raised. (Detail: 詳細情報)

例外名に示される例外が発生しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVL18623-W

An attempt to allocate memory failed. (RecordName=レコード名, Size=取得サイズ)

メモリーの確保に失敗しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

(O)

空きメモリーを増やしてください。

KAVL18624-W

An attempt to collect a record failed. (RecordName=レコード名)

レコード名に示されるレコードの収集に失敗しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

(O)

このメッセージが連続して出力されている場合、監視対象のシステム環境の設定に不備がないか確認してください。要因が判明しない場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVL18625-E

An unexpected abnormality occurred during the collection of records. (RecordName=レコード名)

予期しない異常が発生したため、レコードの収集を中止します。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を終了します。

(O)

保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。

KAVL18629-I

Agent log. path = エージェントログ出力フォルダパス

Remote Monitor Collector サービスのエージェントログの出力先フォルダが、エージェントログ出力フォルダパスであることを記録します。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18630-W

Agent property プロパティ名 is outside injustice or the range. (Range: 範囲値)

Remote Monitor Collector サービスのプロパティに不正な値または範囲外の値が指定されました。

(S)

指定された値を無効にして Remote Monitor Collector の処理を続行します。該当する項目は変更前の値のままです。TIMEOUT プロパティに、1 ~ 9 を指定した場合、値を 10 に置き換えます。

(O)

設定された値で問題がないかどうかを確認してください。問題がある場合は、適切な値を再度指定してください。

KAVL18631-E

An error occurred: エラー詳細内容

Remote Monitor Collector サービスの処理中にエラーが発生しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を終了します。

(O)

OS のリソースが不足していないこと、OS 全般に障害が発生していないことを確認してください。このメッセージが連続して出力されている場合、監視対象のシステム環境の設定に誤りがないかどうか確認してください。要因が判明しない場合、保守資料を採取したあと、システム管理者に連絡してください。保守資料の採取方法については、マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

KAVL18632-W

A warning-level error occurred: 警告エラー詳細内容

Remote Monitor Collector サービスの処理中に警告エラーが発生しました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

(O)

次のことを確認してください。

- OS のリソースが不足していないこと。
- OS 全般に障害が発生していないこと。
- 監視対象のシステム環境の設定に誤りがないこと。

KAVL18633-W

Can't get data from Oracle.

Oracle に対して情報収集ができませんでした。

(S)

Oracle に接続できません。

(O)

Oracle が正常に稼働しているかどうか確認してください。また、インスタンスのセットアップ時に設定した情報に誤りがないか確認してください。

KAVL18634-W

Getting record error(レコード名). This record is only in drilldown reports.

レコード名に示されるレコードを取得できませんでした。このレコードはドリルダウンレポートでだけ取得できません。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

(O)

このレコード固有の ODBC キーフィールドをフィールドを持つレコードに関連づけてドリルダウンを設定してください。ドリルダウンレポートについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働分析のためのレポートの作成について説明している章を参照してください。

KAVL18635-I

Agent : Elapsed time 所要時間 sec.(レコード名)

レコード名に示されるレコードの収集に要した時間(秒)を記録します。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18636-I

The cancellation of the record collection(レコード名) by the time-out was accepted.

レコード名に示されるレコードのタイムアウトによる収集のキャンセルを受け付けました。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

KAVL18638-W

The mismatch of ORACLE_SID was detected.(監視対象のOracle DatabaseのSID)

インスタンス環境のセットアップ時に設定した「oracle_sid」と監視対象の Oracle Database の SID が異なります。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を続行します。

(O)

インスタンス環境のセットアップ時に設定した「oracle_sid」と、監視対象の Oracle Database の SID が異なっていないか確認してください。また、インスタンス環境のセットアップ時に設定した「net_service_name」に、正しい値が設定されているかどうか確認してください。

KAVL18639-E

The target is not set.

監視対象が設定されていません。

(S)

Remote Monitor Collector の処理を終了します。

(O)

PFM・RM for Oracle のインスタンスに監視対象を設定しているかどうか確認してください。監視対象を設定したあと、PFM・RM for Oracle を起動してください。

7

トラブルへの対処方法

この章では、Performance Management の運用中にトラブルが発生した場合の対処方法などについて説明します。ここでは、主に PFM・RM でトラブルが発生した場合の対処方法について記載しています。Performance Management システム全体のトラブルへの対処方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

-
- 7.1 対処の手順
 - 7.2 トラブルシューティング
 - 7.3 ログ情報
 - 7.4 トラブル発生時に採取が必要な資料
 - 7.5 資料の採取方法
 - 7.6 Performance Management の障害検知
 - 7.7 Performance Management の障害回復
-

7.1 対処の手順

Performance Management でトラブルが起きた場合の対処の手順を次に示します。

現象の確認

次の内容を確認してください。

- トラブルが発生したときの現象
- メッセージの内容（メッセージが出力されている場合）
- 共通メッセージログなどのログ情報

各メッセージの要因と対処方法については、「6. メッセージ」を参照してください。また、Performance Management が出力するログ情報については、「7.3 ログ情報」を参照してください。

資料の採取

トラブルの要因を調べるために資料の採取が必要です。「7.4 トラブル発生時に採取が必要な資料」および「7.5 資料の採取方法」を参照して、必要な資料を採取してください。

問題の調査

採取した資料を基に問題の要因を調査し、問題が発生している部分、または問題の範囲を切り分けてください。

7.2 トラブルシューティング

ここでは、Performance Management 使用時のトラブルシューティングについて記述します。Performance Management を使用しているときにトラブルが発生した場合、まず、この節で説明している現象が発生していないか確認してください。

Performance Management に発生する主なトラブルの内容を次の表に示します。

表 7-1 トラブルの内容

分類	トラブルの内容	記述箇所
セットアップやサービスの起動について	<ul style="list-style-type: none"> Performance Management のプログラムのサービスが起動しない サービスの起動要求をしてからサービスが起動するまで時間が掛かる Performance Management のプログラムのサービスを停止した直後に、別のプログラムがサービスを開始したとき、通信が正しく実行されない 「ディスク容量が不足しています」というメッセージが出力されたあと Master Store サービスまたは Agent Store サービスが停止する Oracle Database が停止しない 	7.2.1
コマンドの実行について	<ul style="list-style-type: none"> jpctool service list コマンドを実行すると稼働していないサービス名が出力される jpctool db dump コマンドを実行すると、指定した Store データと異なるデータが出力される 	7.2.2
レポートの定義について	<ul style="list-style-type: none"> 履歴レポートに表示されない時間帯がある 	7.2.3
アラームの定義について	<ul style="list-style-type: none"> アクション実行で定義したプログラムが正しく動作しない アラームイベントが表示されない 	7.2.4
パフォーマンスデータの収集と管理について	<ul style="list-style-type: none"> データの保存期間を短く設定したにもかかわらず、PFM - Agent の Store データベースのサイズが小さくならない 共通メッセージログに「Store データベースに不正なデータが検出されました」というメッセージが出力される PFM - RM を起動してもパフォーマンスデータが収集されない 	7.2.5

7.2.1 セットアップやサービスの起動について

セットアップやサービスの起動に関するトラブルの対処方法を次に示します。

(1) Performance Management のプログラムのサービスが起動しない

考えられる要因およびその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager が停止している
PFM - Manager と PFM - RM が同じホストにある場合、PFM - Manager が停止していると、PFM - RM サービスは起動できません。PFM - Manager サービスが起動されているか確認してください。PFM - Manager サービスが起動されていない場合は、起動してください。サービスの起動方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。
- Performance Management のプログラムの複数のサービスに対して同一のポート番号を設定している
Performance Management のプログラムの複数のサービスに対して同一のポート番号を設定している場合、Performance Management のプログラムのサービスは起動できません。デフォルトでは、ポート番号は自動的に割り当てられるため、ポート番号が重複することはありません。Performance Management のセットアップ時に Performance Management のプログラムのサービスに対して固定のポート番号を設定している場合は、ポート番号の設定を確認してください。Performance Management のプログラムの複数のサービスに対して同一のポート番号を設定している場合は、異なるポート番号を設定し直してください。ポート番号の設定については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。
- Store データベースの格納ディレクトリの設定に誤りがある
次のディレクトリを、アクセスできないディレクトリまたは存在しないディレクトリに設定していると、Remote Monitor Store サービスは起動できません。ディレクトリ名や属性の設定を見直し、誤りがあれば修正してください。
 - Store データベースの格納先ディレクトリ
 - Store データベースのバックアップディレクトリ
 - Store データベースの部分バックアップディレクトリ
 - Store データベースのエクスポート先ディレクトリ
 - Store データベースのインポート先ディレクトリまた、これらのディレクトリを複数の Remote Monitor Store サービスに対して設定していると、Remote Monitor Store サービスは起動できません。ディレクトリ設定を見直し、誤りがあれば修正してください。
- 指定された方法以外の方法でマシンのホスト名を変更した
マシンのホスト名の変更方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。指定された方法以外の方法でホスト名を変更した場合、Performance Management のプログラムのサービスが起動しないことがあります。
- サービスコントロールマネージャーでエラーが発生した

Windows で `jpcspm start` コマンドを実行した場合、「Windows のサービスコントロールマネージャーでエラーが発生しました」というエラーメッセージが出力され、サービスの起動に失敗することがあります。この現象が発生した場合、`jpcspm start` コマンドを再実行してください。頻繁に同じ現象が発生する場合は、`jpcspm start` コマンド実行時にサービス起動処理がリトライされる間隔および回数を、`jpccomm.ini` ファイルを編集して変更してください。リトライ間隔およびリトライ回数を変更する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の起動と停止について説明している章を参照してください。

- Oracle Database がインストールされていない
Oracle Database がインストールされていない場合、RM Collector サービスは起動できません。PFM・RM ホストに Oracle Database をインストールしてください。
- Oracle Database が起動されていない
Oracle Database の起動中の状態によっては、RM Collector サービスを起動できません。その場合、Oracle Database を起動したあと、RM Collector サービスを起動してください。
- ローカルシステムアカウント以外で動作している Oracle のサービスがある
Oracle のサービスのどれかがローカルシステムアカウント以外で動作している場合、Oracle でエラーが発生し、RM Collector サービスが起動できないことがあります。
- インスタンス環境のセットアップ時の設定に誤りがある
インスタンス環境のセットアップ時に設定した次の項目に誤りがあると、RM Collector サービスは起動できません。
 - `oracle_sid`
 - `oracle_home`
 - `oracle_user`
 - `oracle_passwd`

`jpccconf agent setup` コマンドを実行して、各項目の正しい値を設定し直してください。`jpccconf agent setup` コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(2) サービスの起動要求をしてからサービスが起動するまで時間が掛かる

`jpcspm start` コマンドを実行してから、または [サービス] アイコンでサービスを開始してから、実際にサービスが起動するまで時間が掛かることがあります。次の要因で時間が掛かっている場合、2 回目の起動時からはサービスの起動までに掛かる時間が短縮されます。

- システム停止時にサービスを自動で停止させる設定をしなくて、システムを再起動し

7. トラブルへの対処方法

てサービスを起動すると、Store データベースのインデックスが再構築される場合があります。この場合、サービスが起動するまでに時間が掛かることがあります。

- エージェントを新規に追加したあとサービスを起動すると、初回起動時だけ Store データベースのインデックスが作成されます。そのため、サービスが起動するまでに時間が掛かることがあります。
- 電源切断などによって Store サービスが正常な終了処理を行えなかったときは、再起動時に Store データベースのインデックスが再構築されるため、Store サービスの起動に時間が掛かることがあります。

(3) Performance Management のプログラムのサービスを停止した直後に、別のプログラムがサービスを開始したとき、通信が正しく実行されない

Performance Management のプログラムのサービスを停止した直後に、このサービスが使用していたポート番号で、ほかのプログラムがサービスを開始した場合、通信が正しく実行されないことがあります。この現象を回避するために、次のどちらかの設定をしてください。

- Performance Management のプログラムのサービスに割り当てるポート番号を固定する
Performance Management のプログラムの各サービスに対して、固定のポート番号を割り当てて運用してください。ポート番号の設定方法については、マニュアル「JP1/ Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- TCP_TIMEWAIT 値の設定をする

TCP_TIMEWAIT 値で接続待ち時間を設定してください。

Windows の場合、接続待ち時間をデフォルトの設定としてください。デフォルト値は、次のとおりです。

- Windows Server 2003, Windows Server 2008 の場合：2分

Linux の場合、接続待ち時間のデフォルト値（60 秒）は変更できません。

Performance Management のプログラムのサービスのポート番号を固定する方法で対応してください。

(4) 「ディスク容量が不足しています」というメッセージが出力されたあと Master Store サービスまたは Remote Monitor Store サービスが停止する

Store データベースが使用しているディスクに十分な空き容量がない場合、Store データベースへのデータの格納が中断されます。この場合、「ディスク容量が不足しています」というメッセージが出力されたあと、Master Store サービスまたは Remote Monitor Store サービスが停止します。

このメッセージが表示された場合、次のどちらかの方法で対処してください。

- 十分なディスク容量を確保する
Store データベースのディスク占有量を見積もり、Store データベースの格納先を十分な容量があるディスクに変更してください。Store データベースのディスク占有量を見積もる方法については、「付録 A システム見積もり」を参照してください。Store データベースの格納先を変更する方法については、「2.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更」を参照してください。
- Store データベースの保存条件を変更する
Store データベースの保存条件を変更し、Store データベースのデータ量の上限値を調整してください。Store データベースの保存条件を変更する方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

これらの対処を実施したあとも Master Store サービスまたは Remote Monitor Store サービスが起動されない場合、Store データベースに回復できない論理矛盾が発生しています。この場合、バックアップデータから Store データベースをリストアしたあと、Master Store サービスまたは Remote Monitor Store サービスを起動してください。利用できるバックアップデータが存在しない場合は、Store データベースを初期化したあと、Master Store サービスまたは Remote Monitor Store サービスを起動してください。Store データベースを初期化するには、Store データベースの格納先ディレクトリにある次のファイルをすべて削除してください。

- 拡張子が .DB であるファイル
- 拡張子が .IDX であるファイル

Store データベースの格納先ディレクトリについては、「2.6.1 パフォーマンスデータの格納先の変更」を参照してください。

(5) Oracle Database が停止しない

PFM・RM for Oracle を停止する前に、監視対象の Oracle Database を停止しようとしても、NORMAL シャットダウンでは終了しないことがあります。IMMEDIATE シャットダウンで Oracle Database を停止してください。

7.2.2 コマンドの実行について

Performance Management のコマンドの実行に関するトラブルの対処方法を次に示します。

(1) jpctool service list を実行すると稼働していないサービス名が出力される

考えられる要因およびその対処方法を次に示します。

- Performance Management のプログラムのサービス情報を削除しないで Performance

7. トラブルへの対処方法

Management のプログラムをアンインストールした

Performance Management のプログラムをアンインストールしても Performance Management のプログラムのサービス情報はデータベースに残っています。jpctool service delete コマンドを実行して、Performance Management のプログラムのサービス情報を削除してください。サービス情報の削除方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

- Performance Management のプログラムのサービス情報を削除しないでマシンのホスト名を変更した

Performance Management のプログラムのサービス情報を削除しないでマシンのホスト名を変更した場合、以前のホスト名が付加されているサービス ID のサービス情報が、Master Manager サービスが管理しているデータベースに残っています。

jpctool service delete コマンドを実行して、Performance Management のプログラムのサービス情報を削除してください。サービス情報の削除方法およびホスト名の変更方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management のインストールとセットアップについて説明している章を参照してください。

(2) jpctool db dump を実行すると、指定した Store データと異なるデータが出力される

同じ Master Store サービスまたは Remote Monitor Store サービスに対して、同じエクスポートファイル名を指定して、複数回 jpctool db dump コマンドを実行すると、先に実行した出力結果があとから実行された実行結果に上書きされます。同じ Master Store サービスまたは Remote Monitor Store サービスに対して、複数回 jpctool db dump コマンドを実行する場合は、異なる名称のエクスポートファイルを指定してください。Store データベースのエクスポート方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。

7.2.3 レポートの定義について

Performance Management のレポートの定義に関するトラブルの要因を次に示します。

(1) 履歴レポートに表示されない時間帯がある

PFM・RM がインストールされたマシンの現在時刻を、現在時刻よりも未来の時刻に変更した場合、変更前の時刻から変更後の時刻までの履歴情報は保存されません。

7.2.4 アラームの定義について

Performance Management のアラームの定義に関するトラブルの対処方法を次に示します。

(1) アクション実行で定義したプログラムが正しく動作しない

考えられる要因とその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager またはアクション実行先ホストの Action Handler サービスが起動されていない
PFM - Manager またはアクション実行先ホストの Action Handler サービスが停止していると、アクションが実行されません。アクションを実行する場合は、PFM - Manager およびアクション実行先ホストの Action Handler サービスを起動してください。

(2) アラームイベントが表示されない

考えられる要因とその対処方法を次に示します。

- PFM - Manager が起動されていない
PFM - Manager を停止すると、PFM - RM からのアラームイベントを正しく発行できません。アラームイベントを監視する場合は、PFM - Manager を起動してください。

7.2.5 パフォーマンスデータの収集と管理について

Performance Management のパフォーマンスデータの収集と管理に関するトラブルの対処方法を次に示します。

(1) データの保存期間を短く設定したにもかかわらず、PFM - RM の Store データベースのサイズが小さくならない

Store データベースのファイル容量がすでに限界に達している場合、データの保存期間を短く設定してもファイルサイズは小さくなりません。この場合、保存期間を短く設定したあと、いったん Store データベースをバックアップし、リストアし直してください。

データの保存期間の設定方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照してください。また、Store データベースのバックアップとリストアの方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、バックアップとリストアについて説明している章を参照してください。

(2) 共通メッセージログに「Store データベースに不正なデータが検出されました」というメッセージが出力される

予期しないサービスの停止またはマシンのシャットダウンによって、Store データベースに不整合なデータが発生した可能性があります。次の方法で対処してください。

- Store データベースをバックアップしてある場合は、Store データベースをリストアしてください。

7. トラブルへの対処方法

- Store データベースをバックアップしていない場合は、Remote Monitor Store サービスを停止したあと、対応するデータベースファイル（*.DB ファイルおよび *.IDX ファイル）を削除し、サービスを再起動してください。

(3) PFM - RM を起動してもパフォーマンスデータが収集されない

次の方法で対処してください。

- 監視対象ホストの起動状態を確認してください。
- ファイアウォールを挟んで PFM - RM と監視対象を配置している場合、ファイアウォールの通過ポートの設定を見直してください。
- Oracle Database の起動状態を確認し、停止している場合は起動してください。
- 監視対象のセットアップ時の設定を見直してください。
jpcconf target setup コマンドを実行して、各項目に正しい値を設定し直してください。jpcconf target setup コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/ Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。
- インスタンス環境のセットアップ時の設定を見直してください。
jpcconf agent setup コマンドを実行して、各項目に正しい値を設定し直してください。jpcconf agent setup コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/ Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

7.2.6 その他のトラブルについて

トラブルが発生したときの現象を確認してください。メッセージが出力されている場合は、メッセージの内容を確認してください。また、Performance Management が出力するログ情報については、「7.3 ログ情報」を参照してください。

「7.2.1 セットアップやサービスの起動について」～「7.2.5 パフォーマンスデータの収集と管理について」に示した対処をしても、トラブルが解決できなかった場合、または、これら以外のトラブルが発生した場合、トラブルの要因を調査するための資料を採取し、システム管理者に連絡してください。

採取が必要な資料および採取方法については、「7.4 トラブル発生時に採取が必要な資料」および「7.5 資料の採取方法」を参照してください。

7.3 ログ情報

Performance Management でトラブルが発生した場合、ログ情報を確認して対処方法を検討します。Performance Management を運用しているときに出力されるログ情報には、次の 5 種類があります。

- システムログ
- 共通メッセージログ
- 稼働状況ログ
- トレースログ
- エージェントログ

ここでは、各ログ情報について説明します。

7.3.1 ログ情報の種類

(1) システムログ

システムログとは、システムの状態やトラブルを通知するログ情報のことです。このログ情報は次のログファイルに出力されます。

- Windows の場合
イベントログファイル
- UNIX の場合
syslog ファイル

出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

論理ホスト運用の場合の注意事項

Performance Management のシステムログのほかに、クラスタソフトによる Performance Management の制御などを確認するためにクラスタソフトのログが必要です。

(2) 共通メッセージログ

共通メッセージログとは、システムの状態やトラブルを通知するログ情報のことです。システムログよりも詳しいログ情報が出力されます。共通メッセージログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、「7.3.2 ログファイルおよびディレクトリ一覧」を参照してください。また、出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の Performance Management の場合、共通メッセージログは共有ディスクに出力されます。共有ディスク上にあるログファイルは、フェールオー

7. トラブルへの対処方法

バーするときにシステムとともに引き継がれますので、メッセージは同じログファイルに記録されます。

(3) 稼働状況ログ

稼働状況ログとは、PFM・Web Console が出力するログ情報のことです。稼働状況ログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。また、出力形式については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、ログ情報について説明している章を参照してください。

(4) トレースログ

トレースログとは、トラブルが発生した場合に、トラブル発生の経緯を調査したり、各処理の処理時間を測定したりするために採取するログ情報のことです。

トレースログは、Performance Management のプログラムの各サービスが持つログファイルに出力されます。

論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の Performance Management の場合、トレースログは共有ディスクに出力されます。共有ディスク上にあるログファイルは、フェールオーバーするときにシステムとともに引き継がれますので、メッセージは同じログファイルに記録されます。

(5) エージェントログ

エージェントログとは、レコードの取得に関連する処理のログ情報で、PFM・RM for Oracle が出力します。トラブルが発生した場合に、これらの処理の詳細情報を取得するために採取します。

エージェントログは、通常ログ、異常ログが別ファイルに出力されます。出力先については、「7.3.2(3) エージェントログ」を参照してください。

形式

エージェントログは次に示す形式で出力されます。

```
yyyy/mm/dd hh:mm:ss.sss agt1 PID inf1 inf2 inf3 MessageID Message
```

出力される各項目について説明します。

表 7-2 エージェントログの項目

項目	説明
yyyy/mm/dd	ログが出力された日付 (yyyy : 年, mm : 月, dd : 日)
hh:mm:ss.sss	ログが出力されたローカル時刻 (hh : 時, mm : 分, ss : 秒, sss : ミリ秒)
agt1	ログを出力したプロセス名 (agt1 は PFM・RM for Oracle のプロセス名)
PID	出力プロセス ID

項目	説明
inf1 ~ inf3	保守情報
MessageID	メッセージ ID
Message	メッセージ

注

メッセージの内容については、「6. メッセージ」を参照してください。

注意

- RM ホストの時刻やエージェントログファイルの更新日時は変更しないでください。エージェントログの出力にはログファイルの最終更新日時の情報が使用されるため、これらを変更した場合、エージェントログが正しく出力されないおそれがあります。
- 論理ホスト運用の Performance Management の場合、エージェントログの出力先は、実行系と待機系で同一となるように、共有ディスク上のパスを設定してください。

7.3.2 ログファイルおよびディレクトリ一覧

ここでは、Performance Management のプログラムから出力されるログ情報について説明します。

稼働状況ログの出力先ファイル名やファイルサイズについては、マニュアル「JP1/ Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

(1) 共通メッセージログ

ここでは、Performance Management のログ情報のうち、共通メッセージログについて、ログの出力元であるサービス名または制御名、ログファイル名、およびディスク使用量を、OS ごとに表に示します。

表 7-3 共通メッセージログのファイル名 (Windows の場合)

ログ情報の種類	出力元	ファイル名	ディスク使用量 ¹ (キロバイト)
共通メッセージ ログ	Performance Management	インストール先フォルダ ¥log¥jpclog{01 02} ²	2,048 (* 2)
		インストール先フォルダ ¥log¥jpclogw{01 02} ²	2,048 (* 2)
共通メッセージ ログ (論理ホス ト運用の場合)	論理ホスト運用の Performance Management	環境ディレクトリ ³ ¥jplpc¥log¥jpclog{01 02} ²	2,048 (* 2)

7. トラブルへの対処方法

ログ情報の種類	出力元	ファイル名	ディスク使用量 ¹ (キロバイト)
		環境ディレクトリ ³ ¥jplpc¥log¥jpclogw{01 02} ²	2,048 (* 2)

注 1

()内の数字は、一つのサービスに対して作成されるログファイルの数を示します。例えば、「2,048(* 2)」の場合、ディスク使用量が2,048キロバイトのログファイルが最大で二つ作成されることを示します。この場合、ディスク使用量は合計で4,096キロバイトとなります。

注 2

共通メッセージログのログファイル名には、末尾に「01」または「02」が付加されます。

シーケンシャルファイル(jpclog)方式の場合

ログ情報は、まず、末尾が「01」のログファイルに出力されます。ログファイルのサイズが上限に達すると、ログファイル名の末尾が「01」から「02」に変更され、ファイル名の末尾が「01」のログファイルが新規作成されます。その後出力されるログ情報は、末尾が「01」のログファイルに出力されます。すでにファイル名の末尾が「02」のログファイルがある場合は、上書きされます。最新のログは常にファイル名の末尾が「01」のログファイルに出力されます。

ラップアラウンドファイル(jpclogw)方式の場合

ログ情報は、まず、末尾が「01」のログファイルに出力されます。ログファイルのサイズが上限に達すると、ファイル名の末尾が「02」のログファイルが新規作成されます。その後出力されるログ情報は、末尾が「02」のログファイルに出力されます。すでにファイル名の末尾が「02」のログファイルがある場合は、一度データをすべて削除し、先頭行からログが出力されます。そのあとログの出力ファイルが交互に入れ替わります。

ログファイルの出力方式については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注 3

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

表 7-4 共通メッセージログのファイル名 (UNIX の場合)

ログ情報の種類	出力元	ファイル名	ディスク使用量 ¹ (キロバイト)
共通メッセージ ログ	Performance Management	/opt/jp1pc/log/jpclog{01 02} ²	2,048 (* 2)
		/opt/jp1pc/log/jpclogw{01 02} ²	2,048 (* 2)
共通メッセージ ログ (論理ホス ト運用の場合)	論理ホスト運用の Performance Management	環境ディレクトリ ³ /jp1pc/log/jpclog{01 02} ²	2,048 (* 2)
		環境ディレクトリ ³ /jp1pc/log/jpclogw{01 02} ²	2,048 (* 2)

注 1

() 内の数字は、一つのサービスに対して作成されるログファイルの数を示します。例えば、「2,048(* 2)」の場合、ディスク使用量が 2,048 キロバイトのログファイルが最大で二つ作成されることを示します。この場合、ディスク使用量は合計で 4,096 キロバイトとなります。

注 2

共通メッセージログのログファイル名には、末尾に「01」または「02」が付加されます。

シーケンシャルファイル (jpclog) 方式の場合

ログ情報は、まず、末尾が「01」のログファイルに出力されます。ログファイルのサイズが上限に達すると、ログファイル名の末尾が「01」から「02」に変更され、ファイル名の末尾が「01」のログファイルが新規作成されます。その後出力されるログ情報は、末尾が「01」のログファイルに出力されます。すでにファイル名の末尾が「02」のログファイルがある場合は、上書きされます。最新のログは常にファイル名の末尾が「01」のログファイルに出力されます。

ラップアラウンドファイル (jpclogw) 方式の場合

ログ情報は、まず、末尾が「01」のログファイルに出力されます。ログファイルのサイズが上限に達すると、ファイル名の末尾が「02」のログファイルが新規作成されます。その後出力されるログ情報は、末尾が「02」のログファイルに出力されます。すでにファイル名の末尾が「02」のログファイルがある場合は、一度データをすべて削除し、先頭行からログが出力されます。そのあとログの出力ファイルが交互に入れ替わります。

ログファイルの出力方式については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注 3

7. トラブルへの対処方法

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

(2) トレースログ

ここでは、Performance Management のログ情報のうち、PFM・RM のトレースログの出力元であるサービス名または制御名、および格納先ディレクトリ名を、OS ごとに表に示します。

表 7-5 トレースログの格納先フォルダ名 (Windows の場合)

ログ情報の種類	出力元	フォルダ名
トレースログ	Action Handler サービス	インストール先フォルダ ¥bin¥action¥log¥
	Performance Management コマンド	インストール先フォルダ ¥tools¥log¥
	RM Collector サービス	インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥log¥
	Remote Monitor Store サービス	インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥log¥
	Status Server サービス	インストール先フォルダ ¥bin¥statsvr¥log¥
トレースログ (論理ホスト運用の場合)	Action Handler サービス	環境ディレクトリ ¥jp1pc¥bin¥action¥log¥
	Performance Management コマンド	環境ディレクトリ ¥jp1pc¥tools¥log¥
	RM Collector サービス	環境ディレクトリ ¥jp1pc¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥log¥
	Remote Monitor Store サービス	環境ディレクトリ ¥jp1pc¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥log¥

注

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

表 7-6 トレースログの格納先ディレクトリ名 (UNIX の場合)

ログ情報の種類	出力元	ディレクトリ名
トレースログ	Action Handler サービス	/opt/jp1pc/bin/action/log/

ログ情報の種類	出力元	ディレクトリ名
	Performance Management コマンド	/opt/jplpc/tools/log/
	RM Collector サービス	/opt/jplpc/agt1/agent/ インスタンス名 /log/
	Remote Monitor Store サービス	/opt/jplpc/agt1/store/ インスタンス名 /log/
	Status Server サービス	/opt/jplpc/bin/statsvr/log/
トレースログ（論理ホスト運用の場合）	Action Handler サービス	環境ディレクトリ /jplpc/bin/action/log/
	Performance Management コマンド	環境ディレクトリ /jplpc/tools/log/
	RM Collector サービス	環境ディレクトリ /jplpc/agt1/agent/ インスタンス名 /log/
	Remote Monitor Store サービス	環境ディレクトリ /jplpc/agt1/store/ インスタンス名 /log/

注

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

(3) エージェントログ

ここでは、Performance Management のログ情報のうち、PFM - RM for Oracle のエージェントログの出力元であるサービス名または制御名、ログファイル名、およびディスク使用量を次の表に示します。

表 7-7 エージェントログのファイル

ログ情報の種類	出力元	デフォルトの出力先 ¹	ファイル名	デフォルトのディスク使用量 ¹ (メガバイト)
通常ログ	PFM - RM for Oracle	Windows の場合 インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥log¥ UNIX の場合 /opt/jplpc/agt1/agent/ インスタンス名 /log/	agt1inf{01 02} ²	16

7. トラブルへの対処方法

ログ情報の種類	出力元	デフォルトの出力先 ¹	ファイル名	デフォルトのディスク使用量 ¹ (メガバイト)
異常ログ			agt1err{01 02} ²	
通常ログ (論理ホスト運用の場合)	PFM - RM for Oracle	Windows の場合 環境ディレクトリ ³ ¥jplpc¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥log¥ UNIX の場合 環境ディレクトリ ³ / jplpc/agt1/agent/ インスタンス名 /log/	agt1inf{01 02} ²	16
異常ログ (論理ホスト運用の場合)			agt1err{01 02} ²	

注 1

エージェントログの出力先、および最大ファイルサイズは、次の方法で確認・変更できます。

- jpcconf inst setup コマンド
- PFM - Web Console 画面の RM Configuration プロパティ

jpcconf inst setup コマンドでの変更方法については、「2.6.3 インスタンス環境の更新の設定」を参照してください。

注 2

エージェントログは、二つのファイルを使用してシーケンシャルファイル方式で出力されます。ファイル名には、末尾に「01」または「02」が付加されます。ファイル名に付加される数字の意味を次に示します。

- 01：カレントファイル
- 02：バックアップファイル

シーケンシャルファイル方式については、「(1) 共通メッセージログ」の「シーケンシャルファイル (jpclog) 方式の場合」を参照してください。

注 3

環境ディレクトリは、論理ホスト作成時に指定した共有ディスク上のディレクトリです。

7.4 トラブル発生時に採取が必要な資料

「7.2 トラブルシューティング」に示した対処をしてもトラブルを解決できなかった場合、トラブルの要因を調べるための資料を採取し、システム管理者に連絡する必要があります。この節では、トラブル発生時に採取が必要な資料について説明します。

Performance Management では、採取が必要な資料を一括採取するためのコマンドを用意しています。PFM・RMの資料を採取するには、`jpcras` コマンドを使用します。`jpcras` コマンドを使用して採取できる資料については、表中に記号で示しています。

注意

`jpcras` コマンドで採取できる資料は、コマンド実行時に指定するオプションによって異なります。コマンドに指定するオプションと採取できる資料については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

論理ホスト運用の場合の注意事項

論理ホスト運用の場合の注意事項を次に示します。

- 論理ホスト運用する場合の Performance Management のログは、共有ディスクに格納されます。なお、共有ディスクがオンラインになっている場合（Windows）、またはマウントされている場合（UNIX）は、`jpcras` コマンドで共有ディスク上のログも一括して採取することができます。
- フェールオーバー時の問題を調査するには、フェールオーバーの前後の資料が必要です。このため、実行系と待機系の両方の資料が必要になります。
- 論理ホスト運用の Performance Management の調査には、クラスタソフトの資料が必要です。論理ホスト運用の Performance Management は、クラスタソフトから起動や停止を制御されているので、クラスタソフトの動きと Performance Management の動きを対比して調査するためです。

7.4.1 Windows の場合

(1) OS のログ情報

OSに関する次のログ情報の採取が必要です。OSのログ情報を次の表に示します。

表 7-8 OS のログ情報

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムログ	Windows イベントログ	-	
プロセス情報	プロセスの一覧	-	

7. トラブルへの対処方法

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムファイル	hosts ファイル	システムフォルダ ¥system32¥drivers¥etc¥hosts	
	services ファイル	システムフォルダ ¥system32¥drivers¥etc¥services	
OS 情報	システム情報	-	
	ネットワークステータス	-	
	ホスト名	-	
ダンプ情報	ワトソンログファイル ¹	システムドライブ ¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥Microsoft¥Dr Watson¥drwtsn32.log ² システムドライブ ¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥Microsoft¥Dr Watson¥user.dump ²	

(凡例)

- : 採取できる
- : 該当しない

注 1

Windows Server 2008 では、「ワトソン博士」は「問題のレポートと解決策」に変更されています。

注 2

別のフォルダにログファイルが出力されるように設定している場合は、該当するフォルダから資料を採取してください。

(2) Performance Management の情報

Performance Management に関する次の情報の採取が必要です。また、ネットワーク接続でのトラブルの場合、接続先マシン上のファイルの採取も必要です。Performance Management の情報を次の表に示します。

表 7-9 Performance Management の情報

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpccras コマンドでの採取
共通メッセージログ	Performance Management から出力されるメッセージログ (シーケンシャルファイル方式)	インストール先フォルダ ¥log¥jpclog{01 02} ¹	
	Performance Management から出力されるメッセージログ (ラップアラウンドファイル方式)	インストール先フォルダ ¥log¥jpclogw{01 02} ¹	
構成情報	各構成情報ファイル	-	
	jpctool service list コマンドの出力結果	-	
バージョン情報	製品バージョン	-	
	履歴情報	-	
データベース情報	Remote Monitor Store サービス	インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥STPD インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥ インスタンス名 ¥STPI フォルダ下の次に示すファイル。 • *.DB • *.IDX	
トレースログ	Performance Management のプログラムの各サービスのトレース情報	- ²	
エージェントログ	PFM RM for Oracle のレコード取得に関する処理の通常ログ	インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥log¥agt1inf{01 02} ³	4
	PFM RM for Oracle のレコード取得に関する処理の異常ログ	インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥log¥agt1err{01 02} ³	4
インストールログ ⁵	インストール時のメッセージログ	システムフォルダ ¥TEMP¥HCDINST フォルダ下の次に示すファイル。 • HCDMAIN.LOG および HCDMAINn.LOG ⁶ • HCDINST.LOG および HCDINSTn.LOG ⁶ • 製品形名 .LOG	x

7. トラブルへの対処方法

(凡例)

- : 採取できる
- x : 採取できない
- : 該当しない

注 1

ログファイルの出力方式については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注 2

トレースログの格納先フォルダについては、「7.3.2(2) トレースログ」を参照してください。

注 3

エージェントログの出力方式、および格納先フォルダの変更方法については、「7.3.2(3) エージェントログ」を参照してください。

注 4

jpccras コマンドでは、エージェントログ情報は、現在設定されている出力先フォルダからだけ採取されます。エージェントログの出力先フォルダを変更した場合、変更前に出力されているエージェントログファイルについては手動で採取してください。

注 5

インストールに失敗した場合に採取してください。

注 6

n は数字を示します。

(3) オペレーション内容

トラブル発生時のオペレーション内容について、次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成 (各 OS のバージョン、ホスト名、PFM - Manager と PFM - RM の構成など)
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(4) 画面上のエラー情報

次に示すハードコピーを採取してください。

- アプリケーションエラーが発生した場合は、操作画面のハードコピー

- エラーメッセージダイアログボックスのハードコピー（詳細ボタンがある場合はその内容を含む）
- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、[コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピー

(5) ユーザーダンプ (Windows Server 2008 の場合)

Windows Server 2008 で Performance Management のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は、ユーザーダンプを採取してください。

(6) 問題レポートの採取 (Windows Server 2008 の場合)

Windows Server 2008 で Performance Management のプロセスがアプリケーションエラーで停止した場合は、問題レポートを採取してください。

(7) パフォーマンスデータに関する情報

パフォーマンスデータに関する次の情報の採取が必要です。また、ネットワーク接続等でのトラブルの場合、マシン上のファイル、コマンド結果、レジストリ情報の採取も必要です。

PFM・RM for Oracle インストール環境で、PFM・RM for Oracle が固有に採取するパフォーマンスデータに関する情報を次の表に示します。

表 7-10 パフォーマンスデータに関する情報

情報の種類	概要	ファイル名	jpcras コマンドでの採取
Oracle 接続時のエラー情報 ¹	Oracle 接続でエラーが発生した場合のエラーコード	インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥pdia_XXXXX_status.db ²	
内部保守情報	OCI 関数のログ出力ファイル	インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥ocilog.txt	

(凡例)

: 採取できる

注 1

このファイルは、Oracle 接続時にエラーが発生した場合に作成されることがあります。

注 2

"XXXXXX" には、任意の文字列が入ります。

7. トラブルへの対処方法

(8) その他の情報

その他、必要な情報を次に示します。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数
- [アクセサリ] - [システムツール] - [システム情報] の内容
- Windows の [イベントビューア] 画面の , [システム] および [アプリケーション] の内容

7.4.2 UNIX の場合

(1) OS のログ情報

OS に関する次のログ情報の採取が必要です。OS のログ情報を次の表に示します。

表 7-11 OS のログ情報

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
システムログ	syslog	/var/log/messages	
プロセス情報	プロセスの一覧	-	
システムファイル	hosts ファイル	/etc/hosts	
	services ファイル	/etc/services	
OS 情報	パッチ情報	-	
	カーネル情報	-	
	バージョン情報	-	
	ネットワークステータス	-	
	環境変数	-	
	ホスト名	-	
ダンプ情報	core ファイル	-	

(凡例)

- : 採取できる
- : 該当しない

注

デフォルトのパスおよびファイル名以外に出力されるように設定されているシステムでは、収集できません。手動で収集してください。

(2) Performance Management の情報

Performance Management に関する次の情報の採取が必要です。また、ネットワーク接

続でのトラブルの場合、接続先マシン上のファイルの採取も必要です。Performance Management の情報を次の表に示します。

表 7-12 Performance Management の情報

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpccras コマンドでの採取
共通メッセージログ	Performance Management から出力されるメッセージログ (シーケンシャルファイル方式)	/opt/jp1pc/log/jpclog{01 02} ¹	
	Performance Management から出力されるメッセージログ (ラップアラウンドファイル方式)	/opt/jp1pc/log/jpclogw{01 02} ¹	
構成情報	各構成情報ファイル	-	
	jpccconf inst list コマンドの出力結果	-	
バージョン情報	製品バージョン	-	
	履歴情報	-	
データベース情報	Remote Monitor Store サービス	/opt/jp1pc/agt1/store/ インスタンス名 / STPD /opt/jp1pc/agt1store/ インスタンス名 / STPI ディレクトリ下の次に示すファイル。 • *.DB • *.IDX	
トレースログ	Performance Management のプログラムの各サービスのトレース情報	- ²	
エージェントログ	PFM・RM for Oracle のレコード取得に関する処理の通常ログ	/opt/jp1pc/agt1/agent/ インスタンス名 / log/agt1inf{01 02} ³	4
	PFM・RM for Oracle のレコード取得に関する処理の異常ログ	/opt/jp1pc/agt1/agent/ インスタンス名 / log/agt1err{01 02} ³	4

7. トラブルへの対処方法

情報の種類	概要	デフォルトのファイル名	jpcras コマンドでの採取
インストールログ ⁵	Hitachi PP Installer の標準ログ	/etc/.hitachi/.hitachi.log	×

(凡例)

- : 採取できる
- ×: 採取できない
- : 該当しない

注 1

ログファイルの出力方式については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

注 2

トレースログの格納先ディレクトリについては、「7.3.2 ログファイルおよびディレクトリ一覧」を参照してください。

注 3

エージェントログの出力方式、および格納先フォルダの変更方法については、「7.3.2 ログファイルおよびディレクトリ一覧」を参照してください。

注 4

jpcras コマンドでは、エージェントログ情報は、現在設定されている出力先フォルダからだけ採取されます。エージェントログの出力先フォルダを変更した場合、変更前に出力されているエージェントログファイルについては手動で採取してください。

注 5

インストールに失敗した場合に採取してください。

(3) オペレーション内容

トラブル発生時のオペレーション内容について、次に示す情報が必要です。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成 (各 OS のバージョン, ホスト名, PFM - Manager と PFM - RM の構成など)
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(4) エラー情報

次に示すエラー情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コンソールに出力されたメッセージ

(5) パフォーマンスデータに関する情報

パフォーマンスデータに関する次の情報の採取が必要です。また、ネットワーク接続等でのトラブルの場合、マシン上のファイル、コマンド結果、レジストリ情報の採取も必要です。

PFM - RM for Oracle インストール環境で、PFM - RM for Oracle が固有に採取するパフォーマンスデータに関する情報を次の表に示します。

表 7-13 パフォーマンスデータに関する情報

情報の種類	概要	ファイル名	jpcras コマンドでの採取
Oracle 接続時のエラー情報 ¹	Oracle 接続でエラーが発生した場合のエラーコード	/opt/jp1pc/agt1/agent/ インスタンス名 / pdia_XXXXX_status.db ²	
内部保守情報	OCI 関数のログ出力ファイル	/opt/jp1pc/agt1/agent/ インスタンス名 / ocilog.txt	

(凡例)

: 採取できる

注 1

このファイルは、Oracle 接続時にエラーが発生した場合に作成されることがあります。

注 2

"XXXXX" には、任意の文字列が入ります。

(6) その他の情報

上記以外に必要な情報を次に示します。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数

7.5 資料の採取方法

トラブルが発生したときに資料を採取する方法を次に示します。

7.5.1 Windows の場合

(1) ダンプ情報を採取する (Windows Server 2008 の場合)

Windows Server 2008 の環境でのダンプ情報の採取手順を次に示します。

1. タスクマネージャーを開く。
2. [プロセス] タブを選択する。
3. ダンプを取得するプロセス名を右クリックし, [ダンプファイルの作成] を選択する。
次のフォルダに, ダンプファイルが格納されます。
システムドライブ ¥Users¥ユーザー名 ¥AppData¥Local¥Temp
4. 手順 3 のフォルダからダンプファイルを採取する。
手順 3 と異なるフォルダにダンプファイルが出力されるように環境変数の設定を変更している場合は, 変更先のフォルダからダンプファイルを採取してください。

(2) 資料採取コマンドを実行する

トラブルの要因を調べるための資料の採取には, jpcras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお, ここで説明する操作は, OS ユーザーとして Administrator 権限を持つユーザーが実行してください。

1. 資料採取するサービスがインストールされているホストにログオンする。
2. コマンドプロンプトで次に示すコマンドを実行して, コマンドインタープリタの「コマンド拡張機能」を有効にする。
cmd /E:ON
3. 採取する資料および資料の格納先フォルダを指定して, jpcras コマンドを実行する。
jpcras コマンドで, 採取できるすべての情報を c:¥tmp¥jpc¥agt フォルダに格納する場合の, コマンドの指定例を次に示します。
jpcras c:¥tmp¥jpc¥agt all all

jpcras コマンドを実行すると, PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため, 内部的に jpctool service list -id * -host * コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり, システム構成が大規模だったりすると, jpctool service list -id * -host * コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は, 環境変数 JPC_COLCTRLNOHOST に 1 を設定することで jpctool service list -id * -host * コマンドの処理を抑制し, コマンドの実行時間を短縮できます。

jpcras コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

Windows Server 2008 で実行する場合の注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、コマンド実行時にユーザーアカウント制御のダイアログボックスが表示されることがあります。ダイアログボックスが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックして資料採取を続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、資料採取が中止されます。

(3) Windows イベントログを採取する

Windows の [イベントビューア] ウィンドウで、Windows イベントログをファイルに出力してください。

(4) 資料採取コマンドを実行する (論理ホスト運用の場合)

論理ホスト運用の Performance Management の資料は共有ディスクにあり、資料は実行系と待機系の両方で採取する必要があります。

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、jpcras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして Administrator 権限を持つユーザーが実行してください。

論理ホスト運用の場合の資料採取コマンドの実行について、手順を説明します。

- 共有ディスクをオンラインにする。
論理ホストの資料は共有ディスクに格納されています。実行系ノードでは、共有ディスクがオンラインになっていることを確認して資料を採取してください。
- 実行系と待機系の両方で、採取する資料および資料の格納先フォルダを指定して、jpcras コマンドを実行する。
jpcras コマンドで、採取できるすべての情報を c:¥tmp¥jpc¥agt フォルダに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。
jpcras c:¥tmp¥jpc¥agt all all

jpcras コマンドを lhost の引数を指定しないで実行すると、そのノードの物理ホストと論理ホストの Performance Management の資料が一とおり採取されます。論理ホスト環境の Performance Management がある場合は、共有ディスク上のログファイルが取得されます。

なお、共有ディスクがオフラインになっているノードで jpcras コマンドを実行すると、共有ディスク上のファイルを取得できませんが、エラーは発生しないで正常終了します。

注意

実行系ノードと待機系ノードの両方で、資料採取コマンドを実行して資料採取を

7. トラブルへの対処方法

してください。フェールオーバーの前後の調査をするには、実行系と待機系の両方の資料が必要です。

jpccras コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に `jpctool service list -id * -host *` コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、`jpctool service list -id * -host *` コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 `JPC_COLCTRLNOHOST` に 1 を設定することで `jpctool service list -id * -host *` コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。

jpccras コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

3. クラスタソフトの資料を採取する。

この資料は、クラスタソフトと Performance Management のどちらでトラブルが発生しているのかを調査するために必要になります。クラスタソフトから Performance Management への起動停止などの制御要求と結果を調査できる資料を採取してください。

Windows Server 2008 で実行する場合の注意事項

OS のユーザーアカウント制御機能 (UAC) を有効にしている場合は、コマンド実行時にユーザーアカウント制御のダイアログボックスが表示されることがあります。ダイアログボックスが表示された場合は、[続行] ボタンをクリックして資料採取を続行してください。[キャンセル] ボタンをクリックした場合は、資料採取が中止されます。

(5) オペレーション内容を確認する

トラブル発生時のオペレーション内容を確認し、記録しておいてください。確認が必要な情報を次に示します。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成 (各 OS のバージョン, ホスト名, PFM - Manager と PFM - RM の構成など)
- 再現性の有無
- PFM - Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(6) 画面上のエラー情報を採取する

次に示すハードコピーを採取してください。

- アプリケーションエラーが発生した場合は、操作画面のハードコピー
- エラーメッセージダイアログボックスのハードコピー

詳細情報がある場合はその内容をコピーしてください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、[コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピー
Windows Server 2003, Windows Server 2008 の場合, [コマンドプロンプト] ウィンドウまたは [管理者コンソール] ウィンドウのハードコピーを採取する際は, [" コマンドプロンプト " のプロパティ] ウィンドウについて次のように設定しておいてください。
 - [オプション] タブの [編集オプション]
[簡易編集モード] がチェックされた状態にする。
 - [レイアウト] タブ
[画面バッファのサイズ] の [高さ] に「500」を設定する。

(7) その他の情報を採取する

上記以外に必要な情報を採取してください。

OS 共通

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数
- [アクセサリ] - [システムツール] - [システム情報] の内容

Windows Server 2003 の場合

Windows の [イベントビューア] ウィンドウの, [システム] および [アプリケーション] の内容

Windows Server 2008 の場合

Windows の [イベントビューア] ウィンドウを開き, 左ペインに表示されている [Windows ログ] の, [システム] および [アプリケーション] の内容

7.5.2 UNIX の場合

(1) 資料採取コマンドを実行する

トラブルの要因を調べるための資料の採取には, `jpcras` コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお, ここで説明する操作は, OS ユーザーとして `root` ユーザー権限を持つユーザーが実行してください。

1. 資料採取するサービスがインストールされているホストにログインする。
2. 採取する資料および資料の格納先ディレクトリを指定して, `jpcras` コマンドを実行する。

`jpcras` コマンドで, 採取できるすべての情報を `/tmp/jpc/agt` ディレクトリに格納する場合の, コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras /tmp/jpc/agt all all
```

資料採取コマンドで収集された資料は, `tar` コマンドおよび `compress` コマンドで圧

7. トラブルへの対処方法

縮された形式で、指定されたディレクトリに格納されます。ファイル名を次に示します。

```
jpcrasYYMMDD.tar.Z
```

YYMMDD には年月日が付加されます。

jpcras コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に `jpctool service list -id * -host *` コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、`jpctool service list -id * -host *` コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 `JPC_COLCTRLNOHOST` に 1 を設定することで `jpctool service list -id * -host *` コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。

jpcras コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

(2) 資料採取コマンドを実行する（論理ホスト運用の場合）

論理ホスト運用の Performance Management の資料は共有ディスクにあり、資料は実行系と待機系の両方で採取する必要があります。

トラブルの要因を調べるための資料の採取には、jpcras コマンドを使用します。資料採取コマンドの実行手順を次に示します。なお、ここで説明する操作は、OS ユーザーとして root ユーザー権限を持つユーザーが実行してください。

論理ホスト運用の場合の、資料採取コマンドの実行について、手順を説明します。

1. 共有ディスクをマウントする。

論理ホストの資料は共有ディスクに格納されています。実行系ノードでは、共有ディスクがマウントされていることを確認して資料を採取してください。

2. 実行系と待機系の両方で、採取する資料および資料の格納先ディレクトリを指定して、jpcras コマンドを実行する。

jpcras コマンドで、採取できるすべての情報を `/tmp/jpc/agt` ディレクトリに格納する場合の、コマンドの指定例を次に示します。

```
jpcras /tmp/jpc/agt all all
```

資料採取コマンドで収集された資料は、`tar` コマンドおよび `compress` コマンドで圧縮された形式で、指定されたディレクトリに格納されます。ファイル名を次に示します。

```
jpcrasYYMMDD.tar.Z
```

YYMMDD には年月日が付加されます。

jpccras コマンドを lhost の引数を指定しないで実行すると、そのノードの物理ホストと論理ホストの Performance Management の資料が一とおり採取されます。論理ホスト環境の Performance Management がある場合は、共有ディスク上のログファイルが取得されます。

なお、共有ディスクがマウントされていないノードで jpccras コマンドを実行すると、共有ディスク上のファイルを取得できませんが、エラーは発生しないで正常終了します。

注意

実行系ノードと待機系ノードの両方で、資料採取コマンドを実行して資料採取をしてください。フェールオーバーの前後の調査をするには、実行系と待機系の両方の資料が必要です。

jpccras コマンドを実行すると、PFM サービスの一覧取得および起動状態の確認のため、内部的に jpccool service list -id * -host * コマンドが実行されます。コマンド実行ホストとほかの Performance Management システムのホストとの間にファイアウォールが設定されていたり、システム構成が大規模だったりすると、jpccool service list -id * -host * コマンドの実行に時間が掛かる場合があります。そのような場合は、環境変数 JPC_COLCTRLNOHOST に 1 を設定することで jpccool service list -id * -host * コマンドの処理を抑止し、コマンドの実行時間を短縮できます。

jpccras コマンドの詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。

3. クラスタソフトの資料を採取する。

この資料は、クラスタソフトと Performance Management のどちらでトラブルが発生しているのかを調査するために必要になります。クラスタソフトから Performance Management への起動停止などの制御要求と結果を調査できる資料を採取してください。

(3) オペレーション内容を確認する

トラブル発生時のオペレーション内容を確認し、記録しておいてください。確認が必要な情報を次に示します。

- オペレーション内容の詳細
- トラブル発生時刻
- マシン構成（各 OS のバージョン、ホスト名、PFM・Manager と PFM・RM の構成など）
- 再現性の有無
- PFM・Web Console からログインしている場合は、ログイン時の Performance Management ユーザー名

(4) エラー情報を採取する

次に示すエラー情報を採取してください。

7. トラブルへの対処方法

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コンソールに出力されたメッセージ

(5) その他の情報を採取する

上記以外に必要な情報を採取してください。

- コマンド実行時にトラブルが発生した場合は、コマンドに指定した引数

7.6 Performance Management の障害検知

Performance Management では、ヘルスチェック機能を利用することで Performance Management 自身の障害を検知できます。ヘルスチェック機能では、PFM - RM for Oracle や PFM - RM ホストの稼働状態を監視し、監視結果を PFM - RM for Oracle の稼働状態の変化として PFM - Web Console 上に表示します。

また、PFM サービス自動再起動機能を利用することで、PFM サービスが何らかの原因で異常停止した場合に自動的に PFM サービスを再起動したり、定期的に PFM サービスを再起動したりすることができます。

ヘルスチェック機能によって PFM - RM for Oracle の稼働状態を監視したり、PFM サービス自動再起動機能によって PFM サービスを自動再起動したりするには、Performance Management のサービスの詳細な状態を確認するステータス管理機能を使用します。このため、対象となる PFM - RM for Oracle がステータス管理機能に対応したバージョンであり、ステータス管理機能が有効になっている必要があります。ホストの稼働状態を監視する場合は前提となる条件はありません。

また、Performance Management のログファイルをシステム統合監視製品である JP1/Base で監視することによっても、Performance Management 自身の障害を検知できます。これによって、システム管理者は、トラブルが発生したときに障害を検知し、要因を特定して復旧の対処をします。

Performance Management 自身の障害検知については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、Performance Management の障害検知について説明している章を参照してください。

7.7 Performance Management の障害回復

Performance Management のサーバで障害が発生したときは、バックアップファイルを基にして、障害が発生する前の正常な状態に回復する必要があります。

障害が発生する前の状態に回復する手順については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、トラブルへの対処方法について説明している章を参照してください。

付録

付録 A システム見積もり

付録 B カーネルパラメーター

付録 C 識別子一覧

付録 D プロセス一覧

付録 E ポート番号一覧

付録 F PFM - RM for Oracle のプロパティ

付録 G ファイルおよびディレクトリ一覧

付録 H 移行手順と移行時の注意事項

付録 I 権限に関する注意事項

付録 J バージョン互換

付録 K 動作ログの出力

付録 L 用語解説

付録 A システム見積もり

PFM - RM for Oracle を使ったシステムを構築する前に、使用するマシンの性能が、PFM - RM for Oracle を運用するのに十分であるか、見積もっておくことをお勧めします。

見積もり項目を次に説明します。

付録 A.1 メモリー所要量

メモリー所要量は、PFM - RM for Oracle の設定状況や使用状況によって変化します。

PFM - RM for Oracle のメモリー所要量の、およその見積もりを OS ごとに記載します。初期状態とは、1 インスタンスで運用する場合のことを示します。

(1) Windows の場合

Windows の場合の、PFM - RM for Oracle のメモリー所要量の、およその見積もりを次の表に示します。

表 A-1 メモリー所要量 (Windows の場合)

PFM - RM for Oracle の状態	メモリー所要量 (単位: メガバイト)	
	Windows Server 2003, Windows Server 2008	
初期状態での運用	a + b + c	

(凡例)

a : jpcagt1 プロセスのメモリー使用量

b : jpc1collect プロセスのメモリー使用量

c : jpcsto プロセスのメモリー使用量

各プロセスのメモリー使用量は、OS によって異なります。各プロセスのメモリー所要量について次の表に示します。

表 A-2 プロセスのメモリー所要量 (Windows の場合)

プロセス名	プロセスのメモリー所要量 (単位: メガバイト)	
	Windows Server 2003	Windows Server 2008
jpcagt1	12	14
jpc1collect	57	59
jpcsto	16	14

(2) UNIX の場合

UNIX の場合の、PFM - RM for Oracle のメモリー所要量の、おおよその見積もりを次の表に示します。

表 A-3 メモリー所要量 (UNIX の場合)

PFM - RM for Oracle の状態	メモリー所要量 (単位: メガバイト)
	Linux
初期状態での運用	a + b + c

(凡例)

- a : jpcagt1 プロセスのメモリー使用量
- b : jpc1collect プロセスのメモリー使用量
- c : jpcsto プロセスのメモリー使用量

各プロセスのメモリー使用量は、OS によって異なります。各プロセスのメモリー所要量について次の表に示します。

表 A-4 プロセスのメモリー所要量 (UNIX の場合)

プロセス名	プロセスのメモリー所要量 (単位: メガバイト)
	Linux
jpcagt1	64
jpc1collect	75
jpcsto	24

付録 A.2 ディスク占有量

ディスク占有量は、パフォーマンスデータを収集するレコード数によって変化します。

PFM - RM for Oracle のディスク占有量の見積もりについて説明します。

(1) システム全体のディスク占有量

システム全体のディスク占有量の見積もり値を OS ごとに記載します。

(a) Windows の場合

PFM - RM for Oracle のディスク占有量は、次のデータのファイルサイズによって変化します。

- Remote Monitor Store データベース
- PFM - RM for Oracle のインスタンス数
- PFM - RM for Oracle の監視対象ホスト数

- エージェントログ

上記を踏まえ、Windows の場合の、システム全体のディスク占有量の見積み値を次の表に示します。

表 A-5 システム全体のディスク占有量 (Windows の場合)

PFM - RM for Oracle の状態	ディスク占有量 (単位: メガバイト)
	Windows Server 2003, Windows Server 2008
インストール時 ¹	10
初期状態での運用 ²	110
運用時	a + b

(凡例)

a: インスタンスごとのディスク占有量の和。

一つのインスタンスのディスク占有量の算出式を次に示します。

$$c + d + 20 + e$$

b: インストール時のディスク占有量。

c: Store データベースのディスク占有量の合計 ³。Store データベースのディスク占有量については、「(2) Store データベースのディスク占有量」を参照してください。

d: エージェントログサイズ。エージェントログのファイルサイズの上限は、128 メガバイトです。

e: 監視対象ごとのディスク占有量の和。

一つの監視対象ホストのディスク占有量の算出式を次に示します。

$$1 + f$$

f: 監視対象ホストごとのログのディスク占有量。

デフォルト: 64 メガバイト (16 メガバイト × 4 面)

最大値: 128 メガバイト (32 メガバイト × 4 面)

注 1

インストール時にはプログラム本体容量の 2 倍分のディスク容量が必要となります。

注 2

収集設定が System Stat Summary Interval (PI) レコードだけの PFM - RM for Oracle のインスタンスが一つだけセットアップされている場合のことを示します。

注 3

Store データベースのディスク占有量の合計は、監視対象ホストごとのディスク占有量と、グループエージェント用のディスク占有量の合計になります。

(b) UNIX の場合

PFM - RM for Oracle のディスク占有量は、次のデータのファイルサイズによって変化します。

- Remote Monitor Store データベース
- PFM - RM for Oracle のインスタンス数
- PFM - RM for Oracle の監視対象ホスト数
- エージェントログ

上記を踏まえ、UNIX の場合の、システム全体のディスク占有量の見積もり値を次の表に示します。

表 A-6 システム全体のディスク占有量 (UNIX の場合)

PFM - RM for Oracle の状態	ディスク占有量 (単位: メガバイト)
	Linux
インストール時 ¹	20
初期状態での運用 ²	120
運用時	a + b

(凡例)

- a: インスタンスごとのディスク占有量の和。
一つのインスタンスのディスク占有量の算出式を次に示します。
 $c + d + 18 + e$
- b: インストール時のディスク占有量。
- c: Store データベースのディスク占有量の合計 ³。Store データベースのディスク占有量については、「(2) Store データベースのディスク占有量」を参照してください。
- d: エージェントログサイズ。エージェントログのファイルサイズの上限は、128 メガバイトです。
- e: 監視対象ごとのディスク占有量の和。
一つの監視対象ホストのディスク占有量の算出式を次に示します。
 $1 + f$
- f: 監視対象ホストごとのログのディスク占有量。
デフォルト: 64 メガバイト (16 メガバイト × 4 面)
最大値: 128 メガバイト (32 メガバイト × 4 面)

注 1

インストール時にはプログラム本体容量の 2 倍分のディスク容量が必要となります。

注 2

収集設定が System Stat Summary Interval (PI) レコードだけの PFM - RM for Oracle のインスタンスが一つだけセットアップされている場合のことを示します。

注 3

Store データベースのディスク占有量の合計は、監視対象ホストごとのディスク占有量と、グループエージェント用のディスク占有量の合計になります。

(2) Store データベースのディスク占有量

Store データベースのディスク占有量について説明します。

(a) 見積もり式

ディスク占有量、ファイル数、ディレクトリ数、および Store サービスがオープンするファイル数の見積もりについて説明します。

ディスク占有量

Store データベースのディスク占有量は、レコードタイプごとのディスク占有量の総和となります。PI レコードタイプについては、さらに集約区分ごとのディスク占有量の総和となります。

レコードタイプごとのディスク占有量 X の見積もり式 (単位: バイト)

$$X = \{(e+2) * f + (d+60) * \{((e+2) * f) / (65,250-d) + 1\}^2\} * a/b * (c+1) * 1.1$$

a: レコードタイプ, 集約区分ごとに値が異なります。表 A-7 を参照してください。

b: レコードタイプ, 集約区分ごとに値が異なります。表 A-7 を参照してください。

c: 履歴データの保存期間設定値³。レコードタイプ, 集約区分ごとに指定する単位が異なります。単位については表 A-7 を参照してください。

d: 履歴データを収集する各レコードの固定部のサイズ⁴

e: 履歴データを収集する各レコードの可変部のサイズ⁴

f: 履歴データを収集する各レコードのインスタンス数 (単数インスタンスレコードの場合は 1)⁵。インスタンス数が 2 以上の場合, 4 の倍数に切り上げます。例えばインスタンス数が 2 の場合は, f=4 となります。インスタンス数が 13 の場合は, f=16 となります。インスタンス数が 1 の場合は, f=1 となります。

表 A-7 a, b, および c に設定する値

レコードタイプ	集約区分	a	b	c
PI	分	1,440	$1+(g-1)/60^2$	保存期間 (単位: 日)
	時	24	$1+(g-1)/3,600^2$	保存期間 (単位: 日)
	日	7	$1+(g-1)/86,400^2$	保存期間 (単位: 週)
	週	1	$1+(g-1)/604,800^2$	保存期間 (単位: 週)
	月	1	$1+(g-1)/2,592,000^2$	保存期間 (単位: 月)

レコードタイプ	集約区分	a	b	c
	年	1	$1+(g-1)/31,622,400$ ²	10(固定値)
PD	-	1,440	$g/60$	保存期間(単位:日)

(凡例)

g : 履歴データの収集インターバル設定値 (単位: 秒)

- : 該当しない

注 1

$\{(e+2) * f\}/(65,250-d)+1$ の計算結果は、小数点以下を切り捨ててください。

注 2

PI レコードタイプの b の計算結果は、小数点以下を切り捨ててください。

注 3

デフォルトの保存期間と保存レコード数を次の表に示します。

表 A-8 デフォルトの保存期間と保存レコード数

レコードタイプ	データの種類	保存期間	保存レコード数 (収集間隔が 1 分の場合)
PI	分単位	1 日	1,440
	時単位	7 日	168
	日単位	54 週	378
	週単位	54 週	54
	月単位	12 か月	12
	年単位	10 年	(収集年数) * 1
PD	-	7 日	10,080

(凡例)

- : 該当しない

注 4

各レコードの固定部・可変部のサイズについては、「5. レコード」のレコードサイズを参照してください。

注 5

各レコードのインスタンス数の算出方法を次の表に示します。SQL*Plus など
で監視対象の Oracle Database にアクセスし、SQL 文を実行しインスタンス数
を算出してください。なお、グループエージェントのインスタンス数について
は、インスタンスに登録されている監視対象のインスタンス数の最大値になり
ます。

また、算出方法を記載しているレコードに関しては、算出方法に従い算出して
ください。SQL*Plus を使用した場合の実行手順を以下に示します。

実行手順例

1. SQL*Plus を起動します。
2. 以下の権限が付与されているユーザーで監視対象の Oracle Database に接続してください。
 - ・ CREATE SESSION
 - ・ SELECT ANY DICTIONARY
 - ・ SELECT ANY TABLE
3. インスタンス数を確認したいレコードについて、「表 A-9 レコードのインスタンス数の算出方法」に記載されている SQL 文を実行してください。
4. COUNT(*) カラムに表示された件数が対象となるレコードのインスタンス数となります。

注意

インスタンス数に関しては、監視対象となる Oracle Database の動的情報となります。そのため、監視対象の Oracle Database に対する接続数などの要因によりインスタンス数が動的に増減するため、見積みする際は算出された最大の値を適用してください。

表 A-9 レコードのインスタンス数の算出方法

項番	レコード	インスタンス数取得 SQL 文, または算出方法
1	PI	インスタンス数は 1 です
2	PI_PIDB	インスタンス数は 1 です
3	PI_PIDF	下記の 2 種の SQL 文から求められる結果の加算値です 1. SELECT count(*) FROM v\$datafile a, v\$filestat b, sys.dba_data_files c WHERE a.file#=b.file# AND b.file#=c.file_id 2. SELECT count(*) FROM v\$tempfile a, v\$tempstat b, dba_temp_files c WHERE a.file#=b.file# AND b.file#=c.file_id(+)
4	PI_PIIO	SELECT count(*) FROM v\$sess_io a, v\$session b, v\$process c WHERE a.sid=b.sid AND b.paddr=c.addr
5	PI_PIPQ	SELECT count(*) FROM v\$pq_slave
6	PI_PITS	SELECT count(*) FROM sys.dba_tablespaces
7	PI_PMDB	インスタンス数は 1 です
8	PI_PMDF	下記の 2 種の SQL 文から求められる結果の加算値です 1. SELECT count(*) FROM v\$datafile a, v\$filestat b, sys.dba_data_files c WHERE a.file#=b.file# AND b.file#=c.file_id 2. SELECT count(*) FROM v\$tempfile a, v\$tempstat b, dba_temp_files c WHERE a.file#=b.file# AND b.file#=c.file_id(+)

項番	レコード	インスタンス数取得 SQL 文, または算出方法
9	PI_PMTS	SELECT count(*) FROM sys.dba_tablespaces
10	PD	インスタンス数は 1 です
11	PD_PCI	インスタンス数は 1 です
12	PD_PDAS	インスタンス数は 1 です
13	PD_PDDB	インスタンス数は 1 です
14	PD_PDDF	下記のすべての SQL 文から求められる結果の合算値です 1. SELECT count(*) FROM v\$datafile a, v\$filestat b, sys.dba_data_files c WHERE a.file#=b.file# AND b.file#=c.file_id 2. SELECT count(*) FROM v\$tempfile a, v\$tempstat b, dba_temp_files c WHERE a.file#=b.file# AND b.file#=c.file_id(+)
15	PD_PDI	インスタンス数は 1 です
16	PD_PDIA	インスタンス数は 1 です
17	PD_PDLW	SELECT count(*) FROM dba_waiters a, v\$session b, v\$session c WHERE a.holding_session=b.sid AND a.waiting_session=c.sid
18	PD_PDOC	SELECT count(*) FROM v\$open_cursor a, v\$session b WHERE a.sid=b.sid
19	PD_PDP	SELECT count(*) FROM v\$parameter
20	PD_PDS	SELECT count(*) FROM v\$session a, v\$process b WHERE a.paddr=b.addr
21	PD_PDS2	SELECT count(*) FROM (SELECT DISTINCT sid FROM v\$sesstat a, v\$statname b WHERE a.statistic#=b.statistic#)
22	PD_PDSG	SELECT count(*) FROM v\$sgastat
23	PD_PDTF	SELECT count(*) FROM sys.dba_tablespaces
24	PD_PDTS	SELECT count(*) FROM sys.dba_tablespaces

注意

パフォーマンスデータが Store データベースに格納される際、幾つかのフィールドが追加されます。追加されるフィールドは、ディスク占有量に含まれるため、新たに容量を見積もる必要はありません。

ファイル数

Store データベースで作成されるファイル数 N の見積もり式を次に示します。

$$N=20+2 * ((A11+A12+\dots+A1l+1) + (A21+A22+\dots+A2l+1) + (A31+A32+\dots+A3l+1) + (A41+A42+\dots+A4l+1) + (A51+A52+\dots+A5l+1) + (11 * 1) + (B1+B2+\dots+Bm+m))$$

l : PI レコードで収集しているレコードの数

m : PD レコードで収集しているレコードの数

A11 ~ A1l : PI レコードタイプのレコードごとの分レコードの保存期間設定値 (単位 : 日)

A21 ~ A2l : PI レコードタイプのレコードごとの時レコードの保存期間設定値 (単位 : 日)

A31 ~ A3l : PI レコードタイプのレコードごとの日レコードの保存期間設定値 (単位 : 週)

A41 ~ A4l : PI レコードタイプのレコードごとの週レコードの保存期間設定値 (単位 : 週)

A51 ~ A5l : PI レコードタイプのレコードごとの月レコードの保存期間設定値 (単位 : 月)

B1 ~ Bm : PD レコードタイプのレコードごとの保存期間設定値 (単位 : 日)

ディレクトリ数

Store データベースで作成されるディレクトリ数 N の見積もり式を次に示します。

$$N=25+2 * ((A1max) + (A2max) + (A3max) + (A4max) + (A5max) + 11 + (Bmax))$$

l : PI レコードで収集しているレコードの数

m : PD レコードで収集しているレコードの数

A1max : PI レコードタイプで収集しているレコードの集約区分が「分」のデータの保存期間設定値の最大値 (単位 : 日)

A2max : PI レコードタイプで収集しているレコードの集約区分が「時」のデータの保存期間設定値の最大値 (単位 : 日)

A3max : PI レコードタイプで収集しているレコードの集約区分が「日」のデータの保存期間設定値の最大値 (単位 : 週)

A4max : PI レコードタイプで収集しているレコードの集約区分が「週」のデータの保存期間設定値の最大値 (単位: 週)

A5max : PI レコードタイプで収集しているレコードの集約区分が「月」のデータの保存期間設定値の最大値 (単位: 月)

Bmax : PD レコードタイプのレコードごとの保存期間設定値の最大値 (単位: 日)

Store サービスがオープンするファイル数

Store サービスがオープンするディレクトリ数 N の見積もり式を次に示します。

$$N=20+2 * (6 * l+m)$$

l : PI レコードで収集しているレコードの数

m : PD レコードで収集しているレコードの数

(b) 見積もり例

PFM・RM for Oracle の Store データベースの見積もりについて、具体例を用いて説明します。

ディスク占有量

PI_PITS と PD_PDTS を収集する設定にした場合を例に挙げて説明します。

PI_PITS レコードの見積もりについて説明します。「(a) 見積もり式」のディスク占有量の見積もり式の、a ~ g の値を調べます。

$$d=678$$

$$e=291$$

f=今回は 3 とする

g=今回は 60 秒とする

次に、分レコード、時レコードなどそれぞれの計算を行います。

分レコード

$$a=1,440$$

$$b=1 + (60-1)/60 = 1.98 \dots = 1 \text{ (小数点以下切り捨て)}$$

c=今回は 3 日とする

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X(\text{分}) &= \{ (291+2) * 4 + (678+60) * \{ ((291+2) * 4) / (65,250-678) + 1 \} \} * \\ & 1,440 / 1 * \\ & (3+1) * 1.1 \\ & = \{ 1,172 + 738 * 1 \} * 6,336 \\ & = 1,910 * 6,336 \\ & = 12,101,760 \text{ (バイト)} = \text{約} 12 \text{ メガバイト} \end{aligned}$$

時レコード

$$a=24$$

$$b=1 + (60-1)/3,600 = 1.01 \dots = 1 \text{ (小数点以下切り捨て)}$$

c= 今回は3日とする

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X(\text{時}) &= \{ (291+2) * 4 + (678+60) * \{ ((291+2) * 4) / (65,250-678) + 1 \} \} * 24 / \\ & 1 * \\ & (3+1) * 1.1 \\ & = \{ 1,172+738 * 1 \} * 105.6 \\ & = 1,910 * 105.6 \\ & = 201,696 \text{ (バイト)} = \text{約}0.2 \text{メガバイト} \end{aligned}$$

日レコード

$$a=7$$

$$b=1 + (60-1)/86,400 = 1.00 \dots = 1 \text{ (小数点以下切り捨て)}$$

c= 今回は1週とする

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X(\text{日}) &= \{ (291+2) * 4 + (678+60) * \{ ((291+2) * 4) / (65,250-678) + 1 \} \} * 7 / 1 \\ & * \\ & (1+1) * 1.1 \\ & = \{ 1,172+738 * 1 \} * 15.4 \\ & = 1,910 * 15.4 \\ & = 29,414 \text{ (バイト)} = \text{約}0.03 \text{メガバイト} \end{aligned}$$

週レコード

$$a=1$$

$$b=1 + (60-1)/604,800 = 1.00 \dots = 1 \text{ (小数点以下切り捨て)}$$

c= 今回は1週とする

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X(\text{週}) &= \{ (291+2) * 4 + (678+60) * \{ ((291+2) * 4) / (65,250-678) + 1 \} \} * 1 / 1 \\ & * \\ & (1+1) * 1.1 \\ & = \{ 1,172+738 * 1 \} * 2.2 \\ & = 1,910 * 2.2 \\ & = 4,202 \text{ (バイト)} = \text{約}0.005 \text{メガバイト} \end{aligned}$$

月レコード

$$a=1$$

$$b=1 + (60-1)/2,592,000 = 1.00 \dots = 1 \text{ (小数点以下切り捨て)}$$

c= 今回は1か月とする

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X(\text{月}) &= \{ (291+2) * 4 + (678+60) * \{ ((291+2) * 4) / (65,250-678) + 1 \} \} * 1 / 1 \\ & * \\ & (1+1) * 1.1 \\ & = \{ 1,172+738 * 1 \} * 2.2 \\ & = 1,910 * 2.2 \\ & = 4,202 \text{ (バイト)} = \text{約}0.005 \text{メガバイト} \end{aligned}$$

年レコード

$$a=1$$

$$b=1 + (60-1)/31,622,400 = 1.00 \dots = 1 \text{ (小数点以下切り捨て)}$$

$$c=10 \text{ (固定)}$$

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X(\text{年}) &= \{ (291+2) * 4 + (678+60) * \{ ((291+2) * 4) / (65,250-678) + 1 \} \} * 1/1 \\ &\quad * (10+1) * 1.1 \\ &= \{ 1,172 + 738 * 1 \} * 12.1 \\ &= 1,910 * 12.1 \\ &= 23,111 \text{ (バイト)} = \text{約} 0.03 \text{ メガバイト} \end{aligned}$$

以上から、PI_PITS の見積もりは次のようになります。

$$\begin{aligned} X(\text{合計}) &= X(\text{分}) + X(\text{時}) + X(\text{日}) + X(\text{週}) + X(\text{月}) + X(\text{年}) \\ &= 12.27 \text{ メガバイト} \\ &= \text{約} 13 \text{ メガバイト} \end{aligned}$$

次に PD_PDTS レコードの見積もりについて説明します。

$$a=1,440$$

$$b=60/60 = 1$$

$$c=7 \text{ 日とする}$$

$$d=678 \text{ バイト}$$

$$e=117 \text{ バイト}$$

$$f= \text{今回は} 10 \text{ とする}$$

$$g= \text{今回は} 60 \text{ 秒とする}$$

見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned} X &= \{ (117+2) * 12 + (678+60) * \{ ((117+2) * 12) / (65,250-678) + 1 \} \} * 1,440/1 * \\ &\quad (7+1) * \\ &\quad 1.1 \\ &= \{ 1,428 + 738 * 1 \} * 12,672 \\ &= 2,166 * 12,672 \\ &= 27,447,552 \text{ (バイト)} = \text{約} 27 \text{ メガバイト} \end{aligned}$$

したがって、必要なディスク占有量は PI_PITS+PD_PDTS=40 メガバイトとなります。

ファイル数

PI, PI_PITS, PD, および PD_PDTS を収集する場合を例に挙げて説明します。「(a) 見積もり式」のファイル数の見積もり式の、可変値を調べます。

l: PI レコードで収集しているレコードの数 =2

m: PD レコードで収集しているレコードの数 =2

A11 ~ A11: PI レコードタイプのレコードごとの分レコードの保存期間設定値 (単位: 日) = 今回は 3 日とする

A21 ~ A2l : PI レコードタイプのレコードごとの時レコードの保存期間設定値 (単位 : 日) = 今回は 3 日とする

A31 ~ A3l : PI レコードタイプのレコードごとの日レコードの保存期間設定値 (単位 : 週) = 今回は 1 週とする

A41 ~ A4l : PI レコードタイプのレコードごとの週レコードの保存期間設定値 (単位 : 週) = 今回は 1 週とする

A51 ~ A5l : PI レコードタイプのレコードごとの月レコードの保存期間設定値 (単位 : 月) = 今回は 1 月とする

B1 ~ Bm : PD レコードタイプのレコードごとの保存期間設定値 (単位 : 日) = 今回は 10 日とする

Store データベースで作成されるファイル数 N の見積もり式を次に示します。

$$\begin{aligned}
 N &= 20 + 2 * (\\
 & (A11 + A12 + \dots + A1l + 1) + \\
 & (A21 + A22 + \dots + A2l + 1) + \\
 & (A31 + A32 + \dots + A3l + 1) + \\
 & (A41 + A42 + \dots + A4l + 1) + \\
 & (A51 + A52 + \dots + A5l + 1) + \\
 & (11 * 1) + \\
 & (B1 + B2 + \dots + Bm + m) + \\
 &) \\
 & = 20 + 2 * \{ \\
 & [3 (PI分) + 3 (PI_PITS分) + 2] + \\
 & [3 (PI分) + 3 (PI_PITS分) + 2] + \\
 & [1 (PI分) + 1 (PI_PITS分) + 2] + \\
 & [1 (PI分) + 1 (PI_PITS分) + 2] + \\
 & [1 (PI分) + 1 (PI_PITS分) + 2] + \\
 & [11 * 2] + \\
 & [10 (PD分) + 10 (PD_PDT分) + 2] \\
 & \} \\
 & = 20 + 2 * \{ 8 + 8 + 4 + 4 + 4 + 22 + 22 \} = 164
 \end{aligned}$$

ディレクトリ数

PI, PI_PITS, PD, および PD_PDT を収集する場合を例に挙げて説明します。

l : PI レコードで収集しているレコードの数 = 2

m : PD レコードで収集しているレコードの数 = 2

A1max : PI レコードタイプで収集しているレコードの集約区分が "分" のデータの保存期間設定値の最大値 (単位 : 日) = 今回は 3 日とする (考え方 : PI が 2 日, PI_PITS が 3 日の場合は 3 日となります)

A2max : PI レコードタイプで収集しているレコードの集約区分が 「時」 のデータの保存期間設定値の最大値 (単位 : 日) = 今回は 3 日とする

A3max : PI レコードタイプで収集しているレコードの集約区分が 「日」 のデータの保存

期間設定値の最大値 (単位: 週) = 今回は 1 週とする

A4max: PI レコードタイプで収集しているレコードの集約区分が " 週 " のデータの保存期間設定値の最大値 (単位: 週) = 今回は 1 週とする

A5max: PI レコードタイプで収集しているレコードの集約区分が " 月 " のデータの保存期間設定値の最大値 (単位: 月) = 今回は 1 月とする

Bmax: PD レコードタイプのレコードごとの保存期間設定値の最大値 (単位: 日) = 今回は 10 日とする (考え方: PD_PDTS が 8 日, PD が 10 日の場合は 10 日となります)

Store データベースで作成されるディレクトリ数 N の見積もり式を次に示します。

$$N = 25 + 2 * (A1max) + (A2max) + (A3max) + (A4max) + (A5max) + 11 + (Bmax) \\ = 25 + 2 * (3 + 3 + 1 + 1 + 1 + 11 + 10) = 85$$

Store サービスがオープンするファイル数

PI, PI_PITS, PD, および PD_PDTS を収集する場合を例に挙げて説明します。

l: PI レコードで収集しているレコードの数 = 2

m: PD レコードで収集しているレコードの数 = 2

Store サービスがオープンするディレクトリ数 N の見積もり式を次に示します。

$$N = 20 + 2 * (6 * l + m) \\ = 20 + 2 * (6 * 2 + 2) = 48$$

付録 A.3 クラスタ運用時のディスク占有量

クラスタ運用時のディスク占有量の見積もりは、クラスタシステムで運用しない場合のディスク占有量の見積もりと同じです。ディスク占有量については、「付録 A.2 ディスク占有量」を参照してください。

付録 B カーネルパラメーター

PFM - RM for Oracle を使用する場合、実行処理に必要なリソースを割り当てるために、OS のカーネルパラメーターを調整します。ここでは、調整が必要なカーネルパラメーターを OS ごとに説明します。

なお、UNIX 環境で PFM - Manager および PFM - Web Console を使用する場合は、カーネルパラメーターの調整については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されているカーネルパラメーター一覧を参照してください。

付録 B.1 Linux (x86) , Linux (x64) の場合

(1) PFM - RM for Oracle が必要とするシステムリソース

Linux (x86) 環境および Linux (x64) 環境で調整が必要なカーネルパラメーターを次の表に示します。

表 B-1 PFM - RM for Oracle が必要とするシステムリソース (Linux (x86) , Linux (x64) の場合)

システムリソース	パラメーター	見積もり
セマフォ	SEMMNI	2 * 複数インスタンスの場合のインスタンス数
	SEMMNS	2 * 複数インスタンスの場合のインスタンス数

付録 C 識別子一覧

PFM - RM for Oracle を操作したり、PFM - RM for Oracle の Store データベースからパフォーマンスデータを抽出したりする際、PFM - RM for Oracle であることを示す識別子が必要な場合があります。PFM - RM for Oracle の識別子を次の表に示します。

表 C-1 PFM - RM for Oracle の識別子一覧

用途	名称	識別子	説明
コマンド など	プロダクト ID	0	プロダクト ID とは、サービス ID の一部。サービス ID は、コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合や、パフォーマンスデータをバックアップする場合などに必要である。サービス ID については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。
	サービスキー	RMOracle	コマンドを使用して PFM - RM for Oracle を起動する場合や、終了する場合などに必要である。サービスキーについては、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照のこと。
ODBC	製品タイプ識別子	RMORACLE	SQL 文を使用してデータを抽出する場合に必要である。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、ODBC に準拠したアプリケーションプログラムとの連携について説明している章を参照のこと。
GUI など での表示	プロダクト名	RMOracle	プロダクトを識別する名称で、PFM - WebConsole の画面表示などで使用される。
ヘルプ	ヘルプ ID	pca1	PFM - RM for Oracle のヘルプであることを表す。

付録 D プロセス一覧

ここでは、PFM - RM for Oracle のプロセス一覧を記載します。

PFM - RM for Oracle のプロセス一覧を次の表に示します。なお、プロセス名の後ろに記載されている値は、同時に起動できるプロセス数です。

注意

論理ホストの PFM - RM でも、動作するプロセスおよびプロセス数は同じです。

表 D-1 PFM - RM for Oracle のプロセス一覧 (Windows 版)

プロセス名 (プロセス数)	機能
jpcagt1.exe(n)	Remote Monitor Collector サービスプロセス。このプロセスは、PFM - RM for Oracle のインスタンスごとに一つ起動する。
jpc1collect.exe(n) ¹	パフォーマンスデータ収集プロセス。このプロセスはインスタンスごとに一つ起動する。
jpcsto.exe(n)	Remote Monitor Store サービスプロセス。このプロセスは、PFM - RM for Oracle のインスタンスごとに一つ起動する。
stpqlpr.exe(1) ²	Store データベースのバックアップ / エクスポート実行プロセス。

注 1

jpcagt1 プロセスの子プロセスです。

注 2

jpcsto プロセスの子プロセスです。

表 D-2 PFM - RM for Oracle のプロセス一覧 (UNIX 版)

プロセス名 (プロセス数)	機能
jpcagt1(n)	Remote Monitor Collector サービスプロセス。このプロセスは、PFM - RM for Oracle のインスタンスごとに一つ起動する。
jpc1collect_10(n) ¹	パフォーマンスデータ収集プロセス。このプロセスはインスタンスごとに一つ起動する。監視対象 DB : Oracle10g, Oracle11g
agt1/jpcsto(n)	Remote Monitor Store サービスプロセス。このプロセスは、PFM - RM for Oracle のインスタンスごとに一つ起動する。
stpqlpr(1) ²	Store データベースのバックアップ / エクスポート実行プロセス。

注 1

jpcagt1 プロセスの子プロセスです。

注 2

jpesto プロセスの子プロセスです。

付録 E ポート番号一覧

ここでは、PFM - RM for Oracle で使用するポート番号を記載します。

PFM - Manager , および PFM - Base のポート番号およびファイアウォールの通過方向については、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の付録を参照してください。

ポート番号は、ユーザー環境に合わせて任意の番号に変更することもできます。

ポート番号の変更方法については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、インストールとセットアップについて説明している章を参照してください。なお、使用するプロトコルは TCP/IP です。

注意

Performance Management は、1 対 1 のアドレス変換をする静的 NAT(Basic NAT) に対応しています。

動的 NAT や、ポート変換機能を含む NATP (IP Masquerade , NAT+) には対応していません。

付録 E.1 PFM - RM for Oracle のポート番号

PFM - RM for Oracle で使用するポート番号を次の表に示します。

表 E-1 PFM - RM for Oracle で使用するポート番号

ポート番号	サービス名	パラメーター	用途
自動 ¹	Remote Monitor Store サービス	jp1pcstoo[nnn] ²	パフォーマンスデータを記録したり、履歴レポートを取得したりするときに使用する。
	Remote Monitor Collector サービス	jp1pcagt1[nnn] ²	アラームをバインドしたり、リアルタイムレポートを取得したりするときに使用する。

注 1

サービスが再起動されるたびに、システムで使用されていないポート番号が自動的に割り当てられます。

注 2

複数インスタンスを作成している場合、2 番目以降に作成したインスタンスに通番 (nnn) が付加されます。最初に作成したインスタンスには、通番は付加されません。

付録 E.2 ファイアウォールの通過方向

(1) ファイアウォールの通過方向の設定

ファイアウォールを挟んで PFM - Manager と PFM - RM for Oracle を配置する場合は、PFM - Manager と PFM - RM のすべてのサービスにポート番号を固定値で設定してください。また、各ポート番号を次の表に示す方向で設定し、すべてのサービスについてファイアウォールを通過させるようにしてください。

表 E-2 ファイアウォールの通過方向 (PFM - Manager と PFM - RM 間)

サービス名	パラメーター	通過方向
Remote Monitor Store サービス	jp1pcsto1[nnn]	RM Manager
Remote Monitor Collector サービス	jp1pcagt1[nnn]	

(凡例)

Manager : PFM - Manager ホスト

RM : PFM - RM ホスト

: 右項から左項への通信 (コネクション) を開始する方向

注

複数インスタンスを作成している場合、2 番目以降に作成したインスタンスに通番 (nnn) が付加されます。最初に作成したインスタンスには、通番は付加されません。

通信 (コネクション) を開始する時は、接続を受ける側 (矢印が向いている側) が、表 E-1 のポート番号を受信ポートとして使用します。接続する側は、OS によって割り当てられる空きポート番号を送信ポートとして使用します。この場合に使用するポート番号の範囲は、OS によって異なります。

上記の RM Manager の場合は、Manager で一時的に使用される送信ポートが RM の受信ポートを通過できるようにファイアウォールを設定してください。

注意

PFM - RM のホストで `jpctool db dump` コマンドまたは `jpccconf inst list` コマンドを実行したい場合、次のどちらかの方法でコマンドを実行してください。

- `jpctool db dump` コマンドまたは `jpccconf inst list` コマンドの proxy オプションで、PFM - Manager を経由して通信するように指定してください。
`jpctool db dump` コマンドまたは `jpccconf inst list` コマンドの proxy オプションについては、マニュアル「JP1/Performance Management リファレンス」の、コマンドについて説明している章を参照してください。
- 各 PFM - RM ホスト間で次の表に示す方向でポート番号を設定し、ファイアウォールを通過させるようにしてください。

表 E-3 ファイアウォールの通過方向 (各 PFM - RM ホスト間)

サービス名	パラメーター	通過方向	
Remote Monitor Store サービス	jp1pcsto1[nnn]	RM	RM
Remote Monitor Collector サービス	jp1pcagt1[nnn]		

(凡例)

RM : PFM - RM ホスト

: 左項から右項, および右項から左項への通信 (コネクション) を開始する方向

注

複数インスタンスを作成している場合, 2 番目以降に作成したインスタンスに通番 (nnn) が付加されます。最初に作成したインスタンスには, 通番は付加されません。

(2) ファイアウォールの通過方向の設定 (論理ホスト運用の場合)

ファイアウォールを挟んで PFM - Manager と PFM - RM for Oracle を配置する場合は, PFM - Manager と PFM - RM のすべてのサービスにポート番号を固定値で設定してください。また, 各ポート番号を次の表に示す方向で設定し, すべてのサービスについてファイアウォールを通過させるようにしてください。

表 E-4 ファイアウォールの通過方向 (PFM - Manager と PFM - RM 間 (論理ホスト運用の場合))

サービス名	パラメーター	通過方向	
Remote Monitor Store サービス (論理ホスト)	jp1pcsto1[nnn]	RM (論理ホスト)	Manager
Remote Monitor Collector サービス (論理ホスト)	jp1pcagt1[nnn]		

(凡例)

Manager : PFM - Manager ホスト

RM (論理ホスト) : PFM - RM ホスト

: 右項から左項への通信 (コネクション) を開始する方向

注

複数インスタンスを作成している場合, 2 番目以降に作成したインスタンスに通番 (nnn) が付加されます。最初に作成したインスタンスには, 通番は付加されません。

通信 (コネクション) を開始する時は, 接続を受ける側 (矢印が向いている側) が, 表 E-1 のポート番号を受信ポートとして使用します。接続する側は, OS によって割り当てられる空きポート番号を送信ポートとして使用します。この場合に使用するポート番号の範囲は, OS によって異なります。

上記の PFM - RM (論理ホスト) PFM - Manager の場合は, PFM - Manager から一時的に使用される送信ポートが PFM - RM の論理ホストの受信ポートに通過できるよう

にファイアウォールを設定してください。

(3) ファイアウォールの通過方向の設定（ヘルスチェック機能を利用する場合）

ヘルスチェック機能を利用して PFM - RM for Oracle で監視対象ホストの稼働状況を監視する場合、ICMP 通信がファイアウォールを通過するように設定します。

ファイアウォールの通過方向について次の表に示します。

表 E-5 ファイアウォールの通過方向（PFM - RM for Oracle と監視対象ホスト間）

サービス名	通信プロトコル	通過方向
Remote Monitor Collector サービス	ICMP エコ-要求 / ICMP エコ-応答	RM 監視対象ホスト

(凡例)

RM : PFM - RM ホスト

: 左項から右項, および右項から左項への通信 (コネクション) を開始する方向

付録 F PFM - RM for Oracle のプロパティ

ここでは、PFM - Web Console で表示される PFM - RM for Oracle の次のプロパティについて説明します。

- Remote Monitor Store サービス
- Remote Monitor Collector サービス
- リモートエージェントとグループエージェント

付録 F.1 Remote Monitor Store サービスのプロパティ一覧

PFM - RM for Oracle の Remote Monitor Store サービスのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 F-1 PFM - RM for Oracle の Remote Monitor Store サービスのプロパティ一覧

ディレクトリ名	プロパティ名	説明
-	First Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最初の日時が表示される。
	Last Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最新の日時が表示される。
General	-	ホスト名やディレクトリなどの情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Directory	サービスの動作するカレントディレクトリ名が表示される。
	Host Name	サービスが動作する物理ホスト名が表示される。
	Process ID	サービスのプロセス ID が表示される。
	Physical Address	サービスが動作するホストの IP アドレスおよびポート番号が表示される。
	User Name	サービスプロセスを実行したユーザー名が表示される。
	Time Zone	サービスで使用されるタイムゾーンが表示される。
System	-	サービスが起動されている OS の、OS 情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	CPU Type	CPU の種類が表示される。
	Hardware ID	ハードウェア ID が表示される。
	OS Type	OS の種類が表示される。
	OS Name	OS 名が表示される。
	OS Version	OS のバージョンが表示される。

ディレクトリ名	プロパティ名	説明
Network Services	-	Performance Management 通信共通ライブラリーについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Build Date	Remote Monitor Store サービスの作成日が表示される。
	INI File	jpcns.ini ファイルの格納ディレクトリ名が表示される。
Network Services	Service	-
	Description	サービスについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Local Service Name	次の形式でホスト名が表示される。 インスタンス名_ホスト名
	Remote Service Name	サービス ID が表示される。
	EP Service Name	接続先 PFM - Manager ホストの Master Manager サービスのサービス ID が表示される。
Retention Ex	-	データの保存期間を設定する。詳細については、マニュアル「JP1/Performance Management 運用ガイド」の、稼働監視データの管理について説明している章を参照のこと。
Retention Ex	Product Interval - PI レコードタイプのレコード ID	-
	Period - Minute Drawer (Day)	PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。
	Period - Hour Drawer (Day)	分ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。指定できる値は 0 ~ 366 日で、1 日単位で指定できる。
	Period - Day Drawer (Week)	時間ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。指定できる値は 0 ~ 366 日で、1 日単位で指定できる。
	Period - Day Drawer (Week)	日ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。指定できる値は 0 ~ 522 週で、1 週間単位で指定できる。
	Period - Week Drawer (Week)	週ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。指定できる値は 0 ~ 522 週で、1 週間単位で指定できる。
	Period - Month Drawer (Month)	月ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間を設定する。指定できる値は 0 ~ 120 月で、1 か月単位で指定できる。
Period - Year Drawer (Year)	年ごとの PI レコードタイプのレコードの保存期間。10 で固定。	

ディレクトリ名	プロパティ名	説明
Product Detail - PD レコードタイプのレコード ID	Period (Day)	PD レコードタイプのレコード ID ごとに、パフォーマンスデータの保存期間を設定する。指定できる値は 0 ~ 366 日で、1 日単位で指定できる。
Disk Usage	-	各データベースで使用されているディスク容量が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティには、プロパティを表示した時点でのディスク使用量が表示される。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
	Product Interval	PI レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。
	Product Detail	PD レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。
	Product Alarm	PA レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。PFM - RM for Oracle では使用しない。
	Product Log	PL レコードタイプのレコードで使用されるディスク容量が表示される。PFM - RM for Oracle では使用しない。
	Total Disk Usage	データベース全体で使用されるディスク容量が表示される。
Configuration	-	Remote Monitor Store サービスのプロパティが表示される。
	Store Version	Store データベースのバージョンが表示される。

(凡例)

- : 該当しない

付録 F.2 Remote Monitor Collector サービスのプロパティ一覧

PFM - RM for Oracle の Remote Monitor Collector サービスのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 F-2 PFM - RM for Oracle の Remote Monitor Collector サービスのプロパティ一覧

ディレクトリ名	プロパティ名	説明
-	First Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最初の日時が表示される。
	Last Registration Date	サービスが PFM - Manager に認識された最新の日時が表示される。

ディレクトリ名	プロパティ名	説明	
	Data Model Version	データモデルのバージョンが表示される。	
General	-	ホスト名やディレクトリなどの情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。	
	Directory	サービスの動作するカレントディレクトリ名が表示される。	
	Host Name	サービスが動作する物理ホスト名が表示される。	
	Process ID	サービスのプロセス ID が表示される。	
	Physical Address	サービスが動作するホストの IP アドレスおよびポート番号が表示される。	
	User Name	サービスプロセスを実行したユーザー名が表示される。	
	Time Zone	サービスで使用されるタイムゾーンが表示される。	
System	-	サービスが起動されている OS の、OS 情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。	
	CPU Type	CPU の種類が表示される。	
	Hardware ID	ハードウェア ID が表示される。	
	OS Type	OS の種類が表示される。	
	OS Name	OS 名が表示される。	
	OS Version	OS のバージョンが表示される。	
Network Services	-	Performance Management 通信共通ライブラリーについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。	
	Build Date	Remote Monitor Collector サービスの作成日が表示される。	
	INI File	jpcns.ini ファイルの格納ディレクトリ名が表示される。	
Network Services	Service	-	サービスについての情報が格納されている。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Description	次の形式でホスト名が表示される。 インスタンス名_ホスト名
		Local Service Name	サービス ID が表示される。
		Remote Service Name	Remote Monitor Collector サービスが接続する Remote Monitor Store サービスのサービス ID が表示される。

ディレクトリ名		プロパティ名	説明
		EP Service Name	接続先 Correlator サービスのサービス ID が表示される。
		AH Service Name	同一ホストにある Action Handler サービスのサービス ID が表示される。
JP1 Event Configurations		-	JP1 イベントの発行条件を設定する。
		各サービス	Remote Monitor Collector サービス, Remote Monitor Store サービス, Action Handler サービス, および Status Server サービスのリスト項目から「Yes」または「No」を選択し, サービスごとに JP1 システムイベントを発行するかどうかを指定する。
		JP1 Event Send Host	JP1/Base の接続先イベントサーバ名を指定する。ただし, Action Handler サービスと同一マシンの論理ホストまたは物理ホストで動作しているイベントサーバだけ指定できる。指定できる値は 0 ~ 255 バイトの半角英数字, 「.」および「-」である。範囲外の値を指定した場合は, 省略したと仮定される。値を省略した場合は, Action Handler サービスが動作するホストがイベント発行元ホストとして使用される。「localhost」を指定した場合は, 物理ホストを指定したものと仮定される。
		Monitoring Console Host	JP1/IM - Manager のモニター起動で PFM - Web Console のブラウザを起動する場合, 起動する PFM - Web Console ホストを指定する。指定できる値は 0 ~ 255 バイトの半角英数字, 「.」および「-」である。範囲外の値を指定した場合は, 省略したと仮定される。値を省略した場合は, 接続先の PFM - Manager ホストが仮定される。
		Monitoring Console Port	起動する PFM - Web Console のポート番号 (http リクエストポート番号) を指定する。指定できる値は 1 ~ 65535 である。範囲外の値を指定した場合は, 省略したと仮定される。値を省略した場合は, 20358 が設定される。
JP1 Event Configurations	Alarm	JP1 Event Mode	アラームの状態が変化した場合に, 次のどちらのイベントを発行するか設定する。 <ul style="list-style-type: none"> JP1 User Event : JP1 ユーザーイベントを発行する JP1 System Event : JP1 システムイベントを発行する
Detail Records		-	PD レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は, 太字で表示される。
Detail Records	レコード ID 1	-	レコードのプロパティが格納されている。

ディレクトリ名	プロパティ名	説明
	Description	レコードの説明が表示される。このプロパティは変更できない。
	Log	リスト項目から「Yes」または「No」を選択し、レコードを Store データベースに記録するかどうかを指定する。この値が「Yes」でかつ、Collection Interval が 0 より大きい値であれば、データベースに記録される。
	Collection Interval	データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0 ~ 2,147,483,647 秒で、1 秒単位で指定できる。なお、0 と指定した場合、データは収集されない。
	Collection Offset	データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は、Collection Interval で指定した値の範囲内で、0 ~ 32,767 秒の 1 秒単位で指定できる。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値によらないで、Collection Interval と同様の時間となる。
	LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の [サービス階層] タブで表示されるサービスのプロパティ画面の、下部フレームの [LOGIF] をクリックすると表示される [ログ収集条件設定] ウィンドウで作成した条件式 (文字列) が表示される。
Interval Records	-	PI レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は、太字で表示される。
Interval Records	レコード ID 1	<p data-bbox="563 1116 1258 1193">-</p> <p data-bbox="563 1193 1258 1271">Description</p> <p data-bbox="563 1271 1258 1425">Log</p> <p data-bbox="563 1425 1258 1557">Collection Interval</p> <p data-bbox="563 1557 1258 1740">Collection Offset</p>

ディレクトリ名		プロパティ名	説明
		LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の [サービス階層] タブで表示されるサービスのプロパティ画面の、下部フレームの [LOGIF] をクリックすると表示される [ログ収集条件設定] ウィンドウで作成した条件式 (文字列) が表示される。
Log Records		-	PL レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。PFM - RM for Oracle ではこのレコードをサポートしていないため使用しない。
Monitoring Targets		-	PFM - RM for Oracle で監視する監視対象ホストのプロパティが格納されている。
Monitoring Targets	監視対象名	-	監視対象の説明が、監視対象の数だけ表示される。
		Target Name	監視対象名が表示される。このプロパティは変更できない。
		Target Host	監視対象ホスト名が表示される。このプロパティは変更できない。
Remote Monitor Configuration		-	PFM - RM for Oracle 固有の設定用プロパティが格納されている。
Remote Monitor Configuration	Remote Monitor	-	Remote Monitor Collector サービスの概要が表示される。このフォルダに格納されているプロパティは変更できない。
		Product	プロダクト ID 「1」が表示される。
		Instance	jpccconf inst setup コマンドで指定したインスタンス名が表示される。
		Description	サービスの説明が表示される。
		Version	監視対象の Oracle のバージョンが表示される。
Remote Monitor Configuration	jpc1collect	-	Remote Monitor Collector サービスのデータ収集プログラムのプロパティが表示される。
		ORACLE_HOME	インスタンス環境を設定したときに指定した「oracle_home」の値が表示される。このプロパティは変更できない。
		ORACLE_SID	インスタンス環境を設定したときに指定した「oracle_sid」の値が表示される。このプロパティは変更できない。
		ORACLE_USER	インスタンス環境を設定したときに指定した「oracle_user」の値が表示される。このプロパティは変更できない。

ディレクトリ名	プロパティ名	説明
	NET_SERVICE_NAME	インスタンス環境を設定したときに指定した「net_service_name」の値が表示される。このプロパティは変更できない。
	LOG_PATH	インスタンス環境を設定したときに指定した「log_path」の値が表示される。このプロパティは変更できる。 ²
	LOG_SIZE	インスタンス環境を設定したときに指定した「log_size」の値が表示される。このプロパティは変更できる。 ²
	TIMEOUT	インスタンス環境を設定したときに指定した「timeout」の値が表示される。1～9を指定して更新した場合、値は変更されない。このプロパティは変更できる。 ²
	SQL_OPTION	インスタンス環境を設定したときに指定した「sql_option」の値が表示される。このプロパティは変更できる。 ²
	NUMERIC_10	インスタンス環境を設定したときに指定した「numeric_10」の値が表示される。このプロパティは変更できる。 ²
	STARTUP_ALWAYS	インスタンス環境を設定したときに指定した「startup_always」の値が表示される。このプロパティは変更できる。 ²
	RETRY_TIME	Oracle 接続時に認証エラーが出力された場合に、再接続を試みる秒数が表示される。UNIX 上では常に 0 に設定されている。このプロパティは変更できない。
	LOCALTEMP_OPTION	インスタンス環境を設定したときに指定した「localtemp_option」の値が表示される。このプロパティは変更できる。 ²

(凡例)

- : 該当しない

注 1

ディレクトリ名には、データベース ID を除いたレコード ID が表示されます。各レコードのレコード ID については、「5. レコード」を参照してください。

注 2

更新した値を反映するには、Remote Monitor Collector サービスを再起動してください。

付録 F.3 リモートエージェントおよびグループエージェントのプロパティ一覧

PFM - RM for Oracle のリモートエージェントおよびグループエージェントのプロパティ一覧を次の表に示します。

表 F-3 PFM - RM for Oracle のリモートエージェントおよびグループエージェントのプロパティ一覧

ディレクトリ名	プロパティ名	説明	リモートエージェント	グループエージェント
-	Data Model Version	データモデルのバージョンが表示される。		
Remote Monitoring	-	リモートエージェントおよびグループエージェントのプロパティが格納されている。		
	Agent Type	エージェントの種別が表示される。 <ul style="list-style-type: none"> • リモートエージェントの場合 Remote Agent • グループエージェントの場合 Group Agent 		
	RMName	PFM - RM for Oracle のサービス ID が表示される。		
	Target Name	監視対象名が表示される。		×
	Target Host	監視対象ホスト名が表示される。		×
	Group Name	グループ名が表示される。	×	
	Primary Host	プライマリホスト名が表示される。	×	
	Grouping Targets	集約対象 Target Name の一覧 (リスト表示) が表示される。	×	
Detail Records	-	PD レコードタイプのレコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は、太字で表示される。		
Detail Records	レコード ID ¹	-	レコードのプロパティが格納されている。	
	Description		レコードの説明が表示される。	

ディレクトリ名	プロパティ名	説明	リモートエージェント	グループエージェント
	Log	レコードを PFM - RM for Oracle の Store データベースに記録するかどうか「Yes」または「No」で表示される。この値が「Yes」でかつ、Collection Interval が 0 より大きい値であれば、データベースに記録される。		2
	Collection Interval	データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0 ~ 2,147,483,647 秒で、1 秒単位で指定できる。なお、0 と指定した場合、データは収集されない。	3	3
	Collection Offset	データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は、Collection Interval で指定した値の範囲内で、0 ~ 32,767 秒の 1 秒単位で指定できる。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値によらないで、Collection Interval と同様の時間となる。	3	3
	LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM - Web Console の [サービス階層] タブで表示されるサービスのプロパティ画面の、下部フレームの [LOGIF] をクリックすると表示される [ログ収集条件設定] ウィンドウで作成した条件式 (文字列) が表示される。	3	3

ディレクトリ名	プロパティ名	説明	リモートエージェンツ	グループエージェンツ	
Interval Records	-	PI レコードタイプのリコードのプロパティが格納されている。収集されているレコードのレコード ID は、太字で表示される。			
Interval Records	レコード ID ¹	-	レコードのプロパティが格納されている。		
		Description	レコードの説明が表示される。		
		Log	レコードを PFM - RM for Oracle の Store データベースに記録するかどうか「Yes」または「No」で表示される。この値が「Yes」でかつ、Collection Interval が 0 より大きい値であれば、データベースに記録される。		2
		Collection Interval	データの収集間隔を指定する。指定できる値は 0 ~ 2,147,483,647 秒で、1 秒単位で指定できる。なお、0 と指定した場合、データは収集されない。	3	3
		Collection Offset	データの収集を開始するオフセット値を指定する。指定できる値は、Collection Interval で指定した値の範囲内で、0 ~ 32,767 秒の 1 秒単位で指定できる。なお、データ収集の記録時間は、Collection Offset の値によらないで、Collection Interval と同様の時間となる。	3	3

ディレクトリ名	プロパティ名	説明	リモートエージェント	グループエージェント
	LOGIF	レコードをデータベースに記録するときの条件を指定する。条件に合ったレコードだけがデータベースに記録される。PFM・Web Console の [サービス階層] タブで表示されるサービスのプロパティ画面の、下部フレームの [LOGIF] をクリックすると表示される [ログ収集条件設定] ウィンドウで作成した条件式 (文字列) が表示される。	3	3
Remote Monitor Configuration	-	監視対象固有の設定用プロパティが格納されている。		×
Remote Monitor Configuration	Target	-		×

(凡例)

- : 表示され、かつ更新可能。
- : 表示されるが更新不可。
- × : 表示されない。

注 1

フォルダ名には、データベース ID を除いたレコード ID が表示されます。各レコードのレコード ID については、「5. レコード」を参照してください。

注 2

PFM・RM for Oracle では、一つのインスタンス環境に定義できる監視対象は一つだけです。そのため、グループエージェントの使用は有効ではありません。プロパティからレコードの記録を変更する場合は、グループエージェントのプロパティではなく、リモートエージェントのプロパティから行ってください。

注 3

PFM・RM for Oracle で設定した値が表示されます。

付録 G ファイルおよびディレクトリー一覧

ここでは、PFM - RM for Oracle のファイルおよびディレクトリー一覧を OS ごとに記載します。

Performance Management のインストール先ディレクトリを OS ごとに示します。

Windows の場合

Performance Management のインストール先フォルダは、任意です。デフォルトのインストール先フォルダは次のとおりです。

- Windows Server 2003 (x64), 64 ビット版の Windows Server 2008 以外の場合
システムドライブ ¥Program Files¥Hitachi¥jplpc¥
- Windows Server 2003 (x64), 64 ビット版の Windows Server 2008 の場合
システムドライブ ¥Program Files (x86) ¥Hitachi¥jplpc¥

UNIX の場合

Performance Management のインストール先ディレクトリは、「/opt/jplpc/」です。

付録 G.1 PFM - RM for Oracle のファイルおよびディレクトリー一覧

(1) Windows の場合

Windows 版 PFM - RM for Oracle のファイルおよびフォルダ一覧を次の表に示します。

表 G-1 PFM - RM for Oracle のファイルおよびフォルダ一覧 (Windows 版)

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ ¥	instagt1.ini	内部処理用中間ファイル
インストール先フォルダ ¥agt1¥	-	PFM - RM for Oracle のルートフォルダ
	readme.txt	README.TXT (日本語)
	insrules.dat	インスタンス起動環境ルール定義ファイル
	PATCHLOG.TXT	内部処理用中間ファイル
	jpcagtras.bat	保守資料収集プログラム
jpcagtras.exe		
インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥	-	Remote Monitor Collector サービスのルートフォルダ

フォルダ名	ファイル名	説明
	agtlis.ini	インスタンス一覧
	inssetup.bat .instmpl	内部処理用中間ファイル
	jpcagt.ini.i nstmpl	Remote Monitor Collector サービス起動 情報テンプレートファイル
	jpcagt1.exe	Remote Monitor Collector サービス実行 プログラム
	jpc1collect_ 9.exe	Remote Monitor Collector サービスパ フォーマンスデータ収集プログラム (Oracle10g/Oracle11g 用)
	target.ini.t mpl	監視対象設定テンプレートファイル
	group.ini.tm pl	グループエージェント設定テンプレート ファイル
	targetrules. dat	監視対象作成ルールファイル
	GARULES.DAT	グループエージェント作成ルールファ イル
インストール先フォルダ ¥agtl¥agent¥sql¥	-	SQL スクリプト格納フォルダ
	sp_rdrp.sql	Oracle Database からのオブジェクト削 除 SQL スクリプトファイル
	sp_rist.sql	Oracle Database からのオブジェクト登 録 SQL スクリプトファイル
	mk_rmus.sql	PFM-RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントを作成するスクリプトファ イル
インストール先フォルダ ¥agtl¥agent¥ インスタンス名 ¥	-	Remote Monitor Collector サービスの ルートフォルダ (インスタンスごと) 1
	jpcagt.ini	Remote Monitor Collector サービス起動 情報ファイル (インスタンスごと) 1
	jpcagt.ini.m odel	Remote Monitor Collector サービス起動 情報ファイルのモデルファイル (イン スタンスごと) 1
	inssetup.bat	内部処理用中間ファイル 1
	status.dat	内部処理用中間ファイル 3
	pdia_XXXXX_s tatus.db 4	内部処理用中間ファイル 3
	targetlist.i ni	監視対象一覧

フォルダ名	ファイル名	説明
	GARULES.DAT	グループエージェント作成ルールファイル
	grouplist.ini	グループエージェント一覧
	ocilog.txt	保守資料ファイル
インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥groups¥	-	グループエージェント用フォルダ
	グループ名.ini	グループエージェント設定ファイル
インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥log¥	-	Remote Monitor Collector サービス内部 ログファイル格納フォルダ（インスタ ンスごと） ¹
	agt1inf01.log agt1inf02.log	RM for Oracle エージェントログファイ ル
	agt1err01.log agt1err02.log	RM for Oracle エージェントログエラー ファイル
	agt1inf.lck	内部処理用中間ファイル ³
	agt1err.lck	内部処理用中間ファイル ³
	msglog01 msglog02	内部ログファイル ²
	nslog01 nslog02	内部ログファイル ²
インストール先フォルダ ¥agt1¥agent¥ インスタンス名 ¥targets¥	-	リモートエージェント用フォルダ
	監視対象名.ini	監視対象設定ファイル
	監視対象名 .ini.model	監視対象設定ファイルのモデル
インストール先フォルダ ¥agt1¥lib¥	-	メッセージカタログ格納フォルダ
	jpcagt1msg.d ll	メッセージファイル
インストール先フォルダ ¥agt1¥store¥	-	Remote Monitor Store サービスのルー トフォルダ
	jpcsto.ini.i nstmpl	Remote Monitor Store サービス起動情 報テンプレートファイル
	stolist.ini	ストア一覧

フォルダ名	ファイル名	説明
	*.DAT ⁴	データモデル定義ファイル
インストール先フォルダ ¥agtl¥store¥ インスタンス名 ¥	-	Remote Monitor Store サービスのルートフォルダ (インスタンスごと) ¹
	*.DB ⁴	パフォーマンスデータファイル (インスタンスごと) ²
	*.IDX ⁴	パフォーマンスデータファイルのインデックスファイル (インスタンスごと) ²
	*.LCK ⁴	パフォーマンスデータファイルのロックファイル (インスタンスごと) ²
	jpcsto.ini	Remote Monitor Store サービス起動情報ファイル (インスタンスごと) ¹
	jpcsto.ini.model	Remote Monitor Store サービス起動情報ファイルのモデル (インスタンスごと) ¹
	*.DAT ⁴	データモデル定義ファイル (インスタンスごと) ¹
	status.dat	内部処理用中間ファイル ³
インストール先フォルダ ¥agtl¥store¥ インスタンス名 ¥backup¥	-	標準のデータベースバックアップ先フォルダ (インスタンスごと) ¹
インストール先フォルダ ¥agtl¥store¥ インスタンス名 ¥partial¥	-	標準のデータベース部分バックアップ先フォルダ (インスタンスごと) ¹
インストール先フォルダ ¥agtl¥store¥ インスタンス名 ¥dump¥	-	標準のデータベースエクスポート先フォルダ (インスタンスごと) ¹
インストール先フォルダ ¥agtl¥store¥ インスタンス名 ¥import¥	-	標準のデータベースインポート先フォルダ (インスタンスごと) ¹
インストール先フォルダ ¥agtl¥store¥ インスタンス名 ¥log¥	-	Remote Monitor Store サービス内部ログファイル格納フォルダ (インスタンスごと) ¹
	msglog01 msglog02	内部ログファイル ²
	nslog01 nslog02	内部ログファイル ²
インストール先フォルダ ¥agtl¥store¥ インスタンス名 ¥STPD¥	-	PD データベース固有のフォルダ
インストール先フォルダ ¥agtl¥store¥ インスタンス名 ¥STPI¥	-	PI データベース固有のフォルダ
	STPIopn	内部処理用中間ファイル

フォルダ名	ファイル名	説明
インストール先フォルダ ¥auditlog¥	-	動作ログファイル出力フォルダ
	jpcauditn.log ⁵	動作ログファイル
インストール先フォルダ ¥patch_files¥agt1¥	-	パッチ用ファイル格納フォルダ（エージェント用）
インストール先フォルダ ¥setup¥	-	セットアップファイル格納フォルダ
	jpcagt1u.Z	PFM - RM セットアップ用アーカイブファイル（UNIX）
	jpcagt1w.EXE	PFM - RM セットアップ用アーカイブファイル（Windows）

（凡例）

- : 該当しない

注 1

jpccconf inst setup コマンドの実行で作成されます。

注 2

Remote Monitor Store サービス起動時に作成されます。

注 3

一時的に作成される場合があります。

注 4

"xxxxxx", "*" には、任意の文字列が入ります。

注 5

nは数値です。ログファイル数は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。

（2）UNIX の場合

UNIX 版 PFM - RM for Oracle のファイルおよびディレクトリー一覧を次の表に示します。

表 G-2 PFM - RM for Oracle のファイルおよびディレクトリー一覧（UNIX 版）

ディレクトリ名	ファイル名	パー ミッ ション	説明
/opt/jp1pc/	instagt1.ini	644	内部処理用中間ファイル
/opt/jp1pc/agt1/	-	755	PFM-RM for Oracle のルートディレクトリ
	jpcagtras	555	保守資料収集プログラム
	insrules.dat	640	インスタンス起動環境ルール定義ファイル
	PATCHLOG.TXT	644	内部処理用中間ファイル
	patch_history	644	内部処理用中間ファイル

ディレクトリ名	ファイル名	パー ミッ ション	説明
/opt/jp1pc/agt1/ agent/	-	755	Remote Monitor Collector サービスの ルートディレクトリ
	jpcagt1	555	Remote Monitor Collector サービス実 行プログラム
	jpc1collect_10	555	Remote Monitor Collector サービスパ フォーマンスデータ収集プログラム (Oracle10g/Oracle11g 用)
	agtlist.ini	644	インスタンス一覧
	inssetup.instm pl	755	内部処理用中間ファイル
	jpcagt.ini.ins tmpl	444	Remote Monitor Collector サービス起 動情報テンプレートファイル
	target.ini.tmp l	444	監視対象設定テンプレートファイル
	group.ini.tmpl	444	グループエージェント設定テンプレ ートファイル
	targetrules.da t	600	監視対象作成ルールファイル
	GARULES.DAT	444	グループエージェント作成ルールファ イル
/opt/jp1pc/agt1/ agent/sql/	-	755	SQL スクリプト格納ディレクトリ
	sp_rdrp.sql	555	Oracle Database からのオブジェクト 削除 SQL スクリプトファイル
	sp_rist.sql	555	Oracle Database からのオブジェクト 登録 SQL スクリプトファイル
	mk_rmus.sql	555	PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のアカウントを作成するスク リプトファイル
/opt/jp1pc/agt1/ agent/ インスタンス名 /	-	755	Remote Monitor Collector サービスの ルートディレクトリ (インスタンスご と) ¹
	jpcagt.ini	600	Remote Monitor Collector サービス起 動情報ファイル (インスタンスご と) ¹
	jpcagt.ini.lck	777	Remote Monitor Collector サービス起 動情報ファイル (インスタンスご と) のロックファイル ²

ディレクトリ名	ファイル名	パー ミッ ション	説明
	jpcagt.ini.model	444	Remote Monitor Collector サービス起動情報ファイルのモデルファイル（インスタンスごと） ¹
	inssetup	755	内部処理用中間ファイル
	status.dat	600	内部処理用中間ファイル ³
	FILEMAP_XXXXX ⁴	666	内部処理用中間ファイル ⁵
	pdia_XXXXX_status.db ⁴	- ⁶	内部処理用中間ファイル ³
	targetlist.ini	644	監視対象一覧
	targetlist.ini.lck	777	監視対象一覧のロックファイル
	grouplist.ini	644	グループエージェント一覧
	grouplist.ini.lck	777	グループエージェント一覧のロックファイル
	ocilog.txt	644	保守資料ファイル
	db_host_name_db	- ⁶	内部処理用中間ファイル
/opt/jplpc/agt1/agent/ インスタンス名 / groups/	-	755	グループエージェント用ディレクトリ
	グループ名.ini	600	グループエージェント設定ファイル
	グループ名.ini.lck	777	グループエージェント設定ファイルのロックファイル
/opt/jplpc/agt1/agent/ インスタンス名 / log/	-	777	Remote Monitor Collector サービス内部ログファイル格納フォルダ（インスタンスごと） ¹
	agt1inf01.log agt1inf02.log	644	RM for Oracle エージェントログファイル ²
	agt1err01.log agt1err02.log	644	RM for Oracle エージェントログエラーファイル ²
	agt1inf.lck	644	内部処理用中間ファイル ³
	agt1err.lck	644	内部処理用中間ファイル ³
	msglog01 msglog02	666	内部ログファイル ⁵
	nslog01 nslog02	666	内部ログファイル ⁵

ディレクトリ名	ファイル名	パー ミッ ション	説明
/opt/jplpc/agt1/ agent/ インスタンス名 / targets/	-	755	リモートエージェント用ディレクトリ
	監視対象名.ini	600	監視対象設定ファイル
	監視対象名 .ini.model	600	監視対象設定ファイルのモデル
	監視対象名 .ini.lck	777	監視対象設定ファイルのロックファイ ル
/opt/jplpc/agt1/ nls/	-	755	メッセージカタログ格納ディレクトリ このディレクトリ内のファイルおよび ディレクトリについては、「付録 G.2 メッセージカタログ格納ディレクトリ 内のファイルおよびディレクトリー一覧」 を参照のこと。
/opt/jplpc/agt1/ store/	-	755	Remote Monitor Store サービスのルー トディレクトリ
	jpcsto.ini.ins tmpl	444	Remote Monitor Store サービス起動情 報テンプレートファイル
	stolist.ini	644	ストア一覧
	*.DAT ⁴	444	データモデル定義ファイル
/opt/jplpc/agt1/ store/ インスタンス名 /	-	755	Remote Monitor Store サービスのルー トディレクトリ (インスタンスごと) ¹
	*.DB ⁴	644	パフォーマンスデータファイル (イン スタンスごと) ⁵
	*.IDX ⁴	644	パフォーマンスデータファイルのイン デックスファイル (インスタンスごと) ⁵
	*.LCK ⁴	666	パフォーマンスデータファイルのロッ クファイル (インスタンスごと) ⁵
	jpcsto.ini	644	Remote Monitor Store サービス起動情 報ファイル (インスタンスごと) ¹
	jpcsto.ini.mod el	444	Remote Monitor Store サービス起動情 報ファイルのモデル (インスタンスご と) ¹
	*.DAT ⁴	444	データモデル定義ファイル (インスタ ンスごと) ¹
	status.dat	600	内部処理用中間ファイル ³

ディレクトリ名	ファイル名	パー ミッ ション	説明
/opt/jplpc/agt1/ store/ インスタンス名 / backup/	-	755	標準のデータベースバックアップ先 ディレクトリ (インスタンスごと) ¹
/opt/jplpc/agt1/ store/ インスタンス名 / partial/	-	755	標準のデータベース部分バックアップ 先ディレクトリ (インスタンスごと) ¹
/opt/jplpc/agt1/ store/ インスタンス名 / dump/	-	777	標準のデータベースエクスポート先 ディレクトリ (インスタンスごと) ¹
/opt/jplpc/agt1/ store/ インスタンス名 / import/	-	755	標準のデータベースインポート先ディ レクトリ (インスタンスごと) ¹
/opt/jplpc/agt1/ store/ インスタンス名 / STPD/	-	755	PD データベース固有のディレクトリ
/opt/jplpc/agt1/ store/ インスタンス名 / STPI/	-	755	PI データベース固有のディレクトリ
/opt/jplpc/agt1/ store/ インスタンス名 / log/	-	777	Remote Monitor Store サービス内部ロ グファイル格納ディレクトリ (インス タンスごと) ¹
	msglog01 msglog02	666	内部ログファイル ⁵
	nslog01 nslog02	666	内部ログファイル ⁵
/opt/jplpc/ patch_files/agt1	-	755	パッチ用ファイル格納フォルダ (エー ジェント用)
/opt/jplpc/ auditlog/	-	700	動作ログファイル出力ディレクトリ
	jpcauditn.log ⁷	600	動作ログファイル
/opt/jplpc/setup/	-	755	セットアップファイル格納ディレク トリ
	jpcagt1u.Z	444	PFM・RM セットアップ用アーカイブ ファイル (UNIX)
	jpcagt1w.EXE	444	PFM・RM セットアップ用アーカイブ ファイル (Windows)
/opt/jplpc/tools/ log/	agt1_sp_rist.l og	644 ⁸	内部ログファイル ⁹
	agt1_mk_rmus.l og	644 ⁸	内部ログファイル ¹⁰

(凡例)

- : 該当しない

注 1

jpcconf inst setup コマンドの実行で作成されます。

注 2

PFM - RM が内部で使用しているファイルです。変更または削除しないでください。

注 3

一時的に作成される場合があります。

注 4

"xxxxx", "*" には、任意の文字列が入ります。

注 5

Remote Monitor Store サービス起動時に作成されます。

注 6

一時ファイルであるため、ファイル権限は指定しません。

注 7

n は数値です。ログファイル数は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。

注 8

スクリプトを実行するアプリケーション (Sql*Plus など) に依存します。

注 9

sp_rist.sql スクリプトの実行で作成されます。

注 10

mk_rmus.sql スクリプトの実行で作成されます。

付録 G.2 メッセージカタログ格納ディレクトリ内のファイルおよびディレクトリー一覧

メッセージカタログ格納ディレクトリ (/opt/jp1pc/agt1/nls/) 内のファイルおよびディレクトリ構成について記載します。

(1) Linux の場合

Linux 版 PFM - RM for Oracle のメッセージカタログ格納ディレクトリ内のファイルおよびディレクトリー一覧を次の表に示します。

表 G-3 PFM - RM for Oracle のメッセージカタログ格納ディレクトリ内のファイルおよびディレクトリー一覧 (Linux 版)

ファイル・ディレクトリ名	パーミッション	説明
/opt/jp1pc/agt1/nls/C/	755	LANG=C 用メッセージカタログ格納ディレクトリ
/opt/jp1pc/agt1/nls/C/jpcagtlmsg.cat	444	LANG=C 用メッセージカタログ

ファイル・ディレクトリ名	パーミッション	説明
/opt/jplpc/agt1/nls/ja_JP.UTF-8/	755	UTF-8用メッセージカタログ格納ディレクトリ
/opt/jplpc/agt1/nls/ja_JP.UTF-8/jpcagt1msg.cat	444	UTF-8用メッセージカタログ
/opt/jplpc/agt1/nls/ja_JP.eucJP/	755	EUC用メッセージカタログ格納ディレクトリ
/opt/jplpc/agt1/nls/ja_JP.eucJP/jpcagt1msg.cat	444	EUC用メッセージカタログ
/opt/jplpc/agt1/nls/ja_JP.ujis	777	EUC用メッセージカタログ格納ディレクトリへのシンボリックリンク
/opt/jplpc/agt1/nls/ja_JP.utf8	777	UTF-8用メッセージカタログ格納ディレクトリへのシンボリックリンク

付録 H 移行手順と移行時の注意事項

PFM - RM for Oracle をバージョンアップするには、PFM - RM for Oracle を上書きインストールします。インストールの操作の詳細については、次に示す個所を参照してください。

Windows の場合

「2.1 インストールとセットアップ (Windows の場合)」

UNIX の場合

「2.2 インストールとセットアップ (UNIX の場合)」

注意

- バージョンアップする際には、古いバージョンの PFM - RM for Oracle をアンインストールしないでください。アンインストールすると、古いバージョンで作成したパフォーマンスデータなども一緒に削除されてしまうため、新しいバージョンで使用できなくなります。
- PFM - RM for Oracle のプログラムを上書きインストールすると、次の項目が自動的に更新されます。
 - ・ Remote Monitor Store サービスの Store データベースファイル
 - ・ ini ファイル
 - ・ PFM - RM for Oracle のインスタンス環境

付録 I 権限に関する注意事項

PFM - RM for Oracle を操作するために必要な権限は、操作対象ごとに異なります。

操作対象ごとに、必要となる権限を次に示します。

(1) sp_rist.sql スクリプトを実行する場合

sp_rist.sql スクリプトを実行するために必要な Oracle のアカウントのシステム権限を次の表に示します。

表 I-1 sp_rist.sql スクリプト実行に必要な Oracle のアカウント権限

必要な権限	説明
CREATE SESSION	監視先の Oracle Database に対して、セッションを確立するために必要。
CREATE TABLE	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要なテーブル を登録するときに必要。
CREATE PROCEDURE	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な監視用のプロシージャ を登録するときに必要。
SELECT ANY DICTIONARY	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な情報 を登録するときに必要。
UNLIMITED TABLESPACE	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な情報 を登録するときに必要。

注

次に示す表を参照してください。

Windows の場合

「2.1.4(3)(c) Oracle Database へオブジェクトを登録する」の表 2-11

UNIX の場合

「2.2.4(4)(c) Oracle Database へオブジェクトを登録する」の表 2-24

なお、CREATE TABLE 権限は表 2-11 または表 2-24 のテーブルを、CREATE PROCEDURE 権限はパッケージを参照してください。

(2) sp_rdrp.sql スクリプトを実行する場合

sp_rdrp.sql スクリプトを実行するために必要な Oracle のアカウントのシステム権限を次の表に示します。

表 I-2 sp_rdrp.sql スクリプト実行に必要な Oracle のアカウント権限

必要な権限	説明
CREATE SESSION	監視先の Oracle Database に対して、セッションを確立するために必要。

(3) mk_rmus.sql スクリプトを実行する場合

mk_rmus.sql スクリプトを実行するために必要な Oracle のアカウントのシステム権限を次の表に示します。

表 I-3 mk_rmus.sql スクリプト実行に必要な Oracle のアカウント権限

必要な権限	説明
CREATE SESSION	監視先の Oracle Database に対して、セッションを確立するために必要。
CREATE USER	監視先の Oracle Database に対して、ユーザーを作成するために必要。
GRANT ANY PRIVILEGE	監視先の Oracle Database に対して、システム権限を付与するために必要。

(4) 性能情報収集を実行する場合

PFM - RM for Oracle が性能情報を収集するために必要な Oracle のアカウントのシステム権限を次の表に示します。

表 I-4 PFM - RM for Oracle が性能情報収集の実行に必要な Oracle のアカウント権限

必要な権限	説明
CREATE SESSION	監視先の Oracle Database に対して、セッションを確立するために必要。
SELECT ANY DICTIONARY	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な情報 ¹ を登録するときに必要。
UNLIMITED TABLESPACE	監視先の Oracle Database に対して、Oracle Database を監視するために必要な情報 ¹ を登録するときに必要。 ²
SELECT ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
INSERT ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
UPDATE ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
DELETE ANY TABLE	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
CREATE ANY INDEX	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。
ALTER ANY INDEX	SQL Text (PD_PDSQ) レコードの Explain Plan (EXPLAIN_PLAN) フィールドを取得するために必要。

注 1

次に示す表を参照してください。

Windows の場合

「2.1.4(3)(c) Oracle Database へオブジェクトを登録する」の表 2-11

UNIX の場合

「2.2.4(4)(c) Oracle Database へオブジェクトを登録する」の表 2-24

注 2

デフォルトの表領域に対して割り当て制限を無制限に設定すれば、この権限は不要です。

PD_PDSQ レコードを取得する場合は、表 I-4 に示したすべての権限が、Oracle のユーザーアカウントに必要です。

PD_PDSQ レコードを取得しない場合は、CREATE SESSION 権限、SELECT ANY DICTIONARY 権限、および UNLIMITED TABLESPACE 権限が、Oracle のユーザーアカウントに必要です。

付録 J バージョン互換

PFM - RM には、製品のバージョンのほかに、データモデルのバージョンがあります。

データモデルは、上位互換を保っているため、古いバージョンで定義したレポートの定義やアラームの定義は、新しいバージョンのデータモデルでも使用できます。

PFM - RM for Oracle のバージョンの対応を次の表に示します。

表 J-1 PFM - RM for Oracle のバージョン対応表

PFM - RM for Oracle のバージョン	データモデルのバージョン	監視テンプレートのアラームテーブルのバージョン
09-00	4.0	09.00
09-10	4.0	09.10

バージョン互換については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、付録に記載されているバージョン互換を参照してください。

付録 K 動作ログの出力

Performance Management の動作ログとは、システム負荷などのしきい値オーバーに関するアラーム機能と連動して出力される履歴情報です。

例えば、PFM サービスの起動・停止時や、PFM - Manager との接続状態の変更時に動作ログに出力されます。

動作ログは、PFM - Manager または PFM - Base が 08-10 以降の場合に出力できます。

動作ログは、CSV 形式で出力されるテキストファイルです。定期的に保存して表計算ソフトで加工することで、分析資料として利用できます。

動作ログは、jpccomm.ini の設定によって出力されるようになります。ここでは、PFM - RM および PFM - Base が出力する動作ログの出力内容と、動作ログを出力するための設定方法について説明します。

付録 K.1 動作ログに出力される事象の種別

動作ログに出力される事象の種別および PFM - RM および PFM - Base が動作ログを出力する契機を次の表に示します。事象の種別とは、動作ログに出力される事象を分類するための、動作ログ内での識別子です。

表 K-1 動作ログに出力される事象の種別

事象の種別	説明	PFM - RM および PFM - Base が出力する契機
StartStop	ソフトウェアの起動と終了を示す事象。	<ul style="list-style-type: none"> PFM サービスの起動・停止 スタンドアロンモードの開始・終了
ExternalService	JP1 製品と外部サービスとの通信結果を示す事象。 異常な通信の発生を示す事象。	PFM - Manager との接続状態の変更
ManagementAction	プログラムの重要なアクションの実行を示す事象。 ほかの監査カテゴリーを契機にアクションが実行されたことを示す事象。	自動アクションの実行

付録 K.2 動作ログの保存形式

ここでは、動作ログのファイル保存形式について説明します。

動作ログは規定のファイル（カレント出力ファイル）に出力され、満杯になった動作ログは別のファイル（シフトファイル）として保存されます。動作ログのファイル切り替えの流れは次のとおりです。

- 動作ログは、カレント出力ファイル「jpcaudit.log」に順次出力されます。
- カレント出力ファイルが満杯になると、その動作ログはシフトファイルとして保存さ

れます。

シフトファイル名は、カレント出力ファイル名の末尾に数値を付加した名称です。シフトファイルの名称は、カレント出力ファイルが満杯になるたびにそれぞれ「ファイル名末尾の数値 +1」へ変更されます。つまり、ファイル末尾の数値が大きいほど、古いログファイルとなります。

例

カレント出力ファイル「jpcaudit.log」が満杯になると、その内容はシフトファイル「jpcaudit1.log」へ保管されます。

カレント出力ファイル名が再び満杯になると、そのログは「jpcaudit1.log」へ移され、既存のシフトファイル「jpcaudit1.log」は「jpcaudit2.log」へリネームされます。

なお、ログファイル数が保存面数（jpccomm.ini ファイルで指定）を超えると、いちばん古いログファイルが削除されます。

3. カレント出力ファイルが初期化され、新たな動作ログが書き込まれます。

動作ログの出力要否、出力先および保存面数は、jpccomm.ini ファイルで設定します。jpccomm.ini ファイルの設定方法については、「付録 K.4 動作ログを出力するための設定」を参照してください。

付録 K.3 動作ログの出力形式

Performance Management の動作ログには、監査事象に関する情報が出力されます。動作ログは、ホスト（物理ホスト・論理ホスト）ごとに 1 ファイル出力されます。動作ログの出力先ホストは次のようになります。

- サービスを実行した場合：実行元サービスが動作するホストに出力
- コマンドを実行した場合：コマンドを実行したホストに出力

動作ログの出力形式、出力先、出力項目について次に説明します。

（1）出力形式

CALFHM x.x, 出力項目1=値1, 出力項目2=値2, ..., 出力項目n=値n

（2）出力先

物理ホストの場合

- Windows の場合
インストール先フォルダ ¥auditlog¥
- UNIX の場合
/opt/jp1pc/auditlog/

論理ホストの場合

- Windows の場合
環境フォルダ ¥jp1pc¥auditlog¥

- UNIX の場合
環境ディレクトリ /jplpc/auditlog/

動作ログの出力先は、jpccomm.ini ファイルで変更できます。jpccomm.ini ファイルの設定方法については、「付録 K.4 動作ログを出力するための設定」を参照してください。

(3) 出力項目

出力項目には二つの分類があります。

共通出力項目

動作ログを出力する JP1 製品が共通して出力する項目です。

固有出力項目

動作ログを出力する JP1 製品が任意に出力する項目です。

(a) 共通出力項目

共通出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。なお、この表は PFM - Manager が出力する項目や内容も含まれます。

表 K-2 動作ログの共通出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	共通仕様識別子	-	CALFHM	動作ログフォーマットであることを示す識別子
2	共通仕様リビジョン番号	-	x.x	動作ログを管理するためのリビジョン番号
3	通番	seqnum	通し番号	動作ログレコードの通し番号
4	メッセージ ID	msgid	KAVEXXXX-X	製品のメッセージ ID
5	日付・時刻	date	YYYY-MM-DDThh:mm:ss.sssTZD	動作ログの出力日時およびタイムゾーン
6	発生プログラム名	progid	JP1PFM	事象が発生したプログラムのプログラム名
7	発生コンポーネント名	compid	サービス ID	事象が発生したコンポーネント名
8	発生プロセス ID	pid	プロセス ID	事象が発生したプロセスのプロセス ID

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
9	発生場所	ocp:host	<ul style="list-style-type: none"> • ホスト名 • IP アドレス 	事象が発生した場所
10	事象の種別	ctgry	<ul style="list-style-type: none"> • StartStop • Authentication • ConfigurationAccess • ExternalService • AnomalyEvent • ManagementAction 	動作ログに出力される事象を分類するためのカテゴリー名
11	事象の結果	result	<ul style="list-style-type: none"> • Success (成功) • Failure (失敗) • Occurrence (発生) 	事象の結果
12	サブジェクト識別情報	subj:pid	プロセス ID	次のどれかの情報 <ul style="list-style-type: none"> • ユーザー操作によって動作するプロセス ID • 事象を発生させたプロセス ID
		subj:uid	アカウント識別子 (PFM ユーザー /JP1 ユーザー)	<ul style="list-style-type: none"> • 事象を発生させたユーザー名
		subj:euid	実効ユーザー ID (OS ユーザー)	<ul style="list-style-type: none"> • ユーザーに 1:1 で対応づけられた識別情報

(凡例)

- : なし。

注

T は日付と時刻の区切りです。

TZD はタイムゾーン指定子です。次のどれかが出力されます。

+hh:mm : UTC から hh:mm だけ進んでいることを示す。

-hh:mm : UTC から hh:mm だけ遅れていることを示す。

z : UTC と同じであることを示す。

(b) 固有出力項目

固有出力項目に出力される値と項目の内容を次の表に示します。なお、この表は PFM - Manager が出力する項目や内容も含まれます。

表 K-3 動作ログの固有出力項目

項番	出力項目		値	内容
	項目名	出力される属性名		
1	オブジェクト情報	obj	<ul style="list-style-type: none"> PFM - RM のサービス ID 追加, 削除, 更新されたユーザー名 (PFM ユーザー) 	操作の対象
		obj:table	アラームテーブル名	
		obj:alarm	アラーム名	
2	動作情報	op	<ul style="list-style-type: none"> Start (起動) Stop (停止) Add (追加) Update (更新) Delete (削除) Change Password (パスワード変更) Activate (有効化) Inactivate (無効化) Bind (バインド) Unbind (アンバインド) 	事象を発生させた動作情報
3	権限情報	auth	<ul style="list-style-type: none"> 管理者ユーザー Management 一般ユーザー Ordinary Windows Administrator UNIX SuperUser 	操作したユーザーの権限情報
		auth:mode	<ul style="list-style-type: none"> PFM 認証モード pfm JP1 認証モード jp1 OS ユーザー os 	操作したユーザーの認証モード
4	出力元の場所	outp:host	PFM - Manager のホスト名	動作ログの出力元のホスト
5	指示元の場所	subjp:host	<ul style="list-style-type: none"> ログイン元ホスト名 実行ホスト名(jpctool alarm コマンド実行時だけ) 	操作の指示元のホスト
6	自由記述	msg	メッセージ	アラーム発生時, および自動アクションの実行時に出力されるメッセージ

固有出力項目は, 出力契機ごとに出力項目の有無や内容が異なります。出力契機ごとに,

メッセージ ID と固有出力項目の内容を次に説明します。

PFM サービスの起動・停止 (StartStop)

- 出力ホスト
該当するサービスが動作しているホスト
- 出力コンポーネント
起動・停止を実行する各サービス

PFM サービスの起動・停止 (StartStop) を契機として、メッセージ ID と動作情報が出力されます。出力されるメッセージ ID と動作情報の内容を次の表に示します。

表 K-4 PFM サービスの起動・停止 (StartStop) 時に出力されるメッセージ ID と動作情報の内容

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	起動：KAVE03000-I 停止：KAVE03001-I
動作情報	op	起動：Start 停止：Stop

スタンドアロンモードの開始・終了 (StartStop)

- 出力ホスト
PFM - RM ホスト
- 出力コンポーネント
Remote Monitor Collector サービスおよび Remote Monitor Store サービス

スタンドアロンモードの開始・終了 (StartStop) を契機として、メッセージ ID が出力されます。出力されるメッセージ ID の内容を次の表に示します。

表 K-5 スタンドアロンモードの開始・終了 (StartStop) 時に出力されるメッセージ ID の内容

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	スタンドアロンモードを開始：KAVE03002-I スタンドアロンモードを終了：KAVE03003-I

注 1

固有出力項目は出力されません。

注 2

PFM - RM の各サービスは、起動時に PFM - Manager ホストに接続し、ノード情報の登録、最新のアラーム定義情報の取得などを行います。PFM - Manager ホストに接続できない場合、稼働情報の収集など一部の機能だけが有効な状態 (スタンドアロンモード) でサービスが起動します。その際、スタンドアロンモードでサービスが起動することを示すため、KAVE03002-I が出力されます。そのあと、一定期間ごとに PFM - Manager への再接続を試み、ノード情報の登録、定義情報の取得などに成功すると、スタンドアロンモードから回復し、KAVE03003-I が出力

力されます。この動作ログによって、KAVE03002-I と KAVE03003-I が出力されている間は、PFM - RM が不完全な状態で起動していることを知ることができます。

PFM - Manager との接続状態の変更 (ExternalService)

- 出力ホスト
PFM - RM ホスト
- 出力コンポーネント
Remote Monitor Collector サービスおよび Remote Monitor Store サービス

PFM - Manager との接続状態の変更 (ExternalService) を契機として、メッセージ ID が出力されます。出力されるメッセージ ID の内容を次の表に示します。

表 K-6 PFM - Manager との接続状態の変更 (ExternalService) 時に出力されるメッセージ ID の内容

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	PFM - Manager へのイベントの送信に失敗 (キューイングを開始) : KAVE03300-I PFM - Manager へのイベントの再送が完了 : KAVE03301-I

注 1

固有出力項目は出力されません。

注 2

Remote Monitor Store サービスは、PFM - Manager へのイベント送信に失敗すると、イベントのキューイングを開始し、以降はイベントごとに最大 3 件がキューにためられます。KAVE03300-I は、イベント送信に失敗し、キューイングを開始した時点で出力されます。PFM - Manager との接続が回復したあと、キューイングされたイベントの送信が完了した時点で、KAVE03301-I が出力されます。この動作ログによって、KAVE03300-I と KAVE03301-I が出力されている間は、PFM - Manager へのイベント送信がリアルタイムでできていなかった期間と知ることができます。

注 3

Remote Monitor Collector サービスは、通常、Remote Monitor Store サービスを経由して PFM - Manager にイベントを送信します。何らかの理由で Remote Monitor Store サービスが停止している場合だけ、直接 PFM - Manager にイベントを送信しますが、失敗した場合には KAVE03300-I が出力されます。この場合、キューイングを開始しないため、KAVE03301-I は出力されません。この動作ログによって、PFM - Manager に送信されなかったイベントがあることを知ることができます。

自動アクションの実行 (ManagementAction)

- 出力ホスト
アクションを実行したホスト
- 出力コンポーネント
Action Handler サービス

自動アクションの実行 (ManagementAction) を契機として、メッセージ ID と自由記述

項目が出力されます。出力されるメッセージ ID と自由記述項目の内容を次の表に示します。

表 K-7 自動アクションの実行 (ManagementAction) 時に出力されるメッセージ ID と自由記述項目の内容

項目名	属性名	値
メッセージ ID	msgid	コマンド実行プロセス 生成に成功: KAVE03500-I コマンド実行プロセス 生成に失敗: KAVE03501-W E-mail 送信に成功: KAVE03502-I E-mail 送信に失敗: KAVE03503-W
自由記述	msg	コマンド実行: cmd= 実行したコマンドライン E-mail 送信: mailto= 送信先メールアドレス

注

コマンド実行プロセスの生成に成功した時点で KAVE03500-I が出力されます。そのあと、コマンドが実行できたかどうかのログ、および実行結果のログは、動作ログには出力されません。

(4) 出力例

動作ログの出力例を次に示します。

```
CALFHM 1.0, seqnum=1, msgid=KAVE03000-I,
date=2007-01-18T22:46:49.682+09:00,
progid=JP1PFM, compid=1A1host01, pid=2076,
ocp:host=host01, ctgry=StartStop, result=Occurrence,
subj:pid=2076,op=Start,
```

付録 K.4 動作ログを出力するための設定

動作ログを出力するための設定は、jpccomm.ini ファイルで定義します。設定しない場合、動作ログは出力されません。動作ログを出力するための設定内容とその手順について次に示します。

(1) 設定手順

動作ログを出力するための設定手順を次に示します。

1. ホスト上の全 PFM サービスを停止させる。
2. テキストエディターなどで、jpccomm.ini ファイルを編集する。
3. jpccomm.ini ファイルを保存して閉じる。

(2) jpccomm.ini ファイルの詳細

jpccomm.ini ファイルの詳細について説明します。

(a) 格納先フォルダ

Windows の場合

インストール先フォルダ

UNIX の場合

/opt/jp1pc/

(b) 形式

jpccomm.ini ファイルには、次の内容を定義します。

- 動作ログの出力の有無
- 動作ログの出力先
- 動作ログの保存面数
- 動作ログのファイルサイズ

指定形式は次のとおりです。

" 項目名 "= 値

設定項目を次の表に示します。

表 K-8 jpccomm.ini ファイルで設定する項目および初期値

項番	項目	説明
1	[Action Log Section]	セクション名です。変更はできません。
2	Action Log Mode	動作ログを出力するかどうかを指定します。この項目の設定は省略できません。 <ul style="list-style-type: none"> • 初期値 0 (出力しない) • 指定できる値 0 (出力しない), 1 (出力する) これ以外の値を指定すると、エラーメッセージが出力され、動作ログは出力されません。

項番	項目	説明
3	Action Log Dir	<p>動作ログの出力先を指定します。</p> <p>論理ホスト環境の場合は共有ディスク上のディレクトリを指定します。共有ディスク上にないディレクトリを指定した場合、論理ホストを構成する各物理ホストへ動作ログが出力されます。</p> <p>なお、制限長を超えるパスを設定した場合や、ディレクトリへのアクセスが失敗した場合は、共通ログにエラーメッセージが出力され、動作ログは出力されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 省略 省略した場合に適用される値（デフォルト値） 物理ホストの場合 Windows：インストール先フォルダ %auditlog% UNIX：/opt/jplpc/auditlog/ 論理ホストの場合 Windows：環境フォルダ %jplpc%auditlog% UNIX：環境ディレクトリ /jplpc/auditlog/ 指定できる範囲 1 ~ 185 バイトの文字列
4	Action Log Num	<p>ログファイルの総数の上限（保存面数）を指定します。カレント出力ファイルとシフトファイルの合計を指定してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 省略 省略した場合に適用される値（デフォルト値） 5 指定できる範囲 2 ~ 10 の整数 <p>数値以外の文字列を指定した場合、エラーメッセージが出力され、初期値である 5 が設定されます。</p> <p>範囲外の数値を指定した場合、エラーメッセージを出力し、指定値に最も近い 2 ~ 10 の整数値が設定されます。</p>
5	Action Log Size	<p>ログファイルのサイズをキロバイト単位で指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 初期値 省略 省略した場合に適用される値（デフォルト値） 2048 指定できる範囲 512 ~ 2096128 の整数 <p>数値以外の文字列を指定した場合、エラーメッセージが出力され、初期値である 2048 が設定されます。</p> <p>範囲外の数値を指定した場合、エラーメッセージが出力され、指定値に最も近い 512 ~ 2096128 の整数値が設定されます。</p>

注

物理ホストで設定したあと、jpcconf ha(jpchasetup) コマンドで論理ホストを設定すると、物理ホストの設定が論理ホストにも反映されます。論理ホストと物理ホストを同時に使用する場合には、動作ログの出力先ディレクトリが同一にならないようにしてください。

付録 L 用語解説

(英字)

Action Handler

PFM・Manager または PFM・Base のサービスの一つです。アクションを実行するサービスのことです。

Correlator

PFM・Manager のサービスの一つです。サービス間のイベント配信を制御するサービスのことで、アラームの状態を評価して、しきい値を超過するとアラームイベントおよびエージェントイベントを、Trap Generator サービスおよび PFM・Web Console に送信します。

HA クラスタシステム

高可用性を実現させるためのクラスタシステムです。障害が発生しても運用を継続できるようにすることを目的としています。業務実行中のサーバで障害が発生すると、待機していた別のサーバが業務の処理を引き継ぎます。これによって、障害発生時の業務の中断を防ぎ、可用性を向上させることができます。

このマニュアルでは、単に「クラスタシステム」と記述している場合は、HA クラスタシステムのことを指します。

Master Manager

PFM・Manager のサービスの一つです。PFM・Manager のメインサービスのことです。

Master Store

PFM・Manager のサービスの一つです。各 PFM・RM から発行されたアラームイベントを管理するサービスのことです。Master Store サービスはイベントデータの保持のためにデータベースを使用します。

ODBC キーフィールド

PFM・Manager または PFM・Base で、SQL を使用して Store データベースに格納されているレコードのデータを利用する場合に必要な ODBC キーフィールドを示します。ODBC キーフィールドには、全レコード共通のものと各レコード固有のものとがあります。

PD レコードタイプ

「Product Detail レコードタイプ」

Performance Management

システムのパフォーマンスに関する問題を監視および分析するために必要なソフトウェア群の総称です。Performance Management は、次の五つのプログラムプロダクトで構成されます。

- PFM・Manager
- PFM・Web Console
- PFM・Base
- PFM・Agent
- PFM・RM

PFM - Agent

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - Agent は、システム監視機能に相当し、監視対象となるアプリケーション、データベース、OS によって、各種の PFM - Agent があります。PFM - Agent には、次の機能があります。

- 監視対象のパフォーマンスの監視
- 監視対象のデータの収集および記録

PFM - Base

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。Performance Management の稼働監視を行うための基盤機能を提供します。PFM - Agent を動作させるための前提製品です。PFM - Base には、次の機能があります。

- 各種コマンドなどの管理ツール
- Performance Management と他システムとの連携に必要な共通機能

PFM - Manager

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - Manager は、マネージャ機能に相当し、次の機能があります。

- Performance Management のプログラムプロダクトの管理
- イベントの管理

PFM - Manager 名

Store データベースに格納されているフィールドを識別するための名称です。コマンドでフィールドを指定する場合などに使用します。

PFM - RM

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。PFM - RM は、システム監視機能に相当し、監視対象となるアプリケーション、データベース、OS によって、各種の PFM - RM があります。PFM - RM には、次の機能があります。

- 監視対象のパフォーマンスの監視
- 監視対象のデータの収集および記録

PFM - View 名

PFM - Manager 名の別名です。PFM - Manager 名に比べ、より直感的な名称になっています。例えば、PFM - Manager 名の「INPUT_RECORD_TYPE」は、PFM - View 名で「Record Type」です。PFM - Web Console の GUI 上でフィールドを指定する場合などに使用します。

PFM - Web Console

Performance Management を構成するプログラムプロダクトの一つです。ブラウザで Performance Management システムを一元的に監視するため Web アプリケーションサーバの機能を提供します。PFM - Web Console には、次の機能があります。

- GUI の表示
- 統合監視および管理機能
- レポートの定義およびアラームの定義

PI レコードタイプ

「Product Interval レコードタイプ」

Product Detail レコードタイプ

現在起動しているプロセスの詳細情報など、ある時点でのシステムの状態を示すパフォーマンスデータが格納されるレコードタイプのことです。PD レコードタイプは、次のような、ある時点でのシステムの状態を知りたい場合に使用します。

- システムの稼働状況
- 現在使用しているファイルシステム容量

Product Interval レコードタイプ

1 分ごとのプロセス数など、ある一定の時間（インターバル）ごとのパフォーマンスデータが格納されるレコードタイプのことです。PI レコードタイプは、次のような、時間の経過に伴うシステムの状態の変化や傾向を分析したい場合に使用します。

- 一定時間内に発生したシステムコール数の推移
- 使用しているファイルシステム容量の推移

Remote Monitor Collector

PFM・RM のサービスの一つです。パフォーマンスデータを収集したり、アラームに設定されたしきい値で、パフォーマンスデータを評価したりするサービスのことです。

Remote Monitor Store

PFM・RM のサービスの一つです。パフォーマンスデータを格納するサービスのことです。Remote Monitor Store サービスは、パフォーマンスデータの記録のためにデータベースを使用します。各 PFM・RM に対応して、各 Remote Monitor Store サービスがあります。

Store データベース

Remote Monitor Collector サービスが収集したパフォーマンスデータが格納されるデータベースのことです。

(ア行)

アクション

監視するデータがしきい値に達した場合に、Performance Management によって自動的に実行される動作のことです。次の動作があります。

- Eメールの送信
- コマンドの実行
- SNMP トラップの発行
- JP1 イベントの発行

アラーム

監視するデータがしきい値に達した場合のアクションやイベントメッセージを定義した情報のことです。

アラームテーブル

次の情報を定義した一つ以上のアラームをまとめたテーブルです。

- 監視するオブジェクト（Process，TCP，WebService など）
- 監視する情報（CPU 使用率，1 秒ごとの受信バイト数など）
- 監視する条件（しきい値）

インスタンス

このマニュアルでは、インスタンスという用語を次のように使用しています。

- レコードの記録形式を示す場合
1行で記録されるレコードを「単数インスタンスレコード」、複数行で記録されるレコードを「複数インスタンスレコード」、レコード中の各行を「インスタンス」と呼びます。
- PFM・RMの起動方式を示す場合
同一ホスト上の監視対象を一つのエージェントで監視する方式のエージェントを「シングルインスタンスエージェント」、同一ホスト上の監視対象を複数のエージェントで監視する方式のエージェントを「マルチインスタンスエージェント」、マルチインスタンスエージェントの各エージェントサービスを「インスタンス」と呼びます。

インスタンス番号

内部処理で使用する、1バイトの管理番号を示す識別子のことです。サービスIDの一部です。

エージェント

パフォーマンスデータを収集する PFM・RM のサービスのことです。

(カ行)

監視テンプレート

PFM・RMに用意されている、定義済みのアラームとレポートのことです。監視テンプレートを使用することで、複雑な定義をしなくても PFM・RM の運用状況を監視する準備が容易にできるようになります。

管理ツール

サービスの状態の確認やパフォーマンスデータを操作するために使用する各種のコマンドまたは GUI 上の機能のことです。次のことができます。

- サービスの構成および状態の表示
- パフォーマンスデータの回避および回復
- パフォーマンスデータのテキストファイルへのエクスポート
- パフォーマンスデータの消去

機能ID

Performance Management プログラムのサービスの機能種別を示す、1バイトの識別子のことです。サービスIDの一部です。

クラスタシステム

クラスタシステムとは、複数のサーバシステムを連携して一つのシステムとして運用するシステムです。大きく分けて HA (High Availability) クラスタシステムと負荷分散クラスタシステムの2種類があります。

このマニュアルでは、単に「クラスタシステム」と記述している場合は、HA クラスタシステムのことを指します。

- 「HA クラスタシステム」
- 「負荷分散クラスタシステム」

(サ行)

サービス ID

Performance Management プログラムのサービスに付加された、一意の ID のことです。コマンドを使用して Performance Management のシステム構成を確認する場合、または個々のエージェントのパフォーマンスデータをバックアップする場合などは、Performance Management プログラムのサービス ID を指定してコマンドを実行します。サービス ID の形式は、プロダクト名表示機能の設定によって異なります。サービス ID の形式については、マニュアル「JP1/Performance Management 設計・構築ガイド」の、Performance Management の機能について説明している章を参照してください。

実行系ノード

クラスタシステムを構成するそれぞれのサーバシステムの、業務を実行中のノード（論理ホストがアクティブなノード）のことです。

スタンドアロンモード

PFM - RM 単独で起動している状態のことです。PFM - Manager の Master Manager サービスおよび Name Server サービスが、障害などのため起動できない状態でも、PFM - RM だけを起動して、パフォーマンスデータを収集できます。

(タ行)

待機系ノード

クラスタシステムを構成するそれぞれのサーバシステムの、実行系ノードの障害時に業務を引き継げるよう待機しているノードのことです。

単数インスタンスレコード

1 行で記録されるレコードです。このレコードは、固有の ODBC キーフィールドを持ちません。
「インスタンス」

データベース ID

PFM - RM の各レコードに付けられた、レコードが格納されるデータベースを示す ID です。データベース ID は、そのデータベースに格納されるレコードの種類を示しています。データベース ID を次に示します。

- PI
PI レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。
- PD
PD レコードタイプのレコードのデータベースであることを示します。

データモデル

各 PFM - RM が持つレコードおよびフィールドの総称のことです。データモデルは、バージョンで管理されています。

ドリルダウンレポート

レポートまたはレポートのフィールドに関連づけられたレポートです。あるレポートの詳細情報や

関連情報を表示したい場合に使用します。

(八行)

バインド

アラームをエージェントと関連づけることです。バインドすると、エージェントによって収集されているパフォーマンスデータが、アラームで定義したしきい値に達した場合、ユーザーに通知できるようになります。

パフォーマンスデータ

監視対象システムから収集したリソースの稼働状況データのことで、

フィールド

レコードを構成するパフォーマンスデータの集まりのことです。

フェールオーバー

クラスタシステムで障害が発生したときに、業務を実行するサーバの処理を実行系ノードから待機系ノードに引き継ぐことです。

負荷分散クラスタシステム

複数のノードで処理の負荷を分散して実行するシステムです。複数のノードで処理を分散して実行することによって処理能力を向上させることを目的としています。また、障害が発生してノードが停止してもほかのノードに処理を切り替えることによってシステムの可用性も向上できます。

複数インスタンスレコード

複数行で記録されるレコードです。このレコードは、固有の ODBC キーフィールドを持っています。

「インスタンス」

物理ホスト

クラスタシステムを構成する各サーバに固有な環境のことです。物理ホストの環境は、フェールオーバー時にもほかのサーバに引き継がれません。

プロダクト ID

該当する Performance Management プログラムのサービスが、Performance Management のどのプログラムプロダクトのものかを示す 1 バイトの識別子のことで、サービス ID の一部です。

(九行)

ライフタイム

各レコードに収集されるパフォーマンスデータの一貫性が保証される期間のことです。

リアルタイムレポート

監視対象の現在の状況を示すレポートです。

履歴レポート

監視対象の過去から現在までの状況を示すレポートです。

レコード

収集したパフォーマンスデータを格納する形式のことです。レコードの種類は、Store データベースの各データベースによって異なります。

レポート

PFM・RM が収集したパフォーマンスデータをグラフィカルに表示する際の情報を定義したものです。主に、次の情報を定義します。

- レポートに表示させるレコード
- パフォーマンスデータの表示項目
- パフォーマンスデータの表示形式（表、グラフなど）

論理ホスト

クラスタシステムでの運用時に JP1 の実行環境となる論理上のサーバのことです。障害の発生時には、論理ホスト単位で系が切り替わります。論理ホストは専用の IP アドレスを持ち、フェールオーバー時にはその IP アドレスを引き継いで動作します。そのため、障害で物理的なサーバが切り替わった場合も、クライアントからは同じ IP アドレスでアクセスでき、一つのサーバが常に動作しているように見えます。

索引

A

Action Handler〔用語解説〕 526
Activity Summary (PD_PDAS) レコード
268
ALTER USER 文 34
ALTER USER 文〔UNIX の場合〕 70

B

Blocking Locks レポート 206
Buffer Cache Usage アラーム 189
Buffer Cache Waits アラーム 190

C

Cache Usage Status(Multi-Agent) レポート
209
Cache Usage Trend(Multi-Agent) レポート
210
Cache Usage レポート 208
Collection Instance 2 272
Collection Tablespace 2 274
Correlator〔用語解説〕 526

D

Database (PD_PDDB) レコード 298
Database Activity Status(Multi-Agent) レ
ポート 213
Database Activity Status Detail レポート
212
Database Activity Status レポート 211
Database Activity Trend(Multi-Agent) レ
ポート 214
Database Interval (PI_PIDB) レコード
309
Database Space Overview レポート 215
Database Space Summary(Multi-Agent) レ
ポート 216
Database Space Trend(Multi-Agent) レポー
ト 217

Data File (PD_PDDF) レコード 277
Datafile I/O Activity Detail レポート 218
Datafile I/O Status Detail(Reads) レポート
219
Datafile I/O Status Detail(Writes) レポート
220
Datafile I/O Status Summary レポート 221
Datafile I/O Trend Detail(Reads) レポート
222
Datafile I/O Trend Detail(Writes) レポート
223
Datafile I/O Trend Summary レポート 224
Data File Interval (PI_PIDF) レコード
286
Dict. Cache Usage アラーム 191
Disk Sorts - Top 10 Sessions レポート 225
Disk Sorts アラーム 192
DROP TABLESPACE 文 92
DROP TABLESPACE 文〔UNIX の場合〕
99
DROP USER 文 91
DROP USER 文〔UNIX の場合〕 98

F

Free List Waits アラーム 193
Full Table Scans アラーム 194
Full Table Scans レポート 226

H

HA クラスタシステム 130
HA クラスタシステム〔用語解説〕 526

I

I/O Activity - Top 10 Datafiles レポート 227
Instance (PD_PDI) レコード 321
Instance Availability(PD_PDIA)レコード
324
IP アドレスの設定〔UNIX の場合〕 51
IP アドレスの設定〔Windows の場合〕 16

J

jpcconf inst list コマンド 89
 jpcconf inst list コマンド〔UNIX の場合〕 96
 jpcconf inst setup コマンド 41
 jpcconf inst setup コマンド〔UNIX の場合〕 78
 jpcconf inst unsetup コマンド 89
 jpcconf inst unsetup コマンド〔UNIX の場合〕 96
 jpcconf mgrhost define コマンド 49
 jpcconf mgrhost define コマンド〔UNIX の場合〕 85
 jpchosts ファイル 148
 jpchosts ファイル〔UNIX の場合〕 159
 jpcras コマンド 456
 jpctool service delete コマンド 90
 jpctool service delete コマンド〔UNIX の場合〕 97
 jpcwagtsetup コマンド 29
 jpcwagtsetup コマンド〔UNIX の場合〕 65

L

LANG 環境変数の設定 62
 Library Cache Usage アラーム 195
 localtemp_option 37, 74
 Locked Objects レポート 229
 Lock Usage - Top 10 Sessions レポート 228
 Lock Waiters (PD_PDLW) レコード 327
 log_path 36
 log_path〔UNIX の場合〕 72
 log_size 36
 log_size〔UNIX の場合〕 72
 Longest Transactions - Top 10 Sessions レポート 230

M

Master Manager〔用語解説〕 526
 Master Store〔用語解説〕 526
 Memory Usage - Top 10 Sessions レポート 231
 Minimum Database Interval 2 330
 Minimum Data File Interval 2 332

Minimum Tablespace Interval 2 337

N

net_service_name 36
 net_service_name〔UNIX の場合〕 72
 numeric_10 37
 numeric_10〔UNIX の場合〕 73

O

ODBC キーフィールド〔用語解説〕 526
 ODBC キーフィールド一覧 255
 Open Cursor (PD_PDOC) レコード 340
 Open Cursors レポート 232
 oracle_home 35
 oracle_home〔UNIX の場合〕 71
 oracle_passwd 36
 oracle_passwd〔UNIX の場合〕 72
 oracle_sid 35
 oracle_sid〔UNIX の場合〕 71
 oracle_user 36
 oracle_user〔UNIX の場合〕 72
 oracle_version 36
 oracle_version〔UNIX の場合〕 71
 Oracle Database へオブジェクトを登録する 46
 Oracle Database へオブジェクトを登録する〔UNIX の場合〕 82
 Oracle Database へ登録したオブジェクトを削除する 90
 Oracle Database へ登録したオブジェクトを削除する〔UNIX の場合〕 97
 Oracle Database を設定する 47
 Oracle Database を設定する〔UNIX の場合〕 83
 Oracle インスタンス稼働監視 13
 Oracle のアカウントが使用していた表領域を削除する 92
 Oracle のアカウントが使用していた表領域を削除する〔UNIX の場合〕 99
 Oracle のアカウントを削除する 91
 Oracle のアカウントを削除する〔UNIX の場合〕 98

OS のログ情報 447

OS のログ情報〔UNIX の場合〕452

P

Parameter Values (PD_PDP) レコード
342

PD 365

PD_PCI 272

PD_PCTS 274

PD_PDAS 268

PD_PDDB 298

PD_PDDF 277

PD_PDI 321

PD_PDIA 324

PD_PDLW 327

PD_PDOC 340

PD_PDP 342

PD_PDS 344

PD_PDS2 353

PD_PDSG 360

PD_PDSQ 362

PD_PDTF 391

PD_PDTL 408

PD_PDTR 404

PD_PDTS 382

PD レコードタイプ 4

PD レコードタイプ〔用語解説〕526

Performance Management〔用語解説〕526

Performance Management の障害回復 464

Performance Management の障害検知 463

Performance Management プログラム 20

Performance Management プログラム

〔UNIX の場合〕55

PFM - Agent〔用語解説〕527

PFM - Base〔用語解説〕527

PFM - Manager〔用語解説〕527

PFM - Manager が停止した場合の影響 139

PFM - Manager での設定の削除 171

PFM - Manager での設定の削除〔UNIX の
場合〕178

PFM - Manager 名〔用語解説〕527

PFM - RM〔用語解説〕527

PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のア
カウントの削除 91

PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のア
カウントの削除〔UNIX の場合〕98

PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のア
カウントの作成 29

PFM - RM for Oracle で使用する Oracle のア
カウントの作成〔UNIX の場合〕65

PFM - RM for Oracle の運用方式の変更 102
PFM - RM for Oracle の運用方式の変更〔ク
ラスタシステムの場合〕180

PFM - RM for Oracle の概要 1

PFM - RM for Oracle のシステム構成の変更
101

PFM - RM for Oracle の接続先 PFM -
Manager の設定 49

PFM - RM for Oracle の接続先 PFM -
Manager の設定〔UNIX の場合〕85

PFM - RM for Oracle のセットアップ手順
〔UNIX の場合〕62

PFM - RM for Oracle のセットアップ手順
〔Windows の場合〕26

PFM - RM for Oracle のセットアップファイ
ルをコピーする 28

PFM - RM for Oracle のセットアップファイ
ルをコピーする〔UNIX の場合〕64

PFM - RM for Oracle の登録 26

PFM - RM for Oracle の登録〔UNIX の場合〕
62

PFM - RM for Oracle の特長 2

PFM - RM for Oracle のファイルおよびディ
レクトリー一覧 500

PFM - RM for Oracle を使ったパフォーマン
ス監視の例 9

PFM - RM の登録 144

PFM - RM の登録〔UNIX の場合〕156

PFM - RM の論理ホストのアンセットアップ
167

PFM - RM の論理ホストのアンセットアップ
〔UNIX の場合〕175

PFM - RM の論理ホストのセットアップ 145

PFM - RM の論理ホストのセットアップ
〔UNIX の場合〕157

PFM - RM ホスト 18
 PFM - RM ホスト〔UNIX の場合〕 53
 PFM - View 名〔用語解説〕 527
 PFM - Web Console〔用語解説〕 527
 Physical I/O - Top 10 Sessions レポート 233
 PI 373
 PI_PIDB 309
 PI_PIDF 286
 PI_PIIO 351
 PI_PITS 398
 PI_PMDB 330
 PI_PMDF 332
 PI_PMTS 337
 PI レコードタイプ 3
 PI レコードタイプ〔用語解説〕 527
 Product Detail レコードタイプ〔用語解説〕 528
 Product Interval レコードタイプ〔用語解説〕 528

R

Redo Log Buffer Contention レポート 234
 Redo Log Contention アラーム 196
 REDO ログ待機の監視 14
 Remote Monitor Collector〔用語解説〕 528
 Remote Monitor Collector サービスのプロパティ一覧 490
 Remote Monitor Store〔用語解説〕 528
 Remote Monitor Store サービスのプロパティ一覧 488
 retry_time 36

S

Server Configuration Status レポート 235
 Server Status アラーム 197
 Session Detail (PD_PDS) レコード 344
 Session Detail レポート 236
 Session I/O Interval (PI_PIIO) レコード 351
 Session Statistics Detail レポート 238
 Session Statistics Summary (PD_PDS2) レコード 353

SGA Components (PD_PDSG) レコード 360
 SGA Status Summary レポート 240
 SGA Status レポート 239
 sql_option 37
 sql_option〔UNIX の場合〕 73
 SQL Text (PD_PDSQ) レコード 362
 SQL Text レポート 241
 startup_always 37
 startup_always〔UNIX の場合〕 73
 Store データベース 4
 Store データベース〔用語解説〕 528
 Store データベースに格納されているデータをエクスポートすると出力されるフィールド 264
 Store データベースに記録されるときだけ追加されるフィールド 262
 syslog と Windows イベントログの一覧 417
 System Overview レポート 242, 244
 System Stat Summary (PD) レコード 365
 System Stat Summary Interval (PI) レコード 373

T

Tablespace (PD_PDTS) レコード 382
 Tablespace Fragmentation (PD_PDTF) レコード 391
 Tablespace Interval (PI_PITS) レコード 398
 Tablespace Status Detail レポート 247
 Tablespace Status レポート 246
 Tablespace Usage アラーム 198
 timeout 37
 timeout〔UNIX の場合〕 73
 Transaction (PD_PDTR) レコード 404
 Transaction Lock (PD_PDTL) レコード 408

W

Web ブラウザでマニュアルを参照するための設定 125
 Windows イベントログを採取する 457

あ

アクション 4
 アクション〔用語解説〕 528
 アラーム 4
 アラーム〔用語解説〕 528
 アラーム一覧 188
 アラームテーブル 4
 アラームテーブル〔用語解説〕 528
 アラームの記載形式 187
 アンインストール手順 (UNIX の場合) 99
 アンインストール手順 (Windows の場合) 92
 アンインストール手順〔クラスタ運用時 :UNIX の場合〕 178
 アンインストール手順〔クラスタ運用時 :Windows の場合〕 171
 アンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合) 94
 アンインストールとアンセットアップ (UNIX の場合)〔クラスタ運用時〕 172
 アンインストールとアンセットアップ (Windows の場合) 87
 アンインストールとアンセットアップ (Windows の場合)〔クラスタ運用時〕 165
 アンインストールとアンセットアップの流れ〔クラスタ運用時 :UNIX の場合〕 172
 アンインストールとアンセットアップの流れ〔クラスタ運用時 :Windows の場合〕 165
 アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項 87
 アンインストールに必要な OS ユーザー権限に関する注意事項〔UNIX の場合〕 94
 アンセットアップ手順 (UNIX の場合) 95
 アンセットアップ手順 (Windows の場合) 88
 アンセットアップ手順〔クラスタ運用時 :UNIX の場合〕 174
 アンセットアップ手順〔クラスタ運用時 :Windows の場合〕 167
 アンセットアップの前に (UNIX の場合) 94
 アンセットアップの前に (Windows の場合) 87

い

移行時の注意事項 511
 移行手順 511
 インスタンス〔用語解説〕 529
 インスタンス環境の Windows のサービス名 44
 インスタンス環境のアンセットアップ 88
 インスタンス環境のアンセットアップ〔UNIX の場合〕 95
 インスタンス環境の更新の設定 105
 インスタンス環境の更新の設定〔クラスタシステムの場合〕 181
 インスタンス環境のサービス ID 43
 インスタンス環境の設定 35
 インスタンス環境の設定〔UNIX の場合〕 70
 インスタンス環境の設定〔クラスタ運用時 :UNIX の場合〕 158
 インスタンス環境の設定〔クラスタ運用時 :Windows の場合〕 146
 インスタンス環境のディレクトリ構成 79
 インスタンス環境のフォルダ構成 42
 インスタンス環境を削除する 89
 インスタンス環境を削除する〔UNIX の場合〕 96
 インスタンス情報を設定する 35
 インスタンス情報を設定する〔UNIX の場合〕 71
 インスタンス番号〔用語解説〕 529
 インストール手順 (UNIX の場合) 60
 インストール手順 (Windows の場合) 25
 インストール手順〔クラスタ運用時 :UNIX の場合〕 156
 インストール手順〔クラスタ運用時 :Windows の場合〕 144
 インストールとセットアップ 15
 インストールとセットアップ (UNIX の場合) 51
 インストールとセットアップ (UNIX の場合)〔クラスタ運用時〕 152
 インストールとセットアップ (Windows の場合) 16
 インストールとセットアップ (Windows の場合)〔クラスタ運用時〕 140

インストールとセットアップの流れ (UNIX の場合) 58
 インストールとセットアップの流れ (Windows の場合) 23
 インストールとセットアップの流れ (クラスタ運用時:UNIX の場合) 154
 インストールとセットアップの流れ (クラスタ運用時:Windows の場合) 142
 インストールとセットアップの前に (UNIX の場合) 51
 インストールとセットアップの前に (Windows の場合) 16
 インストールとセットアップの前に (クラスタ運用時:UNIX の場合) 152
 インストールとセットアップの前に (クラスタ運用時:Windows の場合) 140
 インストールに必要な OS ユーザー権限について 18
 インストールに必要な OS ユーザー権限について (UNIX の場合) 53

え

エージェント (用語解説) 529
 エージェントログ 440

か

カーネルパラメーター 480
 稼働状況ログ 440
 環境変数に関する注意事項 21
 環境変数に関する注意事項 (UNIX の場合) 56
 監視対象の一覧を表示する 119
 監視対象の更新の設定 104
 監視対象の更新の設定 (クラスタシステムの場合) 180
 監視対象の設定 147
 監視対象の設定 (UNIX の場合) 159
 監視対象の設定状況を確認する 119
 監視対象の設定内容を確認する 119
 監視対象プログラム 20
 監視対象プログラム (UNIX の場合) 55
 監視対象ホスト 2

監視対象を削除する 88
 監視対象を削除する (UNIX の場合) 95
 監視対象を設定する 44
 監視テンプレート 5, 185
 監視テンプレート (用語解説) 529
 監視テンプレートの概要 186
 管理ツール (用語解説) 529

き

機能 ID (用語解説) 529
 共通メッセージログ 439, 441
 共有ディスクのアンマウント (アンインストール・アンセットアップ) 177
 共有ディスクのアンマウント (インストール・セットアップ) 161
 共有ディスクのオフライン (アンインストール・アンセットアップ) 170
 共有ディスクのオフライン (インストール・セットアップ) 149
 共有ディスクのオンライン (アンインストール・アンセットアップ) 167
 共有ディスクのオンライン (インストール・セットアップ) 145
 共有ディスクのマウント (アンインストール・アンセットアップ) 174
 共有ディスクのマウント (インストール・セットアップ) 157

く

クラスタ運用時のディスク占有量 479
 クラスタシステム (用語解説) 529
 クラスタシステムで運用する場合の注意事項 183
 クラスタシステムでのインストールとセットアップについて 21
 クラスタシステムでのインストールとセットアップについて (UNIX の場合) 56
 クラスタシステムでの運用 129
 クラスタシステムでの環境設定 151
 クラスタシステムでの環境設定 (UNIX の場合) 164
 クラスタシステムの概要 130

クラスタソフトからのPFM-RMの登録解除
170
 クラスタソフトからの PFM-RM の登録解除
〔UNIX の場合〕 178
 クラスタソフトからの起動・停止の確認 151
 クラスタソフトからの起動・停止の確認
〔UNIX の場合〕 164
 クラスタソフトからの停止 167
 クラスタソフトからの停止〔UNIX の場合〕
174
 クラスタソフトへの PFM-RM の登録 150
 クラスタソフトへの PFM-RM の登録
〔UNIX の場合〕 162

け

権限に関する注意事項 512
 検索処理パフォーマンス 10
 現象の確認 430

さ

サービス ID〔用語解説〕 530
 サービスに関する注意事項 87
 サービスに関する注意事項〔UNIX の場合〕
94

し

識別子一覧 481
 システム見積もり 466
 システムログ 439
 実行系ノード〔用語解説〕 530
 実ホスト名 16
 実ホスト名〔UNIX の場合〕 51
 収集するパフォーマンスデータ中のホスト名
について 183
 使用する Oracle のアカウントの作成 146
 使用する Oracle のアカウントの作成
〔UNIX の場合〕 158
 資料採取コマンドを実行する 456
 資料採取コマンドを実行する（論理ホスト運
用の場合） 457
 資料採取コマンドを実行する（論理ホスト運
用の場合）〔UNIX の場合〕 460

資料採取コマンドを実行する〔UNIX の場
合〕 459
 資料の採取 430
 資料の採取方法 456

す

スタンドアロンモード〔用語解説〕 530

せ

接続先 PFM-Manager の設定 146
 接続先 PFM-Manager の設定〔UNIX の場
合〕 158
 セットアップコマンドを実行する〔PFM-
Manager ホスト:UNIX の場合〕 65
 セットアップコマンドを実行する〔PFM-
Manager ホスト〕 29
 セットアップコマンドを実行する〔PFM-
Web Console ホスト:UNIX の場合〕 65
 セットアップコマンドを実行する〔PFM-
Web Console ホスト〕 29
 セットアップ手順〔クラスタ運用時:UNIX
の場合〕 156
 セットアップ手順〔クラスタ運用時
:Windows の場合〕 144
 前提 OS 16
 前提 OS〔UNIX の場合〕 51
 前提プログラム 18
 前提プログラム〔UNIX の場合〕 53

そ

その他の注意事項〔アンインストール・アン
セットアップ:UNIX の場合〕 95
 その他の注意事項〔アンインストール・アン
セットアップ:Windows の場合〕 88
 その他の注意事項〔インストール・セット
アップ:UNIX の場合〕 58
 その他の注意事項〔インストール・セット
アップ:Windows の場合〕 23

た

他 Performance Management プログラムの
論理ホストのアンセットアップ 169
他 Performance Management プログラムの
論理ホストのアンセットアップ〔UNIX の場
合〕 176
他 Performance Management プログラムの
論理ホストのセットアップ 147
他 Performance Management プログラムの
論理ホストのセットアップ〔UNIX の場合〕
159
待機系ノード〔用語解説〕 530
対処の手順 430
単数インスタンスレコード〔用語解説〕 530

て

ディスク監視 13
ディスク占有量 467
データ型一覧 258
データ更新処理パフォーマンス 12
データベース ID〔用語解説〕 530
データモデル 3, 250
データモデル〔用語解説〕 530

と

同一ホストに Performance Management プ
ログラムを複数インストール、セットアップ
するときの注意事項 21
同一ホストに Performance Management プ
ログラムを複数インストール、セットアップ
するときの注意事項〔UNIX の場合〕 56
動作ログ出力の設定 50
動作ログ出力の設定〔UNIX の場合〕 86
動作ログ出力の設定〔クラスタ運用時
:UNIX の場合〕 160
動作ログ出力の設定〔クラスタ運用時
:Windows の場合〕 148
動作ログの出力 516
トラブルシューティング 431
トラブルの内容 431
トラブル発生時に採取が必要な資料 447
トラブルへの対処方法 429

ドリルダウンレポート(フィールドレベル)
199
ドリルダウンレポート(レポートレベル)
199
ドリルダウンレポート〔用語解説〕 530
トレースログ 440, 444

ね

ネットワークに関する注意事項 87
ネットワークに関する注意事項〔UNIX の場
合〕 94
ネットワークの環境設定 16
ネットワークの環境設定〔UNIX の場合〕 51
ネットワークの設定 48
ネットワークの設定〔UNIX の場合〕 84
ネットワークの設定〔クラスタ運用時
:UNIX の場合〕 159
ネットワークの設定〔クラスタ運用時
:Windows の場合〕 147

は

バージョンアップの注意事項 22
バージョンアップの注意事項〔UNIX の場
合〕 57
バージョン互換 515
バインド 5
バインド〔用語解説〕 531
バックアップ 122
パフォーマンス監視の目的 9
パフォーマンスデータ〔用語解説〕 531
パフォーマンスデータの格納先の変更
48, 102
パフォーマンスデータの格納先の変更
〔UNIX の場合〕 84
パフォーマンスデータの格納先の変更〔クラ
スタ運用時:UNIX の場合〕 160
パフォーマンスデータの格納先の変更〔クラ
スタ運用時:Windows の場合〕 148
パフォーマンスデータの管理方法 8
パフォーマンスデータの収集と管理の概要 8
パフォーマンスデータの収集方法 8

ふ

ファイアウォールの通過方向 485
 ファイルおよびディレクトリー一覧 500
 フィールド 3, 199
 フィールド〔用語解説〕 531
 フィールドの値 259
 フェールオーバー〔用語解説〕 531
 フェールオーバー時の処理 136
 負荷分散クラスタシステム 133
 負荷分散クラスタシステム〔用語解説〕 531
 複数インスタンスレコード〔用語解説〕 531
 物理ホスト〔用語解説〕 531
 プログラムに関する注意事項 87
 プログラムに関する注意事項〔UNIX の場合〕 94
 プログラムのインストール順序 25
 プログラムのインストール順序〔UNIX の場合〕 60
 プログラムのインストール方法 25
 プログラムのインストール方法〔UNIX の場合〕 60
 プロセス一覧 482
 プロダクト ID〔用語解説〕 531
 プロパティ 488

へ

ベースラインの選定 9

ほ

ポート番号 484
 ポート番号一覧 484
 ポート番号の設定 17
 ポート番号の設定〔UNIX の場合〕 52
 ポート番号の設定の解除 167
 ポート番号の設定の解除〔UNIX の場合〕 174

め

メッセージ 411
 メッセージ一覧 418

メッセージカタログ格納ディレクトリ内の
 ファイルおよびディレクトリー一覧 509
 メッセージの記載形式 412
 メッセージの形式 412
 メッセージの出力形式 412
 メッセージの出力先一覧 413
 メモリー所要量 466

も

問題の調査 430

よ

要約ルール 256

ら

ライフタイム〔用語解説〕 531

り

リアルタイムレポート 3
 リアルタイムレポート〔用語解説〕 531
 リストア 123
 リモートエージェントおよびグループエー
 ジェントのプロパティ一覧 495
 リモート監視 2
 履歴レポート 3
 履歴レポート〔用語解説〕 532

れ

レコード 3, 199, 249
 レコード〔用語解説〕 532
 レコード一覧 266
 レコード収集での Oracle アクセスのキャン
 セル機能 119
 レコードの記載形式 251
 レコードの注意事項 265
 レポート 3
 レポート〔用語解説〕 532
 レポート一覧 203
 レポートの記載形式 199
 レポートのフォルダ構成 201

ろ

ログ情報 439
ログのファイルサイズ変更 48
ログのファイルサイズ変更〔UNIX の場合〕
84
ログのファイルサイズ変更〔クラスタ運用時
:UNIX の場合〕160
ログのファイルサイズ変更〔クラスタ運用時
:Windows の場合〕148
ログファイルおよびディレクトリ一覧 441
論理ホスト〔用語解説〕532
論理ホスト環境定義ファイルのインポート
〔アンインストール・アンセットアップ
:UNIX の場合〕177
論理ホスト環境定義ファイルのインポート
〔アンインストール・アンセットアップ
:Windows の場合〕170
論理ホスト環境定義ファイルのインポート
〔インストール・セットアップ :UNIX の場
合〕161
論理ホスト環境定義ファイルのインポート
〔インストール・セットアップ :Windows の
場合〕149
論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート
・インポート 183
論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート
〔アンインストール・アンセットアップ
:UNIX の場合〕176
論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート
〔アンインストール・アンセットアップ
:Windows の場合〕169
論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート
〔インストール・セットアップ :UNIX の場
合〕160
論理ホスト環境定義ファイルのエクスポート
〔インストール・セットアップ :Windows の
場合〕148
論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノード
へのコピー〔アンインストール・アンセット
アップ :UNIX の場合〕177
論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノード
へのコピー〔アンインストール・アンセット
アップ :Windows の場合〕170

論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノード
へのコピー〔インストール・セットアップ
:UNIX の場合〕161

論理ホスト環境定義ファイルの待機系ノード
へのコピー〔インストール・セットアップ
:Windows の場合〕149

ソフトウェアマニュアルのサービス ご案内

1. マニュアル情報ホームページ

ソフトウェアマニュアルの情報をインターネットで公開しています。

URL <http://www.hitachi.co.jp/soft/manual/>

ホームページのメニューは次のとおりです。

マニュアル一覧	日立コンピュータ製品マニュアルを製品カテゴリ、マニュアル名称、資料番号のいずれかから検索できます。
CD-ROMマニュアル	日立ソフトウェアマニュアルと製品群別CD-ROMマニュアルの仕様について記載しています。
マニュアルのご購入	マニュアルご購入時のお申し込み方法を記載しています。
オンラインマニュアル	一部製品のマニュアルをインターネットで公開しています。
サポートサービス	ソフトウェアサポートサービスお客様向けページでのマニュアル公開サービスを記載しています。
ご意見・お問い合わせ	マニュアルに関するご意見、ご要望をお寄せください。

2. インターネットでのマニュアル公開

2種類のマニュアル公開サービスを実施しています。

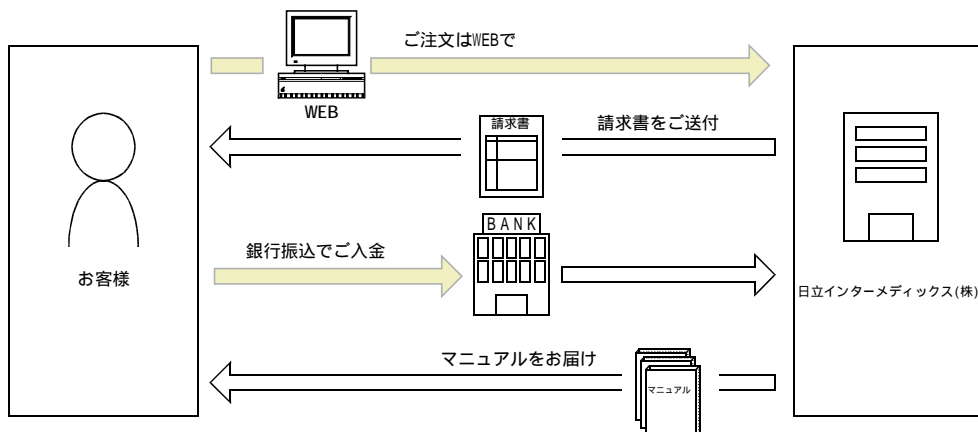
(1) マニュアル情報ホームページ「オンラインマニュアル」での公開

製品をよりご理解いただくためのご参考として、一部製品のマニュアルを公開しています。

(2) ソフトウェアサポートサービスお客様向けページでのマニュアル公開

ソフトウェアサポートサービスご契約のお客様向けにマニュアルを公開しています。公開しているマニュアルの一覧、本サービスの対象となる契約の種別などはマニュアル情報ホームページの「サポートサービス」をご参照ください。

3. マニュアルのご注文



マニュアル情報ホームページの「マニュアルのご購入」にアクセスし、お申し込み方法をご確認のうえ WEB からご注文ください。ご注文先は日立インターメディアックス(株)となります。

ご注文いただいたマニュアルについて請求書をお送りします。

請求書の金額を指定銀行へ振り込んでください。

入金確認後 7 日以内にお届けします。在庫切れの場合は、納期を別途ご案内いたします。